

現代世界の史的觀察

文學博士
大類伸 著

東京
天佑社
一九一八年發行

序

本書は著者が數年來雜誌新聞紙等に載せた論文說話の中から、世界の現勢に關する分二十三篇を輯錄して一書となしたものである。內容は種々樣々であるが、主として世界の現勢に對する史的觀察と見られる。依つて本書の命題を「現代世界の史的觀察」としたのである。

著者は本書中到る處に於て、現代に於ける國家主義の價値を力說した。蓋し多事多端の現代に處するには、日本がその國家としての立脚地を大に固めねばならぬ必要がある。世界主義の理想はさることながら、日本はまづ國家としての自覺と力とを備へねば

現代世界の史的觀察

文學博士
大類伸著

東京
天佑社
一九一八年發行

序

本書は著者が數年來雜誌新聞紙等に載せた論文説話の中から、世界の現勢に關する分二十三篇を收錄して一書となしたものである。内容は種々樣々であるが、主として世界の現勢に對する史的觀察と見られる。依て本書の命題を『現代世界の史的觀察』としたのである。

著者は本書中到る處に於て、現代に於ける國家主義の價値を力說した、蓋し多事多難の現代に處するには、日本がその國家としての立脚地を大に固めねばならぬ必要がある。世界主義の理想はさることながら、日本はまづ國家としての自覺と力とを備へねば

ならぬと云ふのが本書の精神である。

現代戰爭の一大經驗を經た世界列强の努力は、將來必ず目覺しいものがあるに相違ない、殊に新興の世界的勢力たる米國の活動は吾人に取つて殊に注意せねばならぬものである。現代戰爭の著しい現象は獨逸の誤算と米國の勃興とである、而して露國の解體である。米露支三國に近接して居る日本は以上の形勢から考へても、國家としての基礎を固めるのが急務でなければならぬ。

大正七年十月十五日

大　類　伸

內容

現代世界の史的觀察

文學博士　大類　伸

一　統一主義と割據主義

歴史を讀んで居ると、その如何なる時代に於ても、統一と割據との二大傾向が歴史の大勢を動かしつゝあることを看過することが出來ない。統一と云ふ言葉は如何にも堂々と立派に聞えるが、之に反して割據と云ふ言葉は何となく悪い意味に解釋される。例へば封建割據の世などゝ云ふと、如何にも固陋偏執な狹い量見の人々が各々狹隘の

天地を固守して、此の廣い世界に互に反目對立した時代の様子が想起せられる、されば多くの場合、統一の時代が破れて割據の世となることは、時代が墮落したかの如くに考へられる、又小邦や群雄の割據した世の中が、一度、或る大勢力の下に統一されると恰も暗黒の夜が明けて晝となつた如くに之を歡迎し謳歌するのが常である。これは歷史を讀む人々に先天的に備はつた感情かとも考へられる、併しそれは要するに「統一」と云ひ「割據」と云ふ言葉の外形に捉はれた觀念であつて、決してその言葉の內容を理解した上のことではないのである、恰も「戰爭」と云へば其の戰爭と云ふ言葉だけで既に全くそれを呪ふべきものとし、「平和」と云へば一も二もなく渴仰して已まぬと同一の弊があるのである。想ふに「統一」はしかく賞讃すべきものであり、「割據」はしかく批難すべきものであらうか。抑も、人事の作用には普遍的方面と特殊的方面とがある、普遍的とは或る範圍に共通の事柄で、之を大きく云へば古今東西あらゆる人類に共通の現象とも見られるし、更に狹く解釋すれば一時代、一國民、一階級等それぞ

れに共通の事實ともなるのである。特殊的とは普遍的に比すれば遙かに狹い範圍に於て其のものが特有して居るもので、他と區別せらるべき點を指して云ふ、其の最も狹い場合に於ては一個人の有する特性で、即ち個人性と云ふべきものである。例へば吾等は人間として世界の諸國民と共通の點を有して居るが、日本國民として亦他國民と異つた特殊的方面をも備へて居る。要するにこの普遍性と特殊性とは、人間活動の二方面であつて、古往今來歷史を動かしつゝある二大勢力である、而して兩者相共に缺くべからざることは、恰も車の兩輪の如き趣がある、人類の發達、世界の進步は常に此の兩勢力の交渉關係に依て遂げられるのである。嚮に述べた統一なるものは此の普遍的作用の發現である、割據なるものは特殊的作用の結果である。

二

元來人間或は人間が組織した幾多の團體、すべて其等は相互の間に相違の點を有す

ることが多いので、其等のすべてを徹底的に統一することは非常に困難である。古來幾多の大帝國が史上に出現したけれども、間もなく衰滅に陷つたのは如何に統一の困難なるかを語るものである。是に於てか大なる統一を維持せん爲めには、勢ひ極めて不徹底なる又寛濶なる方針に依らねばならなかつた。古代支那の例を看よ、支那は古くから自から中華を以て任じ、四隣の國々はみな自國に來貢すべきものとして臣屬視して居つた、併し其の帝國思想は頗る漠然たるもので、國家組織は近代國家の如き緊張したものでなかつたこと固よりである。古代東洋の大帝國は多く此種のものであつた、其の永續しなかつたのも怪むに足らない、則ち徹底的なる統治を行ふことは、當時の交通機關其他一般に文明の幼稚なるが爲めに到底不可能であり、且又屬國の叛亂を招き易いのである、そこで勢ひ寛濶なる隙の多い組織に賴るのであるが、此の方針では中央の勢力が少しく不振の情況に陷ると、帝國內諸地に動搖を生じてやがては分裂を來すのであつた。西洋史上の大帝國たる羅馬帝國は確かに史上の一偉觀であるけ

れども、其の統一を維持することは甚だ困難であつた、是は風土や人情や歷史や更に利害を異にした幾多の國家民族を征服して建國した結果である、國が大になればなる程不純不統一の分子を益多く抱擁することゝなり、而して之を統御すべき中央勢力たる少數者は、他の異分子に化せられて自家本來の特質を失ひつゝあつた。此くなつては大なる統一組織を維持することが困難なのは當然で、分裂は避くべからざる結果である。しかも羅馬は領內各地の繁榮に努力するよりは、寧ろ力を中心地たる羅馬に集中して、全國を擧げて羅馬に奉ずるが如き方針を執つた、その結果地方は疲弊し紊亂して、名は大統一國であつたが、實際その統一は甚だ慘憺たるものであつた。此の如き內容の充實しない統一に代つて玆に割據分立の時代を現したのは自然の勢で、內容の勝れたものならば、統一よりも割據を歡迎するのは怪むに足らないのである。

二

羅馬帝國が滅びて其の文明が野蠻未開のゲルマン族に蹂躙されてから約一千年の間、則ち西曆第五世紀から十五世紀に亙る年代を史家は中世と呼んで居る、而して人は屢〻中世の初期を暗黑時代と云つて居る。成程、羅馬大帝國が倒れて領內は蠻族の割據する所となり、文明の上に何等の看るものも無い時代を暗黑時代と呼ぶのは尤もである。併し暗黑であり小民族割據の世であるからとて、直に之を惡しき時代と解釋してはならぬ。近代の歐洲諸國家は殆どみな此暗黑や割據の間から生れたので、その暗黑をして開明ならしめんとの彼等の努力は、實に近代歐洲の發達した文明を生み出したのである。又中世時代の割據の勢ひは今日にまで繼續しつゝあるので、近代を風靡しつゝある國家主義は實に中世に端を發するのである。要するに名のみ壯大にして實質の遙かに劣つて居る「統一」に代ふるに、狹くとも力ある徹底した組織を建設したいとの努力は、中世の「割據」を生み更に近代の國家主義となるに至つた。この「割據」の趨勢は千四五百年來益進みつゝあるので、今日と雖も決して衰へたのではない。

寧ろ益盛になりつゝある。

固より中世以來歐洲の歴史を動かしたものは單に「割據」の力のみではなかつた、其の一方には「統一」の力が存在して偉大な作用をなしたことを忘れてはならぬ。則ち中世には基督敎が特に大なる勢力を有してこれが「統一」の理想を代表しつつ割據の趨勢に對抗して精神界のみならず、政治上にまでも統一の作用を及ぼさんとした。固より政治上にはその作用は全然失敗したけれども、而して諸國家對立の形勢は益明確となつたけれども、精神上に於ける「統一」の力は決して衰へたのではなかつた。殊に中世は封建割據の世であるとは云へ、それは唯封疆の上のみの問題で、社會的には決して分裂でも割據でもなく、全歐に共通の感情風習等は行はれて居つた。中世の分立主義は十七八世紀に、各國の王權が發達するに從つて色彩は漸々鮮明を加へた、固より當時の國家主義は國君を中心としたもので、王室の家權主義に基いたものである、而して十九世紀に入つて民權の發達と共に、國家主義は單に王室や或る特殊階級の爲

めのみでなく、全國民的となつたのであつた。現代戰爭は實に國家主義時代の最も顯著な產物である、今次の大戰がある特殊階級のみの戰爭でなく、全國民的の戰爭であることは、如何に現代が國家主義の時代であるかを語るものであらう。

四

固より近代の分立主義は中世の割據主義に比すれば遙かに大規模である、恰も軍艦の艦型が年を逐うて大となり、又陸軍の組織の單位が益大となるに似て居る、併し軍艦にも或は艦隊組織にも、又陸軍の組織にも、其の時代に應じてほゞ或程度の制限がある如く、國家の上にもある限界がなければならぬ。則ち國家の境域は統治の力の徹底し得る範圍に止まらねばならぬ、現代の國家主義なるものは此の適當の範圍内に於て國家國民の能力を能ふ限り發揮し行かんとするものに外ならぬ、國家經濟の自給と云ふが如き皆それである。併し數百年來分立の形勢は益顯著であるとは云へ、其の一

面に「統一」の普遍的作用が働きつゝあつたことは忘れてはならない則ちその作用は政治的方面には及ばなかつたけれども、精神的、經濟的、社會的方面には著しく働いて居たのである。十八世紀は民權が未だ發達せず、時代の傾向は尙貴族的であつたが爲め、（佛蘭西の文化は能く之を語る）普遍的作用も主として精神界に限られて、學問の進步は偉大であつたけれども、近代の如き社會的運動は起らなかつた。十八世紀の學者には純知識的の問題に力を傾注して、學問の爲めには國家の差別を顧みないと云ふ態度が認められるのは、國家分立に對する反對の趨勢を代表したものと考へられねばならぬ。

更に十九世紀に入つては普遍的作用は經濟的社會的方面に著しく發揮された、而して分立主義が國家對抗の必要上戰爭の手段を是認するに對して、統一主義（國家の統一にあらず）から生れた諸傾向は、いづれも平和主義に左袒して國家が境域を立てゝ其の分界を守るに汲々たるを批難した。要するに近代の戰爭論と平和論とは分立と統

一との二大傾向から生れたものと認められる。又十九世紀に英國に行はれ而して世界に少からぬ感化を與へたマンチエスター派の自由貿易主義と、十九世紀末に著しく行はれた保護貿易主義、更に現代に喧しく論せられつゝある自給經濟主義の如き、其の前者は統一の傾向に屬し、後の二者は分立の根本精神に基いたものである。而して一方に國家的傾向が強くなるに從ひ、一方社會的方面には統一普遍の作用が行はれて、互に調節の妙用を遂げることゝなつた、社會主義の如き其の最も顯著なるものである。

五

現代戰爭は國家主義則ち分立の傾向から生じた一大結果であるが、この戰爭に對しても統一普遍の作用は決して働くことを怠らなかつた。現代戰爭に際して各國とも社會黨、勞働黨の人々が、戰爭を裏切る如き行動に出でつゝあるのは注意を要すべき點で、露西亞の如きは既に其の先例を開いた、戰場に於て幸にも勝利を占めつゝある獨

逸には、此種の作用が著しく認められないけれども、併し內部に於て漸次熟しつゝある ことは事實であらう、其他英佛諸國いづれも非戰分子の運動を見ないものはない。現代戰爭は經濟上には分立作用を普及せしめて、能く軍國の經濟策を樹立せしめることが出來た、而して國家の要求や利害は決して經濟上から左右せられるものでないことを示し、戰前の經濟學等の說を破ることが出來た。併し社會主義的思想に對しては未だ分立の作用を及ぼすことが出來ないで、軍國の破綻は一に其の方面から起らんとするのである。

戰後以上の統一と分立との兩傾向は如何に消長變遷するであらうか。假令現時の社會主義的運動は巧みに國家の分立作用と同化されて行くとしても、統一の作用は別に何等の形式を採て此世に現れて來るに相違ない、要するに統一作用は永久其の跡を絕たないものである。併し千有餘年の歷史を按ずれば、國家分立の趨勢が大河の海に朝するが如く、滔々として史上に流れて居つたことは明白で、しかも今尙其の流れは澎

湃として天地を席捲するかの如き觀がある。想ふに國家分立の趨勢は現代戰爭に依ても尙極限に達するに至らずして、其の形式には多少の差こそあらうが、今後益繼續されて行くのであらう。固より統一普遍の作用も決して衰へはしまい。現代の國家分立に反對の諸運動も其の思想に於て又其の力に於て決して侮るべきものではないが、併し其等の運動は主として國家主義に對する反動として起つたので、其の價値は反動としての點に存する。則ち或る一の大傾向に對して調節緩和の作用に止るもので、世界の動力としては本系のものでなく、單に傍系のものに過ぎないがと思はれる。假令將來或る時代に於て分立主義が破れることがあつたとしても、之に代て歷史を指導し行くべき力は現今の如き社會的國際的の諸運動ではあるまいと思ふ。恐らく國家分立の趨勢が今後幾多の變遷を經た後でなければ、將來に起るべき全く新しい傾向を想像することは困難であらう。

六

要するに近代は國家主義の時代で、分立割據の力は遙かに統一普遍の力を壓して居る。固より統一普遍の力も明白に存在して居るけれども、時代は依然として分立に傾いて居る。かくして統一的傾向も分立を根本として立脚して居る、現代の幾多の國際的施設は孰れも左樣である。一九〇八年獨人フリードの調査に依れば、世界に存する國際的團體（郵便、電信同盟の類をも含む）の數は七十八である、而して其の內獨逸が加盟して居るのは六十三で、英佛と伯仲の間にある（日本は僅か二十七に過ぎない）。併し如何に此種の傾向が盛になつても、遂に今次の大戰を避けることは出來なかつた。是則ち時代の本流は、かゝる方面に流れて居なかつたことを證するものである。固より國家主義が今後幾度か變改を餘儀なくされることはあらうが、依然として時代を支配することゝ信ずる。

抑も古代の帝國主義は或一の優越なる勢力を假想したるもので、諸國家諸民族は之に對して臣屬の關係に立つのである。國家主義は幾多の伯仲した勢力の對立關係に立脚するもので特に或る一勢力の優越を許さぬものである。されば國家主義の時代に於ては、或一國家の世界支配と云ふ如きは到底實現されるものでない。假令一時實現されたとしても、それは不自然に不條理に行はれたもので、間もなく破壞されてしまはねばならぬ。世界は漸次大なるものに統一されて行くとは、屢人の口にする所であるが、予は之を信じない。たゞ或程度の集中作用は行はれるであらうが、それは相應の大さに止るべきもので、而して其等の大勢力が多く對立して世界の歷史を形成することゝ思はれる。但し各國が互に負けず劣らず帝國主義を奉じて、國勢の伸張に努めつゝあるのは近代史上の著大の事實であるが、それは各國が存立の基を固めん爲めの努力で、世界的覇業と云ふ如き壯大な空名に隨喜しての結果ではない、自立自存の必要に迫られた結果である。

七

近代の帝國主義は古代の帝國主義とは異なり、いづれも國家主義に基いたもので、たゞ外的發展を必要とする國家の要求に應ぜん爲め、假に帝國と云ふ名稱を冒したもので、實は國家主義の變形に過ぎない。眞の帝國主義は或る優越なる一勢力が世界を支配することでなければならぬ。現代戰爭も對立關係に立脚して居る國家主義が各自の存立を安固にせん爲め採用した帝國主義或は世界政策の衝突とも見られる。戰後は恐らく此種の國家的帝國主義に整理が行はれる時代であらう。而して其の結果十八世紀に於ける英國の海上權獨占と云ふ如き事實は認められないで、幾何かの殆ど相似た大勢力が對立することゝなるであらう。換言すれば世界的國家主義の對立である。吾人も亦時代の趨勢が依然分立割據に存することを確認して、徒らに統一普遍の美名に醉ふことなく、國家の自立的存在の基礎を安固にすべく、あらゆる力を此の目的に集中せしめなければならぬのである。

エリッヒ・マルクスの帝國主義論

一

獨逸ミュンヘン大學の敎授エリッヒ・マルクス(Erich Marcks)は、ビスマルク研究の史家として知られて居るが、又年來帝國主義に關しても研究を積んだ學者である。マルクスは一九〇三年ドレスデンで、『現代の帝國主義の思想』(Imperialistische Idee im Gegenwart)と云ふ講演を遣つたことがあるが、今囘の開戰後も矢張りドレスデンに於て『帝國主義と世界戰爭』(Der Imperialismus und der Weltkrieg)と云ふ講演を試みた。此講演は一九一五年十月九日に遣つたもので、翌一九一六年に小冊子として出版された、而して一讀の價値ある議論であるから、抄譯して玆に紹介することゝした。

マルクスの所說は大體に於て、英國の帝國主義を世界的侵略的、無制限膨脹的なる舊帝國主義とし、獨逸の帝國主義を以て、國家的、防衛的限定的なる新帝國主義と

解したのである、而してこの舊帝國主義の世界的壓迫に對して新帝國主義はその地歩を主張せん爲め奮鬪せねばならぬことを說いて居る。マルクスは中歐同盟論者の一人と見え、彼は獨逸新帝國主義は其の立脚の基礎を中歐同盟に定むべしと主張し、國家連盟の形式に依て帝國主義を樹立せんとして居る、彼が獨逸帝國主義は侵略的支配的にあらずと云ふのは、此の國家連盟の形式を指す次第なのである。固よりそれは一の辭柄に過ぎないので、事實上は舊帝國主義と何等の異なる所がないであらう。併し言論の上のみでも國家連盟的の帝國主義を說くのは興味のある點で、新時代の趨勢を語るものと考へられる、大英帝國組織の問題は戰後非常に面倒なことゝなるであらうが、是も矢張り聯邦化せらるゝか、或は場合に依ては將來國家連盟の形を取るに至らぬであらうか。則ち獨逸の中歐連衡策と英國の帝國統合策とは互に類似して行くのではあるまいか。孰れにせよ世界の各國家が發達した現代に於ては、侵略的帝國主義の實現は甚だ困難である、是に於てかマルクスの帝國主義論は帝國主義の將來に一道の

光明を與へたかの感があるのである。

但し其他の點に於てはマルクスの所說は、戰爭氣分に支配された議論で、獨逸の立場を辯護せん爲めの議論とも考へられる。依て讀者はたゞ論文の一部分に就て批評せらるゝことなく、たゞ論文の底に流れて居る大體の傾向を看取せられんことを望むのである。尙原文の間には往々名句がないでもない。例へば『世界史的大勢は必しも各時代のあらゆる存在を左右するものにあらず』(das Weltgeschichtlich-Allgemeine beherrscht nicht das Dasein jedes Zeitalters.)　の一句の如きは、獨逸人の念慮を能く示したもので、世界に於ける獨逸の立場を明かにした面白い文句である。以下は卽ちマルクスの論文の要領である。

二

現代の大戰爭は如何なる戰爭であるか、或人は之を民族の戰爭だと云ふが、それは

當つて居ない、實際現代の交戰國は民族に分れて戰つて居ないではないか。又或者は之を文明の戰だと云ふ、而して英佛二國の如きは專制主義に對する自由主義の戰として解して居る、固より中歐諸國は西歐諸國と異なつた政治組織を有して居る。併し露國の專制主義が聯合側に加つて居ることを見れば、この戰爭は決して主義の戰爭ではない。『自由對軍國主義の爭』と云ふ如きは、要するに標語に過ぎない、此等の語はたゞ交戰國が都合のよい武器として使用して居るのみである。民族や主義などは敢て數ふるに足らぬが、たゞ見逃すべからざる一事がある、それは中央歐羅巴に對する敵意である。今や東歐及び西歐の諸國は等しく戈を中歐國家に向けた。中歐國家は民族に於て、文化に於て、又政體に於て互に合致して居る、彼等の結合は地理的地位と國家の力とに基くので、あらゆる方面より觀察するも歸する所は此の二點に外ならぬのである。

併しそれのみでは充分でない、現代戰爭は眞の意味に於ける世界戰爭である、地上

の國家にして之に干與せざる者は殆ど無い、この世界的大問題は東方に在るイスラム教徒をも關係者たらしめたのである。さて帝國主義が現代の標章であることは能く人の知る所であらう、世界に雄飛し、世界を占有せんとする大帝國は、今でも互に睨み合つて居る、十九世紀末以來吾人の周圍には其等の壯大なる勢力が活躍して居ることは動かすべからざる事實である。我等が帝國主義の時代に生きて居ることは、もはや毫も疑ふの餘地がない、ある社會學者は帝國主義の國家に次の如き定義を下した、世界的支配を求むる大國家は、其の全世界統一なると一部分の支配なるとを問はず、等しく帝國主義の國家である、而して其の力を欲求するのは社會的欲求と同一で、自己の性を世界に推し擴めるに存するのであると。此の如き大國家は現代にも確かに存在して居る、併し是は形式に捉はれた見解で、實際に迂遠である。吾人は須らく事實に立脚すべきである。

三

吾人の所謂帝國主義とは何ぞや、則ち帝國の建設、帝國たるの努力に外ならぬ、而してその帝國は實に世界的帝國なのである。併し現今に所謂帝國主義なるものは、其由來は新しいのであつて、一八八〇年來或は著しい場合を云へば一八九〇年來世界を風靡したのであつた。從來世界的帝國としては英露の二國があつた、露國は歐亞兩洲に跨つた陸國であり、英國は之にも勝る大海國であつた、この兩大國は一八一四年から一九〇五年まで常に睨み合つて居た、當時の世界史は之に依て支配されたことが多いのである。固より吾人も一八一四年から一八六四年まで英國が世界的支配を行つたことを認めて居る、併し各時代のあらゆる存在は決して世界史上の大勢のみに依て左右されるものでない。さればこそ一八八〇年以來そこに新しい時代が生れた、卽ち英露兩國の外更に世界に雄飛すべき幾多の國家を生じたのである。其等の國家は一八六〇年

頃から發達し來つて、一八七〇年來世界史的徑路を踏むこととなり、一八八〇年以來愈其の著しきを認めるのである、米獨佛日伊の五國は則ちそれである。嘗て英國は世界政策を遂行する上に於て、露國以外の對敵を有せなかつた、此時代こそ英國の自由主義の時代であつたのである。此時代には英國は自由主義を振翳して自由なる活動を世界に試みることが出來た、併し上述の如き新しい勢力が勃興すると、英國は忽ち自由主義的の世界政策を一擲し去つて、力と爭とを根本方針として奉じたのである。かくして一八八〇年以來大英帝國は緊密な、力ある一體として固められつゝあつた。英帝國は實に新興諸國の標本となつたもので、新時代の世界的努力に帝國主義の名を與へたのも英國である。而して他の諸國家が續々勃興し來つて、世界は今や共通の一體となり、又共通の戰場となつた。此の如き新形勢は一九〇〇年頃に於て熟したのである。

世界的經濟の主義は全世界を風靡した、商工業に次で資本は續々國外に注出された、

大工業者や大富豪は國家に迫つて彼等の大勢力を扶養せしむるに至つた。國家も亦自由主義時代の自制抑損の態度を放擲して、全力を競爭に傾注し、植民地や、販路や、原料地や、勢力範圍を獲得するに務めた、又之に伴つて新しい武器や軍艦や、大規模な外交策が採用された。チェンバレンやルーズヴェルトや、ウイルヘルム二世は此の如き新精神の宣傳者であつたのである。蓋し此等の世界政策の背後には一の強い力がある、則ち著しく增大した國家の力である。併し其等の國家には依然として舊時の國民的國家の觀念が離れないのである、かくして自己に集積され充溢された力を、國外に流出せしめんとして居る。

四

但し茲に注意を要する一事がある、世界の國家は各自一の個人に等しいものであることは吾人も承知して居る、而して現今では各國間に差異のあることが重視される、

則ち分化が肝要なのである。世界に於ける最も廣大なる國家は英米露の三國である、而して自己の内に數多の差異を抱藏して居る。海上的なる英國は經濟力の基礎の上に世界的組織を建設した、恰も世界的のヴェネチヤである、英國が海の支配に努力して居るのは勿論のことで、彼は海上に於て一の敵手なからんことを欲して居る、從て彼の海上支配は、停止する所を知らざる世界支配に外ならない。英國は此の目的の爲めにはあらゆる手段をも辭せず、自國に危かるべき新興の勢力に對しては常に之を壓迫するに躊躇せず、すべての新勢力の進路を狹むるに努めた。而して自からは往々分裂の危機に瀕しつゝも、間もなく又覺醒して以前にも增した攻擊力を發揮し來るのである。

英國に對して好對照をなすものは露國である、彼は全然大陸的である、數世紀を通じて彼は海へ向つて發展を企てた、而して常に其の計劃を止めたことが無い。日露戰役の際露國は日英兩國の爲めに、極東への發展を挫かれた、そこで再び舊時の方針に

歸つて、土耳古やバルカンへ南下を企てた、而してそれは墺匈にも獨逸にも戈を向けて居るのである。其の向ふや恰も洪水の如く、到る處の國民を威嚇して已まない。露國は固より海上の植民國家では無いけれども、其の欲求は實に無制限なのである。米國の大國家は新しいものではあるが、矢張り自意のまゝに膨脹侵略を續けて來た、彼自身の範圍内に於て彼は矢張り併呑者であつた。彼も恐らく東半球の大國家の如く攻擊的に傾くであらう。

以上英露米の三大國は孰れも自國内に經濟的滿足を得んとの希望を有して居る、即ち自立自足の國家を建設せんとして居る。此の外尙小なる國家を擧ぐれば、まづ日本が在る。日本は最も變化の著しいもので、英國の如く島國であり又海國であるが、同時に又舊の如く陸國である。而して强い膨脹の野心を抱いて、將來海外に飛躍せんとして居る、やがて彼が支那を支配すべきことは期待されねばならぬ。要するに日本も亦無制限に發展せんとする帝國の一に屬するのである。之に反して佛國は本來大陸的で

ある、固より阿弗利加及び亞細亞に植民地を有しては居るが本來は大陸的である、經濟上に於て人口に於て佛國は不振の狀況にあるけれども、其の政治的氣分に於ては特に豐富である、而して固く自己の存立を主張して已まない、是實に佛國の强味である。但し彼は帝國主義的傾向には半ば參與して居るに過ぎぬ、決して無制限膨脹を事とせず、又攻勢的でもない。たゞ佛國は獨逸に對してのみ攻勢的なのである。次に伊太利は以上の諸國に比すれば劣勢の觀がある、地理上佛國よりは海國的である、又野心にも富んで居るが、確乎たる趣が無い。政治上にも經濟上にも根本的には大國と云ふことが出來ぬ、たゞ舊來の歷史に從て進みつゝあるのである。從て英佛等の諸國と共に地中海の勢力として發展はしやうけれども、其の東西に驥足を伸べんとする態度は未だ尙甚だ不安に感ぜられる。但し伊太利は力は缺けて居るけれども、帝國主義の意向は有して居る、彼も亦かくして攻勢的と云はれねばならぬ。

五

然らば獨逸は如何。彼は大陸の中央に生れて多年敵國の爲めに苦められた。併し一八七一年以來始めて强固となり、自力を以て國家を固めることが出來、次で經濟の發展も著しく、遂に一八八〇年代より着々として國外に發展することゝなつた。ビスマルクやウィルヘルム二世の指導に依て、獨逸は其の存立を中外に明かにした、而して之と共に新時代が始まるのである。帝國主義のあらゆる特色は獨逸の場合にも現はれて來た、併しこの帝國主義は領土獲得の點に於ては極めて不幸であつた、世界は既に他國に分取せられて獨逸の得た所は甚だ狹小なのである。固より彼とても多くを望まないのではない。併し中央に國した結果その進路は多く塞がれて居る、是に於てか獨逸は侵略をなさずして、販路の獲得、勢力圈の擴張開放主義に依る通商區域の擴大を事とするに至つたのである。かくして彼は阿弗利加、小亞細亞、メソポタミャに向つた、

併しそれは併呑や支配ではなく、たゞ經濟的努力を主とした、而して其の爲めには政治の力や其他の力を用ゐたけれども、目的とする所は世界に於ける獨逸の地位を確認せしむるにあるのである。而して時には激しい言論を用ゐたこともあらうが、實行に於ては其の眞相は明かに平和的であつた。

獨逸は東南に力を傾注した、是は墺匈と土耳古とに對する關係からで、露國の大壓迫に備へん爲めである、又阿弗利加及び亞細亞に於ては英國の一大壓迫がある。かゝる事情の下に於て、獨逸の帝國主義は決して攻勢的ではなく、明白に防禦的である、彼は英、露、日、米等の如く、無限の膨脹を夢みては居らぬ、其の態度は終始國民的であつて世界的でない。彼は能く自制の途を知る、たゞ自由の餘地を求めるのである。かゝる帝國主義は新しい部類に屬する、新獨逸はこの新しい帝國主義を奉じて居るのである。但し帝國主義の語は墺匈國に適用することは出來ない、彼はあらゆる側から壓迫を受け、露國や伊國や、バルカンに對して自己を防護するに急である。獨逸は之

に反して積極的に行動して居る、彼はたゞ世界から疎外されるのを恐れ、世界に參與することの自由を求めて已まない、英國の如き舊大國の世界獨占に對して奮闘することは、獨逸自身の爲めでもあり、又後進諸國の爲めでもある。

以上の諸大國は互に世界政策を奉じて角逐するに至つた、東亞に於ては英露の競爭があり、更に佛米日獨も之に參加した、阿弗利加に於ては植民國家の爭があり、地中海には海軍國の爭が起つた。殊に地中海はあらゆる反目の燒點となり、あらゆる勢力はそこに衝突した、こゝに於ても優勢を振つたものは英國である。英國は地中海からして、又埃及からして、阿弗利加、亞細亞への交通路を扼制して、海と世界とを支配した。かくして獨逸が除け物にされてしまつたのは、能く人の知る所であらう。兎も角も英國は獨逸に對して著しく攻勢を執り、之を壓倒するに努めた。是に於てか不均衡なる英獨兩勢力の間に顯著なる大反目を生じた、その一方は世界的勢力であり、他の一方は國家的勢力である、又一は世界的大國家で一は新興の小國である、又一は攻勢

的で一は防禦的である。

六

然らば此の一大抗爭は如何にして起つたか、それは英國が獨逸の發達を許さないからである。兩國は西亞細亞に於て對抗したけれども、開戰前に妥協は成立した、之を考へても反目の眞の燒點は歐洲に存する、他の方面では無い。獨逸の經濟力は年來英國の勢力圏を威嚇した、又其の海軍力も發達した、之に依て英國の本國は著しい危險を感じた。併し英國の感じた危險は本質に於ては、歐洲的問題であつて決して世界的問題ではない。然るに史上の例を見るに英國は常に大陸に於ける競爭者を壓服し、殲滅することを根本的方針として居る。獨逸は經濟及び海軍に於て一大國家であるが、併し歐洲的國家で又陸軍國である、然るに英國は戈をこの獨逸に向けた、若し英國を威嚇すべき世界的帝國を求めるとせば、それは獨逸でなくして露國であり、又米國で

あり、更に日本でなければならぬ、此等は確かに英國に對する大危險である、併しそれは將來のことで、目前の危險ではない。要するに獨逸の力と活動とが舊時の世界的國家に比して遙かに潑溂の氣に富んだが爲めに、英國との反目は增大せざるを得なかつたのである。但し獨逸は終始歐洲的、大陸的であつたことを忘れてはならぬ。

又獨佛の間にも反目は存する、この反目ほ歷史的のものではあるが、決して帝國主義的ではない、大陸的である。又獨露の間には帝國主義的關係がある、獨逸が發達して以來露國は之を危險と感じた、墺匈に對する露國の壓迫は益加はつた、土耳古に對しても同樣である。獨逸は墺匈並に土耳古との關係上、勢ひバルカンより小亞細亞に對して利害を感ぜざるを得ない、かくして獨逸は露國と反目するに至つた、但しこの反目は獨り獨逸のみではなく、墺匈も土耳古も等しく露國に對して抱いて居るのであつた。パグダード鐵道問題も或は帝國主義もこの共同危險の感じに比すれば價値が劣るのである。かくして獨墺土の提携は獨逸に取ては全く歐羅巴的見地から成立したの

であつた。又墺匈國の對敵關係は全然歐洲的大陸的である、伊太利も亦トリエント方面、アドリヤ方面共に其の關係は歐洲的である。新しい世界政策は如上の關係に於て互に交渉して居るが、其の本質は舊の如く歐羅巴的に外ならぬのである。

予は現代戰爭を以て中央に對する側面よりの戰爭と解する、この帝國主義の戰爭は、其の區域が非常に廣大である點に於て確かに帝國主義的ではあるが、併し其の根本の原因或は目的に於ては全然歐羅巴的である、其の要點を占めて居るのは中央歐羅巴であつて、決して世界的勢力ではない。

七

獨逸が歐洲の中央に存在したことは、歷史其他あらゆる方面に重大の意義を有して居る。獨墺が提携して中歐同盟を形成したのも地理的地位の結果である、而して又實際上已み難き必要に迫られた結果である。しかも此の如き趨勢はやがて現代の戰爭を

生み出した、この戰爭は實に中央歐羅巴に對する戰爭に外ならない。中歐國家の問題は大陸的問題なのであるが、英國は之を利用して巧みに帝國主義的なる世界勢力の戰爭としてしまつた、而して戈を連ねて獨逸に殺到した、是こそ實に現代戰爭の實相である。一七五六年に普魯西は墺太利に對して七年戰爭を試み而してそれを成し遂げた、現代戰爭は正にこの七年戰爭に比較され得る、嚮に列强は普魯西の勃興を以て不利なりとしたが、今や中歐國家の興隆は等しく列强より不利と目せられて居る。要するに現代戰爭は獨逸の國民的發展の歷史から生じた成行であつて、吾人は毫も之を以て意外として驚く必要はない、其の萠す所は古く又深いのである。

繰返して云ふ、現代戰爭は大陸的戰爭である、又實に一八七一年及び一八七九年の獨逸建國の偉業則ちビスマルクの業績を固定せんことより起つたのである。換言すれば、東西兩面に對して中歐國家の存立を安せんが爲の結果である。その目的は侵略でもなければ、膨脹でもない、吾人の國家、力、而して國民、其等の存立の爲めである。

固より吾人の決心の背後には、全人類に對する中歐文明の價値に就ての深い確信が横はつて居る。吾人は之を以て、自ら誇として居る、吾人はこの文明を大いに主張し發揮せねばならぬ、但しそれは世界の侵略ではなく、自己の宣明であり發揚であることを要する。而して吾人は益〻一致團結を固うして、中歐に儼存する力を扶養し發揮して行かねばならぬ。

是に於て吾人は問ふ、如上の獨逸の態度は帝國主義であるかと。然り、それは英國の場合に於ける如き侵略的の帝國主義ではないが、中歐國家の戰爭の場合の意味に於て帝國主義である。中歐連盟は自衛の目的から成立した、而してそれは將來益〻必要である。假令其の結合は緩くとも又固くとも各連盟は確固として存在せねばならぬ、是實に益〻發展の必要を感ぜる新世界に於て、自然的に發達し來つたもので、その發達の區域が擴大せらるゝに伴つて、各員は孰れも其の利益を享受すべきものである。獨逸の帝國主義と云ふのは、上の如き意味のものである、而して其の防衛すべき地域

は單に防衛のみに用ゐらるべきでない、更に之を內部より創造的に發達せしめ、其の力を中外に發揚せねばならぬ。中歐連盟は經濟上並に政治的の理由よりして成立したが、將來にも永く其の效果を存續すべきである、此點に於て吾人は帝國主義時代の傾向を認めることが出來やう。而して力の爲め、經濟の爲め、文化作用の爲め、發達を求めることは勿論であるが、それは侵略でなくして自衞の行爲に外ならない。

八

併し玆に注意すべき一事がある。現代の世界は幾多の反目矛盾を藏するにも拘らず、倍、一體となるの傾向がある。現代戰爭も其の本質こそは歐羅巴的ではあるが、其間に非常に遠大なる世界的反目の働いて居るのを看過することが出來ない、英國の世界的手腕はあらゆる事件、あらゆる地方に働いて居るのである、かくしてこの戰爭は世界戰爭として吾人の前に現れて來た。かゝる事實は世界にいかなる影響を及ぼすで

あらうか。固より決して影響の無いことは不可能である。全世界に瀰漫した帝國主義・は世界到る處に足跡を殘さずして濟むものでない、勢力と領土と、資本と文化との配置關係は少からず影響を受けるに相違ない。現今の大戰爭は決して世界的競爭の精神を絕滅するものでない、又帝國主義をも消滅せしむるものでない。この戰爭に依て國家の力と組織と團結とを非常に重要視する傾向を生じた、あらゆるものは國家の力に依て存立を計ることゝなつた。このあらゆる力の集中は軍國的色彩を帶びたるもので現代の一大特色である、帝國主義の努力も亦かゝる方面に注がれて居る。戰爭の結果は豫言することは出來ないけれども、吾人が中歐國家存立の爲めに奮鬪すべきことは、動かすべからざる將來の決定である、而して從來進み來つた徑路を濶步すべきある、植民地に海上に經濟に、あらゆる點に於て世界的活動の舞臺より退いてはならぬ。

戰後世界の國境は如何に變更せんとも、現代の國民はは其の眼界を遠大にせずんば生存することは出來ない、成長したる國民が舊時の如き狹隘の眼界に滿足することは

到底不可能である。生きんとする經濟上の必要は吾人をして是非とも廣く世界に發展せしむるのである、將來吾人は此の廣範圍の內面的福利を享受するを希望すべきである、世界が反目と統一とに充滿して居る現代は、如何に多くの慘害と破壞とを實見したとは云へ、それは確かに力强い創始力に富んだ時代である、吾人は之に勝るべき時代を求めることが出來ない。かくして吾人の決心は固められ、吾人の地步は益〻堅固となるべきである、帝國主義の時代が吾人に與へた敎訓は實に偉大と云はねばならぬ。

（大正七年四月二十日）

帝國思想と國家思想

近世史が帝國主義の趨勢に依て支配されつゝあることの事實はよく人の知る所であらう、而して又國家主義なるものが近來特に著しく高唱せられつゝあることも亦認められねばならぬ。帝國と云ひ、國家と云ふ、この兩思想の間に如何なる相違があるか、この問題は現代人士に取て殊に興味ある且必要な問題であらうと思ふ。元來帝國思想は宇內統一の思想と深い關係があるもので、古代の羅馬帝國の如き、支那の國家の如き皆それである。羅馬帝國の如きは其の版圖は主として地中海沿岸諸地に限られて居たけれども、千八九百年も以前にあつては、彼の領土はやがて當時の世界を統一したものと見て宜しい、古人の「世界」と云ふ觀念は甚だ狹かつたのである。支那が自ら中國と稱し、君主が天子と稱して四夷に君臨したのも、やはり當時の世界を統一した觀念から出たのである。元來天子と云ふ語が天の子として此土に君臨するの意味で、天

と地と相對した思想の產物でなければならぬ、從て天子の君臨する國土は世界全土を意味することゝなる、固より事實上此の如きことは不可能であるとしても、根本觀念はそこに存する次第である。西洋では皇帝(Emperor)の語は「命令者」(Imperator)と云ふ語から出たので、此の義に從へば權力の普及と云ふ觀念がその間に認められる、更にその義を推し擴めて行けば、此の語は能ふ限り廣い版圖に命令せんとの希望をも示して居るのである。卽ち帝國思想は世界的觀念に基いて居る、從て事實はともかく、その理想は世界全土に命令することに存するのである。

帝國思想が世界的統一的なるに反して、國家思想は確かに割據的である。人民が纏るに便利な或る一團體を組織して能ふ限り强固な團結をなして行くのが國家思想の根本觀念で、帝國思想の如くあらゆるものを包括せんとするものでなく、同類相集つて異分子を排斥する傾向がある。帝國と國家との間には上の如き差違がある、卽ち帝國の團結は種々雜多の分子の上に樹立されたもので、決して緊密なものでない、之に反

して國家の團結は小規模ではあるが確かに强固で其の力は極めて徹底的である、而して又それだけ排他的なることを免れはい。この國家的團結の更に小なるものは、封建諸侯の領土の如き、又古代の都市國家或は未開人の部落乃至血族の團體等であるが、其の本體は殆ど皆同一なのである、卽ち時世の進運に伴ひ小なる團體の間に漸次集中が行はれて、國家なる團體が成立したが、近代に於ては其集中の範圍が國家の程度に止つて居る次第である。固より近來民族主義の聲が喧しくなつて、民族と國家の關係は屢國際的紛糾の種子を蒔くのであるが、併し現代に於ては民族主義は國家主義に對抗するに力が不足して居る、要するに現代は尙國家主義の時代に屬するものである。

然らば近代を風靡して居る帝國主義なるものは何か。それは國家主義の立場よりして帝國主義を行はんとするもので、換言すれば國家主義を帝國主義的に行はんとするものである。蓋し古代に行はれた帝國思想は支那に於て最もよく示された如く、四方の諸國が支那に對して臣下の禮を執つて朝貢するのを以て滿足し、必しも支那の主權を

徹底的に其等の國土に勵行せんとしたものでない、蓋し幾多の異分子を含んだ國土は、容易に統一されるものでないから、强て徹底的統治を行へば國土は分裂解體に終るの虞がある。但し支那が文化に於て著しく四周の民族に卓越して居たことは、所謂帝國思想の實現に好都合であつた、實に支那は主として文化の力に依て自ら中國としての地位を保つことが出來たのである。羅馬に於ても當時の歐羅巴に卓越した彼の武力はよくその帝國主義を維持することが出來た。要するに帝國主義なるものは他に著しい競爭者の無い場合に行はれ得べきものである。西洋古代の末期に羅馬帝國の統一が亡びて、數多の國家が歐洲に對立することゝなつて以來、古來の帝國主義卽ち宇內統一主義は到底實行不可能となつてしまつた。固より中世に於て統一思想は種々の形で頭を擡げては居るが、時代の大勢は遂に國家主義に傾くことゝなつた、近世に於て國家主義が盛になつたのも、其の端を中世の昔英佛獨等の諸國が起つた時に發するのである。抑、國家主義なるものは帝國主義に反して、相似た勢力が對立競爭しつゝある

時代の產物で、自國の立場を强固なるものとしたいと云ふ努力から生れるので、四方に號令することは其の根本觀念ではない、從て帝國主義の理想は積極的であるが、その手段は消極的である、卽ち徹底的でない、之に反して國家主義は理想は消極的であるが、手段は極めて積極的卽ち徹底的であると云つて宜しい。然るに近代に至て列强の對立競爭が激甚になつた結果、國家の權勢を外に擴張するの必要が起つた、而してその權勢擴張運動を帝國主義と呼ぶに至つたのである。しかも此の帝國主義の根柢は國家主義で、既に始めから矛盾が存して居る、元來小規模な排他的團體の思想の上に擴張運動を試みるのであるから、自から他に對して壓迫的となり、又權力政策的(Macht politisch)とならねばならぬ。此種の傾向は近代獨逸の帝國主義の上に能く示されて居る。一體獨逸は國家として極めて個人的である、從て其の對內及び對外の活動は甚だ徹底的であるが、國際關係を結ぶ列强の一員としては餘りに自恃的である。獨逸が他國人よりして常に壓迫的なものと感ぜられるのは、彼が徹底的なるの結果に外なら

ぬ。獨逸の植民地經營が充分の効果を收め得ないのもその爲めである。英國も亦帝國主義の驍將であるが、其の權勢を世界に擴張した時代が、列强の競爭が著しくなかつた時代であつたのは非常に幸福なことで、此點に於ては羅馬帝國の發達と類似して居る。英獨ともその帝國主義は等しく近代の産物であるが、英國のそれは餘程古代の帝國主義に近似した點があつて、獨逸の如く徹底的でない代り、又著しく包括的である。此點から見て大英帝國は眞の世界的帝國であるが、獨逸の帝國主義は國民的帝國たるを脱しないのである。

要するに帝國主義なるものを徹底的に行ふことは不可能である。其の理想が擴大すればする程、不純の分子が加はるのであるから、それだけ多く不統一に傾くことを覺悟せねばならぬ。徹底的なる統一政治が帝國の上に行はれ難いことは、羅馬の例を見ても明かである。さればこそ其の不徹底な統一政治の弊を救はん爲め、中世に幾多の國家が分立して互に自國の版圖内を統治するの形勢となつたのである。併しながら獨

逸は如上の趨勢を餘り露骨に代表した嫌がある、卽ち彼が得意然と吹聽する所の組織(Organisation)は帝國主義を行ふに餘りに窮窟である。此點に於て英國の遣方は隙が多く、又屢その隙に乘ぜられて狼狽するの缺點はあるけれども、確かに又餘裕綽々たるものがある。

然るに茲に注意すべきことは、近來獨人の帝國主義の思想に變化の認められるとである。つまり從來の如き壓迫的な帝國主義が現代の如き民主化の傾向著しい時代に行はれ難いことは明白であるから、彼等はその帝國主義を更に自由なものとし、一種の國家大同盟の形に變せしめんとするものである。獨人が近來頻りに唱へつゝある中歐大同盟說は卽ちその一端で、彼等は獨、墺匈、巴爾幹諸邦並に土耳古が大同盟を結んで、他國に對立すると共に東方に發展を企てんことを期して居る、固より其の大同盟の性質形式等に就ては、幾多の議論がある、而して又其の實現如何も甚だ覺束ないが、併し言論上のみでも中歐大同盟說は中歐諸國の將來に取つて極めて意味の深いも

のがある。但し獨逸が中歐東歐の諸國を併合すると云ふ批難を避けん爲め、特に大同盟と稱して、各獨立國家が自衞の必要と利害關係を同うする點からして相團結すべき由を說いては居るが、事實上はやがて獨逸の意志に依て左右されることとならう、從て中歐大同盟も事實に於ては全獨逸主義と餘り異なる所がないかも知れぬ。されども名義上だけでも中歐大同盟と稱して、能ふ限り併呑、壓迫或は威嚇として解釋されない樣に努めたのは注意すべきことゝ思ふ。英國に於ても近來彼の海外領土を糾合して一大帝國の組織を固めんとする運動が起りつゝある、而してその大英帝國は本國並に各植民地から成る聯邦的性質のもので、其の實現如何は中歐大同盟と等しく戰後の大問題であるが、其の根本觀念は同一であると云つて宜しい。要するに兩者とも民主化されたる帝國主義である。前揭のマルクスの意見は其の一例である。

想ふに帝國思想と國家思想との間には矛盾がある、從て國家主義の立場よりして帝國主義を行はんとする近代の所謂帝國主義は、現代の如き列强競爭の激甚なる時代に

は、必ず何等の破綻を生ぜざるを得ないのである。是に於てか各國家の同盟を政治的經濟的の結帶に依て、一種の聯邦的組織のものに變じて、玆に新意義の帝國主義を實現せんとする傾向の仄見ゆるは、時代の民主化に伴ふ自然の結果であらう。要するにかゝる帝國主義は各國家を單位とした民主政治であると云ふことが出來る。此して帝國思想と國家思想とは調和せられんとしつゝあるのである。かくして吾人は我國と支那との關係に就て一言せざるを得ない、日本が支那に對して侵略主義或は權力政策的の野心を抱く國家なる如く解せらるゝのは甚だ不利である、想ふに日支親善の上に帝國主義を樹立することは不可能であらうか。(大正六年五月)

中世の昔を顧みて

今古東西いづれの歴史を讀んでも、統一と割據との二大勢力が常に消長隆替しつゝあるのを認めざるを得ない、要するに歴史は此の二大勢力の交涉に過ぎないと云つてよろしい。現代開戰以來『平和か戰爭か』と云ふ主題に就て諸名士の意見が多く世に發表されて居るが、其の間にも此の兩勢力の對峙は認められると思ふ。世界主義對國家主義の爭はやがて平和主義對軍國主義の爭である。固より軍國主義を以て直に戰爭主義と解するのは不當であらうが、力に依て飽くまでも國家の存立を主張しやうとする點に於て、平和主義の反對とも見るべきである。實際現代がいかに國家主義の色彩に富んだ時代であるか、殊に其の國家主義が現代の大戰亂と獨逸の目覺しい活動とに依つて、如何に深く世界の人心を動かしつゝあるか、此等は實に現代に生れたる吾人に取つて極めて意義ある問題であり、特に戰後に於て益々緊切になつて來る問題であら・

う。孰れにせよ、爾今軍事は固より經濟上、思想上の諸問題或は更に民族問題なども、國家主義の立場から論ぜられる樣になりはしまいか。固より獨立と協同とを調和せしめ、國家主義と世界主義とを握手せしむることが、人類文化の進歩、世界史の發展の上に重要であるのは明白であるけれども、大戰亂の威力に怯えた(？)現代の人々は益々國家主義の麾下に馳せ參ずるに至りはしまいか。卽ち平和の時代に出來た國際法なるものが、砲煙と共に空に消えてしまつたと云ふことは、人をして益安心を『國家』の祭壇に祈り求めしむるのであらうか。此の世界史上意味深き現代にあつて中世歐羅巴の昔を顧みると、そこに又淺からぬ感興を覺えざるを得ないのである。

西洋中世史は羅馬大帝國の統一が破れた時に始まるのであるが、其の要點は統一に代ふるに、割據を以てしたことに存すると思ふ、所謂封建制度は其の割據を代表したものである。古代羅馬は武力に依て四方を征服した。是は英國が其の海軍に依つて雄を世界に稱したと同じく、羅馬が武力に於て卓越して居たと云ふよりは、寧ろ四隣

の民族が弱かつた爲めだと云ふのが適當であらうと說く者もある。孰れにせよ羅馬が武力的征服に次ぐに文化的統治を以てしたのは著しい事實で、如何にもして世界統一を實現しようとした羅馬人の努力は、其間に充分に示されたのであるが、併し彼等が後世に遺した敎は、要するに統一は不可能であると云ふことであつた。固より統一にも種々の意味があるであらう、若しそれが極めて弛緩した意味に於ける統一であるならば兎に角、幾多の異なつた性情と風習と更に歷史的背景とを有する民族の上に、徹底的な統一を實現するこは不可能である。武力の征服は一時的成功に過ぎない、之を永久ならしめるには勢ひ文化の力を借らねばならぬ。現代獨逸が軍國主義を振り廻しながらも、其の戰爭が文化の爲の戰爭であると唱へて居るのを見ても、人事が力のみでなされるものでないことを說明して餘あるのである。さればこそ文化的統治の必要も起るのであるが、羅馬人のなした如く征服地を自己の屬領として、其等の上に劃一的なる宗敎や制度を布かうとするのは甚だ困難の仕事である。支那の如く自國は中華

として中原肥沃の地に據り、四隣の諸蠻を來朝入貢せしむるに滿足するならば兎に角であるが、此の如きは眞の統一と云ふものでない。古代諸國の統一といふもの、多くは此種の朝貢主義と認められるが、其間にあつて羅馬が彼の大範圍に劃一的統治を樹立せんとしたことは、確かに世界史上の一大事實に相違ない。少くとも『統一』の意義を後世に敎へた點に於て、羅馬人の偉大を稱せねばならぬのである。

併し其の偉大なる羅馬人の抱擁力を以てしても、徹底的なる統一を實現することは不可能で、帝國の範圍が擴大するに從つて異分子の混入は益著しく、基督敎が世界に弘布するに伴つて、益異敎化せねばならなかつた如く、羅馬的特色は漸々に喪失して、もはや在來の『羅馬』と云ふものに依て、帝國を維持することが出來なかつた。帝國が東西に兩分され、更に又四分されたことは以上の消息を説明するものである。斯くして當時蠻族であつたゲルマン人は帝國に侵入して遂に羅馬を滅してしまひ、古代の一大帝國に代つて起つたものは、中世のゲルマン諸國家であつた、近代歐羅巴の諸國は

殆ど其等ゲルマン諸國家の後裔なのである卽ち現代歐洲は端を羅馬の滅亡に發すると云つて宜しい。

此くして中世史は『統一』に替ふるに『割據』を以てすることに依て始められた、封建制度は此の割據を基とした統治で、時代の生活は極めて小規模な範圍に狹められたのであつた。要するに羅馬の大統一政治では、公權が弱くして到底全國の住民に生命財産の安全を保證することが出來ない、しかも人が一日も安堵の思なくして生存することの不可能である限り、是非とも安堵の保證を公權以外に求ねばならない。そこで中央の公權に代つて保證者の地位に立つたものが地方の豪族或は大官等の有力者であつた。卽ち公權に代つて私權が勢力を占めたので、公私兩權は混淆してしまつたのである。封建時代とは何ぞやと云へば、それは此の公私兩權の混淆した時代に外ならぬのである。君臣の間に情誼關係が結ばれ、國君と雖も諸侯の領土竝び臣下に對して、直接に命令することの出來なかつたものも其の爲めであつた。所謂封建制度なるものが

成立したのは、彼のチャールス大帝の歿後に起つた紛亂時代、卽ち十世紀頃であるけれども、封建制度の由來を尋ぬれば、それは羅馬帝國の統一が動搖した時代から始まるで、公權の不安に懼れた人民が漸々私權の庇護を仰ぐに至つた時代、卽ち第四世紀の頃からであつたのである。

封建時代を中心とした西洋の中世に於て、私權が公權に代つた事實は無數に存在するので、一々茲に數へ立てることは出來ないが、其の一例を擧げて見れば、當時の武士には決鬪の特權が與へられた。卽ち武士相互の間に爭が起つた時、之を法官に訴へても其の裁判に不服である場合には彼等は劒を執つて理非曲直を自己の腕力に依て決することが出來た。これは武士の名譽を尊重した結果であるが、一面に於て確かに司法といふ國家の大權を蔑視したものと云はねばならぬ。夫にも拘らず決鬪の如きことが名譽ある特權として許されて居たのは、如何に公權の微弱なりしかを語りて餘あるであらう。日本の封建時代にも矢張り公私混淆時代で、江戶時代の如きは純封建の時

代ではなく、餘程統一的傾向も强かつたものであるが、それでも尙武士には其の私權の自由を認めらるゝことを以て名譽として居つた。彼等が國法の處分を受けずして、切腹と云ふ自裁手段を執るを名譽とした如きは著しい例證であらう、尙又江戶時代の俾史小說を飾る仇討の如きも、かゝる方法に依て武士たる特權を認めて置かねばならぬ必要があつた程、尙私權の尊重されねばならなかつた事情を說明するものである。

　上述の如き公私混淆に伴つて、割據の傾向は封建時代の全體に瀰漫して居たが、然らば古羅馬が努力の目的とした『統一』は全く泯び去つたのであるか。否、羅馬の大統一と云ふ如き世界史上の大事實は、決して何等の影響をも後世に殘ることなくして、幽靈の如くに消え去つてしまふものでない。成る程政治上から見れば中世は分裂割據の世である、一諸侯の領土はやがて一國の觀を呈して、領內の住民は濫りに封疆を越えることが出來ず、下級農民の如きは全く其の住地を離れることが出來ないで、土地に縛り附けられて居つた程である。併し其の割據的傾向の盛な時代に於て基督敎は中

世生活の統一を維持した唯一の楔子であつた。古羅馬の遺した統一の訓は、基督敎に依て精神上に尙其の權威を失はなかつた。羅馬法皇が舊敎敎會の主長として、諸帝王の上に勢力を揮ひ得たのも、統一の遺訓未だ尙泯びぬ證據であるが、併しそれとても法皇の權力が政治上に及んで、帝王の俗權に干涉すると云ふことは出來なかつた。固より中世に於ける敎權對俗權の衝突には幾多の波瀾曲折があつた、而して法皇の權威がよく帝王を左右し得た事もあつたが、要するに地方的に割據せんとする國家的運動に讓步せねばならなかつた。近世史の始に起つた宗敎改革運動なるものは、宗敎界の統一運動に對して、時代の趨勢に乘じて起つた國家主義が凱歌の聲を揚げたに外ならぬのである。

要するに中世を通じて僧俗は益分離しつゝあつた。基督敎は全歐に弘通した爲に著しく異敎の分子を混入して、或意味に於て墮落したのであるが、其の廓淸運動は十世紀頃に於て非常に著しくなり、幾多の高僧は蜚出して淸く尊き純なる基督敎の眞面目

に還らんことを叫び、敬虔の風は到る處に起つたのである。日本でも平安朝に於て政權と相結んで宮廷化した佛敎が、鎌倉時代に至つて有爲の僧侶の努力に依て信仰を主とした社會的佛敎となつたが、是は十世紀の歐洲に起つた宗敎廓清運動と比較研究さるべきものと思ふ。此の廓清運動は基督敎をして全然俗界より分離せしめ超越せしむるには至らなかつた、而して政權に容喙せんとする敎會の運動はなか〳〵烈しかつたのであるが、基督敎が宗敎としての態度を益明瞭に示して來たのは此時代からで、僧俗分離の傾向も認められるのである。

以上の趨勢に乘じて起つたのは封建制度の成立と云ふことで、之に依て武士と僧侶との區別は益明かとなつた、即ち此時代からして武士は全然一種特別の階級となり、武士生活を中心とした獨特の文化が發達することゝなつた。中世に行はれた武士物語或は武士歌謠の類は、此の武士生活が生んだ獨特の文學である、而して時代の前後に依つて其の物語歌謠の性質にも多少の差違が認められる、それは早い時代のもの程宗

敎的分子が多く加つて居るが、時代の降るほど純武士的となり更にに現世的享樂的となるのである。チャールス大帝の征戰を題材とした歌謠傳說と、十二三世紀に行はれたアーサー王物語とは時代の相違を說明すべきもので、後者を前者に比較して見ると、武士が益宗敎と離れ行く有樣は窺ふことが出來る。殊にアーサー王物語に出て來る興宴と試合と婦人とを生命と賴んだ享樂的な武士は、それが必しも武士生活の全體を示したものでないにしても、武士の理想が中世初期のそれに比して違つて來たことが解る。殊にかゝる武士が居つたと同時に聖フランシスの如き、裸頭跣足、慈悲と貧窮とを說きつゝ街頭をさまよひ、路に蟲に會へば爲めに其の路を讓り、飛ぶ鳥を見ては敎を說いたと云ふ聖僧があつたことを思へば、中世史にも著しく予盾した兩面があつたのを看過し難いのである。

武士と僧侶、それは中世史の重なる役者で、當時の社會は彼等兩階級に依て維持されたのであるが、兩者の區別は益著しく、遂に近世史に入つて封建國家から國民的國

家が發達することゝなり、國家は强固なる君主權を基礎として統一的に組織されるに至つた。此時代に至つて僧侶階級は殆ど武士階級に屈服したのである。嘗て十二、三世紀に亙つて十字軍と云ふ一大事件が起つたが、是は武士と僧侶とが協力して一大遠征を東方聖地に試みたもので、人も知る如く其の目的は遂に達せられずにしまつた。而して此の十字軍は武士と僧侶とが握手して一大事業を企てた最後の例で、以後かゝることは再び看られないのである。要するに十字軍は中世史の中心たるべき大事實で、統一と割據との兩精神が互に消長しつゝあつた時代を説明すべき好適例とすべきである。

十字軍の遺響乃至統一的運動の閃光は、近世史を通じて時々認められるけれども、地方的に或は民族的に强固なる纒つた國家、卽ち小規模ながら徹底的なる統一的國家を建設する運動は益盛となつて、現代に見る如き列强角逐の風は十七、八世紀に愈よ著しくなつて來た、『國勢均衡』の問題が八釜しく唱へられる樣になり、外交とか國際

法とか云ふ言語が重ぜられる樣になつたのも此頃からである。戰爭と條約とを除けば近世政治史は無意味なものとなつてしまふ程各國家の關係は複雜を加へて來た。卽ち現代列强の對峙關係は、近世國家主義の產物で、其の國家主義は又中世の割據主義に端緒を有するのである。羅馬帝國が實際上に徹底的な統一を仕遂げ得なかつた爲め、安堵を求めて已まぬ人心は『統一』を棄てゝ『割據』に走つてしまつた。而して其の影響は遠く遠く千八百年の後に至つて、現代獨逸の如き極めて徹底的な國家主義を現ずるに至つた。『近代獨逸』の著者エリス・バーカーは現代戰亂を指して『民主々義對封建制度の戰爭』と云つた、勿論英國對獨逸の戰爭の意味であるが、現代獨逸を指して封建制度の國家と稱するのは、或程度まで確かに眞實である。或意味に於て獨逸は中世の昔を現代的に完成しつゝあるものと云へやう。

併し割據的なる中世にも統一の精神は決して泯なかつた如く、國家對立の烈しい現代に於ても、統一的世界的精神は其の光を失つて居らぬ。通信、交通其他救護博愛事

業に於て、幾多の國際的運動が催されたことは能く人の知る所であらう。要するに『割據』と『統一』とは、其の一を擇んで他を棄てることの出來ないもので、各人生の半面を示したものに過ぎぬと思ふ。固より歴史の流に浮沈して兩者の間に消長隆替はあるであらうが、兩者あればこそ人生は意義ある發展を續けて行くのである。平和と戰爭と、其の孰れかゞ絶對的價値を有するのではなくして、兩者共に人生に缺くべからざるものに相違ない。獨逸は其の國家主義の堅城に據つて益〻軍國主義を鮮明にするも宜しい、併し時代の流は單に獨逸の内にのみ流れては居らぬ。要するに現時の大戰亂は益〻國家主義の發展に便ならしむると共に、又一面に於て世界的精神の價値を鼓吹するに至ると思ふ。蓋し中世が尙現代に生きて居る如く、羅馬も亦決して水泡の如く消えたのではないのである。（大正五年三月）

地中海と伊太利

地中海の特色――古代の統一――分裂と列强角逐――ビスマルクの外交策――伊太利と三國同盟――形勢の一變――地中海の妥協――現時の戰亂と伊太利の態度

一九一三年の春、時の伊太利外相ジウリヤノ伯が某處での演說中に、『地中海は公開の海なり、而して其の主人たるものは伊太利なり』との意味ある語を述べた。當時之を聞いた英人の間には、伊太利の野心を疑つて不安の念を起したものが尠くなかつたと云はれて居る。英人の不安は兎も角として、伊太利が地理上其他の理由からして、地中海に最も重きをなすべき地位に立つて居ることは明かである、又地中海が歐洲列强之に對して孰れも淺からぬ利害關係を有するのも事實である。現に歐洲の大戰亂に際して伊太利が屢開戰の噂を立てられながらも、未だに中立を守つて旗幟甚だ鮮明でないのは其間に種々の事情のあることゝ察せられる。（本篇は伊太利參戰前に起稿せり）伊太利は凡そ五十年前

統一王國が成立して以來、殊に近年に至つて著しい發展を遂げたが、爾今益歐洲乃至世界の史上に重大なる地位を占めるであらうし、又伊太利と最も關係の深い地中海の形勢も、亦刮目すべきものがあらうと思ふ。此際地中海の昔を顧みて形勢の推移を尋ねるのも、亦興味あることであらう。歐羅巴の文化はまづ何の邊から開けたと云ふに、それは云ふ迄もなく地中海である。埃及のことは別として、文化はまづ地中海の東部即ちエーゲ海の諸島竝び沿岸に起つた、エーゲ海文化と稱するものは是で、實に希臘の文化の先驅となつたものである。次に文化は希臘の半島に榮え、更に西して伊太利半島に精華を發輝したことは能く人の知る所であらう。此くして羅馬帝國に至て地中海沿岸全部と、歐洲大陸の西部及南部とが統一さるゝこととなつた。此時代に於て西洋史の中心は實に地中海であつた。而して其の地中海の中央に位した伊太利が、其の大帝國の中心であつたことも決して偶然でない。卽ち古代に於て歐洲の表面は地中海に濱した南部で、今日の獨逸其他北海沿岸の地は裏面であつた。換言すれば歐洲の生命

はすべて地中海に集中されて居たのである。又地中海は云ふまでもなく內海である が、此の大なる內海の爲めに沿岸の地方を統一するに便であつたことは固よりであ る。內海は其の沿海諸地の交通に非常に便利であるのみでなく、氣候に於ても沿海諸 地の間に著しい差を生ぜしめない。此の氣候に對する內海の調節作用の爲め沿海諸地 の關係は親密とならねばならぬ。地中海の沿海諸地も畧同一氣候で、歐羅巴側の諸沿 岸と小亞細の沿岸とは、所謂地中海氣候の圈內に屬して居り、阿弗利加側は一小部分 を除く外、みな准熱帶氣候の土地で、地中海の南北兩部の氣候はまづ相似たものであ る。其の上古代にあつて航海し得る唯一の大海は、地中海のみであつたから、氣候の 關係と相俟て其の沿岸諸地が、各自孤立的關係に立つことは不可能と云はねばなら ぬ。地中海沿岸に幾多の民族や國家が起つたけれども、彼等が遂に羅馬帝國に統一さ れてしまつたのは、實に地理上の關係が然らしめたものと云ひ得る。

要するに史上に於ける地中海の任務は統一と云ふことである。而して此の地中海を

生命と頼んで起つた羅馬が、遂に統一の任務を果したのも誠に當然の事であつた。併し歐洲大陸には表面のみでなく、頗る廣い裏面がある。卽ち西はピレニース山脈よりアルプスの連山に及び、更にカルパチヤ山脈に連つて居る一大山系は、ほゞ歐洲を南北に二分して居る、氣候も之に依てほゞ南北二部に分たれて居る。（但し匈牙利とバルカン半島の內部とは聊か例外である。）古代史は主として此の南部の歷史であつたが、やがて北部の分子が加はるゝに至て古代史は面目を一變した。羅馬帝國の滅亡は種々の原因があるが、此北部歐羅巴が歷史の舞臺に上つたことは其の一因である。ゲルマン族の活動は卽ちそれで、偉大なる羅馬を顚覆したものは實に彼等であつた。古代史に次いだ中世史は此の南北兩分子の抗爭史とも云ふべきもので、統一を生命とした南方主義と、割據を重じた北方主義との勢力消長の歷史である。是に至て南方主義は單に地中海を己が天地と頼んで居ることが出來ず、北方に對して新しい關係を結ぶこゝなつた。此の事情は地中海をして從來の如く統一の海たらしむることが出來ず、玆に分裂の形勢を現ずるに至つた。

此の勢に乘じてイスラム敎徒は阿弗利加北岸を席捲して、西班牙に據り、又シ、リー島をも占領したのである。爾來現今に至るまで歐洲全土に統一が實現されなかつたと共に、地中海も亦『分裂』の海となつてしまつた。元來宗敎の相違は文化の差別を示すもので、信仰を異にする民族が相融合するのは頗る困難である。中世にイスラム敎徒が地中海沿岸に勢力を扶植したのは、地中海の形勢に根本的變化を與へたもので、同海の南北兩部は互に疎隔するに至つた。

以上の形勢に伴つて伊太利は北方主義と頻繁な關係を結ぶこととなり、獨佛兩國は屢此の半島に野心の手を伸ばしたのである。併し古代は『統一』の羅馬か滅びると共に去つたけれども、其の中世に及ばした感化は偉大なもので、『統一』の精神は分裂割據の中世を通じて、依然として人心を支配した一大勢力であつた。而して地中海も尙歐洲の表面、歷史の中心舞臺たる意義を失はなかつた、伊太利が中世史上に重きをなして居るのも此の爲めに外ならぬ。歐洲の交通路は多く伊太利に集中され、通商は其諸

港を經て地中海沿岸諸地へと營まれた。獨逸の內地殊にライン地方が著しく進步したのも、伊太利との關係である。ラインの下流卽ち後の和蘭、白耳義地方が開けたのも、北海の御蔭を被つたことは無論であるが、背後に伊太利を控えたことも重要な原因である。又中世後期に榮えた北獨のハンザ諸市も、矢張り伊太利諸市との關係に負ふ所が多い。更に伊太利から見ればアルプスの連山を踰えて、背後に獨佛諸國を控えて居たのは、實に經濟上其他の諸點に於て伊太利の後楯となつたもので、此等の後楯を利用して伊太利は自己の地位を固めたのである。固より此の北方に關係を結んだが爲め、幾多の政治的紛爭を釀したことは事實であるが、伊太利の强味もそこにあるので、羅馬敎會が統一主義を標榜して列國の帝王を操縱し得たのも、南方主義の未だ衰えざる證據であらう。又宗敎改革時代の始に當つて、羅馬敎會が免罪符を賣つて頻に獨逸人から金を徵集したのも、矢張り南北相倚る方針に出たものと認められる。彼の十字軍の如きは中世の地中海に起つた大事件で、地中海中心の時代乃至統一主義の時代を

說明すべき好適例である。

此く統一主義は頗る勢力があつたけれども、大勢は段々割據主義の勝利に歸して、中世末から近世に懸けて國家主義が著しく盛になつた。獨逸の君主が統一主義に心醉して、頻に伊太利に干渉したのも、地中海が未だ尙其の意義を失はなかつた證據であるが、國家主義の風潮は遂に獨逸をして手を伊太利から收めしむるに至つた。以後十六世紀に西班牙は頻に舊敎的統一主義を標榜して、佛國と覇を爭ひ、其の抗爭は伊太利及び地中海に行はれたが、其後佛國の隆盛時代には北阿經營を始めて、西班牙に對抗したのである。其間には土耳古族の活動もあり、又十七世紀からは英人和蘭人相次で地中海に活躍を試みた爲め、地中海は列强角逐の海となつた。併し西洋史の大勢は大陸主義や外洋主義に傾いて居た爲め、昔の如く地中海が歷史の中心となることは出來なかつた。其後十八世紀末から十九世紀に及んで列國も內事に忙しかつた爲め、地中海には目覺しい大事件もなく、たゞ露國が屢土耳古を壓迫したのと、佛國が再び北

阿經略を好めた位なものである。處が一八六九年スエズ運河が開通して、地中海が世界の交通上重要な意義を有して來ると、又もや地中海は世界史的地位を占め得ることゝなつた。而して地中海が從來の不活動の狀態から覺醒して來た頃から、其中央なる伊太利も中世以來の紛亂分裂の不幸な狀態を脫して、統一した獨立國家を形成することゝなつたのである。殊にスエズ運河の開通と伊太利の統一とがほゞ同年であつたのも、偶然とは云へ面白い事實である。

さて上に述べた如く近世の地中海は、もはや西洋史上の本舞臺ではなく、たゞ本舞臺の餘波がそこに現はれたに過ぎない觀がある。これは列强均勢の大陸主義や、拓地植民の外洋主義が全盛であつたからで、又統一の精神は著しく衰え、たゞ各自の彊域を固める國家主義が盛んであつた結果である。無論此の時代の伊太利半島は分裂割據の有樣で、列强の勢力消長に伴つて多少の波瀾を揚げたに過ぎない。併し十九世紀中頃に至て伊太利は漸く統一の目的を達することが出來、又之に次いで獨逸帝國の建設

を見ることゝなつた。此の以後約二十年間卽ち七、八十年代はビスマルクの全盛時代で、歐洲列國は全く彼の頤使の下にあつたと云つて宜しい、恰もナポレオン沒落以後墺國宰相メッテルニヒが保守主義を標榜して、歐洲外交界の樞機を握つたに比すべきであらう。近代の外交關係に就ては屢論ぜられたことであり、就中ビスマルクの外交の如きは、現代戰亂の破裂以來殊に能く說かれたので、今茲に繰返す必要がないと思はれるが、事の順序として是非とも一言するの必要があり、殊に地中海のことを語る際には論及せざるを得ない次第である。ビスマルクは獨逸に對する佛國の復讐心を外に轉ぜん爲め、佛國をして阿弗利加に向はしめた、而して英佛兩國は自然阿弗利加で衝突することゝなつた。一八八一年佛國がチュニスを併合し、更に南進して手を中央阿弗利加に加へんとし、遂に英國と衝突するに至つたのは著名の事實である。又伊太利は佛國の勢力が北阿に伸張したのを見て、自ら安ずることが出來ず、遂にビスマルク外交の圈内に走つて、獨墺兩國と三國同盟を結ぶことゝなつた。尙伊太利は佛國の活

動を默視することが出來ず、大に東阿弗利加の經略に着手した。又ビスマルクは一八七八年の伯林會議で露國南下の野心を抑へ、彼をして印度國境に英國と爭はしめ、更に其の力を極東に轉向せしめて、バルカン半島より地中海方面に出やうとした露國の宿志を挫いてしまつた。卽ち此時代の地中海は阿弗利加に於ける英佛の反目と更に佛伊の對抗とに依て維持せられた、而して露國が去つた後のバルカンには墺國の勢力が除々として伸張しつゝあつたのである。此くして列國の注意を阿弗利加乃至亞細亞に向けしめて、ビスマルクは歐洲に於ける獨逸の地位を固めたのであつた。英のソールスベリー、伊のクリスピー、佛のアノトー、墺のアンドラッシー孰れも當時一流の外交家であるが、ビスマルクなる北斗星を繞る衆星の如きものに過ぎながつた。

伊太利は地中海の中央に斗出した國で、其の發展が海上に向ふべきものであるは明白である、處が一衣帶水を隔てた北阿のチュニスは佛國の爲めに取られてしまつた。殊に以前伊太利が獨立戰爭を起した時、佛帝ナポレオン三世は、表面は伊太利を助け

て置きながら、やがて之を責る樣な極めて不信な態度を取つた。此の一事は深く伊太利人の心に銘じて、反佛感情はなか〳〵强かつたのであるが、今佛國がチュニスを領するに至つては切齒扼腕せざるを得ない。一八八二年伊太利が敢然として獨墺と同盟するに至つたのも、以上の事情に基くのである。併しこれは果して自然の現象であらうか。獨墺伊三國の歷史的關係から考へて、當然の結果と云ふことが出來やうか。獨墺兩國は決して地中海主義の國ではない。墺國の如きはアドリヤ海の東岸を領して、地中海に活動すべき根據地を持つて居り、且又近年頻りにバルカンに南下を企てゝ居るけれども、未だ地中海主義の國と云ひ得るまでに至らぬと思ふ。又獨逸は地勢上から北海主義の國であることは當然である。從て此の三國が眞に利害を同うし、互に深く中心から固い握手をしたならば、南方主義と北方主義の大提携であつて、中世の神聖羅馬帝國を實現した樣なものとなる、卽ち地中海の生命であつた大統一主義の一端がそこに發現したと云へやう。併し此の如き中世的思想は國家的對峙の著しい近世に

は到底適合せないものである、南方主義と北方主義との握手は近世には不可能である。固より獨逸の側から見れば、彼が地中海と絶縁されて居ることは心細い次第で、墺國を前衞としてバルカンに南下させて居るのも、以上の必要から出たことゝ思はれる、又ビスマルク去つて後現帝が頻に土耳古を懷柔したのも同一の理由に由るものであらう。從て三國同盟に依て伊太利を味方とすることが出來れば、他日地中海に活動するに非常に便利であり、又地中海の何處かに根據地を設けることも可能であらう。又同盟成立當時にはビスマルクの急務とした佛國孤立策の爲めには、伊太利を味方に引入れて佛伊兩國を反目せしむるのは必要であつたに相違ない。卽ち獨逸は三國同盟に依て軍事上にも經濟上にも、地中海に勢力を扶植することが出來、或意味に於ては北海より地中海まで、南北に歐羅巴を縱斷することも出來やう。獨逸の競爭者たるべき英佛兩國が此の爲めに少からぬ打擊を受けるのは明かである。又墺國に取てはアドリヤ沿岸の領内に居住する伊太利人が、頻に該地方の伊太利本國に合併されんことを望ん

で、本國の人と相應じて所謂イレデンチストの運動を企てゝ居るが、是はたゞさへ民族的競爭に惱されて居る墺國の苦痛とする處で、伊太利との同盟に依て此の紛紜を有利に解決し得る望がないでもない。尙又バルカンに侵入して來る露國の勢力を抑える爲にも、伊太利を味方として置くのは得策である。殊にセルビヤ其他のスラヴ族の國家が發達することは、墺國南下の大障害で、墺國は無論之を打破しなければ止まぬ決心であるが、伊太利も自國がアドリヤ海並にバルカンに勢力を振ふ必要からして、セルビヤを抑えることは或點まで墺國と一致して居る。墺國は此くして三國同盟を利用し得べきものである。

併し伊太利に對する三國同盟の意義は何うであらう。此同盟は獨墺兩國に取ては、必しも國家の運命を左右すべき一生懸命の問題でないかも知れない、併し伊太利に取ては國家の前途を支配すべき死活問題である。伊太利は伯林會議の際に何物をも得なかつた、恰も列强から仲間外れの態である、然も當時法王黨の運動は尙盛で國土統一

の上には、憂慮せねばならぬ一分子であつた。此の如き境遇に立つて彼が最も心強く思つたのは、獨逸の武力を借り得ることであつたらう、殊に年來佛國の不信を憤つて居た伊太利としては、尙更獨逸に倚るの傾向を生じたのは疑むに足らない。恰も是中世の初羅馬法王が敎會の安全を計らん爲め、西北の方フランクに助力を求めたと相似て居る。且又伊太利は墺國に好意を表することに依て、將來活動の舞臺たるべきバルカン方面に於て、利益の分配に與るべき機會を捉み得るかも知れない。以上は獨墺に對する關係であるが、尙更に英、露兩國に對しては、ビスマルク在職中は伊太利は三國同盟に加入したからとて、別に此等の二國と敵視する樣な情況ではなかつた。伊太利が決然北方主義の國と握手するに至つたのも、以上の事情からであつたに相違ない。併し元來地中海主義の伊太利が、佛國を敵とし獨墺に走るのは危險のことゝ云はねばならぬ。

伊佛兩國は『ラテン兄弟』の間柄であると云ふ樣なことは別として、元來兩國人は感

情に於て信仰に於て、其他幾多の民族的關係に於て、相類似して居るのみでなく、伊太利が地中海に活動する上に於て、佛國を敵とするのは甚だ不利である、固より三國同盟に依て獨逸の武力を後楯と賴むことも重要であらうが、それよりも佛國の海軍に横合から攻められることは、更に重大の問題であらう。單に軍事上の問題のみでなく經濟上の必要もある。三國同盟締結の結果、伊佛兩國の間には激烈な關稅戰爭が起り、兩國の貿易は著しく打擊を受けた。此の時まで伊太利には佛國の資本が多く放下されて居たが、玆に至て續々本國に回收されてしまひ、此から大に發展しやうとした伊太利の商工業は、之に依て進步の路を杜絕される有樣であつた。尙關稅戰爭の不幸な結果は財政の上にも影響して、やがて重稅の賦課となり、民心の不滿となり、殊に植民政策の上に一頓挫を來すことゝなつた。一八九六年アドワに大敗して、アビシニヤ經畧に不名譽の汚點を印したのは、實に其の著しいものである。されば之より先一八九一年三國同盟を更訂した際に、伊太利は必要に應じてチロールより二軍團の兵を進め

て、佛國を側面より攻撃すべしとの趣意が補足されたと云はれて居る。之を以ても伊太利が形勢の非なるに悶々として、益々三國同盟に倚るの意志が强かつたことが察せられやう。

要之、ビスマルク時代の地中海は、英佛伊三國の反目に依て維持され居た、而して英國は常に佛國に對抗して地中海に於ける伊太利の利益を保護したのである。(一八八七年の英伊協約) 此く地中海が反目の海であつたことは、實にビスマルク外交の頂點に達したのを意味するものであるが、併し此の形勢は永久に續くものではなかつた。一八八九年ビスマルクの退隱した頃から、英佛は從來の態度を改めて漸く接近し始めた、是は兩國が徒に衝突するのは相互の不利益であるから、玆に兩國の提携を見ることゝなつた。而して英にランスダウン出で、佛にデルカッセの出たことは、此の趨勢を大に助長せしめたのである。さて英佛が握手すると地中海の形勢は大に變らざるを得ない、而して地中海の主長たる伊太利の上にも、當然變化は起らねばならなかつた。其のみな

らず、ビスマルクの退隱は益佛露をして接近せしめた、獨逸をして孤立せしむる大方針は夙くも此頃に端を發して居る。四周の形勢が此く變化して來ると、伊太利は地中海に於ける自己の不安を顧みざるを得ない、此くして彼は英佛兩國に接近すること丶なり、三國同盟に對しては必しも誠實な味方でないことを示した。一八九八年の佛伊通條約に依て、從來の不幸な關稅戰爭の幕を閉ぢたことや、又モロッコ問題で英佛に與みして、獨逸の走狗となるを肯ぜなかつたことや、又佛國と默契してトリポリに對する伊太利の特殊な利害關係を認めしめたことは、孰れも形勢の一變を示す例證である。

是に至て地中海は反目の海から一變して、妥協の海となつた。英佛伊三國は各自の利益を保證すべく互に妥協したのである。英の埃及に於ける、佛のモロッコに於ける、伊のトリポリに於ける皆それである。又方面が少し違ふけれども、アルバニヤを分割しないこと、卽ち他國をして濫にアルバニヤに手を加へしめぬこと、一九〇七年墺

伊兩國の外相エーレンタール及びチットニの間に約束したのも、矢張り以上の妥協の精神から出たものと云へる。されば最近バルカン戰爭の際にも、列强は皆バルカンの現狀維持を主張して已まなかつたではないか。從て獨逸がモロッコ問題を提げて地中海に波瀾を捲き起さうとした時、列强は之を抑へて地中海の妥協は遂に破られずにしまつた、但、伊太利のトリポリ遠征並に併合の事件が起つたけれども、これは從來默契のあつたことで、矢張り妥協の結果たるに外ならぬのである。

地中海の平和は以上の妥協に依て保たれたが、此平和を攪すべき禍源は實にバルカン諸邦の自覺と、近年頻に土耳古に向けられた全獨逸主義の侵入と、更に墺國の南下とである。其等の事情は今玆に略するけれども、英佛伊の三國が之を默認出來ぬのは明かで、特に獨逸をして地中海に手を加へしむることは、やがて地中海の妥協を破ることゝならう、殊に墺國がサロニカ方面に南下することは、アドリヤ海からバルカンを東西に横斷しやうと云ふ伊太利の經濟的進路を妨げるもので、墺伊の利害は玆に衝

突せざるを得ない。此くして地中海から見て三國同盟は甚だ不和の分子を含んで居る。但、目下墺伊兩國はアドリヤ海沿岸割讓の件に關して、頻に交渉中の樣子で、其の結果は甚だ不安なものであると察せられるが、併し之に依て墺伊兩國間には或る妥協が成立し得るかも知れない。又此の戰亂後獨逸が地中海に活動することは當分無いであらうと思はれる。然らば心配すべきはたゞバルカンの形勢である。こゝでは土耳古の衰勢が著しい爲め、之に乘じて露國の南下は益露骨となるかも知れない、左樣すれば地中海の新勢力として露國の活動を見るに至るので、從來獨逸に對する心配は、今後變じて露國に對する心配となりはしまいか、地中海の平和は或は此邊からして攪亂されることが無からうか。

地中海は羅馬帝國の昔には統一の海であつたが、其の後變じて分裂割據の海となり、或は列强角逐の海となり、更に最近に至て反目の海となり、轉じて妥協の海となつた。而して其の中央に在つて自から地中海の主人公たり得る地位を占めた伊太利は、年來

三國同盟にも又三國協商にも、兩者に對して親善を保つに努めた。チットニが屢々繰返して云つた如く『固く三國同盟を守ると共に英佛兩國との親善關係を保たん』ことは、實に近年の伊太利外交の大方針であつた。これは洞ヶ峰主義のやうであるが、伊太利の地理的地位から云つても、また妥協を主義とする地中海の國家であると云ふ點から見ても、誠に已むを得ないことである。現代の戰亂に對して伊太利は中立を守つて居るが、是は地中海の大勢から考へて至當のことで、或る大變化の起らぬ限り伊太利は開戰しないことと思ふ。單にトリポリ戰後の財政問題の關係があるのみでなく、開戰は伊太利に不利であらう。それは寧ろ中立の代償としてアドリヤ沿岸の要地を、墺國から割讓せしむる方が得策であらう。

伊太利は近年獨逸と經濟上親密な關係がある、輸出入も獨逸方面が一番多く、又獨逸國內に領事を派遣してあることも、伊太利が第一である。尚又先頃の海外電報に依れば、獨逸人が戰亂の爲め伊太利に避難するものが多いとのことである、固より伊太

利は三國同盟の走狗はないが、又必しも同盟を脫して獨墺と戰端を開くものでもあるまい。如上の獨伊の親密な關係は遽かに兩國の開戰を許さないであらう。伊太利の爲めに計るに、伊太利は此際何處までも中立を守つて、列國が戰爭に忙しいに乘じて自國の基礎を固めるの必要である。伊太利は統一したとは云へ、半島の南北兩部は全然協同一致し得るものでない、氣候、風土、人情其他すべて南北兩部は異なつて居る。從て伊太利名物の大地震でもあると、人心は稍動搖を免かれないので、國王もそれには非常に心を勞されて、直に巡幸して慰撫するに怠られないのである。されば昨年大地震があつた時、海外電報は直に『大地震は起りしも、人心は動搖せず』との旨を報じて居るではないか。統一以來日尙淺い伊太利は國內に於ても幾多の問題がある、之を思ふと國土の基礎を固うするのが、伊太利の急務ではあるまいか。（大正四年五月）

本篇を草し終つて後數日にして伊太利は協商側に與みして獨墺側と開戰するに至つた、人事の豫測し難きの感一層深からざるを得ない。

バグダード鐵道問題の推移

中歐大同盟の計劃と伯林バグダード政策――バグダード鐵道問題の四期――英國の孤立とその態度動搖――獨逸東方發展の始――英の反獨政策厲行――波斯灣問題――英の鐵道反對――土耳古の革命――英の態度一變――バグダード鐵道進步――列强の妥協――英獨の外交成功――開戰と形勢の變化

一

バルカンは由來歐洲の伏魔殿と云はれ、歐洲國際關係の紛糾は多くその禍源をそこに有したのであるが、將來其の伏魔殿は漸く東に移つて、亞細亞土耳古から波斯に亙つた方面がバルカンに代つて、世界列强の角逐場となる形勢が認められる。近來獨人の間に中歐大同盟の意見が頻に行はれて、中歐獨逸民族の存立は東方發展を志ざゝずんば到底望むべからずとなし、獨墺相提携してバルカン諸邦を味方とし、土耳古と握手して遠く波斯灣方面に發展を企つべきことを說くものが多いのである。獨墺の關稅

同盟は固より、或者は獨墺兩國の軍隊を統一すべきことをも主張して居る。かくして所謂『伯林バグダード』政策は近來著しく、彼等の間に高唱され中歐諸國家の運命は懸つて一にバグダード鐵道にありとまで說くに至つた。此種の意見はウィンテルステッテンの『伯林バグダード』なる書中に力說されて居る、（Winterstetten, "Berlin-Bagdad, Neue Ziele der Mitteleuropäischer Politik."—1914）但し同書の記述はまゝ煽動的に失するの嫌はあるけれども、獨逸大政策の將來を東方に定めんとするの精神はよく窺ふことが出來る。又中歐大同盟に關する諸家の說はシートン・ワトソンの近著『ゲルマンとスラヴとマジャール』（Seton-Watson"" German, Slav and Magyar."-1916）の一節によく網羅されて居る。

假令獨逸が波斯灣に進出して直に印度を脅し、或は印度洋に活動を試みて遠く和蘭本國と蘭領印度諸島とを連絡し、兩者を併せて中歐同盟の圈内に收めんとする程の大理想を實現し得ないまでも、彼が國家存立の途を東方に求め亞細亞土耳古の資源を開

發して、自給經濟の立國策を樹立せんとしつゝあるは現代に於て確かに遠大の計劃と云はねばならぬ。小亞細亞竝にメソポタミヤの棉花、銅、石油、穀物等に依て、中歐諸國の自給經濟策を立てなば、英米諸國より此等物資の供給を仰ぐの必要なきに至るべしとの意見は、ロールバッハ教授其他の人々に依て主張されつつあるが、其の實現は假令遠き將來のことであるとしても確かに有力なる議論で、獨人は既に此の方針に向つて着々歩を進めつゝあり、又或程度までは成功をも收めつゝあるのである。

孰れにせよ、將來發達の餘地多き亞細亞土耳古は獨逸に取つて見逃すべからざる資源地である。ロールバッハ教授は十九世紀末に土耳古に旅して以來、該地方開拓の有望なるを熱心に說いて居るが、エリス・バーカーも亦最近『亞細亞土耳古の將來』なる一文を雜誌『十九世紀及び以後』に寄せて、該地方が軍事上經濟上重大なる意義に富めることを論じて居る。(Ellis Barker, "Future of the Asiatic Turkey," Nineteenth Century and after. June, 1916) 之に對して英人中にはメソポタミヤ開發の容易でないこと

を說き、獨人が重大意義を吹聽しつゝあるバグダード鐵道の如きも畢竟勞多くして效少き結果に終るならんと云ふ者もある。併し至難の事業にせよ獨人努力の將來は恐るべきものゝあることを豫期せねばならぬ。殊に獨人は中部阿弗利加の獨逸植民地と、東方に擴張さるべき勢力圏と相應じて、英國の埃及を威嚇せんことを期して居る、獨人は今回の戰爭に依り海外植民地の維持困難を悟つたけれども、尙東方發展の大政策に對應して其の後備へたるべき土地として、阿弗利加植民地の維持を必要とするものが少くない、チンメルマンの如きはその一人である。さればこそ英國地理學者ホルヂッチは最近雜誌『スフィーヤ』誌上に於て、『獨逸は中歐同盟のみならず、中部阿弗利加の屬領に對しても大望を抱きつゝあり、この大望の實現を妨ぐべきものは英國の據れるカイローならざるべからず、而して獨逸のメソポタミヤ經略を妨ぐるものは露國の占有すべきコンスタンチノープルたるべきなり』と云つて居る。(T. Holdich, "German Eye to the East"-Sphere, Febr. 1917)

兎も角獨逸の東方發展を背景としたバグダード鐵道は、將來世界に提供さるべき幾多の問題を包藏して居るのである。

二

バグダード鐵道問題は既に云ひ古された問題である。敢て茲に事新しく喋々するにも及ばないかも知れないが、先般英軍がバグダードを陷れて世界の注目を再びこの方面に牽き、東方問題の將來益〻多事なるべきを思はしめた際、バグダード鐵道問題の過去を一顧して、其の經過のいかに複雜であつたかを考へて、徐に想像を將來に馳せるのも必要の一事であらう。予は固より近世外交交史の專攻者でない、從てこの紛糾した問題を說くに際して所謂硏究的態度を執ることを能くせないが、たゞ近時聊かこの問題に興味を感じて、一二三の參考書を讀んだ結果、茲に筆を執るに至つた次第なのである。殊に獨人シェーファーの近著『バグダード鐵道政策の發達』(C,A, Schäfer, "Entwicklung

der Bagdadbahn- politik." 1916) を讀んで、バグダード鐵道を中心とした列强關係の變遷が著者に依て巧に叙述されたのに感じた結果であることが少くない。固より同書は特に獨逸の立場を辯護し、獨逸の成功を吹聽して、頻に英國が窮境に懊惱しつゝある狀を書き立てたかの嫌がある。併しバグダード鐵道問題に伴ふ國際關係の過去を論じたものとして決して一の良書たることを失はないと思はれる。

又英人シュミットが其の近著『英國と獨逸』(B.E.Schmitt, "England and Germany"-1916) の内にバグダード鐵道に就て述べた章の如きは、英人の立場から見た極めて穩當な意見であらうと思ふ。其他今次の戰爭に先だつ僅かにして出版された白耳義人イリッチの『バグダード鐵道』(Ilitch,"Le Chemin defer de Bagdad."-1913) の如き、雜誌フォートナイトリー・リギューに載せられた英人オーコンノルの論文『バグダード鐵道』(O'Connor. "The Baghdad Railway,, Fortnightly Review,-Febr.1914) の如き、孰れも獨逸の著しい成功を認めないものはない。但し佛國前藏相イーヴ・ギーヨーの著『大戰の原因及

び歸結』(Ive Guiyot, "Causes and Consequences of the War" Engl. trans.)や其他開戰後發表された英佛側の論文や書籍の内には、所謂『戰時の心理』に支配されて、殊更にバグダード鐵道に對してケチを附ける樣な傾向が認められぬでもない。併しバグダード鐵道は英佛露殊に英國をして强硬な反對を試みしめた程、それだけ獨逸の成功を語るものであらう、而して前にも述べた如く中央歐羅巴より波斯灣に向ふ一大政策乃至一大理想の大動脈として、獨逸將來の運命に多大の意義を有せんとして居る。少くとも獨人はバグダード鐵道に對して殊更に重大の意義を附會せんとする傾向がある。吾人は今後益〻この問題に對して甚深の注意を拂ふ必要があらう。

三

英國が十九世紀末に阿弗利加縱貫鐵道を計劃して、南阿とカイローとを連結せんとする所謂『ケープ・カイロー』主義の實現を期せんとし、又カーゾン卿一派の人々が

『カイロー・カルカッタ』主義を奉じて、英國の印度政策を擴張して波斯灣より亞剌比亞亞細亞、土耳古を橫斷して埃及カイローに達する線を英國の手に確保せんことを主張した時、英國の東方策は確かに遠大なものであつたが、此の一大連絡線は獨逸が『伯林バグダード』主義に依て側面から橫鎗を入れたことに依て著しい危險を醸したのである。固より西亞細亞に對しては露國も佛國も大なる利害關係を有して居る。土耳古は云ふまでもない、併しバグダード鐵道問題の主なる役者は英獨兩國で、露國が之に次ぎ、佛國は更に其の次に位するの形勢をなして居る。而して英國は常に露獨兩國を反目せしめ、互に其の勢力を相殺せしめて波斯灣に於ける自國の地位を安固にせんとし、獨逸は又之に對して、英露を反目せしめて自ら東方發展の好機を捉ふるに汲々たる形勢である。今、年代に依て如上の大勢の變遷を區別して見れば、大略左の如きものである。

（一八九五年頃より　（英國孤立時代

時期	年代	事項
第一期	一九〇三年頃まで	英の態度動搖 獨逸バグダード鐵道策の始
第二期	一九〇三年頃より 一九一一年頃まで	英獨反目の顯著 英の反獨政策 バグダード鐵道不進捗
第三期	一九一一年頃より 一九一四年開戰まで	英露佛と獨逸との妥協 英獨の交讓及び成功 バグダード鐵道進捗
第四期	一九一四年開戰以降	英獨反目の復興 獨逸東方策の高唱 土都處分問題

四

第一期は英國が孤立した時代で、東方問題に對して英國は露獨の接近を妨げることに努めた。一八九五年六月には英國首相ソールスベリーより獨逸皇帝に對し個人的提案として土耳古分割の議を申込んだけれども、(Schäfer, Entw. d. Bagdadbahn Politik.)

此時獨帝は土耳古保全を必要として、その提議に應じなかつたが、是れは如上の露獨を反目せしむる英國の根本主義から出たことゝ認められる。又翌一八九六年ソールスベリーは更に露國に接近せんと試みて、『露國にして埃及に於ける英國の主張を承認せば、英國は露國がコンスタンチノーブルに據るを妨げざるべし』と云つて誘つたのであるが、(Schäfer, a.a.O.) 露國は當時極東に力を注いだ時で獨墺の背面威嚇を怖れた際であるから、是も亦露國の同意を得ることが出來なかつた。此等の事情を考へ合せると、英國が自國の不安な境遇に懊惱して已まなかつた事情の一端が察せられるのである。

此頃獨逸の東方政策の進捗に好都合な事情は少くなかつた。例へば(一)一八九七年の希土戰役に年來衰殘の老國とのみ思はれた土耳古が、意外の抵抗力を發揮したことは、土耳古に對する獨逸の信用を增加せしめた、獨逸は自國の提携者として土耳古が全然不可能の者でないことを認め所謂『獨土親善』の關係は此頃より著しくなつたのである

る、(二)又一八九八年ファショダ事件に依て佛國が英國と敵視した結果、獨逸は佛國と握手するに便利の事情があつた。一八九七年亞細亞土耳古の鐵道計劃に關し、獨逸帝國銀行と巴里のオトマン銀行との間に契約が成立して、鐵道布設を獨佛の共同經營にすることゝなつたのはそれである。(三)尚又英露の間に反目の存したのも獨逸には有利であつた。露國が旅順口を租借した時英は之を面白からず思ひ、獨と結んで露に當らんことを說くものさへあつた。一八九八年五月殖民大臣チェンバレンの演說の如きは、英獨同盟の意見を仄かしたものであらう。曰く『大英國は露國に對して開戰し得しならん、されども吾人は同盟國なくしては、露國に大打擊を與ふる能はざるべし』と。(Schäfer a.a.O.) 固より英國が此頃南阿戰役に忙しかつたに乘じ露國が波斯灣に對する野心を曝露して來たことは、英國に取つて不安の一事であつた故、英國には獨逸の東方發展を利用して露の波斯南下を抑制せんとの考もあつたのである。(四)要するに南阿戰役は英國の力を南阿に傾注せしめたと同時に獨逸の東方發展には甚だ好都

合であつた。

されば十九世紀末に於ける英國の孤立的地位を利用して、獨逸が夙くも眼を東方に轉じて『伯林バグダード』政策の胞芽を養つたことは確かに成功と云はねばならぬ。此の點から見て一八九八年は極めて意味深い年であつた。獨逸が艦隊條例を制定して、大海軍の建設に依て英國の海上權力に威嚇を加ふる政策に着手したのは一八九八年四月である。而して一方に獨帝自から土都を訪問し聖地を巡回して獨土提携の基礎を固めたのも、一八九八年秋のことである。而して翌一八九九年十二月バグダード鐵道布設の假約定が、土耳古政府と獨人經營のアナトリヤ鐵道會社との間に結ばれ、一九〇二年に至て正式に認可され、別にバグダード鐵道會社なるものが設立されることゝなつた。而して上述の如き外交上悲境に墺惱して居つた英國も、亦この鐵道計劃を承認するに傾いて居たのである。

シェーファーは次の如き趣意を述べて居る。『一八九八年は世界史の大勢に變化を生じ

た重要な年である。米國はこの年西班牙に捷つて、太平洋に活動を試みるの新時期を開いた、太平洋上に日米兩國が對抗するの形勢はこの年に始まるのである。之と年を同うして獨逸は海陸共に英國と覇を爭ふの大政策を採用して印度洋上に英國と角逐するの端を開いた』と。此くして彼は英獨の爭覇と日米の對抗とを何等かの意味ありげに説明して居る。是は面白い觀察であると共に、又吾人の注意を要する點であると思ふ。

要するに第一期に於ける英國の態度は動搖して居つた、國際關係上不安なる孤立の境涯より脫したいとの苦心煩悶は、能くその態度の上に窺ふことが出來やう。バクダード鐵道政策の發達は如上の事情に負ふ所が少くないのである。

五

如上の第一期の形勢は第二期に入つて變動を生じた、それは英國が反獨策を厲行して、すべて國際關係上に獨逸を孤立に陷れると共に、バグダード鐵道問題に於ても佛

露と提携して獨逸の計劃に故障を入れたことである。それが爲に第一期の末に於て聊か進捗しつゝあつた鐵道事業も、一頓挫を生じて、工事は著しく遲滯するに至つた。固より獨逸も之に對して英露の離間に努めて、英獨の反目は著しいのであつた。要するに第二期は「英獨の反目」の一語で說明することが出來ると思ふ。

英國の態度が此く變調を呈したことは、其の主因は波斯灣問題にある、但し波斯灣問題は單に波斯灣の問題のみでなくして、其の本體は印度の問題であることは固よりである。元來波斯灣に最も夙く經營の手を加へたのは英國で、土耳古がこの方面を放任して顧みなかつたに乘じて着々實權を握るに至つた、かくして波斯灣よりメソポタミヤ南部に至る貿易は英人の獨占に歸した。然るに露國も同方面に着目することを怠らず、夙くも一八三四年にバスラ(バグダード鐵道豫定終點地)を以て露國の海軍根據地となす計劃さへあつたが、後にはブンデル・アッバスを『印度洋のウラヂウォストック』と稱して、頻に中東に南下するの野心を示し、或は更にオデッサと波斯灣との間に直接

航路を開くなど其の志の決して小ならざることを示して來た。(Schäfer, a.a.o.) 併し英國の苦心は露國に對する警戒よりも、寧ろ獨逸勢力の侵入に對する手段でなければならぬ。

獨逸が波斯灣に着目したのは十九世紀末で、他國に比して遙かに後世のことであるが、其の努力の勢は侮り難いものであつた。獨逸は夙くから、波斯灣頭の要地コウェートに垂涎し、此地を手中に收めんとしたこともあり、又ブビヤン島を占領せんとし、或はアブ・ムサ島を自家の有とせんとし、或は東方のヘリゴランドたるべきハルル島の眞珠を獨占せんとする等、百方利權の獲得に苦心したが、此等はいづれも英國が該地方の藩王等に後援を與へて、激烈な反對をさせた爲め獨逸は遂に目的を達せなかつた。それでも尙モハメラーに於て灌漑事業を獨逸會社の手に經營せしむることに成功したのである。(Schmitt, England and Germany)

形勢既に此の如くであるから、印度政策の驍將にしてカイロー・カルカッタ主義の主

唱者たるカーゾン卿は、一八九九年一月ミード大佐を波斯灣頭のコウェートに派遣して該地の藩主と密約を結ばしめ、間接にコウェートを英國保護の下に置くに至つたのである。又一九〇一年には英國は土耳古と協定を結んで、土耳古をして實際上コウェートの獨立を認めしめた。而して一八九九年末に成立したバグダード鐵道協約に依れば、土國政府が獨人經營のアナトリヤ鐵道會社に許可した鐵道延長の範圍は、小亞細亞のコニヤより波斯灣頭に及んで居るから、多年波斯灣に勢力を扶植せる英國としては、バグダード鐵道の將來に對して不安を感ぜざるを得ない。一九〇三年五月英國外相ランスダウンが波斯灣に於ける英國のモンロー主義を公言して、『何國たりとも波斯灣に海軍根據地或は要港を設くるは、英國の重大利害を無視するものにして、英國は斷乎として之に反對せざるを得ず』と演說し、尙『波斯灣は印度國境の一部として見らるべきものなり』と云つたのは、英國の波斯灣政策を表明したものと云ふべきであらう。而して英國がバグダード鐵道の進捗を抑へる方針を執るに至つた理由も主として玆に

存するのである。

英國が如上の反對的態度に出たことに伴つて、英國のコンスタンチノープル放棄と云ふ一事實も亦認めらるゝに至つた。十九世紀を通じて土耳古保全論者として立つた英國が、露國の代りに獨逸を敵とするに至つた以上、從來の方針を一變してコンスタンチノープルを露國の手に委ねて、之に依て獨逸の東進に當らしめやうとしたのは自然の結果であらう。是蓋し獨逸を孤立の窮境に陷れる爲めには、露國が年來南下の野心を復活してコンスタンチノープルに進出せねば不可能であるからである。又英國は日本と同盟を結んだ爲め、土耳古を犧牲に供するも印度の安全を期することが出來る、是も亦土耳古保全を斷念した一理由である。尙其他に經濟上の理由もあつた。それは從來英國は南露の穀倉たるウクライナ地方から多量の穀物を仰いで居たが、一八八〇年以來北米、アルジェンチン及び印度よりの穀物供給が著しく增加した爲め、ウクライナよりの輸入は大に壓倒されることゝなつた。從て英國はもはやボスポルス、ダルダ

ネルス兩海峽の通航問題に對して深い利害關係を感ぜなくなつた結果、コンスタンチノーブルを放棄するに至つた次第なのである。(Schäfer, a.a.O.)

六

以上の波斯灣問題の外、英國反對の理由は埃及問題にある。埃及が英國の勢力關係上に重大の意義を有して居ることは云ふまでもないがバグダード鐵道の發達は埃及に對する危險を增加せしむると云ふのが反對の要點である。彼のロールバッハ敎授の如きは、其著『バグダード鐵道』の內で次の如き意見を述べて居る。

陸上よりして英國を打破すべき唯一の途は埃及でなければならぬ。埃及を失へば英國はスエズ運河を支配することが出來ず、從て東洋との連絡を失ふことゝなる。否單にそれのみでなく中央阿弗利加。東阿弗利加の英領も危險に陷るに相違ない、而して印度六千萬の回敎徒が動搖することも無論であらう。併し現在の狀況に於ては土耳古が埃

及を恢復することは不可能である。その爲めには小亞細亞・シリヤの鐵道が發達し、又バグダード鐵道が、大に進捗して之に依て土耳古がメソポタミヤに於て英軍の進擊に對抗することが出來た後でなければならぬ。尙又土耳古の軍備擴張竝に財政整理も實行されることを要する。而して土耳古をして獨逸に加擔せしむるには、埃及は絕好の餌である。

以上の如き意見は別としても、英國は土耳古の南方發展に對しては警戒せざるを得ないのである。一九〇〇年土帝アブヅル・アミドはシリヤのダマスクスよりメッカ及びメジナに達する鐵道を計畫し、一九〇八年に至つてメジナまで開通した。この鐵道に依て土耳古がヘヂャス、イェメン地方の亞剌比亞人を壓服する爲め軍隊を輸送するに便利なることは疑ひない、從來該地方の亞剌比亞人の爲め、土耳古の西亞剌比亞經營が妨げられたことは少なくなかつた。而して又英國は亞剌比亞に於ける土耳古勢力の擴張を以て、埃及の將來に危險であると考へ、隱然亞剌比亞人の後援者となつて土耳古

に對する反抗を助成せしめたのであつた。(Schmitt, a.a.o. 272) 殊にバグダード鐵道がオスマニエよりアレクサンドレッタ港に連絡した今日、埃及が土耳古に依て威嚇される危險は更に增加した次第である、而して土耳古の背後に獨逸のあることは云ふまでもなからう。

以上の危險の一例とも認むべきものは、一九〇六年二月に起つた事である。此時土耳古は軍隊をアカバ(シナイ半島の東側に近し)に派遣して對岸のタバーの占領を企てたが、英國が激しく反對して艦隊を後方面に派遣した爲、土耳古も遂に讓步することとなつた。是は埃及に對する土耳古の野心を示すので、獨逸の使嗾に基くものと認められのである。(Schmitt. a.a.o. 273)

七

バグダード鐵道に對する英國の反對は、該鐵道の資本問題の上に現はれて來た。最

初獨逸は該鐵道事業の費用多額なるが爲め、英佛に向つて投資を勸誘し、英佛獨三國は各自三〇パーセントづゝを分擔し、殘餘一〇パーセントは露國或は其他の國に委ねるの議を提出したが、英國は該會社の理事の過半數が獨逸人に指定されて居る爲、之に同意しなかつた。尙重要な問題は次の點にあつた。該鐵道の布設に對し土耳古政府は一基米突每に擔保として每年一一、〇〇〇フランの出金をする筈であるが、その爲めには土耳古の歲入增加の必要がある、而して其の手段として、(一)土國の國債監理より生ずる收入の一部を土國政府に與ふること(二)八パーセントの關稅を引上げることの二法があつた。第一に對しては英國の故障があつたが、獨逸帝國銀行とオトマン銀行とが一致して之に贊成した爲め、實行されることゝなつた。その結果一九〇四年第一回の鐵道債劵五千四百萬フランを發行するに決したが、併し第二の問題に於ては行惱みを生じた。元來獨逸は關稅引上げ問題を條件として英國資本の參加を求める考であつたが、英國は關稅引上げに依て利するものは獨逸であるべきを發見し、又土耳古

の歳入を増加するも之を以て內政改善の資とするのでなくして、收益覺束なき鐵道事業に投資するの不可を唱へて同意しなかつた。

英國が同意しなかつた理由は、決して鐵道そのものにあるのではなく、獨逸が該鐵道を政治的に利用して、土耳古に權勢を扶殖し、亞細亞土耳古から波斯灣にかけて其の野心を實現せんことを恐れたものもあるが、又一は鐵道の收益覺束ない點にも存したのである。小亞細亞からメソポタミヤ方面の開拓が大に有望であることは、獨人のみならず英人さへも之を認めて居るが、其の主要なる灌漑の大事業には多數の人力を要するので、現在の稀薄なる人口では不可能である。固より移民の奬勵には努めて居るが、風土氣候は歐洲人に適せず、たゞ印度支那方面より植民者を招かねばならぬ。此の如き狀況に於てはバグダード鐵道の前途は收益の點では覺束ない、さればこそ一基米突擔保の如き手段を執る必要も起つたので、この擔保の爲めに土耳古政府每年の負擔は莫大なもので、四三、〇〇〇、〇〇〇フランに上ると云はれて居る。財政疲弊せ

る土耳古が能く之を耐へるであらうか。固よりかゝる悲觀的觀察は英人の立場からで、獨人の意見は之と異なるが、兎に角英國反對の一理由はそこに存したのである。(Schmitt, a.a.o. 268)

かくして一九〇五年二月關稅を八パーセントより十一パーセントに引上ぐるの議は、土耳古政府から提出されたけれども、問題は英國の反對の爲めに行惱んで幾多の折衝を重ねた後一九〇七年四月に至て解決し、愈〻關稅は十一パーセントに引上げられることゝなつた。併しその條件として引上げの結果土耳古政府の處理し得べき增收全額は、全然マケドニヤ改善の財政的要求に使用さるべきことが決定された。この際露國は英國と同一の態度を執つたが、獨人は之を評して、英國はバグダード鐵道を妨害せん爲め、露國の後援を得て亞細亞土耳古を財政的に去勢したのであると云つて居る。(Schäfer, a.a.o. 64)

孰れにせよ一九〇四年以後財政困難の爲め、バグダード鐵道事業は頓挫を來した。

一九〇四年該鐵道會社は土耳古政府補助の下に第一回鐵道債券を發行したが、次で一九〇八年に鐵道をブルグルよりヘリフに延長することが決定されると共に、土耳古政府は一九〇三年に決定された國債監理收入より生ずる金額を該鐵道工事に流用することとなり、其の結果一九一〇年に至て第二回鐵道債券一億八百萬フランが發行された。而して第一第二兩回とも佛人經營のオトマン銀行が其の三十パーセントを引受けたのである。第二回債券の發行に先だち、一九〇九年土耳古は更にヘリフ、バグダード間鐵道布設の資に宛てん爲め、第三回債券發行を企て、關稅を四パーセント引上げ、其の增收額を以て保證金となさんとの提議をしたが、英國は露佛と結んで之れに反對し、關稅引上げは單に豫算の不足を補塡する爲めにのみ用ゐらるべしと主張した爲め、第三回債券の計畫は行惱んだ。但し是は一九一四年に至て始めて英佛露三國の承認を得ることが出來たのである。

上述の如く財政上よりする英國並に露佛の反對の爲め、バグダード鐵道工事は僅か

にその一部を完成したのみで、頗る遲滯したのである。

八

以上の如く英國は土耳古の關稅引上げを以て、內政改革卽ちマケドニヤ改革の財源とすることに贊成したのである。併し其の目的は兎も角として他國が自國の內政に對して干涉がましい態度に出ることは、土耳古として甚だ面白くない。然るに獨逸は英佛と異なつた態度を執り、其の立場は保守的で土耳古朝廷の權勢を減殺せしめないことを主とした、英國の主張する如くマケドニヤの自治を許すことは、やがて其の獨立を認むる前提となる虞がある、從て獨逸は土帝の中央集權的統治に贊成した、而して土廷の歡心を買ふと同時にバグダード鐵道の計畫に利する所あらんとしたのである。この點に於て英國が如上の內政干涉に類した立場に立たねばならなかつたことは、英國としては不利であつたに相違ない。

殊に一九〇八年六月英露兩帝がレヴァルに會合した時、マケドニヤ改革の問題以外に土耳古に對する開戰並に同國分割の密談が交換されたとの風說があつた。英人は之を無稽の說として打消したが、獨人はその事實を主張して居る。(Schmitt, a.a.o.p. 282) その事實は兎も角として、土耳古の志士は躍起せざるを得ない、青年土耳古黨が同年七月革命を斷行したのも、一は如上の陰謀に激發された爲めであつたと云はれて居る。孰れにせよ英國の態度が土國の惡感を助長する嫌あつたことは、獨土兩國をして益〻接近せしめたのである。

元來青年土耳古黨はバクダード鐵道の認可を好まなかつたが、獨逸の外交官は巧みに土耳古を籠絡して、英國の口にする土國の改革が一向に實蹟を擧げないこと、又青年土耳古黨の希望する全イスラム主義に對する敵は英國なることを述べて、土耳古が將來國際的紛擾の煩を脫すべき唯一の途は、軍隊改革と鐵道布設とに外ならない、此が爲めには獨逸は充分の助力を惜まざるべしと說いた。固より是はシュミットが彼の推

測に依て其の書中に述べた所であるが、獨逸が此の如き方法に依て土耳古を自家藥籠中のものとした次第は、いかにも有り得べきことゝ思はれる。

始め英佛兩國は土耳古の革命を歡迎した、その理由は之に依て土帝の專制政治を倒すのみならず、尙それに伴つて土國に於ける獨逸の優越を打破し得べき故であつた。一説に依れば佛國は露國と共に、獨土の提携が益〻固くなるのを嫉んで之を妨げん爲め、まづ青年土耳古黨員中に佛國の敎育を受けたるものゝ多いのを利用して、彼等を使嗾して土帝を廢し憲法を發布せしめた、而して更に前帝時代に成立したバグダード鐵道認可の協定を廢棄せしめんことを期したのであると。(O'Connor, a.a.o.) 然るに豫期に反して獨逸の鐵道計畫は少しも挫折しなかつた、是は青年土耳古黨の革命を起した目的が、國家の統一と强固とにあつたので、獨逸の提出した軍隊改善、鐵道布設の二手段と一致した故である。

土耳古人は一般にバグダード鐵道の價値を信ずることが深い、蓋し之に依て土耳古

の領内に軍隊を輸送するの便があるからである。亞細亞土耳古殊にメソポダミヤ、アルメニヤ、アラビヤ方面の住民を威壓すること、又反對に亞細亞土耳古方面から軍隊を東歐に輸送して、バルカン諸邦に對抗すること、此等はバグダード鐵道の完成に依て始めて期待することが出來やう。從て軍隊改善と共に鐵道布設が土耳古の國家的存在に如何に急務であるかゞ知られる。獨土の親善とバグダード鐵道事業とは、かゝる事情に依て進捗し得たのであつた。

九

以上は第二期の形勢であるが、是は第三期に入つて一變した、その要點は從來反目した英獨が妥協するに至つたことである。シェーファーは之に就て次の如く云つて居る、この形勢の變換點となつた著しき事件は二つあつた、一は英帝エドワード七世の崩御で、他は獨逸外相キデレン・ウェヒテルの任命である。前者に依て極端なる獨逸調伏の

英國外交方針は衰へ、後者に於て獨逸の積極的東方策は發展するは至つた、而して前者は一九一〇年五月七日で後者は同年六月二十八日、共に時を同じうして起つたのであると。

英國が露佛と連衡して獨逸を孤立の地位に陷れんとした露骨な反獨的態度を改めた後、英國は主として露獨兩國を反目せしめて歐洲の均勢を英國の手にて維持するを目的とした。之に對して獨逸は英露の兩大勢力を對立相殺せしめて、獨逸の自由行動に便ぜんとした、而して英露獨三國の間に互に相結び相離るゝの形勢を生んだが、やがては相互の間に交讓する所あつて妥協の時代を現出するに至つたのである。一九〇七年波斯に於ける勢力圏に關し英露の間に協約が結ばれたことは能く人の知る所であるが、次で第三期の始め露獨兩國の間にまづ妥協が成立して、一九一一年八月露都にて露獨協約が成立した。（一九一〇年ポツダムに於ける露獨兩帝會見の結果）その結果露國は獨逸のバグダード鐵道計畫を認めると共に、又露國が北部波斯に鐵道を布設し、殊にハニキンに於てバグダー

ド鐵道支線と連絡せしむることも認められたのである。

かくして露國が波斯國內に布設し得べき線路は次の如きもので、即ちカスピ海のバクよりテヘランに向ひ、更にテヘランよりメシェッド及びアストラバードに至る線と、タブリズよりカニキンに至り、又ハニキン、テヘランを連絡する線である。以上の線路は土耳古領內を通過せず又土耳古に關係する所なきも、印度に取て危險を感ぜしむるの程度は、バグダード鐵道に比して勝るとも劣ることはなからう。しかも此等の布設地方は一九〇七年英露協約の結果露國の勢力圈に屬するもので、英國の干涉範圍の外にある。而してメシェッドはアフガニスタンの西境ヘラットを去る二百哩に過ぎず、又露領のメルフとは三百四十哩を隔てゝ居る。從て一朝事ある時、露國はメルフとメシェッドとの兩方面から、兵をアフガニスタンに入れることは容易で、之に對し英軍が赴援することは決して容易でない、實にヘラットはカンダハルを距る三百六十九哩、ペシャワルを距る八百八十一哩であるのである。(O'Connor, a.a.o.)

されぱこそ一九一二年十二月九日露紙ノウォエ・ウレミヤに於て、次の如き說が載せられた。『露國が波斯に對して斷乎たる態度を執らば、英國の勢力如何に亞細亞に盛なりとも、波斯の運命を英國の手にて左右することは不可能である。英國の海軍如何に優勢なりとも露軍のテヘランに入るを防ぐことは出來ない』と。(O'Connor, a.a.o.)之に依ても露獨妥協の結果が、英國に取て不安の源となつたことが知られる。英國が南波斯に著しい活動を始めたのも如上の形勢に刺激されたものと認められる。一九一四年六月十八日英國下院で「アングロ波斯油業會社」に關する件が議決され、英國政府が該會社に多大の財政的補助を與へて、殆ど之を政府事業の如くした際に、露國新聞紙の論調は甚だ銳いものがあつた、而してその時、英國外相グレーも隱に英露兩大勢力の緊張を說いて、其の語氣は荒かつたのである。かく英露が反目することは獨逸の望む所で、英國に取つては甚だ不利の形勢であるから、英國は今や外交策に轉換期を劃するの必要が起つたのである。

一〇

露獨の妥協は獨逸外交の成功で、バグダード鐵道に對する英佛露三國の連盟的反對は之に依て破られた、而して獨逸は露國の鋒を東南に轉ぜしめて英の勢力圈を窺はしめることゝなつた。之に次で獨逸外交の成功とも云ふべきは佛國との妥協である。

元來佛國はバグダード鐵道に對する主要なる反對者ではなかつた、其の目的とする所は主として多年シリヤ地方に獲得して居た優越の地位である、從てバグダード鐵道に對してもオトマン銀行は約五千萬ノラン餘の投資をして居る。該鐵道會社の株式資本は千五百萬フランであるが、其内土耳古政府及びアナトリヤ鐵道會社は各自百五十萬フランづゝを負擔し、又八百萬フランは獨逸・墺匈・瑞西三國の共同負擔で、殘額四百萬フランは佛國の負擔である。又前後二回に亙つた該鐵道債券は總計一億六千二百萬フランであるが、佛國は實にその約三十パーセントを負擔して居つた。但し英露兩

國との關係上之と歩調を共にしてバグダード鐵道には反對を試みたが、一九一三年より翌年に亙つて佛國はバグダード鐵道に對する權利を全然放棄して之を獨逸に委ね、自國は小亞細亞及びシリヤに於て利權を獲得したのである。其の要項は大略左の如くである。

佛土協約　一九一三年九月

佛國の獲得せし利權

小亞細亞シヴァスを中心としてサムスン、アルガナ、ヴァン、トラペズンド、ペケリヂ、ポリ等に連る諸線路の布設權

佛國經營のシリヤ鐵道を南方に延長しラヤックよりラムレに連絡する線路布設權、ヘジャス鐵道のハイファ、テラァ支線の管理權

エレグリ、トラペズンド、トリポリス、ハイファ、ヤッファ港の租借並に築港權

之に對し佛國は土國の關稅引上げ(十五パーセント)を認め、又七億フランの土國外債に應募す。

獨佛協約　一九一四年二月十五日

獨逸は前記佛土協約を承認す

佛國はシリヤのホムスより三十五度の緯線に平行してエウフラテス河に向ふ鐵道布設權を得
佛國はバクダード鐵道の資本分擔額約一五、〇〇〇、〇〇〇フランに對する一切の權利を獨逸銀行に讓渡す

二

かく獨逸が露佛との妥協に依て着々鐵道政策の進捗を圖つて居た時、英國は又波斯に勢力を扶植することに怠らなかつたのである。一九一三年英國經營の波斯銀行は南波斯にもモハメラー、コラマバード間及びモハメラーよりブンデルアッバス、シラズ、ケルマン等に達する鐵道布設權を得たが、翌一九一四年五月英國は更にモハメラー附近にて有望なる油田を得た。又一九一三年五月波斯灣頭のコウェートに關して土耳古と協定を結び、土耳古をして事實上該地の獨立を認めしめ、土耳古はたゞ名義上の宗主權のみを保つことゝなり、尚土耳古はシャット・エル・アラブの河口其他波斯灣内の二三要地に對する宗主權を放棄して、その支配を英國に委ねたのである。此等のことは確

かに英國の成功で、第三期は恰も英獨互に南北に分れて各自の地歩を占めるに成功した次第である。

之と共にバグダード鐵道に關して英獨の間に協定の成立したことも固よりである。この協定は一九一四年六月十五日に成立したもので、バグダード協定と呼ばれ、其の要項は左の如きものである。

英國はバグダード、バスラ間の鐵道に對し資本參加を中止し、たゞ英人二名をバグダード鐵道會社の理事となし、關稅の平等取扱を監視せしむ

兩國はバスラを以てバグダード鐵道終點となすに同意す、但しシャット・エル・アラブ河口の浚渫を條件とす、又バスラ以南海上航行の自由を認む

バスラ、コウェート間の鐵道は英國の承認を經て國際鐵道として布設せらるべし

バスラ築港の資本分擔額は獨逸六十パーセントとして英國四十パーセントとす

チグリス河航行に對する資本分擔額は英國五十パーセント、獨土兩國各二十五パーセントとす(エウフラテス河をも含むなるべし)

メソポタミヤの油業に對する資本分擔額は英國五十パーセント、獨逸及び和蘭(但し英と共同)各自二十五パ

ーセントとす

以上に於てバスラ以北の所謂バグダード鐵道が全部獨逸の經營となつたことが知られる。嘗てはバグダード鐵道は波斯灣頭にまで及ぶの議が獨土の間に成立したが、それは英國の反對に依て成立しなかつた、而して玆に至てバスラが鐵道の終點となることに決定した。又其の代りバグダード、バスラ間の線路を國際經營とすべしとの議もあつたが、此點では獨逸の主張が通つてバスラまで全部獨逸の經營に歸したのである。尙バスラが終點となつたに就ては獨逸は能ふ限りバスラを利用して波斯灣に出ることを企て、バスラの築港やバスラ以南海上航行の自由等が條件として決定された次第であつた。又英國は獨逸の鐵道計畫を認めると共に水路卽ちチグリス、エウフラテス兩河にて英國が旣に得て居た航行權其他の利權を確保した。之に關しては一九一三年五月旣に英土兩國の間に協定が成立したのである。

二

英國が上述の如く獨逸と妥協したのは英國外交の巧妙な點で、之に依てバグダード鐵道の出口を塞ぐと共に波斯灣及び南波斯に勢力を扶殖することが出來た。而して中東では獨逸と妥協したことに依て露獨を相牽制せしめ、又近東では露國を後援して露獨を反目せしむる方針を執つたのである。要するに一九一一年に成立した露獨の妥協は英國の最も恐れた所で、其時以來英國の對バグダード鐵道策は注目すべきものがあつた。

然るに第四期に入り今回の大戰が開かれて、如上の妥協は全く破れ英國は波斯策に益〻力を注ぎ、モハメラー、コラマバード間の鐵道布設を急ぐと共に、尚最近エフフラテスの河谷に沿ふて鐵道を布設するに決した。又バスラには印度政府の經營事業として東方銀行の支店をも置いたのである。又英軍は一時メソポタミヤで大敗したが、最

近バグダードを陥れ、こゝに根據を据ゑて獨逸東進の目標を奪つてしまつた。獨逸も亦開戰以來鐵道工事の進捗に努め、一九一六年末には難工事と稱せられたタウルス山脈の隧道も完成し、かくてモスルの西北なるニシビンに至るまで全部開通したのである。今後獨逸はバグダード鐵道を獨逸民族發展の大動脈と賴んで益〻その東方策に全力を注ぐであらう。

但し戰爭の結果英佛獨三國が亞細亞土耳古に獲得した幾多の鐵道布設權並に波斯に於ける英露兩國の鐵道布設權の問題は如何に處分されるであらうか。コンスタンチノープル處分問題もバグダード鐵道問題の一部として重要なものであるが、更に刮目して見るべきものは亞細亞土耳古の鐵道問題でなければならぬ。（大正六年四月）

露國の農業改革と獨人の警戒

一

大正六年三月一日發行の『外交時報』に箕作博士は『露獨國是の絶對的衝突』なる論文を寄せられ、露國の南下策と獨逸の東方發展策とが、ボスポルス、ダルダネルス兩海峽附近に於て、所謂『死十字』の關係を形成し、兩國々是の間に調和を求むることの殆ど不可能なるべき旨を詳論せられたり。而して該論文の第八節に於て露國近年の農業改革が、健全なる中等社會の成立を促進し、更に尙國勢の積極的發展に少からぬ貢獻をなし、從來理想上の運動たるに止りし汎スラヴ主義も、實際問題と切實なる關係を生ずるに至りしことを說かれたり。此點は露國將來の發展を攷ふ上に於て、特に重視すべき要件にして、やがて露國の國策を支配すべき大勢力たるべきなり。

想ふに、農業改革は露國々力の基礎をなせる國民そのものゝ發達に大關係ある問題

にして、やがて國家の政策も之に依て定めらるゝに至るべし。現時露國は極めて急速に行はれし大革命の後を受けて、內外の國策共に著しく動搖し、外に强敵を控へたる國家としては頗る悲觀すべき情態にあり。されども現時の動搖は支那政局の動搖と等しく、一大變革の後に免かれ難き現象なるべきを以て、刻下の戰局發展の爲めならざる限り、露國の將來は必しも悲觀すべきにあらざるべし。殊に農業改革の如き根本問題は、政體の如何に關せず、政府當局者の如何を問はず、遂行せらるべき性質のものなるが故に開戰前より着々成果を收めつゝありし其の趨勢は、假令一時頓挫のことありとも、永き將來に於ては益〻發展すべきこと疑なかるべし。

要するに、農業改革は露國將來の隆替を支配すべき要件なり、されば露國と接壤せる獨逸は此問題に對して至大の注意を拂ひつゝあるが如し。農業改革問題の進捗如何は、やがて露國に對する獨逸政策の態度を決定するに至らんとす。『露禍』の語は獨逸一部の識者が口にして止まざるものにして、ロールバッハの如きは開戰後『露禍』(“Die

russische Gefahr")なる叢書を刊行して、國人を警醒するに努めつゝあり。箕作博士が前記の論文中に紹介せられしアクセル・シュミット著『ロシャ最終の目的』(Axel Schmidt, "Das Endziel Russlands")は、該叢書の第二冊なり。又其の第一冊としてはポーレ著『露國の領土慾』(Pohle, "Die russische Ländergier" あり、尙其の第四冊にはロールバッハ自身の著たる『證據明白なる露國』(Rohrbach, "Russische Selbstzeugnisse" 1916) あり、而して第一冊にはロールバッハの長き序文を載せたり。以上の兩冊を看ればロールバッハが如何に、露國の農業改革を重大視し、獨逸百年の患は實實にそこに存せりと主張しつゝあるを窺ふに餘あり。

但し第四冊たる『證據明白なる露國』に於ては、『露國の土地改革』なる卷末の一節に於て、農業改策が將來露國大發展の根柢となるべきを以て、獨逸は之に對して深く警戒せざるべからざることを、一般的に說きしのみにて、獨逸に取りて其の『露禍』たるべき理由を明白に說明し居らず。されども『露國の領土慾』の序文に於ては、其

の理由を明かに力說しつゝあり。彼の所謂『露禍』が果して眞に獨逸の國患たるべきや否やは、之を近き將來に於て決すること困難なるべく、少くとも三十年或は五十年の後なるべきか。然れども露國は將來に富める國家なり、其の發展の勢は之を今日より豫測し難きものあり、獨逸として其の將來の形勢に注意を怠らざるは當然のことゝす。

蓋しロールバッハは獨逸の東方發展を唱道して已まざる論者なり、彼の立場よりすれば露國の勢力を能ふ限り東方に壓迫して、獨逸東進の途を安固にすべきことの急務なるは云ふまでも無し。さればこそ故らに聲を大にして、露國が獨逸の仇敵たることを叫ぶの嫌なきにあらず、『露禍』叢書の如きも亦此の例に洩れざるものなるべし。從て或論者は彼の所說を以て徒に杞憂に過ぎずとなし、或は之を以て脅迫觀念性精神病(Zwangsirrsein)の致す所となすものもあらん。されども國家百年の後を慮りて、他日憂患に備ふるの必要を、一般民衆に知らしめんとする彼等の苦心は決して看過すべき

にあらず。今玆に此の一小篇を草せし所以も、彼等の所說の一端を紹介して、將來露獨の關係を考察する一助となし、且獨人が國際的にも如何に遠慮に富めるか、又如何に警戒心强く、猜疑心深きかを窺はん爲なり。

以下述ぶる所は、主として前記の『露禍』叢書第一册及び第四册に載せられしロールバッハの所論に依り、尚シュミット著『不可解の露國』(Axel Schmidt, "Die russische Sphinx" —— "Der Deut. Krieg" Heft 7.) 帝國農會の調査に係る『最近露國に於ける土地改革』(大五五年五月版)等の諸書を參考せしものとす

二

最近十年來露國が農業改革の大業を決行せし以前にありては、露國農民の窮狀は一方ならざるものありき。固より一八六一年アレクサンドル二世が斷行せし農奴解放は既に農業改革の端緒として見るべきものなれども、農村の慘狀は容易に改善せられざ

りき。卽ち五十餘年の改革は村落團體に對する農民の關係及び村落團體に對する大地主又は國家の關係を改むるを目的とせしものにして、未だ村落團體の土地所有權竝に農家經濟農業技術の改善等農民の實際生活に及ばず、此等の問題はすべて村落團體の經營に一任せられ、村落團體も亦其の施設は實際生活と乖離せることのみ多かりしなり。又農奴は解放せられしも土地は村落團體（ミール）の共有にして、農民の私有財產となるに至らず、彼等はたゞ村落團體より土地の分割を受けて之を耕作するに過ぎず。從て農民は自己の耕地に對して利害を感ずること淺く、其の結果農產の增收を望む能はず、却て減額するの狀を呈せり。加之、人口の增加と、外國農產物の競爭と、更に生活費の向上とは、さなくとも窮困せる農民をして一層悲境に陷らしめたり。

農業不振の原因は上記の數項のみならず、村落團體の土地分割法の宜しきを得ざることも亦主要なる一因をなせり。元來露國の村落團體は頗る廣大なるものにて、往々數ケ村を包含し、其の各村は數百數十の農村に分裂せり。而して此等巨多の農地は各

自地積の大小、地味の肥瘠、其他交通の便否等を異にすれども、村落團體は之を各家族に均分したり。爲めに一農家の所有地は極度に細分せられ、又住家と耕地との距離遠くして、往復に不便なるもの少からず、斯くして土地生產力の增加を望むことは甚だ困難なりき。

此等の弊害を改めて農業の振興を望まんには、まづ左の二法を急務とすべし。

一、村落團體の土地共有制を廢して、農民の土地私有を認むること、

二、從來の農地分割を改めて、區分法に大整理を行ひ、農地細分且散在の弊を防ぐこと、

露國當局者は固よりこの改革に意ありしも、かゝる大改革を一朝にして行はゞ、却て農民の間に動搖を生ぜんことを恐れて、遽かにその處置に出でざりしも、一九〇五年日露戰役の際に起りし農民の大暴動と、之に伴ふ社會の不秩序とは、遂に當局者をして改革を斷行せしめたり。是卽ち內相ストリピンの功績に外ならず。固より露國政

府がこの改革に意を決せし動機は、全く國内の政治的狀態に鑑みし結果にして、經濟上の見地より出でしにあらず。卽ちストリピンは農民に私產を與へて、彼等が革命的運動に加擔するを防遏する考なりしと云はる。而して彼が土地改革に對する意見は、共有地の存する限り農業の改善は到底不可能なりとし、クールランド地方に在る彼自身の所有地に於て、バルト沿岸の住民が健全なる農業狀態を營みつゝあるを見て、是非とも共有地制度を撤廢すべきことに決心し、單一家產制と農民土地私有との實行を急務と信ずるに至りしなり。

一九〇六年以後如上の方針に基きて、農業改革の大事業は着々實行せられ、一九一一年五月の土地改革法修正に依り、農民の土地獲得は益々便となれり。以上の改革に依り農產の增加と農民の收得とを齎すのみならず、尙土地を賣却せしものは工業者となりて、工業の發達に貢獻すべし。又農耕の進步と農民生活狀態の改善に伴ひ、工業の販路が村落に擴張せらるべきは固より云ふを俟たず、殊に農業機械の需要は既に農民の

間に起りつゝあり。開戰の初、露軍が東普地方に侵入せし時、農業機械を掠奪し去りしこと著しきに徵しても、露國農民の需要が那邊に存せるかは明かなるべし。想ふに今後此方面に於て米國が農業機械の供給者として活動すべきこと疑なかるべし。要するに農業改革が工業の發達に對し、健全なる根柢を固めつゝあることを忘るべからず。

農業改革が齎すべき經濟上の效果を、細說せば上述せし以外に多々あるべしと雖も、尙一方政治上に於て至大の變化を生じつゝあることは看過し難き要點なり。農民は改革に依て政府當局と密接なる關係を結び得たり、從來政府は農民に對して、たゞ徵收誅求を事とするのみなりしも、農業改革に依て多年農民が渴望して已まざりし土地を與へたり。是に於てか土地に對する農民の利害關係深きに至るとと共に、國家の領土的發展に關しても、農民の利害を感ずること少なしとせず。斯くして從來國民と沒交涉なりし官僚政府の政策は、今や漸く國民的政策たらんとする形勢となれり。汎スラヴ主義の如き政治論は知識の幼稚なる一般國民に理解せられずとするも、少くとも領

土獲得の必要は農業改革後の農民には容易に了解せらるべし。即ち農民の政治的自覺は將來恐しき結果を齎らすべく、若し現戰爭に於て露國の權勢に著しき失墜を生ぜざる限り、以上の豫想は實現せらるべし。要するに現代戰爭は農業改革の上に不利を釀すものにあらざるか。されば今回の開戰に際して、ストリピンの後繼者にして農業改革に盡瘁せし農相クリウォシイャン等は、開戰に反對し、農業改革行はれ農民狀態の改善進捗せざるに先だち、戰亂の渦中に投ずるを否とせし由なり。ロールバッハは現代戰爭は農業改革の不振を齎らすことなしと云ひ、戰後露國は支拂停止と、對佛外債の延期とに依て、財政上一時休養の便を得べく、事情は却て農業改革に有利なるべしと主張せり。固より此等の說は露國革命の突發せし以前の論なれば、今日より之を批評するは當らず、吾人はたゞ土地改革の如き痛切なる社會的必要に基ける問題は、革命後の國策動搖に依て左右せらるゝこと尠かるべく、今後益〻露國に力の根柢として、國家の發展に貢獻すべきこと大なるを信ぜんとす。

三

農業改革に關聯して考察すべきは、露國の人口問題なり。露國の人口は現今に於て每年約三百萬人づゝの增加をなし、其の增加率に於て正に列國を凌駕せり、而して農業改革の結果、此等の著しく增加し行く人口をも國內に養ふことを得べし。殊に移住に便なるウラル以東の廣大なる御料地を農民に下賜せられし爲め、西伯利亞方面に移住する農民の數は夥しきものあり、露國當局者は此の移住を以て、日本の西侵に對する對抗策となすに怠らざるべしと。是れ實に露國農業改革當事者の意見なりとす。要するに農業改革に伴ふ露領亞細亞の人口收容力の增加は看過し難き現象なるべし。

尙特に注意すべきは、近來亞細亞の國境に向ふ移民に對し、政府が單に歐露より亞細亞方面に能ふ限り多くの農工業者が移住することを奬勵せずして、寧ろ移民が國境地方に新しき土地を獲得し、經營して、其地に定住せしむるの健全質實なる方針を執

るに至りしことなり。この結果移民の數は遞減せしと雖も、國境地方の開發が進步しつゝあるは事實なりとす。西伯利亞移民の數は一九〇七、一九〇八兩年に於て其の極に達せしが、近來大に減じて其の半數にも達せざる狀にあり。

一九〇八年	七五〇、〇〇〇
一九〇九年	七〇七、〇〇〇
一九一〇年	九〇〇〇、〇〇
一九一一年	二二六、〇〇〇
一九一三年	三二七、〇〇〇

今一九〇五年以來西伯利亞に移住せし農民の數を考へんに、約三百萬以上に達すべし、而して露國が西伯利亞占領以來該地に移住せし者が、總べて四百五十萬人に過ぎざる事實に想到せば、最近十年來の西伯利亞の發達は想像に餘ありと云ふべし。而して移民の增加のみならず、之に伴ふ土地の開發物產の增加等は更に注目を要する件なり。實に耕地增加の著しきことは、歐露よりも寧ろ亞細亞方面に於て認めらるゝなり。

移民問題に於て尙看過し難き新現象は、極東に對する工業者の移住なり。農業移民

の外此等工業者の移民數は、一九一一年より一九一三年に至る三年間に、アムール地方のみにて十三萬餘に達せりと云ふ。彼等はアムール地方にて土地を所有し、或は都市又は鐵道沿線に居住せり。而して彼等の送金高は一九一二年のみにて、三千萬ルーブルに及びしと云ふ。此等の金額は從來支那に吸收せられしものなれども、今や露國内に留るに至りしなり。かく西伯利亞地方の發達し來れるは、獨逸に對してよりも寧ろ日本に對して意味あることにして、吾人の注目を値する點なるべし。況して近來米國が西伯利亞にて利權を獲得せんとして已まざる際、特に意義深きことゝ云はざるべからず。

四

一九〇六年以降、露國政府が農業改革に努力せしことは既に述べたり。而して此の事業は一九〇六年三月の勅令に基きて組織せられし中央土地改革委員會に委ねられ、

この中央土地改革委員會の下に、各州土地改革委員會あり、更に其の下に各郡土地改革委員會あり。この郡委員會は貴族代表者を會長とし、其の委員は郡會議長、農務大臣の任命せる終身委員、郡裁判所判事、郡會議員等を以て組織せれら、農民を助け委員會附屬の技術者と提携して、土地に關する一切の調査に從事せり。一九一二年一月には此種の委員會は、全國四十七州に亙り四百五十二に及べりと云ふ。郡委員會の上には州委員會あり、こは露都の農業總務部内なる中央農業委員會に屬せり、而して州委員會は毎年事業の成績を土地改革最高機關たる此の中央農業委員會に報告するものとす。

今改革事業が近年着々進捗しつゝありし證據として、中央部より改革事業の爲め支出せられし金額を示すべし。

一九〇九年……………………………………七一、〇〇〇、〇〇〇留
一九一〇……………………………………八五、六〇〇、〇〇〇
一九一一……………………………………一〇一、四〇〇、〇〇〇

一九一二……………………一一八、〇〇〇、〇〇〇
一九一三……………………一三五、五〇〇、〇〇〇

尚土地整理は最近に於て殊に著しく進み、一九一〇年より翌年に亙れる整理計劃は、約八十三萬戸の土地七百六十萬デシャチン（一デシャチンは一町一段餘）に對するものなりしが、一九一二年より翌年に亙りては約百三十四萬戸の土地一千二百萬デシャチンの整理を計劃するに至れり。今土地改革着手後一九一二年に至るまでの、事業成績の明細表を示すべし（面積單位デシャチン）

年度	整理進行中			整理完了		
	村數	戸數	面積	村數	戸數	面積
一九〇七	一、三四四	五一、九八四	六一六、三三〇	八四五	二七、四四九	八二七、六八三
一九〇八	三、三六六	二九、八六一	一、一〇五、六八四	二、五七三	九四、〇八七	八六三、七八七
一九一〇	九、一四二	三九、三九二	三、〇〇四、六五〇	六、七〇四	二七四、八三〇	二、五六七、四一三
一九一一	一二、一八八	四一九、〇四四	三、九三六、二九六	九、五九五	三七六、一六二	二、四四七、二四七
一九一二	一一、〇三四	四〇七、〇四一	三、七三九、九六五	一〇、六六四	三七九、七六六	三、六〇九、七九六
計	三六、八七五	一、三三七、三三三	一三、四〇二、九二五	三〇、四三一	一、一七〇、二九九	一〇、七七五、九七五

此の如く上記五ヶ年間に於ける整理の成績は、約一千〇七十七萬五千デシャチン卽ち約一千二百萬ヘクトルにして、普魯西耕地面積の三分二、伊太利全耕地の二分一に相當すと稱せられたり。而して正に豫定計劃の八割を完了せし次第なり。是實に該事業の進捗著しきを示すものなるべし。かく著大の成績を收めつゝある農業改革が、露國國力の發展に深き關係あることを悟らば、露國と接壤せる獨逸一部の人士が、その改革の將來に對して大なる國憂を豫想しつゝあるは、至當の態度なるべきなり。しかも是獨逸のみにあらず、吾人に取りても亦緊要の問題たるに外ならず。請ふ吾人をしてロールバッハの言に聽かしめよ。（次の一節はロールバッハの所說なり）

五

露國の歷史は軍事的侵略の記錄ならざるはなし、侵略は實に露國史の根柢をせり。露國は將來も亦同一の徑路を踏むべきものと信ず。一九一〇年クロパトキン將軍は

リトワニヤのドルパット市を訪問し、該地の獨逸人學生に對し、左の如き意味の演說をなせり。

『五年以前露人は日本と戰ひて敗れたり、是該戰爭が露國民に取りて國民的性質を有せざりしが爲めなり。されども今後吾人は決して此の如きことなかるべし、蓋し吾人が試むべき次の戰爭は全露國民の利害と一致するものなればなり。其際學生は教員の下に團結して、祖國の爲めに盡すの決心なかるべからず。

と。クロパトキンが次の戰爭と云ひ、又露人の利害と一致せる戰爭と云へるものは、獨逸民族に對する戰爭たること推察するに難からず。

茲に注意すべきは、露國が年來國內に於ける異民族を自國に同化せしむるの拙なることなり。斯くして露人は土地を征服し、該地の異民族を威壓抑制するには長ずれども、之を組織的有機的に自國と同化せしむるに短なり。是れ實に露國內面の缺點なりとす。されども近年露國は此の弱點の改善を企てたり、但し其の改善法は異民族に對する牽制の手段として國內的分子の力を養ふにあらずして、年來把持し來れる政治的殘忍性を更に發達せしむるの手段に由れり。此の手段は露國未曾有の國內策たる農業

大改革と相關聯せり。卽ち農民は共有地制度の廢止に依り土地私有を許されしか、尙之と共に大規模なる强制的移住に依て、大露西亞地方の農民が、露國の西境地方に移されつゝあることを忘るべからず。

農業改革が露國の興隆に大意義を有せるは云ふまでも無し、露國は獨逸の耕地に六倍せる耕地を有せり、しかも其の收穫は獨逸の三分一乃至四分一に過ぎず。此等の土地にして開拓せられんか、莫大なる人口を養ふに困難を感ぜず、三十年以後にはクロパトキンの所謂四億の人口ならずとも少くとも三億前後の人口を收容すること可能なるべし。かゝる發達と共に看過すべからざる一事は、露國の自由主義が比較的平和なる態度を棄てゝ、急に積極的、主戰的態度に變ぜしことなり。露國の政界に勢力ある汎スラヴ主義者は、農民の地位を改善せしのみに滿足せず、更に西部地方の異民族居住地に對して、露國民の中堅をなせる大露西亞人を移住せしむるの計劃をなしつゝあり。

看よ、クールランドにては既に大露西亞農民三十萬人を移住せしむるに決し、尙ク

ヴォニヤ、エストランド・クールランドには、露人農民を移さん爲め、該地方の大地主より所有地を沒收すべしとの議も唱へられつゝあり、リトワニヤにも同樣の運動起れるを認むべし。是れ獨逸に取りて果して一大壓迫たらざるべきか。今次の大戰に際し西部地方の住民は多く他に避難せしが、戰後此等の土地にして露國に復歸せんか、政府は該地の避難民を國內に移して、之に代ふるに露人農民の來住を奬勵すべきこと明かなり。かくして從來異民族居住せし西部地方は、全然露化せらるべきこと疑なし。但し波蘭のみは舊來の住民の勢力侮り難きものある故、該地方に對しては如上の激烈なる露化政策を適用し難かるべし。

要するに露國の本土と全く融和せざる西境地方を、モスコー派の中堅たる純露西亞地方より分離せしむるにあらずんば、獨逸其他列國は將來起るべき露國の壓迫に對し心を安ずる能はざるなり。

上述の如く農業改革と西部地方の强制移住とは、露國の國力を著しく增大せしむべ

き要件なり。而して露國が其の國力を如何に使用すべきかは露國多年の歷史に徵し、尙クロパトキンの演說の如きに依るも、明かなりと云ふべし。卽ち國內情況の一新は益〻國家を驅つて戰爭に赴かしめんとす、殊に自由主義者の態度に變化を生ぜしむることは重視すべき點なり。

露國の自由主義者は獨逸を以て保守的反動的なりとし、露國の專制主義と親近なる事を罵りて止まず。されども彼等が獨逸を敵視する所以は、かゝる理論上の點に於けるよりも、主因は寧ろ物質的、實際利害の上に存せり。是れ卽ち獨逸が露國の南方發展の障害たるを憎むに外ならず。露國近年の經濟的發達は自由主義者の致す所にして、彼等は國民經濟の維持者たるなり。而して彼等は露國の南方發展が必然の要求なるべきを信ぜり。然るに此の發展策は正に獨逸の東方策と相容れざるものにして、彼等の獨逸を憎むの情は愈〻深からざるを得ざるなり。(この露獨國策の衝突に關しては箕作博士の論文に詳述せられたるを以て茲に略す。)

六

以上の第五節はロールバッハの所論の要旨なりとす。露國の農業改革が露國の發展に貢献するの偉大なるべきことは疑ふの餘地なし。されどもロールバッハの如く直に之を以て侵略的性質のものとし。之を獨逸の國患として仇敵視せんとするは、僻見の誇を免かれ難きものか。固より此種の意見はロールバッハのみならず、陸軍中佐フロベニウスも其の著書中に發表せしことあり。但しフロベニウスは知名の獨逸主戰論者にして、今次の開戰に先だつ數ヶ月以前に、一小册子を著し、列國より嫉視を受けつゝある獨逸は、到底戰爭の手段に依らずんば現狀打破を望み難きことを主張して、大に主戰論を絶叫せし者なり。ロールバッハと云ひ、フロベニウスと云ひ、孰れも獨逸に對する露國の敵意を過大視せしものなるべし。露國の農業改革は果して上述せし如き戰爭意志を有せるものなりや、吾人は是を以て寧ろ獨逸一部の人士が神經過敏に陷りし

結果と認めんと欲す。

されども玆に考ふべきは、露國が國內民族の統治に苦めることなり。露國の民族混淆は墺匈國に比して更に甚しきものあり。小露西亞人を除けば、純露西亞人は全人口の半分に達せず、しかも從來よく統一國の體面を維持し得たるは、異民族に對して强き露化政策を行ひしが爲めなり。されば農業改革に伴ふ農民の移住が、民族政策の一端として利用せられ、異民族統御の一手段たる見込なしとせず。但し今次の革命の結果、各地の動搖著しく、殊にウクライナ、フインランドの如きは、自立的態度を發揮せしこと著しきものあり。從て今後の民族政策が果して從前の如くなるべきやは大に疑ふべし。たゞ獨逸としては、東隣の一大勢力に對して國民の覺醒を促し、大に『露禍』を絕叫して戰爭準備を整頓するを以て便とすべし。露國の農業改革が將來に大意義を有すべきことは今玆に贅するを要せず、たゞ獨人が此の事實の侵略的意義を誇大視する點に於て、彼等が徒らに戰爭意志に支配せられつゝあるを窺ひ得れば足れり。

想ふに是亦彼等の國民性の致す所なるべく、國際間に於ける獨逸將來の態度も如上の事實よりして其の半面を推察し得られざるにあらず。（大正六年十一月）

佛人のコンスタンチノープル處分論

（佛國史家ドリョール氏の所論）

地中海の形勢――バルカン諸邦の態度――獨逸及土耳古の失敗――土耳古の末路と列强――コンスタンチノープルの處分――ダルダネルスの開放――露佛同盟の價値

嘗て東歐の雄鎭たりし土耳古は、年來國勢の衰頽著しく、爲めに『瀕死の病人』として取扱はれしこと久しかりしが、今回の大戰亂に際して國運は果して如何に開展し行くべきか、抑、歐洲第一の要地たる首都コンスタンチノープルは、或は遂にオスマン・トルコの手を離るゝことなきか。長瀨鳳輔氏は『太陽』八月號（大正四年）の誌上に於て、世人が多く土耳古を侮蔑するに過ぎたりとの旨を述べられたり、予輩も之を讀みて氏の警告に敬意を表せしものなるが、土耳古の運命に至つては蓋し世界史上の一大痛心事ならずんばあらず。而して最近長瀨氏の論文に對すると等しき興味を以て讀みしものは、こゝに紹介せんとする佛國史家ドリョール氏の論文なりとす。該論文は本

年六月巴里にて發行せられし「ナポレオン研究雜誌」(Revue des Etudes Napoleoniennes, les Origines de l' Europe Nouvelle.) に載せられしものにて、「コンスタンチノープルの恢復と露佛同盟」(La reprise de Constantinople et l'allianee franco-russe) と題する六十餘頁に亙る長篇なり。ドリヨール氏は同誌の主筆にて史家として知られし人なり、されば該論文も東歐千有餘年の歷史を回顧して、大勢の推移を達觀し、更にそれを現代及び將來に推及せんとせしものなり。故に其の說く所は歷史事實に立脚すること多く、從て現在の事相に適切ならんことを要とする政治家の所論と大に異なれり。而して氏の目的は大勢の觀取に存するが故に、所說決して周密ならず、動もすれば放膽に失し空言を弄するの嫌なきにあらず。殊に氏が獨逸の必敗を信じ土耳古の獨立を認めざる如きは、根據餘りに漠然たりと云ふべし。尙氏の主張する如く東歐に露國の優勢を樹立せば、果して地中海の均勢を破るの憂なきか、氏は地中海に於ける英國の勢力を如何に認めしか、是予輩の疑問とせる所なり。要するに氏の所論は現代の複雜

なる列强權力關係を論ずるに於て餘りに放膽なり、無雜作なり。されども史上の大勢より論じ來れる其の態度に於ては、吾人の參考とすべき點亦少からずと信ず。就中、獨逸が頻に露軍に壓迫を加へつゝ、一方ダルダネルス海峽を露國に與へて媾和を急がんとする形勢の見らるゝ今日、佛人の側よりして又ダルダネルス、コンスタンチノープル等の東歐の要地を、露國に委ねんとする議論を聞くは淺からぬ興味を感ずるものなり。今左にドリヨールの論文の後半即ち現代に關する部分の要旨を紹介すべし。

一

現代に於ける獨逸人の橫暴なる侵略は、恰も中世初期ゲルマンの蠻族が歐洲諸國に侵入を企てしに似たり。彼等獨逸人は北歐より起つて南の方地中海に出で、そこに利權を獲得せんと焦慮しつゝあり。されども地中海殊に東歐方面には古來より傳承せられて希臘、拉典の文明が、尚其の光を失はざることを忘るべからず。而して回敎徒の

勢力衰へ、土耳古の頽廢年既に久しき今日、希臘文明は露國の手に依て維持せられ、拉典文明は實に佛國に依て代表せらるゝの狀にあり。尙英國は其の經濟的、智識的勢力を以て兩國の後援者たるものとす、實に英國は埃及並に印度に於て古代文明の保護者たること、露佛兩國の場合と等しきものあり。而して今地中海に出でゝ、此の形勢を攪亂せんとする者は蓋し獨逸人に外ならず。今や聯合國は孰れも文明を重じ自由を貴ぶの國家なり、佛國が其の北阿弗利加植民地に施しゝ政策は之を實證して餘あるべし。英國は又埃及、印度、波斯灣方面に於て此の精神を發揮しつゝあり、露國も亦柔溫親愛の態度を以て其の國民に臨めるにあらずや。

二

今回の大戰亂がバルカン事件を機として破裂せしは能く人の知る所なり。而して開戰に際しバルカン諸邦は一九一三年八月のブカレスト條約に基き、中立を固守してバ

ルカンの均勢を維持するに努めたりき。されば ルーマニャの如きも從來獨逸と親密なる關係ありしにも係らず、夙くも嚴正中立を宣言したるなり。否彼は寧ろ墺匈國の敗亡を望み、其の國民黨は墺匈國よりトランシルヴアニャを獲て、大ルーマニャの實現を期せんとせしなり。又希臘は先年のバルカン戰役以來セルビヤと親善關係を結び、土耳古及びブルガリヤに對して、バルカン三國同盟（希臘、セルビヤ、ルーマニャ）の成立を望みしが如し、而して彼が三國協商の味方なるべきことは固より論なし。希臘は年來エーゲ海諸島を併合して、自國の國民的統一の實現を切望せるものにて、此の爲めには土耳古竝に其の後援者たる獨逸的勢力の衰微を必要とせり。されば其の大宰相ヴェネゼロスの如きは、公然三國協商に加擔せんとせし程なりき。（但こは國王コンスタンチンの同意を得ずして成らざりき）又ブルガリヤが嚮のブカレスト條約に不滿を抱き、常に三國協商に快からざるは明白にして、屢獨墺に加擔せんとしつゝあるは事實なり、たゞ其の敢て起たざるは兩軍勝敗の決遽かに豫測し難きが爲めのみ。土耳

古に至ては全然獨逸の走狗なり。彼は獨墺の勝利を信ずること深く、自らはコーカサスに侵入し、カルス、バツーム及びバクの石油坑を奪ひ、別軍を以て波斯を脅かしてテヘランの政府をして露國と開戰せしめ得べしと豫期せり。されども此等の夢想はすべて破られ、尙埃及遠征に多大の望を囑せしも、是亦失敗に終りしこと能く人の知る所とす。元來土耳古は墺匈國が三十萬の大軍を以てセルビヤを席捲するは容易なるべく、更にブルガリヤを味方として直接土耳古と獨墺との間に聯絡を通じ得べく、從て伯林竝びに維納より自由に軍需品の供給を得べしと信じ、尙之に依て露國と英佛兩國との交通を遮斷せんことを期せしも、此等のこと一も成就せざりき。却て聯合軍はダルダネルスを砲擊して、二百年來の計畫に從ひ、歐羅巴より土耳古を驅逐せんとしつゝあるなり。

三

此の如くにして東歐に於ける獨逸の野心は一大打擊を受けつゝあり。固より戰局の將來を豫測するは、不可能なれども、歷史の潮流が如何なる徑路に向ひつゝあるかは察するに難からず。此くしてまづ認めらるべき著大の現象は、獨逸が土耳古の無力を悟りて、其の復興を幇助せんとする念を斷つべきことなり。最初獨逸は土帝の力能く、世界各地の回敎徒を動かして、西はモロッコより東は波斯、印度に至るまで神聖戰爭の一大運動を起さしめ得べしと信ぜしも、其の全く豫期に反せしは事實の能く證する所なり。土耳古は今日に於て既に一の死屍なり、獨逸が此の死屍を活用して地中海に根據を獲んとせしは大なる誤算と云はざるを得ず。

抑地中海は其の性質に於て既に非獨逸的なり、試に地圖を開けよ、地中海の沿岸何處にか獨逸民族の土地として認められしものありや。獨逸人は國民的國家の主義を奉じて、活躍を試みつゝあれども、其の主義よりすれば獨逸は全然地中海より除外せらるべきものなり、而して彼等が誇稱する「獨逸文明」も亦地中海文明とは沒交涉のもの

たるべし。是決して僻見にあらず、狹量にあらず、實に抗すべからざる歴史の大勢なり。之に反し阿弗利加北岸に於ける佛英伊三國の位置は大に獨逸と異なれり、彼等は孰れも其の勢力圏に對し、文明を以て之を善導しつゝあり、モロッコは全然佛國化して其の國人は兵士となつて佛國の爲めに戰ふを悦び、又埃及は英國の努力に依り土耳古の羈絆を脱して自由を享受するを得たり。西亜細亜に於ても亦然り、亜刺比亜、メソポタミヤ地方其他印度方面に至るまで、其の開發は英國の力に負ふ所多きにあらずや。又佛國は夙くより西亜の交通に着目せるものなるが、土耳古の勢力を倒すを得ば、シリヤより波斯、印度に通ずる歴史的の陸上交通は茲に再び盛となるべく、此くして嘗てナポレオンが企てし東方經略の理想も茲に實現せられしかの觀あるべし。

四

抑〻小亜細亜の南を限れるタウルスの山脈は天然の一大障壁にして、古今を通じて、

民族其他種々の利害關係の分界線なり。今日に於ても土耳古人は該山の北に住し、亞剌比亞人は山南一帶に占據し、自ら互に其居住地を區別せり。而して該山より出づる河流はエウフラトの大河が南流して波斯灣に注ぐ外、多くは黑海に流入するものなり、然も黑海が其の性質上露國の海たることは自然の理とす。又小亞細亞の東部には白人種にして基督敎徒たるアルメニヤ人ありて、屢、回敎徒より迫害せらるゝにも係らず、益露國化しつゝあるは拒むべからず。アルメニヤの西はアナトリヤの高原にして、小亞細亞の脊梁とも云ふべき地方なり、而して此地方こそ眞のオスマン土耳古領たるべきものとす。卽ち西はコニヤより東はシヴァスに至る間にして略、キジル。イルマクの河谷に屬し、其の河口に近きシノペをも含めるものなり。オスマン土耳古の同胞たるトルコマン族は、カスピ海の東、アムダリヤ、シルダリヤの河域に漂浪せるが、オスマン土耳古も亦之に同じくアナトリヤの沙漠に蟄居するに至らん。而して彼等は宜しく全土耳古族と運命を共にして、露國の治下に勇敢なる軍人として活動するを可とせん

是從來の如く獨逸將校の頤使に甘ずるよりも、彼等の爲めに遥かに利益多かるべく、又彼等の末路を飾るべき一事たるべきなり。又露國は彼がトルキスタンに試みし如く、小亞細亞の交通の改善に努力して、玆に著しき經濟的發展を見るに至るべし。既に佛國の會社はバグダード鐵道の重要なる支線を讓受くべき約を結べり。露國が企劃せるオデッサよりバグダードに達する鐵道竝びモスコウより波斯灣に出づべき鐵道に依て、多年土耳古の爲めに妨げられし西亞細亞の交通は、如何なる盛況を呈すべきか察するに難からず。

又伊太利は地中海の一勢力として均勢維持の上より幾多の要求を提出せん。彼はトリポリ戰役以來ローヅス及小亞細亞沿岸の島嶼を占領せり、而して土耳古廢滅の曉に於て彼は此等諸島よりして、更に對岸の陸地を獲得せんと試むべく、恐らく小亞細亞の西部アダリヤ附近までの地を倂合するに至らん。而して彼は此地に鐵道を布設して、コンスタンチノープル・バグダード鐵道の本線と連結せしむるを得べし。希臘は又

其の「大希臘」の理想を實現せんとしてローヅスの島よりイオニヤ沿岸一帶（小亞細亞の西部）より、更に進んではダルダネルスの關門附近に至るまでをも要求するならん。されどもバルカン諸邦が今日に於ても尙因循して起たざるは、却て、彼等の爲めに不利となるべし。記憶せよ、危險を冒さずんば何事をも得られざるべきを。彼等のバルカン諸邦に緊切の問題は云ふまでもなく民族問題なり、彼等が領土の獲得を欲して已まざるは、實に民族問題解決の爲めならずや。彼等が徒に躊躇逡巡して、民族問題解決の此の好機を逸せんか、紛擾は依然半島の天地を被ふなるべく、獨墺は之に乘じて更に非謀を企つるの機會を摑むに怠らざるべし。三國協商殊に露國はバルカン諸邦の聯盟を望み、各自の國民性を尊重し、たゞ彼等が互に協同私親ならんことを切望せり。露國は決してバルカン諸邦の存在を危うせしむることなく、彼等の獨立と自由とを尊重せり、彼は其の波瀾に對しても彼等の利權を恢復せしむるに傾けり。抑露國の領土は、之を劃一の統治の下に置かんには廣大に過ぎたり、故に今や領土の諸邦に對して自治

を許すの方針に向ひつゝあり。此の如き民權尊重の精神は我が佛蘭西大革命の賜物に外ならず、假令獨逸學者の說く所は如何にもあれ、國民の解散と自由なる發展とは、實に拒むべからざる歷史の大勢なることを忘るべからず。

五

今やコンスタンチノープルを依然土耳古の有に歸せしむることは、到底一の幻想に過ぎず、又獨逸をして該地の保護者たらしむることも、決して許され得べきものにあらず。然らばコンスタンチノープルを如何に處分すべきか、或は曰く此地を以てタンジエル及び上海の如く列國に開放せられたる都市とすべしと。されども此の如きは決して斷乎たる解決法にあらず、幾多不安の分子は依然として將來に殘さるべきなり。況や光榮ある歷史に富める千有餘年の一大都府は、如何ぞタンジエル、上海の如き地に比較し得べき。然らば此都府を地理上最も近接せるブルガリヤ或は希臘の手に委ぬべき

か。想ふにこは土耳古が同地を占有せるよりも更に危險の虞あり、ブルガリヤ及び希臘は何時獨逸の走狗となるや測り難きのみならず、兩國孰れも此地を其の首府となすべきこと疑を容れず、是兩國の野心を增大せしものにして、他國の不利たること明かなり。

されどもコンスタンチノープルが露國の有に歸することは、以上の場合と大に異なれり。露國は國土廣大にしてモスコー、キエフ等の舊都あり、且亞細亞方面に廣き活動範圍を有す、さればコンスタンチノープルを握有するも之を首府とするの要なし、要するにたゞ一の要港となすに過ぎざるべし。元來露國が此地に出でんとの念は決して一朝一夕のことにあらず、而して歷史の頁を辿り行かば其の間如何に深き關係の結ばれ來りしかは明かなり。ましてや近年內國の農產著しく發達し、工業亦之に伴うて興り、殊に高加索の石油有益有望に赴くの際なれば、此等の天富を國外に輸出すべき門戶を求めんことは、露國に取りて實に死活の懸れる問題なりとす。然るに現時の戰

亂の爲め、彼は今や海外輸出の門戸を閉されて、其の麥を外に運ぶの途なし、何等の不幸ぞや。

六

抑〻黑海は露國の海なり、其の全沿岸は殆ど露國的なり、露國は宜しく此海を以て大帝國の玄關とすべきなり。此くしてコンスタンチノープルは露國の手に依て、自由と光榮とを享受し得べし。然らばルーマニヤを如何すべきとは當然起るべき質問ならん、されども黑海に於けるルーマニヤの地位は、露國のそれと大に異なれり。假令コンスタンチノープルを有せずとも、黑海に對する彼の門戸は露國の後援に依て却て安固を得べく、且ダルダネルス及びボスポルス兩海峽の通航は露國の保證の下に自由なるべきを疑はず。想ふに露國は此の二大海峽の自由通航を拒まざるべく、又彼にあらずんば自由通航を保護し得べき實力なし。而してスエズ運河の如く、列國は固き規約

を結びて海峽の中立を尊重し、又其地に築城し或は軍隊を集中するを禁ずべく、或は更にガラタ（コンスタンチノ ープルの東北部）又附近の地に英佛人乃至希臘人の居留地を置くも可なるべし、而して露國も亦此等の條件を快諾せざるべからず。

固より三國協商はコンスタンチノープルを露國に與ふるに反對せず。英國は自由が地中海の東南部に確保し得たると同様の地位を、地中海の東北部に於て露國に與ふるに吝ならず、英國外相グレーの如きは英國は露國がコンスタンチノープルの領有を望めるに同情すと聲言せし程なり。英國がアレクサンドリヤ及ポートサイドに據て、其の東洋との航路を安固にせるが如く、露國も亦ダルダネルス、ボスポルスの兩海峽に依て黑海の通路を握有して可なり。然らば露國が此の如く地中海に出でし結果、彼と英佛兩國との間に權方競爭を惹起する虞なきか。蓋し英佛兩國は舊國家なり、其の產業的發展は他に優越を稱すること年既に久し、露國は然らず、彼は新國家なり、其の文化は尙幼稚にして、農產出は莫大なれ、富源の開發利用に於ては機械其他の供給を外

國に仰がざるべからず、殊に工業品は一に國外よりの輸入に俟つを要す、更に尙露國に注意すべきことは、彼が日用の必需品たる熱帶產物を一も有せざることなり。此等のすべてを供給するに、英佛兩國が最も適當の地位にあるは固より言を俟たざる所にして、此くして三國協商は地中海に於て互に協調を固うし得べく、利害の衝突の如き決して夢想し得べからざるなり。

七

近世史を看るに佛國は常に東歐の優者として、特に此方面の利害關係を重視せり。而して從來土耳古の保全を主とし、東歐に事あるや常に土耳古と提携して、地中海の平和の攪亂者を抑制するに努めたりき。十六世紀には佛王フランシス一世は、當時獨帝チャールス五世が世界的政策を提げて歐洲を席捲せんとするに對し、土耳古と結託して獨帝の野心を挫くに努めしことあり。其後地中海の權力關係に於ては、佛國は常

に土耳古の保全に依て、東歐に於ける自國の優越を防護するに怠らざりき。嘗て佛國は地中海に帝國主義を行はんとせしこあり。されども今や時勢は一變せり、もはや帝國主義は地中海に行はるべくあらず、たゞ均勢維持の問題あるのみ。されば今地中海の禍源たる土耳古を處分するに當り、佛國は自ら進んで露國の勢力を東歐に誘引するを敢てせしなり。此くして佛國は嚮に土耳古と提携せし如く、今や露國と握手して近東問題の解決を望むに至れり、吾人が露佛同盟の活用を叫ぶも亦以上の結果たるに外ならず。想ふに露佛同盟に依て地中海の均勢は維持せらるべく、更にマルセーユよりオデッサ及びバッームに達する交通は安固となり、佛國貨物の中央亞細亞に入るべき道は玆に開かるべく、佛國が嘗て西亞に有せし優勢は再び恢復せらるべきこと明かなり。嚮に一八〇七年佛帝ナポレオンは露帝アレクサンドル一世とチルジットに和約を結びし時、兩帝の間自ら默契ありて、露佛各歐洲の一半を支配し、東西の南帝國相對立して世界に臨まんとする風ありき。されどもこは當時に於て一の夢想に過ぎざりき

然るに此の兩國提携して全歐の均勢を維持せんとの精神は、今や又兩國の間に實現せらるべき形勢あり、百餘年前のチルジットは玆に再現せられんとす。又一八二二年ヴエロナ列國會議の開かれし時、佛の使臣シヤトウブリアンは佛の國境をライン河にまで進め、此くして其の天然國境を確保せんとし、更に露國に許すに東歐に於ける權力擴張を以てせんとせり、當時彼の意見に賛成を表せしは露帝アレクサンドル一世のみありき。然るに百年の後吾人は今や此の理想を實行し得るの機會に到達せり。

露佛同盟は宜しく以上の精神に基かざるべからず、卽ち「ラインを佛に、ボルポルス、ダルダネルスを露に」てふ主義に立脚すべきなり。獨に佛國は士耳古と提携して獨逸を抑へ、ラインの國境を固め、士耳古を以て東方の防障となしたりき。時勢の變ぜし今日、佛國は東方の防障として玆に新しく露國を得たり、此くして獨逸の野心を挫くと共は、ラインの天然國境を獲得すべきなり。吾人は野蠻なる士耳古を倒し、橫暴なる獨逸を抑へて、多年國民的屈辱を被りし諸國に自由なる發展を與へざるべからず。

往昔、東歐に榮えし希臘、ビザンツの文明は此くして再び光明を放ち得べし、巴里とモスコーとは互に此等文明の繼承者として、光榮ありし地中海の地位を恢復するの要あり。是實に歷史が吾人に敎ふる所にして、時代の潮流の向ふ所、蓋し堰き止め難き運命なりとす。

以上はドリヨール氏の所論の要旨なり。氏の說く所極めて大膽なり、史家たる氏は主として史上の大勢を論じて、直に之を現代に推及せしに過ぎず。歐洲の禍源たるべき近東問題が此の如く簡明直裁に論じ去らるべきにあらざるは明かなり、三國協商の各國は此問題の解決に當りて、氏の說くが如き公明の態度を取り得べきや疑ふべし。想ふに現時の戰亂が如何なる終局を見るべきや否や明かならずと雖も、ボルポルス、ダルダネルス兩海峽の問題は、必ずや激しき論爭の點となるべきこと疑を容れず。察

するに聯合軍側に釁隙を生ずることありとせば、そは恐らく東歐に於ける利害の衝突に起因するものならん。予輩は將來地中海の多事なるべきを豫想すると共に、バルカン及びボスポルス・ダルダネルスを包有せる近東問題に、幾多の禍根の藏せらるゝを憂ふるものなり。時勢の變遷著しき現代に於て、將來を豫測するは到底不可能なり、たゞ予輩は歷史に基けるドリヨール氏の意見に於て、少からぬ興味を感ぜしと共に、之に依て佛人一部の思想を窺ひ得べきを思ひて、こゝに其の大要を紹介せしのみ。されども今日の空想はやがて明日の實行となるやも測られず。想ふに獨逸の窘蹙、土耳古の壞滅、而して地中海より西亞に及べる露佛同盟の優勢、此等を以て單に幻想に過ぎずとして一笑し去るもの、亦短視者流の謗を免かれざるべき歟。（大正四年八月）

ビスマルクと現代

一

現代は國家主義の時代である、或は之を理想の上より眺めれば、より以上の主義思想が無くてはならないのかも知れないが、理想は別として、事實に於て現代思想の大部分を形づくつて居るものは、國家主義なりと言はざるを得ない。

凡そ理想は別として、悉くの人類が尠くとも一個の人格として世界に確固たる生存を認められる最も有效な方法は、現代に於ては何うしても國家の一員としてその支配下に屬せなければ、不可能な時代となつた。これは現時の歐洲大戰亂が明白に證明してゐる。

將來は措いて、最早今日は個人を本位とし中心として人類の自由生存は許されなくなつた、萬事を國家の立場から定めなければならない時代となつたのである、之は戰

亂から影響された一時的の現象であるかも知れないけれども、從來に於ける國家間の國際的關係とか、萬國心等いふものは極めて蔭の薄いものなつてしまつてゐることは、皆が皆とはいはれないけれども、文明國といはれる各國に共通して現はれた現象であるのは事實である。

その結果として何れの國家も、何事に向つても現實的な要求を發するやうになつて來て、理想に對する觀念は稀薄なものになつてしまつた、即ちidealでは駄目である、real全盛の、實際的に利害を打算する傾向の著しくなつて來たことを否定することは出來ない、今次の戰亂に際して北米合衆國の態度はこれを裏書してるやうなものと言はねばならない。

然らば戰後は如何といふに、一部の論者が主唱する樣な、戰後は必ず軍國主義は衰へて、各國共に平和思想に支配されるであらう等の說は、實際には到底想像し得られないもので、例令戰亂は悲慘、殘忍の極を盡して終決を見るとしても。軍國主義（武

力萬能主義、戰爭主義、侵略主義と異なる）は依然として存續され、否な寧ろより以上の強い意味に於ける國家主義が各國民の頭を支配するに違いないと思はれる。

二

彼のドイツが今日の强大を致した原因は何處に在やといへば、時代の習慣風潮などに動かされず、ひたすら自己を研究し理解して自國の立脚地に確立し現實主義政策の勵行に努力したに在ると言はなければならない。このドイツの現實的な國家思想を觀て、而して近代世界の大勢に眼を轉ずる時、世界の列强にはドイツ的思想の漲ぎつて居たことに一驚を喫する程であらう。そしてこの潮流は單に今日のみではない、尙將來に向ても必ず繼續的に進むものと考へることが出來るのである。

三

この現象を觀て然る後、ビスマルクを考へてみると、此に重大なる意味が含まれて居る、言ふまでもなくビスマルクは近世史上に特筆すべき偉大なる人物であつたばかりでなく、同時にドイツ帝國建設者としての第一人者であるとは餘りに明白な事柄であるが、又彼こそ實に今日の國家主義の代表者であつたのである。

十九世紀の歐洲は大體から言へば英國の自由主義全盛の時代であつたと言へる、それが十九世紀の末期に至つて自由主義に代つて國家主義がポツ〳〵勃興しかゝつて來た、當時尙自由主義全盛の名殘を止めて居つた際、彼ビスマルクは徒らにこの主義に盲從することの非を覺つて、先づ自國の現實的利害觀からして英佛露の傾向等には目も呉れず、只管ドイツそのものゝ了解に力を注ぎ、國策の一切をドイツに適應せしめたところに彼の偉大が表はれて來るのであつた。

當時に於けるドイツ國内の情態は、一つの强力な中心がなければ統制することが出來なかつた、夙くもこの眞相を洞察した彼は、プロシヤを中心力たらしめんとして力を盡した。彼の政策が徹頭徹尾國家本位であつたことも此に原因してゐる、從つて彼は又政黨政派から多大の支配も拘束も受けずに、彼等の上に超然として居つたのも了解し得られるのである。

四

ビスマルクの政治の蹟を觀ると決して巧妙であつたとは言へない、かの所謂鐵血的政策が自由を叫び個人の權利を要求する國民一般に好印象を與へなかつたことは申す迄もなかつたらう、同時に政黨の存在に重きを置かない結果は彼等の間にも極めて不評であつた、最初彼が議會に望んだ時は自由黨を利用したけれども後には之と離れてしまつて保守黨と結んだが、何れの方面からも決して好意を向けられなかつた。

乍併、この憲法政治でありながらも、黨派等は眼中に置かず、何處までも國家中心で押し通してゐたところに、ビスマルクのビスマルクたる大特色を發揮して居ると稱すべきであらう。當時英國が盛に自由貿易主義を採りつゝあつたに對して、彼がドイツに保護關稅政策を實施したのも、自國農業の發展を策した上でのことであつた、又各國が先を爭うて植民地開拓に力を傾倒して居るに對して、彼は之に向つて極めて冷淡であつたことも、時代の風潮に乘ずることを排して、自國の狀態に眼を注いで國力の充實、培養の先決問題なるを洞察した結果に外ならない。故に若し彼をして現代に在らしめたならば或は植民に向つても、力を傾注したことであらうと思ふ。

實に當時のドイツは植民よりも國家の整頓が先きであつた、『善にもあれ惡にもあれ、ドイツは强からざるべからず』とは彼がモツトーとして常に奉じた言葉であつた、何でもいゝ先づ强くならなくてはいかん、善惡の評價は然る後に決すべきものであるといふ、國家主義の特色の極めて鮮かさは、實に雄々にい武者振りといふべしである。

五

晩年のビスマルクは皇帝との不和の爲に不遇な生活を送つたけれども、大體から見て彼がドイツの爲に盡した功績は非常に大きなものと言はなければならない、現時の戰亂も觀察の仕樣に依つては彼の政策の踏襲であるとも云ひ得る、或は又彼の如き偉才が今日に實際に若し居たならば、戰亂は發生せずに濟んだかも知れなかつた、何れにもせよ、ドイツに統一と力とを與へたものはビスマルクであつたのである。

ビスマルクは才氣煥發した才物ではなかつた、可成頑固な或點に於ては極めて冷酷とも見られる性格の所有者であつたけれども、何事に向つても國家といふ立場から事を行つてゐたところに、大政治家としての資格を充分に具へて居つた、一體大人物とも稱せられる程のものは、物事に對しても客觀的の立場からのみ遣らない、反つて主觀的に出發する方が多いものである、と同時に大熱情が必要である、主義とか方針と

かに拘束されては何うしても型が小さくなつてしまふ、何時までも自由に大膽に型に捉れないで行くには熱情の奔流が必要でなければならない。この意味からしてビスマルクは又大人物の有資格者であつた。勿論、彼の行動には矛盾もあり、非難すべき個所も少くないであらうけれども、國家に對する大熱情から事を行つたことが、即ち彼を大人物として生かす所以であつた。

獨逸史家ヱリッヒ、マルクスは彼の事蹟を見て評して曰く Bismarck made us strong & manly. と又或者は『ビスマルクがドイツに盡した遣り方は君主的に、自治的に、現實的に、緊縮的に而して眞面目であつた』と評してゐる。又一八七〇年佛蘭西に勝つた時、英國の一外交官は(歐羅巴は女主人を失へり、されども男主人を得たり)と評したが、佛蘭西を女主人に比したに對して、獨逸を男主人と見立てたところが面白い。

要之ビスマルクは現代に一大意義を有して居る、決して過去の人ではない、其の功罪共に吾人の大いに研究すべき點が多いのである。

戰後の世界

現代大戰の戰後に來るべき變動は果して如何なるものであらうか、それは五十年百年の後に歷史を顧みて徐ろに考へらるべき問題で、現在にあつて現在を考へるのは雜多の事柄に捉はれ易くて眞相を看破することは甚だ困難である、況んや將來の豫言に於をやである。併し豫言でも宜しい、諸方面から幾多の觀察が試みられることは、吾人の修養の上に於て、現代の進步の上に於て悦ぶべき現象である。但し時代の大勢は多く其等の觀察に支配されることなく、默々として强い步みを以て進んで行くであらう。

今回の大戰は確かに古今未曾有の大戰爭である、戰爭に關して發表せられた幾多の計數は實に驚歎すべき程の額に達して居る、併しこの莫大の計數を、以前の幾多の大戰爭に比較して、其の等差の著しいのに驚いて今回大戰の意義が舊來の大戰爭に比して特に重大なりと考へるのは果して正當であらうか。舊時の大戰は其の規模は遙かに小

であつたらうが、それは當時の國家社會竝に文明の狀態が然らしめた結果で、其戰爭が當時の世界に及ぼしたる影響或は史上に於ける戰爭の意義としては、その價値に於て現代戰爭と大した差はあるまいと思ふ。かゝる理由からして吾人は濫に現代戰爭の外形の大なるに驚いて、其の意義を過大視するに贊成し難いのである。

但し現代人士は確かに此大戰の如き經驗は從來有して居なかつた、從て大戰に依て幾多の感化を受けたに相違ない、故に戰前と戰後とでは世界に少なからぬ變化の起るべきは固よりである。併し歷史は大河の流れるが如きもので、時代の大勢は常に動かすべからざる一定の方向に流れつゝあるのである。固より時に應じ變に處して、其の表面には波浪も湧き立つことがあらうし、又河道にも多少の變遷はあらう。併し人工を以て全然河道を別方面に轉ぜしむる如き一大變化は、歷史の上には起つて來ない。元來戰爭なるものも從來の世界を支配して居た形勢から生れたもので、戰爭其ものには自から新しい勢を創造するの力は無いと思はれる。若し戰爭に依て新しいものが生

れて來るとすれば、それは戰爭の力ではなくして、戰爭を動かしつゝある時代の力でなければならぬ。則ち時代は常に新しいものを生みつゝある、而して其の創造は政治と云はず、軍事と云はず、經濟と云はず、文學美術と云はず、あらゆる人間の文化事業として吾人の眼前に絕えず開展されて居る。而して其の開展し來るや、他の方面では外形的には徐々と靜隱に起ることが多いが、戰爭の形式を採ると極めて急激に驚天動地的に起つて來る。そこで人々の眼は戰爭の壯大と慘害とに眩んで、かゝる一大事實の起つた後には當然一大新世界が開展せねばならぬと信ずるのである、吾人は之に與みしない。

固より戰爭は人類に取つては大なる奮鬪であり又努力である、殊に現代戰爭の如き大規模の場合に於て左樣でなければならぬ、從て戰後には大なる疲勞が起り又大なる休養が必要である、(疲勞は今日既に各交戰國民の間に起りつゝある)則ち戰後には戰爭に對する反動が起るのは明かである。平和運動も起らう、人道主義も高唱されやう、

軍備制限の聲も高くならう。其の他すべてに於て非戰論的傾向が增進することであらう。併し其等は戰後に來るべき當然の反動で、之に依て新時代が將來せられることゝは信じない、要するに休養の時期に起るべき一時的現象に過ぎないであらう。則ち此時期は事務に忙殺された人が、休憩時間を花園に逍遙して美しい花を摘みつゝあるに似たもので、次の執務時間が來れば花を棄てゝ彼は再び机に向はねばならぬ。

若し此の如き反動を以て戰後の大勢と見做すならば、それは大なる誤であらう。「反動」は元來「動」があつて生ずるもので、たゞ「動」に對する反動たる點に於て價値がある、「反動」が直に「動」そのものとなることは出來ぬ。所謂平和運動や人道主義は戰後直に時代を左右するの大動力とはなり得ない、蓋し時代の大勢は滔々として別方面を流るゝこと既に久しいものである、戰後起るべき一時的反動は、たゞ此の大勢に對して調節緩和の作用をなし得るに過ぎない。但し戰後五年か十年かの期間に起るべき一時的反動を以て、戰後の新しい形勢と解するならば、それは餘りに平凡な見解である、

かゝる場合はいかなる戰後にも起り得ることで、決して今度の大戰のみではないからである。而してこの一時的反動を戰後の世界的形勢と解して、我國も亦この世界的形勢に伴はざるべからずと絶叫する人達は、その反動期が過ぎると又もや我國は以前の世界的形勢を棄てゝ新しい形勢に順應せねばならぬと叫ぶであらう。要するに彼等は水面に起つた漣や渦卷を見て、それを直に水流そのものと解する人々で、水流は漣や渦卷を起しつゝ、しかも其の流るゝ方向を變へないことを忘れて居るのである。

然らば、戰後の世界は如何、答へて云ふ、世界は依然として戰前踏み來つた路を進むのであると。茲に戰前踏み來つた途と云ふのは、各國家の分立對峙の形勢を指すのである。蓋し國家主義が著しく國民的となり、而して各國家各國民の對立競爭を益明確ならしめたことは、十九世紀後半に起つた著大の現象で、爾來世界は常に此の徑路を踏んで變らなかつたのである。膨脹發展を專一とする帝國主義が行はるゝに至つたのも、以上の國家の分立競爭が强くなつた結果に外ならぬ。但し十九世紀末以來、尙

他に著しい現象があつた、それは國際的運動で種々の國際的團體が組織された、併しそれは國家を基として組織されたものたるを出でなかつた。從て一たび國家の間に戰爭が破裂すると、其等の國際的組織は脆くも破裂されて了つたのである。要するに時代の秤は未だ尚分立主義に傾いて居るので、世界的傾向や人道主義はまだ時代を動かす原動力とはならないで、唯傍系の力として調節緩和の作用をなすのみに過ぎないのである。

國家主義が世界的傾向となつたのは、十九世紀の後半に所謂帝國主義が起つた頃からのことで、新しい現象である。歐洲では列强の對抗が夙くから盛であつた爲、國家主義は既に十七世紀頃から明かになつて居るけれども、それは現代の如き全國民的國家主義ではなくて、寧ろ王室中心の貴族的性質を帶びたものであつた、ルイ十四世時代の佛國及び十八世紀の佛國文化は能く此の特色を示すものである。則ち現代的の國家主義は歐洲に於ても新しいので、其の明確に認めらるゝのはビスマルクの時代から

である。獨逸は英佛等の先進國よりも遙に遲れて國家として形をなしたが、丁度其勃興時代は新意義の國家主義が行はれんとする時代であつた。獨逸は此形勢に乘じて自國の地歩を强固すべく所謂現實政策（Realpolitik）を奉じて起つた、則ち自己の國家國民の特殊なる立場から政策を定めて、極めて實際に適應せる處置を執らんとするので、必しも世界の風潮に雷同せざるものである。惡く云へば極端なる自我主義である。

併し世界の各國家が未だ完全なる成形を得ない今日、則ち世界の權力關係が平衡を得て居らぬ時代に於て、遽に統一平等に基いた世界主義を行はんとするのは不自然で、各自孰れも自國の立場を完全にすべく、國家分立主義に基いて行動するのは已むを得ないことと思ふ。茲に於てか現實政策の跋扈を見ることとなつた、而して各國負けず劣らず自我に執着し現實を專一とした結果は、目前に見る如き世界大戰となつたのである、是蓋し已むを得ざるの勢で、現代がいかに缺陷の多いかを語るものである。

現代戰爭の由來は上の如くであるとしても、其の形勢はこの戰爭に依て一變される

のではなからうか。否、現代戰爭はかゝる一大變革を齎すには餘りに現實的に過ぎて居る、現實に起つたものは現實に終る、吾人はこの戰爭が戰前の現實政策を一變せしむることは難いと信ずる。而して各國の對立競爭は依然として變らないであらう。但し戰後の世界を一新せしめん爲めには現代戰爭がモット徹底的に戰はれ、モット精神的に戰はれねばならぬ。現時の戰局を看よ、露國の變動を除けば別に著しい變化もないではないか。ただ戰後に起るべきことは、從來の列國分立に基いた權力關係が漸々に修正されて行くことに過ぎぬ、又從來の國家主義が益全國民的に組織さるべきことである。一派の論者の唱ふる如き平和主義人道主義は現代戰爭が生むべき見としては尙早である、餘りに立派な見である。

繰返して云ふ、戰後に當然來るべき反動を以て世界の大勢と解してはならぬ。深く近代の歷史を察すれば、時代の流れは尙未だ全然方向轉換をするものとは考へられぬ。想ふに世界の分立主義則ち國家對立の傾向は今尙ほ發育の半途にある、則ち未だ

安固なる定形を得て居らない。此傾向は將來益成熟の域に向て進むべきものである。其成熟が極まつた時、そこに始て別の新傾向が世界の動力となるのであらう。其時期が來る迄は吾人の努力は益國家的に集中されねばならぬ。固より各國家が互に存立する今日に於て、國際的精神乃至世界主義の尊重すべきは云ふまでもない。たゞ吾人の主張する所は、此等の美名に心醉して、自家の立脚地を固めることを忽諸に附すべからずと云ふにある。而して此等の立派な精神を行ふにも、まづ自國から整頓して掛らねばならぬ。今後百年の後か千年の後かは知ぬが、聽て來るべき其新時代は發達したる國家主義を通じて名實共に全き世界主義の實施されるのを看るであらう。

（大正七年五月）

獨逸學者の永久平和論

一

獨逸の中央歐羅巴同盟論の驍將として知られたフリードリヒ・ナウマンは、自から主宰して居る所の週刊雜誌『ヒルフェ』の一九一七年八月廿三日號に『平和主義に就て』と云ふ論文を載せた。論文そのものは極めて短篇で、且つ學術的研究として書かれたのではなく、隨筆風に筆を走らせたものに過ぎないのであるが、併し目下獨逸知名の士たるナウマンの筆であり、又論旨も面白い點があるので、次に紹介することゝした。

ナウマンは一派の人の唱ふる如き「世界平和」を以て、到底近く實現さるべきものでもなく、又決して永久的なものと思つて居ない。彼は世界の永久平和の不可能なりや否やを、歷史や歷史哲學や或は外交家、平和論者に尋ね、更に常識的判斷にも訴へて見

た。而して現代が永久平和を實現すべき具體的方便と、組織とに缺けて居ることを知り、其の實現の不可能なことを說いて居る。要するに永久平和は空想であつて、吾人は現代の如き時代から一足飛びに、かゝる立派なる時代に入ることは出來ないと云ふのが、ナウマンの主張である。獨逸の立場から云へば當然の議論である、併し之れを獨逸流の僻論とのみ解してはならぬ。世界史の發展から公平に觀察して來れば、矢張り左樣であると思ふ。吾人も此點に於て彼の說に賛成する、現代及び近き將來は尙國家主義の時代であると信ずる。吾人は宜しくこの國家主義の傾向を發達し完成せしめて、而して後に所謂永久平和の實現を考へなければならぬ。そこに達するには尙幾多の曲折を要するであらう。要するに現代に於ける人間生存の問題はまづ國家を基礎として論ぜられなければならぬのである。以下ナウマンの所說を紹介することゝする。

二

永久平和は、果して可能であらうか。吾人はまづ之を歴史と歴史哲學とに尋ねて見やう、更に又政治上の實際家に問うて見やう、尚政治上に少からぬ勢力を有すべき多數者の常識的判斷にも質して見たい。

歴史は果して何事を語るか。この疑問は餘り單純な問である、蓋し、それは歴史なるものを一の明確な誰人にも分り易いものと考へて見る故である。併し尚精細に歴史を調べて見ると、歴史は甚だ複雜錯綜したもので了解に苦むのである、而してそれに記されたことは史實そのまゝであるのか、又史家の考に依て着色された記載に過ぎないのであるか、判斷に迷ふ次第である。

嚴重に云へば、歴史なるものは、畫家が森林を描くに似たものである。畫家は決して森林そのまゝを現はす者ではなく、たゞ森林の一面を描いたに過ない、歴史にと云つて居る。史上の出來事ではたゞ其の事實のみが表面に現はれて來るので、吾人は實に歴史哲學れて來ない。

た。而して現代が永久平和を實現すべき具體的方便と、組織とに缺けて居ることを知り、其の實現の不可能なことを說いて居る。要するに永久平和は空想であつて、吾人は現代の如き時代から一足飛びに、かゝる立派なる時代に入ることは出來ないと云ふのが、ナウマンの主張である。獨逸の立場から云へば當然の議論である、併し之れを獨逸流の僻論とのみ解してはならぬ。世界史の發展から公平に觀察して來れば、矢張り左樣であると思ふ。吾人も此點に於て彼の說に贊成する、現代及び近き將來は尙國家主義の時代であると信ずる。吾人は宜しくこの國家主義の傾向を發達し完成せしめて、而して後に所謂永久平和の實現を考へなければならぬ。そこに達するには尙幾多の曲折を要するであらう。要するに現代に於ける人間生存の問題はまづ國家を基礎として論ぜられなければならぬのである。以下ナウマンの所說を紹介することゝする。

二

永久平和は、果して可能であらうか。吾人はまづ之を歴史と歴史哲學とに尋ねて見やう、更に又政治上の實際家に問うて見やう、尚政治上に少からぬ勢力を有すべき多數者の常識的判斷にも質して見たい。

歴史は果して何事を語るか。この疑問は餘り單純な問である、蓋し、それは歴史なるものを一の明確な誰人にも分り易いものと考へて見る故である。併し尚精細に歴史を調べて見ると、歴史は甚だ複雜錯綜したもので了解に苦むのである、而してそれに記されたことは史實そのまゝであるのか、又史家の考に依て着色された記載に過ぎないのであるか、判斷に迷ふ次第である。

嚴重に云へば、歴史なるものは、畫家が森林を描くに似たものである。畫家は決し森林そのまゝを現はす者ではなく、たゞ森林の一面を描いたに過ない、歴史にる。史上の出來事ではたゞ其の事實のみが表面に現はれて來るので、はれて來ない。

和があり、又戰爭が起つたことを吾人に語り得るけれども、ればならぬとか、平和が來るべき筈であると云ふことを教へるもので かゝる問題を論議するのは想像の範圍に屬するもので、歷史に通曉した思想に一任さるべきである。

　從て『永久平和は可能なりや』との質問に對して、歷史は次の如く答へるであらう。『予の知れる處では、羅馬帝國及び支那には確かに長い平和の時代があつた、この二例は史上に實現された平和の內では最も著大なものであつた、而してその平和は國境に築かれた長城と中央集權とに基いたものである。併し一歩を進めて且つ長城の如き防禦物がなく、中央集權でなく、民主政治の基礎の上に、則ちたゞ相互の理解の上にのみ永久平和が實現され得るか否か、その問題に就ては、去て我が兄弟の歷史哲學に尋ねて呉れよ』と。

二

併し歷史哲學とは誰人を指すのか、又何處に居るのか、それは甚だ知るに困難である。蓋し歷史哲學は到る處に遍在するとも云へるが、又何處にも無いとも云ひ得る、それは彼が人間の精神から出る呼吸の如きものである故である。固より大なる歷史家に就て觀察すれば、彼の上にも歷史哲學を認めることが出來る、又世間で賢明の士と云はれる人々の思想中にも存在して居る、尙神學者や之と反對なる自由信仰論者の間にも認められる。而して吾人が歷史哲學を認め得る處では、何處でも歷史の場合とは多少異なつた語を、彼の口からして聞くのである。

歷史哲學が現實のものに對して、それはやがて合理的に改善されなければならないと云つて居る限り、彼は現實のものを以て必然的に不合理のものと見て居るのである、吾人は實に歷史哲學からして如上の意見を聞くのである。但し『永久平和は可能なり

や』の問題に就て彼に質さんとする場合には、まづ豫め次の如き諸問題を決定して懸らねばならぬ。

人類歷史の變遷の上に於て、大勢の傾向に進步が認められるか否か。かゝる進步の趨勢は經濟事情に依て起されるか、或は寧ろ道德的原因乃至理想に依て促されるのであるか、戰爭よりも寧ろ平和に依て發展が齎されると云ふことが、大勢の目標として進展しつゝある所であらうか、抑もかゝる發展の勢は直線的に一本道を進むべきものであらうか、或は又或原因からして退步の起るのは避け難いことであらうかと。

かゝる問題から論議して懸る次第であるから、いよ〳〵本題に立入つて歷史哲學の意見を聽くまでには、甚だ長たらしい氣の長い話である。

四

さて歷史家や、其他の學者よりも、更に近く現實に觸れ、而して面倒な過去の事實

に依て、現在に對す判斷を束縛されないで、たゞ實際家の立場から論じ得る者は誰か。又かゝる問題に於て誰人を指して實際家と云ふべきであらうか。それは嚮に戰爭開始の衝に當り、而して今となつては戰爭の結末を着けるに窮して居る外交官連であらうか、或は之に反して、自ら人類惡疾の治療を以て任じて居る平和論者であらうか。

要するに吾人は外交官連と平和論者と双方の意見を尋ねるべきである。外交官は國際法上の問題に於て、明確な廣い知識を吾人に與へて吳れる、彼等は過去の平和會議と其の努力や結果に就て熟知して居る。而してかゝる知識を有して居る爲め、彼等は將來に對して決して過大の希望を抱いて居らない。彼等の判斷し得る問題は次の點に過ぎない、則ち戰亂の猛火が一度び鎭靜した時、其の後直に起るべき形勢如何との點である。彼等に取ては世界永久平和の問題は、條約や擔保制度の復興問題と同一なのである。彼等の見解に從へば現戰爭後に來るべき世界平和は、單に皮相的の仕事に過ぎない、彼等は世界平和を以て根本的事業としては不可能と信じて居る、從て皮相的事

業はやがて破棄せられ易いことを示すのである。

平和論者が、之と全然反對の意見を述べるのは疑ふべくもない。彼等の議論は維納列國會議や巴里條約倫敦條約などから發足しないで、一八九九年海牙の萬國平和會議を以て發足點とする。而して彼等は古い外交術の破れたのを以て、自家の主張を援ける有力な材料として居る、或は一層正確に云へば、條約締結の技術は保存されて宜しいが、之を充實するに歷史的の理想を以てせねばならぬと云ふのである。則ち國家的精神よりも更に高い人類的精神の價値を重んぜよと云ふのである。固より彼等は現代諸國家の代表者に對して死刑を宣告する迄には至らないけれども、彼等は幾多の困難あるにも拘らず、彼等の理想は是非とも實現されねばならぬとの固い自信を抱いて居る。世界の大平和は可能である、蓋しそれは當然實現さるべきものである故である。若し實現されなければ人類はやがて破滅に陷るであらう、意志の存する處には必ず道が開かれると。以上は實に彼等の斷乎たる信念である。

人々は各專門家の技術上の力量には、充分信頼することが出來るけれども、彼等專門家は各自專門の立場からして樂觀的に傾く嫌がある。よし彼等はいかに樂觀せんとも、現代の國家からして一躍全人類的の組織を實現するのは、餘りに突飛である、餘りに冒險である。而して誰人と雖も豫言者の如く確然として『看よ永久平和は眼前に在り』と言ひ放ち得る者があらうか。成程永久平和は眼前に來たかも知れない、併しそれは疑問として來たのである。朦朧たる影の如く、祈禱の聲の如くに來たのである。

五

但し外交官や非外交家たる平和論者は、人間の數から云へばホンの一部の人に過ぎない。彼等の周圍には幾百萬の民衆が居る、而して彼等の息子は出征して塹壕内の人となり、又彼等の麵麭切符は漸く乏しきを告げて居るのである。彼等幾百萬の民衆は平和締結が如何にして成されるかに關して、何等滿足なる考を有して居らぬ。航空船

を新造すべきか、或は化學工場を建つべきか、それ以上のことは彼等は毫も知らないけれども、併し平和締結の事業が彼等及び全國民の存立問題に重大な關係があることは、彼等の能く理解して居る所である。目下交戰諸國民の經驗しつゝある狀態は、甚だ不快な物恐しい狀態である實に窮困の極に達したと云つて宜しい。

この場合所謂常識的見解は旣に其の力の及び難いことを悟らねばならぬ。元來歷史家や哲學者や、外交家や、非外交家が數多あるにも拘らず、世界に秩序を齎らすものは常識の力であるべき筈である、固よりそれは齎らし得ないのでは無からう、併し遺憾ながらそれを實現すべき具體的事項が缺けて居る、又明確の度と、組織の機能とを缺いて居る。吾人が今日各國社會黨の努力として見聞する事實、或は目下開かれんとしつゝあるストックホルムの平和促進會合の如きは、いづれも以上の實例と見るべきである。又社會主義者でなくとも、世界の或團體の人々が後人の爲めに善い模範を示して、各國の政黨、政治家も之に倣つて其の完成に盡力することの出來る樣になるのを

希望して居る。併しまづその平和の端緒を開くのが非常に難事なのである。人類内部に存する本來の組織的機能は未だ弱いのである、人類は如何にして組織の目的を達し、而して永久平和を實現することが出來るであらうか。

六

繰返して云ふ、永久平和は果して可能なりや。未開漂浪時代の人間に取ては今日の國家組織は驚くべき物であるが、永久平和の出現は更にそれよりも一層驚歎に値すべきものである。さてそれは期待さるべきものか。實は世界の發展は、未だそれを期待し得るの程度に達して居らない。生存競爭の立場から觀察すれば、歴史は競爭の終極に到達したのでは無い、吾人の眼前に横はれる國家は、既に太古の帝國ではない、吾人は却て次に來るべき時代に向て發展の基礎を準備して置き、而して吾人自身に正しい地位を獲得すべきの義務を有して居る、かくして吾等の國民は互に孤立せず、又相

闘爭せず、將來に於ても、今日の如く、彼等の負ふべき責任を充分に果たし得るのである。

吾人が平和に到達せん爲めには、先づ最初の目的を以上の點に定めねばならぬ。而してそれ以上に尙宏大なる人類の希望が成熟し來るべきことも、豫想さるべき筈である。吾等は決して之に對して反對意見を述べるものでない、併し現今如何に平和熱望の風が盛であるとても、それに依て吾等の生活しつゝある現代史全般の本質を誤解してはならない。今日吾人は永久平和を享受することが出來ない、吾人は之を知悉して居ればこそ、平和を求めて已まない。吾人は將來を慮り、將來わが獨逸民族があらゆる方面で多大の貢獻を爲すべきを期待するが故に、吾人は平和を求めて已まないのである。然り吾人は平和を求める。併し敵の考が一變せぬ間は、吾人の運命と意思とは多大の壓迫を受けねばならぬ、此の如き場合には、吾人は戰爭繼續を辭せないのである。

（大正七年六月）

郷土思想の涵養

現代大戰の破裂以來此の戰亂はあらゆる場合に引合に出されて「此の大戰に際して宜しく吾人は何々せざるべからず」と云ふ樣な風に、發奮激勵の材料に利用されたことが夥しい。何も現代が戰時でなくとも吾人の發奮激勵は固より當然のことで、敢て戰爭と云ふ如き刺激の强い題材を標榜する必要はないのであるが、併し自分も矢張り此の戰爭からは多大の刺激を受けた一人で、今玆に郷土思想の涵養に就て述べる場合にも、まづ現代戰爭を劈頭に揭げ出すの決して無意義でないことを感ずるのである。

現代戰爭は世界史の大勢から見て確かに一大事件である、時代はこれに依て著しく其の局面を轉ずるであらうと思ふ。吾人は戰後列强國民の努力が、對外的にも又國內的にも益著しくなることを疑はない、吾人は今から大に覺悟をして掛らねばならぬのは今更玆に云ふまでもなからう。殊に各國民が自國發展の爲め益國家的觀念を强うす

べきことは吾人の注意すべき點で、著しい時勢の變化は國民をして、徒に内容空虚な世界的親念や平和思想に執着せしむることを許さないのである。要するに國家自立、國民團結の必要は現戰爭に依て特に痛切に感ぜられた、此く云へばとて決して人間は戰はんが爲めに生れたりと云ふ如き戰爭一點張の議論をするのではない、世界の國際競爭場裡に立つ國民は國家自立、國民團結の決心を固めなければ到底競爭の一端にさへ加はることは出來ない。吾人は國民のあらゆる階級が日常其の職務に從事するに當て、絶えず以上の決心を持たんことを希望するのである。つまり吾人の主張は愛國心の鼓吹であるが、吾人は愛國心振作の要點として郷土思想の涵養を說くのである。

郷土思想の涵養に就ては既に屢說かれた先輩も少くないことゝ思ふ。併し從來我邦で郷土研究とか郷土保存とか云ふことが唱へられたのは、多く趣味の方面から必要を唱へたのであつて、道樂的な嫌がないでもなかつた、卽ち地方に傳つて居る傳說或は遺跡の堙滅を恐れて、其等の研究を奬め且つ保存を圖るのが趣意であつたと思はれる。

吾人が主張する鄕土思想とは更に廣い意味のもので、地方在住の人士をして其の鄕土を愛し鄕土に安住せしむるのを目的として居る、而して國家國民の健全なる發展の基礎を、鄕土思想の上に置きたいのである。此く云ふと或論者は之に反對して云ふであらう。現代の如き國民の活動が世界的となつて居る時代には、人々は宜しく國内にのみ蟄伏して居ないで、大に海外に出でて活動せなければならぬ、此の際鄕土に安住する如きは國民をして萎縮せしめ國家をして益國際競爭の落伍者たらしむるものであると。それは如何にも御尤もな議論である、現代は商工業殷盛の時代で、以前の農業主義の時代ではない、從て國家國民の發達が商工業の途に由らねばならぬのは無論である。人口の都市集中と云ひ、農村の工業化と云ひ、其等はみな當然の現象である。併し如何に商工業の時代であるとは云へ、又海外貿易の發達が必要であるとは云へ、其が爲めに鄕土思想の涵養を等閑視して宜いのであらうか。

元來商工業と農業とは並行すべきものである、決して一の爲めに他を犧牲に供する

ことは出來ぬ。之を家庭に譬へて見れば商工業は外で働く主人の如く、農業は家内を預る主婦の如きものであらう。今は大に社會に活動すべき時である、人は外に出で働かねばならぬと云つて、家内を預る主婦迄が家庭を飛び出してしまつたら如何であらう。恒產もなく恒心もなき其日暮しの者はそれでも宜からうが、併し國家國民の健全なる發達は、必ずや恒產あり恒心ある人々の階級に根柢を有せねばならぬ。家庭に於ける安心と慰藉とが、社會に出ての活動に更に新しい元氣を賦與する所以を考へたならば活動と安心とは離るべからざる關係を有することが知られる。固より家庭あり係累あるが爲めに思ひ切つた活動の出來ぬ場合もあらう、何等の係累なき者が身を捨てて働くことに依て、新天地の開拓が成功した例は決して尠くない、併しそれは特別の場合で危險を伴ふ新事業の計劃には必要であらうけれども、かゝる冒險的方法は決して永久に有效な手段ではない、持久的に堅實に事業の成果を擧げやうとすれば、是非とも恒產あり安心あるものゝ努力に俟たねばならぬ。現代の歐洲戰亂でも、戰爭が著

しく國民的となり持久的となつた爲めに、各國とも戰線の將卒に屢歸鄕を命じ交代して家庭の慰藉を味はしめて居る、是みな戰爭が一氣呵成で行はれなくなつた結果である、海外に事業を起すにしても家族を伴つて永住的に遣るのでなければ、事業の健全なる發達を望み難いのも此の理である。卽ち農業は商工業に對して安心を與ふるのである。

農業の商工業に對する關係は、やがて海外思想に對する鄕土思思の關係である。自己の鄕土を愛し鄕土を思ふの情深い人にして、始めて海外に出でゝ健全なる活動を試み得るのである、鄕土を忘れ鄕土の荒廢を意とせぬ者の活動は、それは絕望的に近いもので、其の活動は如何に目覺しくあらうとも、それは一時的に過ぎない決して堅實な永久的なものでない。本邦でも近頃農村振興、農村救濟の聲が高いのは誠に悅ばしいことで、農村の疲弊はやがて國力の疲弊である、農村不振ならば商工業の盛大も徒に內容空虛な盛大に過ぎないのである。英國は年來農村の荒廢、農業不振が著しかつ

たが、今度の大戰で國民食料問題の重要なことを悟り、今や頻に農業の振興に努力して居るさうである、今度のロイド・ジョージ内閣も農業政策の振作を標榜して起つたではないか、實に農村の振興は國家自立の問題と共に、戰亂が與へた教訓として戰後益重要な問題となるに相違ない。

鄕土思想の涵養も如上の趨勢に伴ふべきものである、何も獨逸の例を有難さうに擔ぎ出す必要もなからうが、近來獨逸では戰爭を益國民的のものとして、國民をして持久戰に耐えしめやうと努めて居る、而して頻に鄕土思想を鼓吹して居る如く認められる。それは開戰以來カイゼルが國民又は陸海軍人に下した數々の勅諭を見ると、段々に鄕土愛護を說くことが強くなつて、鄕土の爲めに敵と戰ふと云ふ思想を國民に吹き込む如く見える。元來鄕土思想は獨逸に強く行はれて居つた、獨逸語の「鄕土」即ち「ハイマート」の語は獨逸特有の語ではあるまいか、英語では「家庭(ホーム)」「竈(ハース)」等の語を以て之に宛て、佛語では「竈(フォアイエ)」の複數名詞を以て鄕土に代用して居る、察するに鄕土保存(ハイマートシユッツ)、

郷土愛護（ハイマートリーベ）、郷土研究（ハイマートクンデ）、郷土藝術（ハイマートクンスト）等の語もみな獨逸に端を發したものと思はれる。獨逸人の性情に一種の底力があり、又執着心の強いことも、彼等の郷土思想と關聯して説明せらるべきことであらう。固より獨逸人が執拗頑固で排他心の強い缺點あることも、矢張り郷土思想と關係あるものと認められる。從て郷土思想に執着して他を顧みる暇のないことは避けなければならぬ、卽ち郷土思想と共に國家思想更に海外思想の價値をも尊重せねばならぬ、併し郷土思想が國民の敎育に、國力の培養に缺くべからざることを看過してはならぬのである。

要するに郷土は家庭と共に自己の安住所である、之を愛し之を尊重するは自己の活動に有力なる後拒を與ふる所以である、地方人士の郷土思想にして發達すれば、地方の振興は自から遂げられるであらう。昔封建時代に於ては領主と領地との關係は極めて親密で、地方の繁榮如何は直に領主の權勢に關係するのであつた、從て地方人民と役人との關係は決して皮相的でなく、此くして地方の開拓は著しく進んだのである。今

日地方の官吏が該地方の風土人情に通じない爲め、施政の上に屢不便な事情を生じ、却て地方の振興に不利を釀す場合がないでもないが、此點に於て吾人は封建時代の民政の精神に鑑みる必要があるのである。地方人士が其の鄕土を愛するは固より、地方官吏も亦地方に安住して事に從ふの決心がなければならぬ。殊に或論者が舊領主が舊領地に歸て地方の振興を圖ることを主張したのは、地方の社會的發達の上に肝要なことで、吾人も亦舊領主の間に鄕土思想の盛にならんことを望まざるを得ない。例へば福井市の如く舊城內に舊領主が果樹園を拓いて、依然として舊城下に居住されることは、地方人に取ては甚だ意味深いことで、何となく人々の心に安定の感を深める次第なのである。吾人は亦地方を旅して舊藩士が舊領內で役人となつて居るのが少くないのを見て、賴もしい感に耐えないのである。

依て吾人は地方人士が新しい意味の封建的思想を以て地方經營に從事されんことを望まざるを得ない、又敎育者諸氏は新しい意味の封建的思想を以て鄕土愛護の精神を

鼓吹されんことを切望するのである。茲に云ふ新しい意味の封建的思想とは、海外的發展、世界的活動の根柢たり後拒たらしめん爲め、地方人士の間に鄕土思想を喚起せしむるの謂である。舊來の傳說を慕ひ、遺跡を保存するの風も、單に其のみであつては一種の道樂に過ぎない、眞の鄕土思想は鄕土には各自誇るべき歷史があることを了解せしめねばならぬ、而して其の誇を根柢として鄕土の將來に於ける發達を企つべきである。現代は過去から繼續し來つたもので、過去の事物は其の形式こそ現代に無效であらうが、其の精神は現代に於ても尙生命を持續して居る、從て一種の好奇心から過去の事物を弄ぶのは、實は其の物を殺す所以に外ならぬので、吾人は之を生かして使はねばならぬ。此の意味に於て國史を學ぶのは祖國將來の發展に資する所以なので、國史硏究は卽ち廣い意味に於ける鄕土硏究である、鄕土思想は要するに愛國心の縮圖に過ぎない。獨人リエンハルトは鄕土藝術は卽ち藝術を人間らしくするものであると云つて居る。想ふに鄕土の人として鄕土の爲に働き得る人にして、始めて國民と

して國家の爲めに盡し得るのではあるまいか。

地方には地方獨特の生命がある、地方人の敎育はまづ此生命を把持することを要する、統一は固より必要であるが、單に統一の尊ぶべきを知り、中央の命令、乃至大都市の勢力に屈するのみでは、地方の自覺は到底望まれない、而して此の自覺がなければ實は統一も內容空虛なものである。國家的統一の內容を充實せしむるものは、鄕土の自覺でなければならぬ。吾人は地方に在て敎育に從事せらるゝ諸氏が、常に鄕土思想の鼓吹を閑却せられざらんことを祈るのである。地理歷史の敎授の如きは單に之を何千里彼方のこと、何百年以前のこと、卽ち該地方人士に無關係なことゝして敎授しないで、あらゆる機會を捉へて、其等の無關係らしく見ゆる事實と鄕土とを關聯させて說明せねばならぬ。尙又該地方の歷史、遺跡、傳說或は地理上の特色に就ては、其等の事實と日本全體乃至世界との關係を明かにして、該地方が日本全體乃至世界に對して如何なる地位に居るかを特に說明するを要する。元來歷史の硏究は自から人々の

自重心を養成せしむるものであるが、郷土の研究も亦郷土人士の自重心を増すものでなければならぬ。吾人は動もすれば道藥視せられんとする所謂郷土研究――地方の風土・人情・傳說・遺跡等の研究――をして、地方振興の大方針に一致せしめ、而して更に之を以て將來祖國發展の根柢たらしめたいと希望し、又切に敎育家諸氏の盡力を煩はしたいと思ふて居る。

（大正六年一月）

現代より見たる城郭

意義ある一遺蹟

城郭（封建諸侯の居城）は現代に於ては既に過去の遺物である、其の實際的價値は過去に於て既に發揮されたのであつた。彼の蜿々たる石垣や水濠、乃至城門跡の桝形などは、交通の便利を主とする現代生活に對して大なる障害である。併し城郭が日に月に破壞しながらも尚其俤を止めて居るのは、現代に對して何等かの價値を有して居る故ではあるまいか、固より彼の石垣や濠が直に實際の用に供せられると云ふ意味ではなく、彼の壯大堅固な城郭の外容は吾人に對して何等かの精神的意義を有する如く思はれる。吾人は日常東京市内を散歩しながら舊江戸城の石垣や御濠の松を仰ぎ見る時、何等の感をも起さずして立去ることは出來ないのである。たゞにお江戸の昔が慕はしいとか、奥床しさに耐えぬとか云ふのではない、城郭と云ふ一大土木に對した時、

近來吾人の心中に起らざるを得ざる所感がある、然もそれは現代に取つて重要な意義あるものと思ふ。城郭の石一個、瓦一枚と雖も古人の苦心を語つて餘あるのであるが、其等の苦心は三百年の今日にも決して無意義のものではない。次に現代に對する城郭の意義に就て聊か述べて見やうと思ふ。

何故の城郭か

城郭は云ふまでもなく軍備の一つである。何が爲めに古人は城郭を築かねばならなかつたか、その問題は現代に於ても生きた問題であつて、吾人は何が故に軍備を整へねばならぬか、と云ふのと同一である。江戸時代の諸侯が城郭と云ふ一大土工を起したのは、全然彼の城郭に據て戰ふ爲めのみではなかつた、固より一藩の領土を防ぐのが主であるから、大名の居城のみを固めた所で役に立つまい。當時の國防（一藩の國防）の精神から云へば、國境の堅固なることを期するのが當然であつて、根據地たる居城

に防禦の努力を集注するのは本末を誤つたかの觀がある。固より領內の四民を威服する政治的必要から見れば、居城を壯嚴にすることは當然であるが、軍備の上から考へれば築城術の精巧を極めた城郭は無用の長物と云ふ點がないでもなからう。城は要するに其人にあるのであると云つて、城郭の堅固を求めなかつた武將(例へば信玄の如き)心懸けの方が勝つては居まいか。

無用の用

然り、城郭は或點に於て確に無用の長物である、殊に江戶時代の泰平な社會にあつて、武士の長刀が庶民に對して一の迷惑となつた如く、城郭も或場合には確に厄介視せられたに相違ないのである。併し無用の用と云ふこともある、話しは少し違ふが、現今の東京市から見れば舊江戶城の外濠を彼のまゝにして置くは無用のことゝ思はれる。併し彼の外濠は山の手方面の水利に取つて輕視することの出來ぬ者で、軍事上の

目的でなくとも外濠の存在は必要であると云ふ說を聞いた。現に溜池を埋めた爲め赤坂の高臺では水放けが以前より惡くなつたとも聞いて居る。又東京市內に廣場が漸く減少するのも外濠を埋ると同樣の仕事で、無用の用と云ふことを輕視したものであるまいか。

領主の權威と士民の安堵

泰平の時代に城郭を堅固にするのも確に無用の用である。假令直接其の城郭が實戰上に役に立つ場合がないとしても、一藩の中心たる城主居住地に壯大な城郭が儼然と構へられたと云ふことは、領內の士民に安心を與へる一大方便に相違ない。元來「平和」と云ふものは「安心」の上に築かれるもので、不安な時代に求めらるべきものでない。所謂文明殊に物質的文明の進步は此の「安心」がなければ望まれないのである。玆に云ふ「安心」とは恒心と云ふ意義に似たもので、退嬰、安逸などゝ云ふ意味ではな

い。即ち自ら恃むことが強く、他に如何なる事變が起らうとも、心内に毫も不安の念を起さないと云ふことである。江戸時代に於ける各地の產業其他諸生活の進步は、一に大名の力ある統治の下になされたので、殊に江戸時代の初期に至るほど此の趨勢は著しく認められる。併し其の統治も領內の民が大名の權威に服し、之に依つて安心を保ち得なければ到底不可能であつた。而して巍然として半空に聳えた天守閣や、高い石垣、深い濠乃至番士の警戒嚴かな城門の有樣などは、大名の權威を示して餘あると共に、又士民安堵の上に重要な貢獻をなし得たことゝ思ふ。要するに當時の城郭は實戰上の價値如何と云ふよりは、寧ろ領主の權威を發揮し士民をして之に信賴せしむることを必要としたのである。

自彊の精神

「自彊」と云ふこと程人間生活に必要なものはあるまい、自ら恃むの念薄い國民は遂

に劣敗者とならねばならぬ。城郭の意義は此の「自彊」の精神を發揮した點にあると思ふ、而して此の自彊があればこそ、安心もあり、又平和的事業の進歩も望まれるので、城郭は實に江戸時代の平和を保證したものであつた。併し之を以て所謂武裝せる平和と見てはならぬ、卽ち所謂軍國主義の眼を以て見てはならぬ。平和と云ひ安堵と云ふも、自彊の確信がなくては到底望まれない、個人に就て云ふも、自ら寒暑に耐え得る自信がなくして、如何にして此世を安く送ることが出來やう。城郭は卽ち國防のみならず更に一藩統治の全體に安心を與へたものに外ならない。

現代に於ける軍備も此の城郭と同じく批判せらるべきもので、軍備の價値は實際に用ゐられると否とに依つて決せられないのである、其眞價値は國民をして自彊の安心を有せしむる點に存する。而して平和を求める念が強い程軍備の必要は益緊切にならねばならぬ、軍備を以て平和の敵と考へるのは誤りである。殊に戰爭より生ずる慘害を呪つて、直に軍備の意義を論ぜんとするは淺薄な議論で、軍備は其から生ずる實戰上

の結果如何に依つて判斷されるものでない。所謂功利主義の立場から云へば實戰と軍備とを離して考へることは出來ないであらうが、吾人は此かる立場より見ることに賛成出來ない。英人の言であつたと記憶して居るが、「巨人たるの力を有して居ることは確に結構であるが、巨人の如く其力を使用することは暴虐である」と云ふ語があつた。國家が充分なる軍備を整へて居るのは卽ち巨人たるの力を有するのである、併し其軍備を如何に使用するか、又如何なる結果を齎すべきかと云ふことは別問題である。軍備は單に巨人としての力を有し得れば其の目的を達したと云はねばならぬ。要するに軍備は軍備それ自身のみで充分の價値を有して居る。戰爭の慘害の如きは軍備から生ずる必要の結果ではない。

城郭の有する權威

英人は獨逸學者の「正義」及「義務」に對する觀念の誤れるのを指摘して居る。卽ち獨

逸學者が「正義」や「義務」はそれ自身にて價値があるもので、其の實際生活に於ける効果に依つて批判さるべきものでないと云ふに對して、英人は之を批難し、然らば「正義」「義務」の客觀的標準は何處に求めるのであるか、此くせば「正義」なるものも要するに人間の醇化されない感情の發作に過ぎない、實際上の目的や結果を無視した議論は知識を閉塞するのである、彼等は内的認識を唱道するが、其の内容は空虛なもので、徒に理性の衣を飾つたに過ぎないと云ふて居つた。（デユウイー著「獨逸哲學と政治」參照）又愛國心に就ても英佛人の間には、愛國心は國民が國家に期待する所あるに依つて起る、と云ふ説が多い樣に認められる。（シヂユウヰイツク其他、「倫理及心理觀上の世界的危機」參照）併し此等の實際的效果に重きを置いた議論に比すれば、内面的考察と自發的價値とを尊ぶ獨逸學者の意見の方が、遙に權威あるものと認められる、吾人が軍備に對する見解も矢張り之と同樣である。要するに軍備或は寧ろ武力の價値は其の有する權威に存するので、其の權威たるや確に莊嚴なるもの或は寧ろ神聖なるもので

ある。此く云へばとて吾人は武力の萬能を唱へ、所謂軍國主義者の膝下に跪くのではない。文事に於ても商工業に於ても、人間活力の權威ある示現は多く存するのであるが、古來軍事が人生の榮譽ある一面として特殊の尊敬を受けて居たのは、軍事それ自身に冒し難い權威が備はつて居る故である。されば軍備なるものは決して戰爭の慘害などに依つて批判さるべきものでない、城郭も亦軍備と同じく其の發揮した權威に依つて、領土乃至領民に自彊の念を確保し得て其の目的を達したのであつた。

强者たらんとする努力

現時の大戰爭が始つて以來、獨逸の軍國主義に對する世人の注意は著しく喚起され、其の是非の議論は頗る喧しいのである。英人は常に獨逸の軍國主義を倒せと叫んで止まないが、果してそれは彼等が蛇蝎視するが如きものであらうか。軍國主義に對する吾人の見解は上に述べた軍備に對する場合と同一である。卽ち軍國主義其ものは

決して悪いものでもなければ、呪ふべきものでもない。元來國家が强者たるの權威を保たんとするのは當然のことで、自から弱者たる地位に甘ずるのは國家として一の罪惡である。固より自ら强者たることは、他の弱者を虐待し之を迫害すると云ふことではない。弱者は他から見れば憐れむべきものであり、又同情すべき者である。併し自己一身から考へれば確かに罪惡である、吾人は決して弱小國の存在を無視するものでない、併し自國は益强者たることを心懸けねばならぬ。

人生が決して固着凝滯したものでなく、永久に絶えざる發展の段階に過ぎないならば、國家の上にも不斷の努力が肝要である。國際關係に於ても現狀維持と云ふことは理論上存續し得ない筈で、協商や同盟は、國際局面の變轉と共に變化せねばならない。固より獨逸が强者たらんとするの努力は非常なものである、而して其結果列强の不安を釀し、やがては世界を敵として戰はねばならぬ窮境に陷つたに就ては、獨逸の態度に批難さるべき點があつたことは疑ひない。

傲慢なる獨逸人

公人としても私人としても獨逸人の傲慢な態度、容易に人と相容れない摯拗な性情、此等の缺點が强者たらんとする努力と結合して、獨逸に禍したことは一再でなかつた。併しそれは强者たらんとする努力の必然の結果ではない、此等のことを以て獨逸人の努力をまで抑へんとするは間違つて居る。近來獨逸人は佛國に對して左程の惡感情を示さない樣に見受けられるが、それは要するに獨逸が佛國を與みし易いと見た結果で、氣力の弱い佛人を憐むべきものと考へた故である、ラートゲンの小著『獨逸、列强及び戰爭』を見ても、獨人が佛人を輕視して居る樣子の一斑は知られるが、彼等は佛人を指して無氣力、因循、進取の風なしと嘲り、他國の援助なくしては戰爭することの出來ぬ意氣地無しと云つて居る。戰爭に依つて刺戟された獨人の議論には頗る過激に陷つたものが多い、ヴントの如き哲學の老大家ですら、隨分露骨な或は寧ろ下等な

激語を放言して憚らないのである。併し其の態度が非常識であるからと云つて、彼等の議論の精神までも排斥することは出來ない。以上の佛人に對する批評の如きは頗る無禮な放言であるが、其の間に示された獨人の向上心が如何に强いかと云ふことは決して看過せらるべきでなからう。孰れにせよ列强互に相對立して國際競爭の激しい芝居を演じつゝある時、其の舞臺に立つべき一員が、自己の技倆に不安の念を抱いて居たら何うであらう、此くして自彊の信念なき國家は永久晴れの舞臺から退かねばなるまい。吾人は現代の國際關係を思ふ度毎に、我が戰國時代から江戸時代初期に亙り、諸侯が互に自己の領土に據て、日夜權勢の擴張に苦心した昔を想起せざるを得ないのである。

城郭の與ふる安堵の念

彼等諸侯は自家の權勢を固めんが爲めに、領内富力の開發に努力したことは一通り

でなかつた、江戸時代に諸國の生産が著しく發達したのも、其の端は夙くも戰國時代にあると云つて宜しい。彼等は單に軍備の充實を計つたのみでなく、一國經濟の基礎を固めるに少からず苦心した、此傾向は江戸時代初期から元祿、享保の頃に亙つて諸藩の藩政が盛に研究されたことに依つて知られるのである。城郭が築かれたのも亦此諸藩の對抗が最も著しかつた戰國から江戸時代初期に亙る時代であつた。斯かる時代に於て彼の莊嚴を極めた城郭の築かれたことは、如何に領主並に士民に自彊の念を與へたであらうか。固より當時と雖も各領土の對立關係は必ずしも武力に依つてのみ解決されたのではない、彼等の外交は隨分複雜で、其の間には微妙な關係が結ばれて居つた、卽ち單に戰爭の歷史のみでなく又巧妙な外交手段も廻らされたのである。併し聽ては武力の解決に俟たねばならぬことが多かつたので、城郭の意義は實に輕からぬものであつた。前にも述べた如く、其城郭が實戰に於て發揮すべき効果は別として、かゝる時代に於て安堵の念は實に城郭に依つて保證された次第である。さればこそ秀

吉、家康の如き天下の諸侯を抑えて立たねばならぬ大諸侯（或は諸侯の盟主）は、其築城とても亦特に壯大なものでなければならぬ、大阪城と云ひ伏見城（桃山城）と云ひ、乃至徳川氏の江戸城の如き、以上の意味を考へて見れば、其莊麗大規模なことは自然の必要に出たもので毫も怪しむに足らないのである。

列强對立の時代

吾人は昔の諸侯が、築城なる大工事を起さねばならなかつたと云ふ事情を考へる毎に、當時彼等の間に自家存立の決心が如何に强かつたかを思はざるを得ない、即ち彼等の間に生存競爭の激しかつたことは想像に餘ある次第である。彼等が一技一能に秀でた浪人を抱へるに汲々としたこと、殊に石田三成が自己の封祿の半を割いて島左近を抱へたと云ふ如き話を見ても、激烈な群雄競爭の間に立つて强者たる面目を維持したいとの熱心を窺ふに足りやう。以上の事情は最近に於ける獨逸の境遇に似た點があ

ると思ふ。年來獨逸が其苦しい境遇の間から脫却したいとの熱望及び之に伴つた異常な努力は、却て列强から世界平和の攪亂者として呪はれる因となり、所謂獨逸孤立政策の爲めに苦しめられることゝなつた。それは獨逸自ら招いた罪でもあらう、併し彼等は之に依つて益國家自存の必要を感ずると共に、國民經濟の獨立に向つて努力しつゝある。開戰の始め獨逸は食料問題の爲め屈すべしとまで豫想されたのが、今に至るまで毫も弱つた形跡が見えないのは、彼等の努力が如何に强かつたかを示すものである。要するに城を築いて封疆を固めた封建諸侯の決心は、軍國主義を振翳し起つた現代獨逸の決心と同一であらう。エリス・バーカーは今回の大戰爭を指さして「民主々義對封建制度の戰爭」であると云つたが、是は或點まで正鵠を得た說である。

五六百年以來歐羅巴では國家對立の趨勢が著しく、それは近代に至つて益甚だしいことゝなつた。固より一方には種々の國際的運動が催されて、世界的傾向も認められないではないが、併しそれは政治的に各國家を統一すると云ふ古代の世界主義とは大

に異なつたもので、各國家の存立を認め其の獨立國としての體面に觸れること無くして、各國民の間に或る共同の生活を營みたいと云ふのである、電信、電話其他の交通機關乃至博愛救護事業の如きは其一端であるが、要するに此等の運動とて國家主義の上に立たねばならぬのであつた、卽ち『分化』を基として或る『綜合』を求めるに過ぎない。さればこそ一方に於ては英獨海軍競爭の如き事件は遠慮なく起りつゝあつた。要するに國家が互に對立して居つて、而して歷史は常に不斷の發展であり、卽ち城濠の水の如く沈滯したものでなく、日々に新たなる水流の如きものである以上、國家相互間の競爭は到底免れることは出來ない。

武力を背景とする外交

以上の國家的競爭は外交と云ふ平和手段で解決され得る場合もあらう、併し所謂外交なるものが、列强が誠心誠意を吐露して、何等の腹藏もなく眞に胸襟を開いての外

交ならば、問題の解決も不可能であると思はれるが、個人間の關係に於ても或程度まで虛僞を交へない者がない如く、古來外交にも亦虛僞の辭令や權謀譎詐を交へないものがあらうか、若し然らざるものがあれば、それは寥々たる曉天の星の如きものであらう、尙又威力を以て壓迫する高壓手段も認められる。孰れにせよ外交と云ふも其趣は戰爭と異なる所がない、さればこそ外交手段に依つた不徹底な解決は、年月を經ると幾多の破綻を生じて、遂に辭令の假面を脫ぎ棄て戰爭と云ふ露骨な手段に依ることとなるのである。かゝる意味に於て吾人は戰爭を以て政治の繼續に過ぎぬと云ひたい、彼の戰爭を以て政治の墮落したものと見る如きは吾人の與せざる所である。

吾人は固より外交の價值を認めないものでない、併しそれは或程度のことで、之に依て戰爭を避け得るものと思つては居らぬ。外交は外交であるが、一方に於て軍備は軍備である。ビスマルクは威力に目的を貫かうとする所謂威力政策(Macht pol tik)を戒めて、國家は宜しく自國の利害休戚の問題に依て動かねばならぬ、卽ち所謂利害政

策(Interessen politik)を奉すべしとの考へを抱いて居た。(モンロー・スミス『軍略對外交』參照)併しそれは威力政策を惡意に解した場合のことで、威力の濫用を戒めたに過ぎないと思ふ。若し然らずとすれば威力政策と云ひ、利害政策と云ふも要するに其差は五十步百步ではあるまいか。實際ビスマルクの仕事を見れば、果して彼が威力を用ゐない場合があつたか、それは頗る疑はしいのである。

獨逸の現狀は自業自得

但ビスマルクは威力を用ふるにしても之を被ふに巧妙な外交手段を以てした、彼が戰爭を開く際にも能ふ限り自國をして受動者の地位に置かんことを努めた、縱令それは表面上に過ぎないにもせよ、自ら進んで平和の攪亂者たる謗を受くはことを避けたのである。從つて彼は獨逸帝國の統一を完成して歐洲に於ける獨逸の地位を確立すると共に、列强の猜疑嫉妬を招くことを恐れて、或は露國の歡心を求め、英國に好意を

表して、其外交手段には頗る巧妙なものがあつたのである。現代獨逸が四面に敵を控へる樣な窮境に陷つたのは、其の一因は確に獨逸外交の拙劣と云ふことに歸すると思ふ、併しビスマルクが現代に居つたとて、獨逸國家の進路を現代獨逸と異つた方面に導くことは困難であらう。要するに獨逸が最近軍備擴張に努したことは自彊の精神に基いたもので、封建諸侯が城を築いたのと同じことゝ思ふ。但其の軍備が列國をして壓迫を感ぜしむるに至つたならば、それは軍備の罪ではなくして獨逸政府乃至國民の態度が產んだ結果である。彼等に自負尊大の缺點があり、其の行動が屢排他的になることは、能く人の認める所であるが、かゝる嫌はれ者の國家或は國民か軍備に熱中し或は軍國主義を奉ずる時、他からして批難を受けるに至つたのは已むを得ない事であらう。暴君が城を築いた時其の城郭は惡魔の如く見えるであらうが、明君の築いた城は却て國民をし自彊安堵の念を强からしむるのである。

昔の大名と今の獨逸

吾人は威容壯嚴なる城郭を看て、偶思を軍備及軍國主義の上に馳せ、而して更に現代の獨逸に想倒せざるを得なかつた。獨逸が軍備を充實し軍國主義を採用したに當つて、若し野心や非望が其の動機であり、而して列强に壓迫を加へて止まないならば、列强が之を抑へようと云ふのは當然である。併し繰返して云ふが其の爲めに軍備や軍國主義そのものを批難するのは間違である。サンデーは其の著『獨英兩國に對する戰爭の意義』に於て次のことを述べて居る。「濫りに軍國主義の壞滅を叫ぶのは、獨逸が自國の理想や制法を他國に强ひんとするが如く、等しく間違つた考へである。元來他國人の愛國心を排斥して却て其の反抗を强うするのは眞の政策でない、寧ろ之を善導して狹隘な國家的思想の範圍を出で、更に大なる高き人類の理想に向はしむべきであ る」と。是は如何にも穩當な意見に相違ない、併し之を實行するに如何なる方法を取

るべきか。それは隨分困難の問題であると思ふ。併し英人が口にする如く無暗に軍國主義を倒せと叫ぶのが、果して當を得たものであらうか。要するに吾人はたゞ自彊の策を講ずれば足れりである。兎も角强者たらんとする獨逸の努力は吾人の看過すべからざることで、目下獨逸を敵として戰つて居るだけ、益吾人の注意はそれに集注されねばならない。

彼の崩れかゝつた天守閣や、壘々たる石垣、或は腐水を湛へた其の濠、今ではたゞ廢墟に過ぎない其城郭を看て、吾人は其昔其等の城主が如何に此城を築くに努力したかを思ひ、彼等に取つては築城は實に眞面目な一生懸命の事業であつたことを考へる度毎に、獨逸の境遇及努力と其發展の偶然ならざるに想例せざるを得ない。而して將來吾日本も如何なる境遇に陷るであらうか、それを思へば吾人は一日も早く固い『自彊』の信念を抱くことが焦眉の急であらう。城郭が吾人に與へた敎訓は實に以上の如きものであつたのである。

（大正四年十二月）

城郭の背後に潜む精神

一

世人は城郭の研究を以て、單に歴史的若くは建築學的興味とのみ解して居るやうであるが、これは城郭に對する眞の理解ではない。我等は審かに往古の築城法を研究し、更に其の背後に潜む城郭の精神に想到する時、そが現代に對し、甚深の敎訓を垂るゝものある事を知るものである。就中、城郭を通して現はれた封建時代の武士の、寸毫の油斷もなかつた緊張した精神は、特に現代日本にとつての痛切な訓戒である事を信ずる。

亂雲の如き群雄が六十餘州の隨所に割據して、覇を天下に競ふた所謂戰國時代は、秀吉家康の非凡なる軍事的竝に政治的手腕に依りて統一せらるゝ事となつた。

云ふまでもなく、德川三百年の治世は太平の時代で、此の間文藝・學術・商工業等、

平和的の事業は頓に興隆し、萬般の施設は所謂文治主義の方針に依りて行はれ、人心も亦た戰國の時代に見たるが如き殺伐剛毅の氣風はやうやく失せて、和平華奢の風潮一世に漲りつゝあつたのは、是非もない時運の變轉であつた。されど此等の風潮は、當然に當時の築城法にも影響して、それは戰國時代の純乎たる軍事的要塞ではなく、一面に地方大名の邸宅であり、更に城下なる文字がよくその眞相を語るが如く、領内の四民が集來して平和の生活を營む都會でもあつて、卽ち城郭と云ふ語には、單に軍事的である以外に、社會的經濟的の意味も加味せられて居た。

加之、時の中央政府たる幕府では、軍事的には頻りに消極策を執つて、城郭の新築等は思ひも寄らぬ事、其の改築修繕にすらも色々の困難な條件を規定し、極端な制限を諸藩の軍備に加へたのである。

其の一例には、德川氏の居城たる江戸城内の天主が、明暦三年の大火に燒失したが、德川家では之を再建することをしなかつた。此の事に關し、幕府の眞意は諸藩に對す

る見せしめであつた事は勿論である。されば當時の諸大名、中にも外樣大名が軍事的施設に關し、幕府に依つて警戒せられた事は推して知るべしで、一度其の天主が燒失でもしたら、絕對に其の再建は不可能であつた。

それは單に天主のみに限らず、櫓若くは塀の改築の如きも面倒な問題の種となり、石垣の如きに於ては石の積み直しすらも精確の圖面を幕府に提出して其の許可を得るに非ざんば、斷じて之に手を附ける譯には行かなかつた。

二

併しながら、是等の事實を以て、直ちに當時の文弱なる風潮を象徵したものと速斷するは、大なる誤りである。こは實に幕府が地方大名の勃興を恐れ、萬一の變に對して未然に備へた方便で、地方大名に於ても亦た幕府に對する氣兼から、心ならずも表面幕府の方針に順應して居たと見るのが中つて居る。勿論當時は太平の世であつたの

で、築城の眼目とする所が、攻擊に非ずして防備にあつた事は睹易き道理であるが、城郭は單に大名の邸宅と云ふのみではなかつた、既に城郭なる名稱が示す如く、其の本來の性質上、軍事的の意義は依然備つて居たものである。されば今仔細に當時の築城の跡を研究して見ると、實に我等の感嘆に値する熱心を以て、諸大名が密かに其の設備に腐心し、一旦緩急の場合に備へた事が分るのである。

これは所謂油斷大敵なる訓言を最も忠實に嚴守したるもので、當時太平無事の世にありながら、よく一旦の兵火を慮り、其の準備に孜々たりし一事は、其の果して太平であるか將た多事であるかは別問題として、頽廢・弛緩・倦怠の色漸く甚しからんとする現下の我國民に對し、確かに一大敎訓たるを信ずるが故に、以下其の實際に關し、聊か述べて見たいと思ふ。

三

其の例には、尾張侯は徳川御三家の一であつて、譜代大名の随一なるものであつたが、其の居城たる名古屋に至つては、實に邸宅式の趣を發揮した泰平の大城郭である。併し天主の入口の通路に、一面に鉛を敷き詰めた。そは一度び兵亂の勃發するに際し、卽座に彈丸を造るの用意であつて、總量百十二萬四千八百五十九貫を有し、一彈三匁五合の銃丸にして、三十二萬一千三百八十八發は立所に得られると傳へられて居た。又天主の內部には、其の各階の床下に無數の所謂木ッ羽と稱する木片を詰め込んであるが、そは今日何の用に供する目的であつたかは解する事は出來ぬが、萬一の危急に備へたものであるだけは明らかである。又同じく天主の最下層には井桁三尺五寸四分、深き曲尺十二間の井戸を掘つてあつて、よし四面悉く敵手に陷つて、天主だけになつても持ち堪へやうとの用意がある。其他鹽倉、食糧庫等を備へた天主もあるが、皆籠城の用意である。姫路城の如きに於ては、天主の第三層の四隅に小さい穴があるが、それは狹間と稱する今日の所謂銃眼であつて、敵が天主の內に闖入しても尙ほ之

を防がんとしたものである。銃丸を用意した例としては、尙ほ加賀の金澤城が其の屋根を鉛磚で葺いた如き事實がある。

斯くの如く各々祕策を盡して城郭の防備に苦心した例は、一々枚擧に遑がない。尙次に予は當時一般的に如何なる防備が施されたかを概括して下に述べる。

當時の築城の精神は、一般に防禦を主とした事は前述の如くであるが、其の頃の築城上の用語を以てすれば、防禦を主とする陰の築城法に、更に攻擊を主とする陽の築城法を加味したものである。凡て一城を築造するに當り、最も意を用ゐて嚴にせねばならぬのは城門である。それは先づ外部から見ゆる事を防ぐ爲めに、城壁に垂直に、門の內側に鍵形に折れた土壘がある。此は蔀と呼ばるゝものである。而して城門の內側に更に直交して、今一つの門が構へてあるのである。これは外面からの直視を遮斷すると共に、外部より城門に通ずる道路を迂曲せしめ、且つ蔀の上の狹間からは弓鐵砲を浴せて敵の侵入を防ぐ手段なのである。而して第一の城門と、第二の城門との間には

かなりの面積があつて、其處を桝形と稱する。攻勢に用ゐらるゝ場合には、此の桝形は武者溜りとなつて、一旦城兵を此處に纒め、內門を閉ぢて外門から之を繰り出すものである。

橋梁の前面は當時馬出しと呼ばれたもので、今日の橋頭堡に當るものであるが、こは土壘竝びに堀を以て圓形若くは四角形に壘を築き、其の兩側には門がある。これも前記の桝形と同じく、防禦の用にも供するは勿論であるが、其の主要なる目的は攻擊にあるは明かで、出兵の際の武者溜りとなるものである。

又城郭を出來得るだけ敵の視界から避けしめやうとして、色々の方法を講じた事は、當時一般的に採用せられた築城上の要件であつた。其の爲めには、城內に大樹を繁茂させて建築物を蔭蔽したり、又は城壁の外面を板張りにして、之をなるべく目立たぬやうにしたりした。

次に何れの城郭を問はず、其の周圍を繞る城壁は、一定の距離每に曲り目を附けて、

其處に據つて壁面を登る敵兵に對し、側面から射擊する設備がある。これは『ひずみ』と稱へられた。

四

郭（くるは）は城內に多數ある、平常は各郭は連絡せられて居るが、若し敵が城內に侵入した場合には、其の連絡は遮斷する事の出來るやうになつてゐる。例へば今日の皇居の正門である二重橋は、江戶城西丸の大手口で郭は二の橋に依て連絡されて居た。若し敵が城間近く迫つた時、兩橋を一度に切落してしまへは、敵の侵入は殆ど不可能の狀態とならねばならぬ。此の方法は郭と郭との間に屢用ひられて居つた。又は敵を城內の低地に導き入れて置いて、やがて水門の口を開いて水を引き、敵を水攻めにする手段の施されたものもある。

通路に關しては色々の苦心が用ゐられたもので、城外より城門に通ずる路に關して

は前にも述べたが、熊本城内にしつらへた暗道は、更に入念に仕粗まれたものである。そは本丸に通ずる凹路の上に家屋を建て、中は眞暗闇である上に、路は八幡の道知らず式に曲折して居るので、一度び其の中に蹈み込んだものは、暗中に道を失ふのであると聞いた。

以上當時の築城上の一般の用意を述べたが、以て防備にまれ攻撃にまれ、如何に彼等が居常油斷なき用意を有つて居たかを知る事が出來る。尙ほ下の一例は、斯くの如き封建武士の綿密な研究と、周到の用意とを物語る一材料である。

江州の彥根城は琵琶湖に面し、敵は舟を以て湖水を渡らねば城に迫る事は出來なかつた。所が城郭の直下なる幾十間かの前面水上に一個の洲があるが、此の洲の防禦上に於ける効果如何に關して、藩士の間に論議が醸された事があつた。此の洲の不要を主張するもの丶意見に依れば、こは敵勢が本城を攻撃する際、絶好の足場を彼に與へるものであつて、一度敵の爲めに之に據られたら、城は非常の危險に瀕するであら

うと云ふにあつた。一方其の反對論者の謂ふ所では、敵は此の洲までは必ず一氣に乘り付けるに相違ない、而して一旦洲に上陸した刹那は、必ず心に多少の弛みが生ずるであらう、其の弛みに乘じて、すかさず之を襲つたなら、敵の潰へる事必然であると。斯くの如く心理上の微細な點にまで意を留めた其の着眼は、誠に我等の敬服に値する所である。更に太平無事の世であるにも拘らず、一旦緩急の場合を忘れる事なく、常に緊張した軍國的精神を持續した彼等の心懸けは、其れ以上に深き敎訓を我等に垂るゝものであらう。

五

日本六十餘州を三百諸侯が區分して、各々自領に據つて營々孜々、自家の安固に努力したと云ふ事は、之を現代より觀れば些か滑稽の感がないでもない。斯くの如き偏狹な封建的氣分は、須らく之を排斥して可なるものである。されば今日昔の城郭の多

くは殆ど破壞され盡し、或は鄕土名所として僅かに其の存在を維持するもあり、或は敗殘の壘壁に風打霖雨の幾春秋、ありし昔の名殘を辛くも留めたに過ぎない。こは單り我國に止まらず、支那に於て然り、歐羅巴の諸國に於ても素よりで、寔に是非なき次第である。

然り、現代に往時の封建制度又は城郭其者は何等の効用もない。さりながら、其の裏に潛む精神に至ては、永遠の生命を藏して居るのである。

試みに思を潛めて、暫く世界の現勢を觀ぜよ。彼の區々たる封建制は、昔の夢であつたかも知れぬ。又は往昔の城郭が如何に其の要害堅固を誇ると雖も、今日の戰術と兵器の前には、或は鎧袖の一觸にだも足らぬかも知れぬ。さはれ、そは單に外面程度の差異のみであつて、列强對立の現勢と封建時代の割據との間にはやがて何等の逕庭がないものではないか。之を切言すれば、甲斐と越後との對立が、より大なる統一體、卽ち國家と國家との對立となつたものに他ならぬ。より大規模なる封建制度が出現し

たものとも見られる。而して昔の一城の代りに、今日は一國家の軍備の全體が城郭であるのではないか。されば今日は組織の單位が昔時に比し、より廣大になつたゞけで、其の組織の精神に關しては昔のそれに似た點が少くない。

六

而して是の如く廣大なる列强對立の形勢は、從つて其の影響する所も廣大深刻である。往時は其の浮沈の係る所、僅かに一城一國に過ぎなかつたものが、今日に於ては實に一國家乃至は一民族の興廢が、一旦の交戰に依つて決せられねばならぬ。我等は之を現代の歐洲戰亂に徵して、特に此の感を深うするものである。而して現代に於て、獨逸は殆ど理想的に封建時代の城郭精神を體現し、且つ極めて有效に之を遂行したものである。現戰爭の初期に於ける獨逸の立場は、恰も往昔の籠城の概があつたが、其の卓越せる科學的知織と組織的材能とに加ふるに、平素より非常なる熱心を以て今次

の戰亂に具へたるが爲めに、四面皆敵の中にあつて、ともかく戰局の優勢を維持し得たのである。然るに平素徒らに平和・苟安・愉樂に媮して、精神的竝びに實際上に、軍國的設備と訓練とに缺如して居つた諸國の狼狽は實に吾人の鑑とする所である。我等は與國の捷利を望んで已まない。吾人は獨逸が其の軍國主義を遂行するに際して行つた幾多の非行と橫暴とを批難するけれども、同時に又その平素の準備に對しては幾多の敎訓を認めねばならぬ。而して又怠慢と油斷とに對する酬いが何であるかも考へねばならぬ。

飜つて我國の現狀は如何。我國民は果して不斷の準備に缺陷が無いか果して怎うであらう。他人の不用意を云爲するに足る程、國民の精神は緊張し、諸般の設備は整然して居るか怎うか。これは大なる疑問である。

我等の觀る所を以てすれば、現下我國民精神は甚しく緊張を缺い居る。國民生活を支配するものは多くは享樂主義・或は功利主義・其の日〳〵主義ではなからうか。凡て

雄大果敢の氣魄は失せてだれ切つた靈は醜き體軀に包まれて居る。一顧すれば我國は僅々半世紀にして歐洲が三百年を以て歩んで路を疾驅し盡した、而して早くも沈滯・懦弱・頽廢の氣は人心に兆し初めつヽあるのである。某外人は近代日本の絶頂は日露戰役であつたと云つたそうだ、甚だ不都合の言である。併し吾人が大聲痛呼其の不都合を語る前、まづ吾人自身を顧みねばならぬ。我國は今や明治文明を絶頂として、降下の一歩を踏み出したのであらうか、否、吾人は然かく信ずるを欲せぬ。萬一にも不吉なる兆候が我國の隨所に見出されるならば、吾人は其を一掃せねばならぬ。併し偸安姑息、油斷をして居れば、やがて天の我國に降す所のもの榮譽であるか將た刑罰であるか、そは說明を要しないで明らかであらう。而して遲かれ早かれ、そは必ず國民の頭上に降つて來る事を忘れてはならぬ。

七

遮莫、我等は絶望してはならぬ。

思ふに我國今日の如き醜態の由來は、多く不純なる異邦文明を無批判に攝取したる事に源をなしてゐる。此の事は文明の進展中にある國民の、往々陷り易き陷穽であるが故に、我等は一面新來の文明・思潮に對し、そが我國に適へるか否かを明確に分別し、其の正しきものは之を攝取するに吝ならざるを要するが、其の不適當なるものは斷乎として峻拒せねばならぬと同時に、他面我自らの意識と尊嚴とを失つてはならぬのである。されば我等は金剛の意志を振ひ起して、迷へる國民には正しき進路を與へ、倦める魂、瀕死の魂に痛き鐵鞭を加へて、醇の又醇なる日本精神の鼓吹に努力せねばならぬ。

我等は近時頻りに民主々義の聲を聞く。而して論者は專らそが世界の大勢なるの故を以て、之に順應せざれば時代に逆轉するものであるかの如くに說くのである。固より民主々義の風潮には侮り難い勢力がある。吾人は之に對して盲目であつてはならぬ。

併し國家國民があつて而して後に主義がある、吾人は決して主義なるもの丶從者ではない。知らず各國の歴史、各國の國狀、各國の國家的箇性は、東西悉く同一流であるが。我國は米國ではない、英國ではない。將た又た獨逸でもない、三千年の歴史を經とし、國土と住民とを緯として、嚴然として存する日本國には、日本それ自身特有の事情がなければならぬ。之を建國の精神と云ふも可、國民性と云ふも可、或は國體と云ふも可なりである。此の自家獨特の珍味あることを吾人は固く忘れてはならぬ。

八

更に我等は平和主義、自由主義、四海同胞主義の聲を聞く。我等は勿論理想に盲目であつてはならぬ。がさりながら、其れ以上事實に盲目であつてはならぬ。成る程是等の主義は理想として申分はないかも知れぬ。併しながら、斯くの如きは現代の實狀から判して當分其の實現の可能なりや否やを斷じ難き性質のものである。而も其の美名に眩

惑されて、早計にも之を直地に現前しようとしたら、由々敷き國家の危險である。徒らに高遠の理想に馳せて平和を夢み、現前の事實を無視して國家萬一の用意に怠慢な國民は、竟には露西亞と同一の軌道を歩むべき運命を有つて居るものである。

而して我等の用心せねばならぬのは、此等の美しき衣裳は、多くは老衰國・劣弱國の保護色としてか、さもなくば最も惡辣なる野心を包藏する國々の欺瞞色として着込まれて居ることである。我等は心して此等に欺かるゝ色盲患者であつてはならぬ。

誠に國際公約は武力の前に何等の權威なく、又口に平和と人道とを叫んで、其の手は掠奪と征服の血に汚れつゝあるは、今日の世界の實狀ではないか。博愛と平和とを大聲疾呼して、他面黄色人の排斥が依然として實行せられて居る事實は、抑々何者を意味するものであらうか。總じて今日の形勢が明かに我等に告ぐる所のものは、將來吾人に對する壓迫の益々大なるべきことである。吾人は平和的にもせよ武力的にもせよ、乾坤一擲の大競爭をせねばならぬと云ふ事である。此が爲めには吾人は國民全般

の力を集中して對抗せねばならぬ。その力は武力のみではない、經濟力、精神力すべての力を指すのである。此の力の集中是れ卽ち軍國主義である。軍國主義とは武力濫用とか、軍閥跋扈とか云ふ意味ではない。

軍國主義は其の精神に於て、古の封建的精神と同じく油斷大敵を以てモットーとして居る。吾人は油斷大敵の舊精神を現代に復活せしめなければならぬ。そは取りも直さず軍國主義である。我等は勿論彼のヘンダーソンが獨逸の軍國主義を評して『不道德なる兵力を不正に適用して、世界の覇權を得んとする努力』と云つた如く、侵略的意志を眼目として軍國主義、又は意氣餘りあつて經世の才之につぐはぬ軍人專制の軍國主義は之をとらずと雖も、今にして內は弛緩せんとする國民の魂を叱咜策勵して國家的精神を活興し、外は力の及ぶ限り軍備は固より其他諸般の設備を充實して、萬一の場合に備へ、且つ內外に發展するの策なくんば、國運の前途は當に知るべきである。繰返して云ふ、吾人の急務はすべてを集中するに存する。現代の米國を看よ、米國は

如何に大規模に其の國民力の能率を發揮せんとするに努めつゝあるか、要するに是れ亦力の集中である。

往時の武士は屋根瓦の落下を慮つて、決して人家の軒下を通らぬ用意があつた。單り武士のみに限らず、町人も亦所謂五人組等と稱する自衞團體を組織して、自ら守るの精神に充ちて居た。然るに今日は如何、異邦文化の惡影響と竝に文明的施設の完備は、甚しく民心を弛緩・懦弱不用意ならしめた。觀じ來れば封建の時代、治に居て亂を忘れなかつた武人の精神、其の精神を具現した城郭の我等に齎す敎訓は、此際特に深き意味を有して居る事を我等は思ふのである。

（大正七年六月）

世界を支配する五大民族（青年の爲めに）

一　民族とは何ぞや

近來、民族問題が頻りに喧ましくなつて來た。それは主として政治上からであるが、また宗敎上、文藝々術上からの聲も仲々侮ることは出來ぬ。此の際、わが青年諸君に『民族とは如何なるものか』『何故に民族上の覺醒を必要とするか』『現世の世界文明を支配しつゝあるは如何なる民族なりや』『世界の將來を支配する民族は何れなりや』『然らば此の際吾人は如何なる覺悟を要するか』といふ諸問題の解釋を與へ、世界に雄々しい大和民族の若き芽生えに執るべき道を敎示することは最も當を得たることであらうと思ふ。

唯、余は此の喧ましい問題について、强ひて喧ましい學說上の論議はしたくない。極めて平易に、そして普遍的に、簡單に、ゆつくりと安らかな解說がしたいと思ふ。

さて、現在世界の形勢、現代の世界文明を支配するものは何といつてもヨーロッパ人とアメリカ人とである。東洋では我が日本のみが近來漸次頭角を現はして來たけれど、未だ世界の文明を自分の力で動かして行くほどの發達はしてをらぬ。これは開國以來日の淺いからのことであつて、決して悲觀するには當らない。とも角、現在の世界を支配してゐるのはヨーロッパ人とアメリカ人とである。が然し、これをもつて直ちに世界の現勢を支配しつゝあるのはヨーロッパ、アメリカの二民族だといふことは出來ない。民族の意味と人種の意味とは違つてゐる。

民族とは何ぞや、民族とは一箇の精神的共通に基く團結である。たとひ國情や風俗は違つてをらうとも、同一の民族であるものならば何處かに互ひに相愛し、相頼みするだけの精神的團結がある。然るに人種といふものは精神的のものではなくして、科學上の實際である。されば民族には精神上の感情、歴史關係が相繫ぐ力となつてゐるが、人種には實際上の體格、容貌が主なる區別の條件となるのである。

此の故に、同人種の內には幾つかの異民族といふものが出來てゐる。歷史的關係に依つて分立したのである。たとへばヨーロッパ人種の內にスラブやラテンといふやうな民族があるやうに。しかもそのラテンとかゲルマンといふ民族の中に更にイギリス、フランス、ドイツ、ポルトガルなどゝいふやうな小民族が分立してゐるのである。又一方にはアメリカ合衆國のやうに、アメリカ系の土着人種が居つた所へ、ヨーロッパ系の輸入人種が入つて來て、自から中心となり而して特殊の國民的發達を遂げて、ヨーロッパ民族とは異つた新しいアメリカ民族を造つたものもある。

アメリカ合衆國などは今擧げた例のやうに、多數のヨーロッパ民族が混合してゐるので、そのヨーロッパ人の中にはイギリス人もあればフランス人もあり、イスパニヤ人もあるといふやうな民族上の烏合の衆であるのである。また現在のイギリスには、ゲルマン系のアングロサクソン人と、ラテン系のスコッドランド人、アイルランド人の三民族が合一してゐる。ドイツの現在にもゲルマン系もあれば、スラヴ系も交つてゐ

る。此の點では日本は一民族一國家の主義が大に明かであるから、世界に向つて誇りとするに足りるのである。

そこで何が故に政治上、または文藝思想上に於て民族問題がもち上つたのであるかといふに、人種とは前に言つた通りの體格、容貌などによつて區劃すること、例へば猫と犬とを區別するに等しいものである。形體上の差別であつて、精神上の差別ではない。しかるに民族とは精神上の結合であつて、異人種相合して一民族となることもあれば、一人種中に多くの民族の分立することもある。此の精神上の歴史關係に依つて團結した民族の結合力は、肉體上の容貌などに依つて結合する人種力よりも、遙かに深刻であつて强固である。地球の上に散布する大ざつぱな人種別などに依つては何も出來るものではない。善良なる國家は必ず統一された民族力に依るの他はない。

古來の世界に於ける歴史の消長はやがて又民族の消長史に他ならぬ。人種といふものは此の點では極めて迂遠なものである。此の民族精神をいやが上にも闡明にし、强

烈にし、偉大にしてゆく所にのみ眞の人類の事業が築かれるのである。政治上の民族覺醒の必要なのも、文藝々術の上に民族といふことの喧ましくいはれるのも故なきでない。

二　ヨーロッパの三大民族

ヨーロッパの諸民族中、現在最も勢力を有するのはゲルマン、ラテン、スラヴの三民族である。その他の群小諸民族は此の三大民族の勢威の下に隱されて了つてゐる。今、此の三個の民族が含んでゐる諸邦を表にして示すと、

一、ゲルマン系＝イギリス、ドイツ、オーストリア、オランダ、デンマルク、ノルウエー、スウェーデン。

二、ラテン系＝フランス、イタリヤ、イスパニア、ポルトガル及びスコットランド人、アイルランド人。

三、スラヴ系＝ロシア、バルカン諸邦、チェッヒ人（墺國內）スロバック人等（匈牙利內）

此の大三民族中、歴史上最も早くから時めいて居たのはラテン民族であつた。さうして現在の狀態では大分精力を消耗したので聊か下り坂の觀がないでもない。近世文藝復興運動（これは世界文學史を繙けば分る。近代文明の根本となつた運動である。）以來、大ナポレオンの雄圖に及ぶまで、いかに此のラテン民族が世界文明の華と咲き誇つたか。ミケルアンジエロ、ラフアエルの二大藝術家、ダンテ、ペトラルカ、ボカッチオの三大文豪を生んだのはイタリアであつた。『ドンキホーテ』で長高いセルヴァンテスの生れたのはイスパニアであつた。ユーゴー、デユーマ、ドウデー、フロオベル、モウパツサンを產んだのはフランスであつた。またコロンブスにアメリカ大陸の發見をさせたのはイスパニアであつた。後に至つてイギリスの水師提督ドレーク等に擊破されたけれども、アルマダ大艦隊を有して一時ヨーロツパの海上權を握つてゐたのもイスパニアであつた。我が日本の種子ケ島へ銃砲を始めて傳へたのはポルトガル人であ

つた。伊達政宗がその臣支倉常長に萬里の旅をさせたのもイタリアのローマが目的地であつた。此の民族は早くから南洋などへやつて來て着々植民事業を進めてゐた。大ナポレオンの雄圖に至つては玆に事新しく說くまでもなからう。然るに近代に至つてはどうであるか。イタリアは早く勢力を失つて了つて目下休養の形であるし、フランスは普佛戰爭以來その光榮を減殺された、イスパニアに至つては二流以下の國家として餘命を繫いでゐるに過ぎない。ポルトガルにも往年の面影は何處にも殘つてをらぬ。さればラテン民族は既に絕頂といふものを通り越した過去の民族といふべきであらう。固より復活は不可能ではないが、現在では聊か望が少ない。

次のゲルマン民族は正に今日が得意の時代である就中イギリス、ドイツの二國は爛漫の域に達してゐる。今度の歐洲戰爭の如きも大觀すればゲルマン民族中の二强國が、世界的にその覇を爭うてゐるのだとも言へるであらう。オーストリヤ、オフンダ以下の同民族中の國家は餘り振はない。けれども此の二强國の盛運をもつてそれを償つ

て餘りある。歐洲戰爭の結果が此の二强何れの勝利に歸するであらうとも、尙暫くはヨーロッパの文明はゲルマン民族の手に支配されるであらう。

第三のスラヴ民族は、此の三民族中最も遲れて出現した。その中心たるはいふまでもなくロシアである。ロシアは十三世紀に蒙古族に征服されて以來二世紀の間はその治下に甘んじて屈辱を嘗めてゐたのであるが、十五世紀に至つて獨立し、十七世紀頃から漸次發展して來てゐる。そして今尙日が淺いので世界文明の雄たることは出來ない。

されども此の三民族中、最も未來を有するのは此のスラヴ族である。ロシアがあの厖大な國家を有しながら、先には日本に破れ、今またドイツの北東軍を持て餘してゐるのはその實弱いからではなくして未だ發育不完全だからである。例へば、いかに體格が大きくとも年の行かない子供は大人に比べて鍛錬が足りなくて間が拔けてゐるやうなものだ。三民族中、底に强い力を藏して將來の忖度を許さざるはスラヴ族である。

政治上から見ても現在ロシアのやうに革命とか暗殺といふやうな事件の多い國家はない。これは日本の明治維新頃のやうに、國家が大なる未來へ趨きつゝある過渡期だといふことの證據である。また文學上から見てもヨーロッパ文學中、最も未來を有するのはロシア文學である。トルストイ、ドストイエフスキー、ゴーリキーなどは之れから眞に輝くのだらう。露國現在の大混亂は將來いづれ整頓されるであらう。

以上を要するに、ヨーロッパの三大民族中ラテン族は過去の民族、ゲルマン族は現代の民族、スラヴ族は將來の民族といふことが出來るのである。ゲルマン族中のイギリスとドイツが、今度の歐洲戰爭に於て覇を爭うてゐる一方には、スラヴ族のロシアが漸次世界の將來遠い將來に有すべき地歩を進めつゝあるのだと考へれば、興味は更に深いのである。

此の三民族の特質を擧げれば、ラテン民族は天才的民族である。從つて彼等の內からは古來異常の大天才が輩出してゐるのである。天才的な輝やかしさと敏捷とを多分

に有してゐる結果發明の才に頗る富んでゐる。しかし天才には免れ難い物事に執着が弱く、そして輕卒だといふ病弊は常に此の民族につき纒うてゐる。

ゲルマン民族は常識的民族である。極めて打算的であり、冷たい理智が發達して沈着であり、勤勉である、一言にして盡せば實務的民族である。スラヴ民族は之れに反して極めて精神的、宗教的哲學的民族である。底に力と信念とが燃えてゐて、熱情に富んでゐて、一方に於ては甚だしく矛盾した性狀を有してゐる。鈍重であつて小才が利かない變りに執着が强い、併し實際的でないから獨逸風の組織には全く缺けて居るこれはスラヴ人の大缺點である。

以上の三民族の特質を大別すればラテン民族は藝術的民族で、ゲルマン民族は科學的民族、スラヴ民族は宗教的民族といふべきであらう。我々が遠い將來に最も注目しなければならぬのは實に此のスラヴ民族であると云つて差支ない。

三　太平洋岸の一大民族

以上のヨーロッパ三大民族と相竝んで大いに勢力を振つてゐるのはアメリカ合衆國人である。此の合衆國は先きに言つて置いた通り本來のアメリカ人と、輸入ヨーロッパ人との混合である併しアメリカを代表するものは云ふまでなく歐洲系の人種で、土着人種は數へるに足らないのである。コロンブスがアメリカ大陸を發見して以來ヨーロッパの各國では我も我もと移民を送つた、その內イギリス人の植民地が今日の合衆國の始をなしたのである。其後植民地と英本國との間には例の有名な獨立戰爭が起つて、偉人ワシントンの出現となつた、但しそのアメリカ獨立軍の元首たるワシントン自身が既にイギリス人の後裔であつた。とも角も、此の獨立戰爭に依つてイギリスの支配下から離れた一個の國家が出來た、それがアメリカ合衆國である。

以來、ワシントンに次いでフランクリンが出で（フランクリンは獨立戰爭の時には

フランスへ獨立援助を請ふ使者として赴いた。從がつて合衆國の獨立は、その黑幕にイギリスの勢力を憎むフランスが後押しをしたのである）次いで、幾多の名大統領が出でゝ例の名高いモンロー主義を振り翳した。そして國運は着々と進んで、今では特殊の文明と特殊の國民性とを發揮するに至つた、是に至てアメリカ人は純粹のアメリカ民族として、全くヨーロッパ系統から離れて居るのである。

此のアメリカ民族、即ち我等には太平洋の彼方なる此の一大民族もまた北方に於けるスラヴ民族と共に頗る注目すべき好敵手なのである。諸君も『排日問題』といふことを聞いたことがあるであらう。彼等は獨り我々日本人に對する『排日』ばかりではなく他のイギリス、ドイツ其他のヨーロッパ人にも斷じて干渉はさせまい、不利益は受けまいとする覇氣に燃えてゐる。この外人排斥問題は皮膚の色の異なつた亞細亞人に對して特に著しいのである。そして又一方に所謂全米主義といふものを振り翳して先づメキシコに向つて野心の手を擴げてゐる。

アメリカ民族も歴史的には日尙ほ淺く、目下漸次盛運の頂點に達せんとしつゝあるのだから、その本領の發揮は正に將來にあると見ねばならぬ。今度の歐洲戰爭に於て彼は一層その面目に重きを加へた。此の民族の特質は最初がさういふ工合に寄り集つた所謂烏合の衆であつたがために、今でもその面影を殘して極めて自由平等である。世界の共和國中アメリカの如く理想的なのはない。貴族とか平民とかいふ階級もない。富豪は貧民のために喜んでその財を投げ、遺産は分割分配されて不自然な富を徒らに盛るやうなことはしない。何人の子弟と雖も子供の内から甘やかされるといふこともなく、浮世の辛苦といふものゝ中に鍛へられる。されば國民は擧つて活動的で若々しく元氣である。たゞ斯る自由國の弊として、概して無遠慮で物質的に走るのは吾人のとらない所であるが、吾人がまづ第一に注目すべきはアメリカ人である。

四　東洋唯一の大和民族

歐米には以上の四大民族があつて、いづれも現代世界文明の支配者として動いてゐる。然るに東洋に在つてはどうであるか。三千年の昔に文化を誇つた印度も支那も、さてはアフリカのエヂプトも今日に至つては徒らに榮枯盛衰の跡を偲ぶばかりである。エヂプトも印度も今はイギリスの領有に歸した、支那は古い老大國、幸ひに幾多の覺醒者ありて現在國運の挽回に力を注いでゐるとはいふものゝ、その復活して世に時めくのはいつのことであらうか。此の間に在つて唯一の獨立國として、ひとり不甲斐なき東洋のために大氣焔を吐いてゐるのは我が日本の大和民族である。

世界の各國中、交り氣の少ない純粹の一民族のみで國家を組織し、しかも開闢以來一系の皇統を以て貫いてゐるのは日本の外にはない。日本民族が九州の一角に起つて漸次東方大和に本據を定めるに至つたのは、世界の文明史上に於ける民族運動としてはその第二期に屬する。メソポタミヤに建國したセム民族、エヂプト帝國を起したエヂプト族の運動は今から五千年以上の昔のことである。其他ヘブライ、フエニキヤ族

の運動も第一期に屬する。日本民族の出現前後にはペルシヤにイラン民族が起つて印度の西境より地中海に渡る大帝國を建てた。次いでインド、ゲルマン族のギリシヤが起り、同族のローマ大帝國が起り、また支那は春秋戰國の時代から漢の天下となつた。此の間は正に第二期で日本民族は歴史的にいへば今日盛運を極めてゐるゲルマン、ラテン、スラヴ、アメリカよりも何の位古いか分らない。

此の古い歴史を有してゐて、世界の大民族中に列することの今日漸く出來るやうになつたのは鎖國政策に負ふ所が少くない。神功皇后の三韓征伐、阿部比羅夫の黒龍江沿岸の征討、豊臣秀吉の明韓征伐の如き民族進展の運動も往々あつたけれども、夙に日本人の頭を占めてゐたのは保守思想であつた。その上、德川時代になつてから鎖國令が布かれ、大船を造ることさへ禁じられるやうになつたので、海上國でありながら鰭や尾を切られた魚のやうになつて了つたのだ。

それが一朝、浦賀灣頭の黑船に目を覺まされて以來、維新の大改革となり、開國

五十年の間に今日の盛運を見るに至つたのは、一に長い長い間、國民の心内に眠つてゐた雄圖が一時に突發したからである。之れ歴史の古いに以合はず國運の新しく潑剌たる所以である。されば日本民族の有する時代も將來に在るのである。開國以來日の淺いがために、今日直ちに世界文明の覇となることは出來ないけれども、それは何等悲觀する必要がない。進んで我々自身の手で、將來にその運動の扉を開かねばならないのである。

五　各民族の將來如何

さて、此の以上の五大民族の將來は、どんなことになるであらうか。之れは極はめて興味ある問題である。

民族問題が喧ましくなりかけたのは十九世紀の中葉からである。何が故に民族問題が起つたのであるかといへば、ヨーロッパの各國が、國内に幾多の民族を集合してゐ

るが故に、頗る統治に苦しみ始めたからである。オーストリアの如きは、七十有餘の種族を含んでゐるのだから無理もない。ドイツはゲルマン系とスラヴ系とを抱含して、しかも聯邦帝國ではあるけれども、特殊のドイツ民族としての、强固な精神的團結が出來てゐるから現在のやうに强いのである。

バルカン半島がいつもヨーロッパ政治問題の淵源となり、今度の歐洲戰爭の導火となつたのも、スラヴ、ゲルマン、ラテン三民族の交叉點に當つてゐるからに他ならない。イギリスのやうな大帝國でさへ半面には常にアイルランド問題に苦しんでゐるが、之れは中心をなしてゐるアングロサクソン人がゲルマン族であり、スコットランド、アイルランド人がラテン族だからに起因するのである。

異つた幾つかの民族を統治してゐる國家には、常に民族主義と國家主義とが矛盾し、衝突する。そして從來は國家主義が民族主義を壓倒して行くので、常に國內に不平の聲が絕えないのである。そこで、一民族を以て一國家を組織するやうにしたいといふ所

から民族問題が生れた。

けれども日本のやうな一民族で一國家を組織してゐる國家に在つては、民族と國家とは調和の必要さへないほどの異稱同義の事に屬する。即ち國家主義がとりも直さず民族主義であり、民族の發展がやがてまた國家の發展となるのである。かゝる國家は幸福なるかなである。從つてドイツ民族、ロシヤ民族アメリカ民族、日本民族の四國家は現在世界の五大民族が有する諸國家中、最も未來を有するといふことの合點も行くであらう。

たゞ、今度の歐洲戰爭に於て一つの看過出來ないことがある。それは既に過去の民族に屬してゐる筈のラテン民族に復活の曙光の現はれたことである。ラテン民族の復活その急先鋒となつて活動してゐるのはフランスである。

戰爭といふものは、赤裸々に、國家のベストとベストとを打ち合はせるものである。從つて、運動の血液の交換をするやうに、老境に入らんとしてゐたフランスも、戰爭

に依つて大いに若返つた。從來の不生產的なる虛榮、虛飾の愚劣に目覺めて、凡ての不純なるものを洗ひ落して、眞のフランス民族としての自覺に生きて來たのである。自分はフランスの現在より將來にかなり興味深い目を向けてゐる者である。

同じラテン系で同じく戰爭に參加してゐるけれども、イタリアの將來については何とも云ふことが出來ない、但し徐々と復興の途をたどることゝ思はれる。

思ふに今後五年、十年、五十年、百年といふ歲月の間には、先づゲルマン系のドイツ、それにアメリカ、日本の四國家が全盛を極める時がくるであらう、ロシアの發達は遠い將來ではあるまいか。

（大正六年二月）

東洋文明と西洋文明との根本的差異

一

東洋文明と西洋文明とを比較すると、大體に於て次の如き差異を發見する。卽ち西洋文明は分立的割據的で、明確を貴び、一面に向つては非常に徹底的である。又東洋文明は之に反して統一的で何となく茫漠として、悠揚迫らず、從つて不徹底の趣を免かれぬ。併し東洋文明の大をなす所には其の點に存するかと思ふ。西洋の政治的關係を規定するものは、同勢力の對立から生れる對々關係の國家主義であり、東洋は一の優勢力を認むる天下思想である。彼れを覇道と稱すれば、此れは王道と謂ふべきである。

此の差の來る原因は主として地理的條件が多きに處る。卽ち國土の形狀地勢の如何に由る。東洋は概して大平野が連り、大沙漠があつて、小勢力の分立を許さないのに

西洋は概して山岳が交錯して、自然に小邦の分立を來たさしめてゐる。

メソポタミヤの南部に出現した古代バビロンの壯大を偲ぶ時は、誰か東洋の天地が帝王の業に適することを痛切に感じないものがあらうか。

而してバビロンの生命は實に治水事業にあつた。あの尨大な國土を一貫したチグリス、ユウフラテス兩大河の治水を行ふのには、どうしても中央の大勢力に賴らなければならなかつた。一地方一鄕土の力では到底不可能で、是非とも專制君主の大なる手に俟たねばならなかつた。

吾人は之を亦古代支那に於いて見ることが出來る。堯舜が名君と稱せられ賢主と云はれたのは何の爲かと云ふに、主として治水の功績に因つたのである。言語學者の說明に『治』なる字は水を修むるの義で、政治なる語の主成分は治水の意なりとあるのは、宜なりと謂つべしである。是れ明かに大平野は大河を有し、大河は大治水を要し、大治水は英君を要して、大國を出現するの理を說明するものではあるまいか。

由來東洋の大帝國は、東に於ては支那、西に於てはバビロン及び波斯を以て其尤なるものとする。而して是等の國の君主の觀念は、單に一個の王たるに止らずして、實に王中の王たるにあつた。支那の『天子』、波斯の『シャー』なる王稱は、共に王の王たる意義を示してゐる。

二

飜つて西洋は如何にと云ふに、先づ之を希臘に就て見る時は、一都市卽一國家と云ふ有樣で、バビロン市を首として古代東洋の都市か、規模の雄大結構の壯麗當時の西洋に見ることが出來なかつたばかりでなく、現今の大都市にも劣らないのに比較して其國家卽都市の甚だ小規模なるの感に堪へない。

賢哲アリストートルが『國家は小なるを可とす』と小國家主義を主唱したのは、能く當時の思想を表はしてゐると思ふ。

西洋に於ける帝王の主義創始者とも見るべきアレクサンドル大王も、決して獨創的に帝業を行つたのではなくて、實に東洋文明の感化に負ふ所が非常に大であつた。彼は先例を波斯大帝國に採つたのであると云つても宜しい。次いで興つた羅馬帝國の覇業も、必ずしもシーザー等一二英雄の事業ではなくて、正しくアレクサンドル大王以來絶へず流れつゝあつた大統一思想の發現と謂つても差支ない。要するに是皆東洋より學んだ思想であつた。

斯くの如く西洋の大統一思想は、悉く其の源を東洋から求めたのであるから、其の大統一は何れも内部の異分子の爲に崩されて、分裂するの止むなきに立ち至つてゐる。則ち東洋流の大統一主義は、分立割據主義たる西洋には永續しなかつたのである。從て中世以降は西洋に於て帝王主義を敢行する者殆んどなく、僅に基督敎會が羅馬の遺志を繼いで統一的に活動したのを著しいとするに過ぎない。

三

之を要するに、西洋の國家は分立主義であつて、是こそ實に西洋文明の根柢である。近代に於ける西洋諸國の發展は内に溢れた自己の力を四方に推し廣め、發揮するの外的發展で、近代の帝國主義なるものは是である。則ち自國の國家主義を根柢として之を他に及ぼさんとするものである。之を四方の來朝入貢を待つ昔の東洋式の帝國主義に比すれば全然趣を異にしてゐる。

西洋文明の特色は積極的で、その國家主義は極めて團體の固い鋭い作用をなすが、之に反して東洋文明は消極的であり、其の國家思想は茫漠として居る。彼れは鋭角式で此れは鈍角式である。之れを同じ西洋諸國の中に例を取つて見れば、現在の獨逸帝國は西洋式で大英帝國は東洋式である。

西洋式が是か、東洋式が非かは、俄に之を斷ずることは出來ないが、由來東洋の國

家は大であるが、團結の脆弱なことは其の通弊である。東洋諸國は宜しく、獨逸近來の勃興に鑑みて自覺せねばならぬ。而して其の自覺たるや、まづ部分的國家的なる自覺であらねばならぬ。最後の目的は勿論、東洋文明全部の協同的運動にあるが、其の道程として、現在の西洋に於けるが如く、東洋に力ある國家が簇生する必要があると思ふ。

我が日本帝國は其の東洋諸强國自覺の先驅者として、東西兩洋文明の長短を取捨し、鞏固無比の先天的團結の下に立脚して、東洋諸國の指導者として步武堂々と濶步し、以て最後の成功者たることを期せねばならぬ。

（大正七年三月）

米獨の國交斷絶に際して（青年の爲めに）

米獨二國潜水艇戰より國交危殆

最近世界に於いて、最も元氣あり、最も新興の素に富んでゐる著名の國は、米國と獨逸とである。所がその米獨二國が頃者國交斷絶に及んで、爾後の風雲急ならんとするものがある。元來米獨の兩國は親善の間柄であつた。現に獨人が米國に歸化したもの、卽ち所謂『獨系米人』なるものは、その數一千萬口に及んでゐるといふことである。のみならず、米獨兩國の經濟關係は最も親密で、獨逸はその輸入の大部分を米國から仰いでゐた。斯くまで親密な兩國が、國交斷絶に逮んだのは何う云ふ譯であらう乎。無論米國との國交斷絶は、獨逸の望む所でないに相違ない、獨逸の眞目的は、依然として英國の屈服にある。獨逸は何うしても英國を屈服せしめなければ、今回の開戰の目的を達することが出來ない。元來英國が多年、その優越せる海軍力を利用して、

海上に跋扈してゐることは著明の事實で、戰時禁制品拿捕や海上封鎖の如きは、獨逸が特に英國を恨んだ原因であつた、啻に獨逸のみならず、和蘭の如きも此の英國の海上跋扈には面白からぬ感情を懷いてゐる。

海軍力に於いて英國に及ばぬ獨逸は、何うかして英國に打擊を與へんとして、所謂『潜水艇戰』を始めた、而して遂に潜水艇によつて商船をも擊沈するやうになつた結果、米國と葛藤を惹き起すに立ち至つた。事の起りは千九百十五年二月、獨逸が英國の周海を交戰區域として、その區域内に於ては中立國の商船と雖も、潜水艇攻擊に對しての安全を保しないと宣言したるに始まり、同年五月ルシタニア號が擊沈せられ、乘客の米人が多數溺死したことによつて、米國の輿論は非常に沸騰し、續いて同年八月にアラビック號が擊沈せられたので、米國の態度は益々强硬となつた。特に昨千九百十六年サセックス號擊沈の爲め、米獨關係は一時甚だ危かつた次第であるが、此の時は獨逸の方でも讓步して、無警告に商船を擊沈しないといふことを明言した。併し

その後獨逸の態度は屢々米國との公約を輕んじて之を蹂躙する傾があり、公海交通の危險は、決して減じなかつたのである。

英國の屈服は潛水艇に由る外なし

所が英國では持久的のアスクイス内閣に代つて、急進的のロイド・ジョージ内閣が起り、それ以來獨逸に對する封鎖は益々嚴重となり、從前よりは更に露骨なる手段を取つて、獨逸の海岸を封鎖することとなつた結果、それまでは或る程度まで成功してゐた中立國と獨逸との貿易も、殆ど全く斷絕して、獨逸は全然同盟國だけで物資を始末し、最早中立國を恃みにすることは出來なくなつた。然るに獨逸は先頃ルーマニヤを席卷して、バルカン半島に優勢を占めたので、その機に乘じて講和問題を提出し、自國の有利なる條件を以て平和の局を結ばんとしたが、聯合國の意氣込が太だ熾んで、その申込を顧みだにせざりし爲め、米國の仲介もその功なく講和は遂に不成功に終つた。

乃で獨逸は何うしても當の敵たる英國を屈服しなければならなかつた。從前は中立國に對する遠慮があつたから、潜水艇戰にも幾分の手加減を加へてゐたが、今日では最早や中立國の必要を感ずることが少なくなつたので、獨逸は益々自暴自棄的に陷り、狂暴なる態度を採つて、遮二無二英國屈服の手段を最大限に實行するの決心を定め、その結果最近の潜水艇戰敢行の通告となつたのである。その當時獨逸宰相の帝國議會に於いてなしたる演說は、此の決心の動機と目的とを明らかにしてゐる。宰相は曰はく『政府は今後無制限の潜水艇戰を開始することに決した。獨逸の潜水艇は昨春以來著るしくその數を增加した。予は本年の世界穀類の減收によつて、協商國側の困難を增大せしめ、伊佛兩國の石炭問題を一層危急に陷らしめ、將た又英國から協商國に對する軍器用の地金炭坑用の木材等の供給を絕たんことを期する。若し夫れ今後行はるべき無制限の潜水艇戰に依て、獨逸に齎らすべき危險は何うかと觀るに、予は寧ろ著るしく減少せられたと考へざるを得ぬ』と。

無制限潜水艇戰の區域

獨逸は開戰以來、潜水艇戰を以て得意となし、獨逸の海上に於ける手段は、此の新戰法を外にしては一もあるなしと誇つてゐた程である。現に潜水商船ドイッチュランド號が、米國にまで往復した如きは、獨人の大成功として誇る所で、ドイッチュランド號航海記の如きは、盛んに獨逸で出版せられてゐる。現に予の眼に觸れた丈でも五六種はある。これを以て觀るも、獨逸に於ける潜水艇熱の如何に强度であるかといふことが分る。

こんな次第で、獨逸は二月二日から次に述ぶるが如き區域に對して、一切の商船を無差別に擊沈する旨を宣言したのである。その無制限なる潜水艇の封鎖區域は、

(一)北海方面に於いては白耳義、和蘭の國境より始まり、蘭國の海岸十海里を離れて、テルシエリング島に至り、北折して諾威國西岸二十海里(北緯六十二度)に至

り、西折してファロー諸島の南端を過ぎ、南西に折れて北緯四十三度に至つて東折し、西班牙フィニステル岬沖二十海里に至り、西國海岸二十海里沖を西佛國境に至つて終る。而して一週一回ファルマス港に出入を許さるゝ米國定期旅客船は、北緯五十度西徑二十度の點から、一直線路を航行することを得可く、又和蘭フリーシンゲン港と、英國サウスウオルド港との間には、蘭船の出入を許可する。

(二)地中海方面に於いては、東徑六度北緯三十八度の交叉點より一は西佛國境に一はモロツコ、アルゼリア國境に至り、更に一はシシリー島、チュニス間を過ぎて、希臘領海に達する三線より成り、而して希臘領海から前記の交叉點までの間に、幅員二十海里の自由航路あつて、交叉點以西は西國海岸に沿うてジブラルタル海峽に至り得るを以て、中立國船舶は該線路によつて地中海を航海することが出來る。

實際英國の前アスクイス内閣の如き、悠長な持久戰的態度を採らないで、之に代つたロイド・ジョージ内閣の如き、急激な突貫戰的方針を採ることになれば、獨逸は連

合國屈服の爲めに如上の露骨な、狂暴な潜水艇戰政策に出なければならぬことは素より怪しむに足らぬ。實際獨逸は恁の如き絶望的態度に出なければならぬ程焦慮つてゐる。之を以ても現今戰爭の將來が獨逸に於て如何に暗澹たるものかゞ分らう。

中立國として米國の保つた位地

米國は建國以來人道主義を標榜して世界に處し來つたが、今回の戰爭にも嚴正中立を守つて公平の態度を採つた。元來現代は、中立國と雖ども武力がなければならぬ時代で、假令平和を唱道するにしても、その背後に武力がなければその主張を貫ぬくことが出來ぬのである。西班牙、和蘭、瑞西、その他二等國以下の國家は、中立してゐても世界の大局の上に大關係を及ぼすことはないが、米國の如き一大國家が儼として中立を守つてゐることは、世界戰局の上に甚だ頼みあることゝ云はねばならぬ。それが各國人に取つて心强き『中立』を守つてゐた米國が獨逸と、國交絶斷に及んだことは、

世界の平和の上に悲むべきことである。

併し米國の立場から考へると、開戰以來、交戰國に對する軍需品の供給で、米國は方外の利益を得てゐるのである。最近には聯合國の軍需品供給が、自國內で間に合ふ丈け進步發達した爲め、當初の如き大儲けはなくなり、且つ又是まで間接の方法に依つて試みた獨逸その他への輸出も、英國の嚴重な封鎖の爲めに不可能となつたから此の際、米國が獨逸と斷つに至つたのは或は時機を得たのかも知れない。

又米國は最近に海軍大擴張を行ひ、又陸軍をも大に增加する計畫がある。米國の此の軍備大擴張は、決して侵略主義の上に立脚したものではなく、平和を保障する爲めに企てられた軍國主義的運動であると云つてゐる。或は今囘の獨逸との國交斷絕も、之に由つて獨逸を威嚇して媾和を促進せしめる精神であるかも知れない。卽はち金力と武力とに秀でた米國の重錘を以て、獨逸を平和といふ薄板に壓搾しようといふ考へかも知れない。吾人は今囘の國交斷絕が、憖くの如き意味のものであることを希望せざ

るを得ない。

それは兎に角、米國の世界政局に對する活躍は、今後益々著るしくなることであらう。曩に講和問題の仲介者となつて、その目的を遂げなかつた儘で引込んで了つたのは、世界に於ける米國の地位を辱しめるやうなものであるから、今度無制限なる潜水艇戰の宣言を好機會として、獨逸と國交を斷絶して准交戰狀態に入つたのは、他日世界平和會議の際に口を挿んで、或る利權の分配を要求し、以て米國の世界的地位を高くしようといふ意味ではなからう乎。

尙ほ今度の事變によつて、若し獨逸と交戰することゝなれば、米國の艦隊は自から大西洋に集中せられるであらうが、それを口實にして米國は海軍大擴張を行ふことが出來はしまいか。卽ち米國元來の目的たる太平洋に活躍する爲に、必要なる大海軍の建設が、今回の事變で完成される譯となる。

米國には獨系米人が多いから、米國の國論は始終その爲めに左右せられてゐるとは

よく人の云ふ所であるが、それは如何なものであらう。無論一部の獨系米人の爲めに兵器工場などが爆發されたことがある。併しながら在米獨人は、一部分を除いては大分米國化されたと認められてゐる。一體現代は民族主義の時代と云ふけれども、最近に於ては寧ろ民族は國家に壓倒される狀態で、何方かと云へば國家主義的の時代に近い、從つて如何に獨逸種であるとは云へ、米人なる以上は米化されずに居られない。同時に獨系米人の爲めに、米國政府が動かされるといふようなことは信じ得られない。

獨の東方策と米の太平洋策

今回の國交斷絕に關して痛切に感じられることは、今度獨逸の東方策が益々頭を擡げはしまいかといふことである。從來獨逸は食料品その他の原料品の大部分を、米國から仰いでゐた。若し今後米國と親密關係を保つことが出來ぬとあれば、獨逸は勢ひバルカンより亞細亞トルコにかけて發展を策しなければならぬ。バクダード鐵道は此

の政策の大動脉ともいふべきもので、獨逸は此の鐵道によつて東方の富を吸收し又自國工業品の販路を東方に求めようといふ意圖を懷いてゐるのである。思ふに從來米國に移住した多數の獨人は、今後必ずや東方に移住するに相違ない。而して此の東方策の實現に際して、當然邪魔物たるべきロシヤに對して、何等か妥協の手段を講ずることがあるかも知れない。若し假りに露國內の親獨派が勢力を占めて、獨逸と單獨に和親を結ぶことがあるとしたならば、獨逸の鼻息は今後益々荒くなるであらう。果して然らば彼は將來ペルシャ灣から印度洋に向つて、その活動の手を擴げるに相違ない。一轉して米國の軍備大擴張とその太平洋に於ける將來の活動とを思ひ、一方獨逸の東方策を想望して、わが日東帝國の世界的地位に想到したならば、吾人は心中自から會得する所があるであらう。若し夫れ現に米國の諸州に起れる排日運動に考慮せよ。吾人は樂觀してばかりに居られまい。吾人の緊褌一番して起つべき秋は今である。若き諸君は刮目して此の危殆なる世界の大勢を觀よ。

(大正六年二月)

日米關係の囘顧（青年の爲めに）

石井特使とハーデー翁

大正六年九月日本の石井特使は米國に使して、非常な大歡迎を受けた。此際に於ける米國の歡迎振りは實に仰山なもので、米國官民の熱誠は其極に達したとまで新聞紙上には吹聽された。而して十一月二日遂に日米協定の覺書が交換されて、日米の親交は益々厚きを加へたと稱されて居る。以上の事實を看て誰か慶賀しない者があらうか、併し歡樂は悲哀に變じ易く、喜悅はやゝもすれば怨恨に變ずる。海洋は常に平穩であるとは云はれぬ。諸子よ太平洋の波は長へに太平であるであらうか。

諸子よ、新春の劈頭、吾人が好んで不祥の言を爲す者と誤解してはならぬ。吾人はただ事實を語るのである。其の事實の裏に潜む者は平和の神か、戰爭の惡魔か、歡樂か悲哀か、それは神と雖も知る由はなからう。ただ諸氏が『日米關係』に就て等閑視

せざらが爲め次に聊かお話をすると云ふことを忘れないで居て貰ひたい。

日米協定の公文が發表されてから間もなく、十一月十五六日の頃、米國から古い水兵服を着たハーディーと云ふ老人が到着した。而して日本の新聞紙は筆を揃へて彼を歡迎し、彼も亦涙を流して悦んだと云ふ。云ふまでもなく彼は六十六年前に日本に來朝したペリー提督の部下の一水夫で、大正の今日再び日本に來て、熱誠なる歡迎を受けて懷舊の涙に咽んだのであつた。この老船員の來朝に依て我等の米國に對する感じは更に深からざるを得ない、之と前後して我が石井特使は異常な歡迎を米國で受け、彼の日米協定は成立した。是に於てか、日米の交歡何ぞ夫れ厚きやと云ひたくなる。否實に左樣斷言して宜しい。併し之が爲めに我等は過去を忘れねばならぬと云ふ理由は決して無い。

ペリー來朝の眞相

日本が德川時代に鎖國の長夜の夢を貪つて居た時、先づ來て我が門戸を訪れた外國は米國であつた。『起きよ、起きよ、世界の形勢はもはや汝の鎖國を許さず、世界貿易の波は汝の岸に打寄せつゝあり。』と云つて、我等の父祖に一大覺醒を與へたものは實に彼れ米國であつた。嘉永六年（一八五三年）六月、米國水師提督ペリー艦船四隻を率ゐて、浦賀に來り通交貿易を求めたことは能く諸君の知る所であらう。當時の日本人の大狼狽は非常なもので、黑船騷ぎと云つて有名なものであつた。而して幾多の交渉の後ペリーの勸告と威壓とが功を奏して、我國は外國との通交に決定したのである米國に次で英佛露蘭の諸國とも同樣の條約が結ばれた。假令ペリーが如何なる威壓を用ゐたにせよ、日本の開國が米國に負ふ所は少くない。米國は日本の恩人なりと云ふのも、決して外交的辭令のみではないのである。

併し米國が卒先して日本に開國を勸めたのは、小供が朝寢をして居るから學校に行くのが遲くなる、早く起きなければいけぬと云つて、愛兒を叩き起す慈母の愛情と同

一視してはならぬ。固より米國の好意はあつたらうが、他に重大な理由がある、それは十九世紀の中頃以殊、世界の海運が大に發達し、各國は孰れも政治上、經濟上に世界的活躍を始めた。此の場合米國の如きは太平洋から東洋方面の航海貿易に努力すべきは明白のことで、其が爲めには日本の如き交通の要路を占めた國が『我は鎖國でござる。外國船は一隻たりとも近海に立寄らば直ちに打ち拂ふのでござる』と云つて嚴然と構へて居ては、米國に取ては非常な迷惑のことで、自國の發展上是非とも日本をして開國せしめなければならなかつたのである。但し其の動機は兎も角、日本に取つて開國は必要なことであつた次第で、米國の好意は好意として感謝して置くべきである。其の意味に於て老船員ハーデーを歡迎する、大に可なりである。

海の彼岸の新興國

其後明治の御代になつて日米の間は益親密であつた。此時代に於ける米國の發達は

實に目覺しいもので、太平洋に於て着々地歩を固め來つたのである。諸子も知らるゝ如く、米國大統領モンローは一八二三年モンロー主義なるものを宣言した。是は米合衆國は他國が米大陸に干渉するを拒むと共に、米國も亦米大陸以外に干渉するを欲せずと云ふ主義で『亞米利加は亞米利加の亞米利加なり』と云ふ精神を發揮したものである。此のモンロー主義に從へば米國は米大陸以外には侵略的態度は固より、干渉をもせない筈であるが、それは米國が未だ充分に發達しなかつた時代の話で、十九世紀後半に國力が內に充溢し、而して歐洲列强が爭つて拓地植民に熱中する樣になると、米國だとて獨り端然と行儀よくして居ることは出來ぬ。

米國は若い若い新興の國である、內に溢れた活力を外に發揮せねばならぬ事情にある、此點に於ては日本も同一である。そこで米國は古臭いモンロー主義の衣を脫ぎ棄てゝ新しい衣を着換へた。其の新衣こそ海外發展、國勢發揮と云ふ恐しく景氣のよい帝國主義である。米國の帝國主義が太平洋に實現された第一步は、布哇の合併であつた、

之は一八九三年（明治廿六年）に提議され一八九八年（明治卅一年）に決定された。次で同年米國は西班牙と戰端を開いた、而して戰捷の結果、太平洋に於ては西班牙から比律賓を獲得したのである。此より先日本は明治廿七八年戰役に淸國を膺懲して、東亞に於ける日本の地位を確立した、今まで日本を支那の屬國位に考へて居た西洋人等は驚異の眼を以て、日本の發達を看た。而して更に十年の後、日本が大國露西亞との戰爭に捷つて、愈々世界大强國の列に伍して、英米獨佛露等と世界の檜舞臺に立つことゝなつた時、彼等西洋人の眼は益々驚異の輝きに滿ちたのであつた。

太平洋の東に米國、西に日本、等しく是新興の國民である、而して支那と云ふ大國土は日本の最も利害關係の深い所、而して米國も亦そこに勢力を扶殖するに努めて居る。兩雄並び立たずと云ふ語は、果してこの場合にも適用されるであらうか。日露戰役以前までは兩國の間に葛藤を惹起すことも稀であつた。而して日本が露國と戰つた際、米國は少からぬ同情を日本に表したのである。然るに日露戰役後、日米戰爭の聲

はポツ〳〵吾等の耳に響いて來た『サア今度は米國だ』と云ふ感は、時として吾等の念頭に起つて來た。諸子よ、之を以て直に日米戰爭と想像してはならぬ。日本は今後米國との關係を最も重視せねばならぬ。假令其の關係が戰爭であると平和であるとを問はず、兎に角日本が對手國として最も注意すべきものは、太平洋の彼岸にある米國であると云ふ意味なのである。

米國人氣質

果して日露戰役の後、日米間には幾多の紛議を醸した。明治四十年（一九〇七年）には、在米日本兒童の入學禁止の事件が起つた、之と前後して太平洋沿岸地方では、日本人排斥の聲が頻りに高まつた、日本人の商店が窓硝子を破壞された如き事件は屢々起つた。日本人勞働者の渡航制限も此頃に起つた問題である。此等の排日的問題に依て直に日米兩國の國際關係が反目して居たと速斷してはならぬ。米國は統一された

國でない、從て各州いづれも議會を有して、其の州内の件に關しては中央政府と雖も命令することが出來ない、排日問題は主としてカリフォルニヤ州に起つた事件で、中央政府の勸告があつたに拘らず、氣勢はなか〳〵强かつた。是は二三の政治家が自己の野心を遂げん爲め新聞紙を買收して民衆を煽動した結果でもあつたが、一面に於て東洋人が自國の社會に勢力を得て來たのを好まぬ事情にも基くのである。而して大正二年（一九一三年）には加州土地法案が通過して、在米日本人の土地所有は不可能となつてしまつた。

併し排日問題の一面には、在米日本人の内には品性野卑の者が無いでもなく、又日本人が米國で何處までも國粹主義を奉じて、米人と胸襟を開いて交際する風が缺けて居ることも認めねばならぬ。元來米人は潑溂なる元氣に富んで居る、心に思つたことはドン〳〵之を口に出して、少しも遠慮しない性質である。日本人の如く無暗に禮讓を尊んで、云ひたい事も十分口に出さず、而して心内に不平の念を抱いて居る如き不徹

底な態度は、彼等米人は嗤ふべきものと考へて居る。從て排日問題などの交渉も、嚴しく形式を整へて正面から廻り諄く談じ込むよりは、排日運動の主腦者と差向ひで、『排日運動は困りますがね、君一つ何とか考へて貰ひ度いです』など云ふ調子で、大に胸襟を開いて、懇談すると、ソコは流石ヤンキー氣質の元氣よい米人のことゝて、存外話が早く運ぶのであると云ふ點もある。米國は決して老大國でない、ソレだけ氣品に乏しく野卑な趣もある。併し世界第一の物は何でも米國に置きたいと云つて居るなど愛すべき點もある。

軍國化せる米國

明治四十一年（一九〇八年）米國は、滿洲の鐵道を中立にしたい云ふことを提議した。是は實に滿洲に於ける日露兩國の特殊の利害關係を無視した亂暴な提議で、日露の抗議に逢つて直に撤回されてしまつた。併し米國はかゝる提議をなした程無遠慮な

國である、而して若し反對があれば『ア、左樣ですか、反對とあれば止めます』と云つて、自己の主張を放棄して平氣で居る、『成功しなければそれ迄のこと、マア出來る所まで遣つて見るのさ』と云ふのが、米國の態度である。是は米國なる國家に對しても、各個人としての米人に對しても、吾等の心得て置くべき點である。

諸子よ、今回の大戰に對する態度は何うであるか。『自由の爲め、平和の爲め』と云ふ語は、米國の常に口にする所で、米人は如何にも平和を熱愛する國民である如く思つて居る人も少くあるまい。成程米國は最初中立を嚴守して、幾度か獨逸の潜水艇が米國其他中立國の船舶に危害を加へても、隱忍して能ふ限り平和の態度を持して居たに相違ない。而して一九一七年二月獨逸が極めて露骨なる無制限潜水艇戰の勵行を宣言するに及んで、遂に堪忍袋の緒を切つて、彼の横暴なる獨逸を膺懲せずんば已まずと云つて起つた彼米國の態度は如何にも立派なものであつた。恰も是平和の神が降魔の劍を揮ふ如き觀があるのである。併し飜て考へて見給へ、米國は現戰爭開始以來、

歐洲交戰國の軍需品供給を引受け、且又交戰國の從來の販路をも獨占して非常に利益を收めて居る。其利益は、日本人をして驚歎せしむるに餘ある『サアうんと金は儲つた、此處で一つ軍艦を造り、陸軍を擴張して國防設備を充實したいが、それには參戰が適當ではあるまいか』と。是は想像に過ぎないが、米國參戰の裏には、かゝる理由が全然存して居ないと云ふことを斷言し得る人があらうか。要するに米國をして軍國化せしむるには、其の參戰は最も時宜に適したものであつた。何も米國人の血を歐洲の戰場に濺ぐのが目的であるまい。西洋人の心理は恁る點に於て吾等よりも遙かに複雜である。

明治四十一年（一九〇八年）日米兩國の間に太平洋及び支那に關する協定が成立した、太平洋の現狀を維持し、支那の領土保全、機會均等主義を奉すると云ふのが其の精神である、高平（大使）ルート（國務卿）覺書と云ふのがそれである。後九年を經て大正六年（一九一七年）石井ランシング協定が成立して、前回協定の意義は益々明かにせられ

支那に於ける日本の特殊な地位は、特に明かに聲明せられた。實に結構のことである。併し協定だの條約だの云ふものは或程度まで有效のものであるが、戀人の誓でさへも變り易い世の中に何で國際間の一片の約束が頼みにならう。日英同盟と云ふ大磐石の樣な儼として搖がぬ筈である條約がありながら、英國の吾人に對する態度は、頼もしい盟邦たる感を起さしむるには、餘りに冷靜に過ぎた點がないでもなかつた。併し國際關係を以て同志の友が肝膽相照す如き場合に比較するのが間違ひで、遙かに實際的物質的のものである。米國公使は先頃北京の列國外交官を出し拔いて支那政府に單獨警告を試み大に物議を釀したことがある、實に外交のことは油斷が出來ない。又米國は近來頻に露國に接近して、西伯利亞で大なる利權を收めるとか、又勘察加半島に勢力を扶植するとか云ふ噂がある。茫洋して居ると、何時の間にか意外の邊から恐しい壓迫が來ないとも限らないのである。

獨逸と米國

獨逸の發達は頗る力强いものであるが、寧ろ徐々として地歩を固める健實な態度である。併し米國の發達は極めて突飛である。屢々人の意表に出て端睨すべからざるものがある。獨逸の軍國主義が歐洲の平和を害すると云ふならば、米國の軍國主義が太平洋の浪を騷がすことは、恐らく獨逸以上であらうと思ふ。米國は今や順風に帆を揚げ發展向上の路を濶歩しつゝある。諸子が社會に立たれる頃、米國の活躍は實に著しいものであらう。而して之に對する吾人の態度も更に大に活潑に、更に大に力强いものであらねばならぬ。若し他日米國海軍の艨艟幾百隻飛行機幾千臺、水と空とを被うて來る時があらうとも、吾人は其際六十有餘年前に吾人の父祖が黑船の渡來に狼狽した醜態を繰返してはならぬ。吾人は濫りに戰爭熱を煽るものでない。唯元氣に充溢した新興國民が、太平洋の彼方に在つて、平和にも戰爭にも、諸子の好敵手であることを述べて置きたいのである。（大正六年十二月）

シベリヤの今昔（青年の爲めに）

世界の一大邦土

シベリヤと云へば從來あまり歷史の上で重視されて居なかつた。處が今度露西亞に一大變動が起つて、あの一大帝國が支離滅裂の有樣となると、厖大なるシベリヤの平野も安穩では濟まされない。虎視眈々たる列强は忽ち手を加へんとするに至つた。日本も默視することが出來ぬ、そこで目下出兵問題が八釜敷くなつたのである以下シベリヤの今昔に就て知つて居る二三の事柄を書いて見やうと思ふ。

東西約千七百里、南北約八百里、面積約八千萬方里のシベリヤは、確かに世界に於ける一大邦土である、この一大地域は約三百年來露西亞の領土となつた。露西亞が一大强國として世界に臨むことが出來たのも、このシベリヤと云ふ一大領土を有して居

る爲めであつた、恰も英國が五大洲に普く散布した海外領土を持つて世界に雄視して居る如くに。露西亞は如何にして此の大領土を占有することが出來たか。獨逸がアルサス・ローレーン二州を得る爲めには、一八七〇、七一年の獨佛戰爭と云ふ一大戰爭を經ねばならなかつた。又一九一一年にはモロッコ問題が喧しくなつて、獨佛兩國が開戰すると云ふ噂が高く、歐洲に一大危機を釀さんとした騷動があつた。この大騷ぎを遣つた結果、獨逸は中央阿弗利加の佛領コンゴーの僅か一小部分を獲得することが出來た。否、そんな獨逸の例を引かずとも、明治三十七八年日本が滿洲の野に幾萬の生靈を犧牲に供した結果、領土として得た所は僅かに樺太の南半に過ぎなかつた。

北半球の大濕原

領土の獲得は此くまでに困難である、然らば露國は如何にして彼のシベリヤ大平原を獲得したか。人間の運命に幸と不幸とある如く、國家の上にも天惠の厚いと薄い

とを認めねばならぬ。歐洲の東隅に建國した露國は、西方歐洲の中心に向つて發展することは非常に困難であつたが、亞細亞大陸には著しい强敵が無かつた爲め發展は容易であつた。それのみならず、シベリヤ一帶の大平原は殆ど障害物が無い爲め、一瀉千里の勢で進むことが出來たのである。固よりシベリヤは森林と原野とそれから北方の大濕原から成つて居る。地中に潜む富源は莫大なものであらうが、從來餘り開發されては居らぬ。況や三百年の昔、そこは全く不毛の野であつたに相違ない。但し所在の村落にウイグル其他の民族が居住して居たことは固よりである。

毛皮を追うて

露西亞は十三世紀以來蒙古人の支配の下に在つたが、十五世紀に至つて其の支配を脫して自立した、近代露西亞の發達はこゝに始まるのである。當時ウラル山東トボルスク附近の地をシビルと呼んだ、シベリヤの名もそれから起つたのである。そのシビ

ル地方は十五世紀の末モスコー大公（後露帝と稱す）イヴァン三世に服從した。是が露國がシベリヤに君臨した始めである。其後シビルの酋長は露帝の臣下となつたが、東方民族の爲めに常に亂擾が絶えなかつた。そこで十六世紀末、コサックの酋長イェルマクが、コサック兵八百餘名を率ゐて東方遠征の途に登つた。この遠征に依てシビル地方は全く平定され、イェルマクは其の地を露帝イヴァン四世に獻じたのである。

イェルマク以來コサック人は着々東方へと進んで、到る處に市府を開き十七世紀中頃には既にオホック海にまで達した。やがて露人の勢力が日本に接觸するのも間も無いこゝとなつた。かくして彼等は十七世紀末にはカムチャツカ半島を探檢した。彼等の進む有樣は恰も水が平地を流るゝ如くで、如何にも迅速であつたが、何故に彼等はかくも東方へ遙々と遠征したのであらうか。彼等は所謂探檢慾や好奇心に驅られて不毛の大野を進んだのであらうか。否、そこには理由がある。彼等を誘つたのも矢張り『利慾』であつた、卽ち毛皮である。シベリヤには黒狐や黒貂の毛皮獸が多く産する、

其等の毛皮は當時歐羅巴人の非常に珍重したもので、其の商賣は著しい利益を收めることが出來た。利慾は何處までも人を誘つて行く、往々にして十萬億土の彼方までも導いて呉れる。況やシベリヤの荒野何のその〻云ふ勢で露人は東方へと進んだ。而して毛皮を獲ては歐洲に賣捌いたのである。從つてシベリヤの開拓は一面から云へば毛皮獸狩であるとも云へやう。處がシベリヤの東端に達して太平洋に顏を出すと、露人は膃虎や膃肭獸が澤山居るのを發見して、今度は海獸の捕獲をも始めるに至つた。而して太平洋に活躍を始めると、勢ひ日本とも接觸しなければならぬ。德川幕府の末に露人が日本に通商親交を求めたのは以上の事情に基くのであつた。

尨大なる北海熊

又十八世紀には露人は黑龍江沿岸の經略を始めたが、それが南に進むに從つて支那と衝突するに至つた、當時支那は淸の聖祖の時代で國勢が盛んであつたから、露國

と尼布楚に條約を結んで國境を定め、露人の進勢も一時頓挫した。併し十九世紀に入つては將軍ムラヴィエフが盛んに黑龍江沿岸を侵略して、遂に支那に迫つて無理往生に黑龍江以北の土地を全部割讓せしめた。更に進んでは沿海州を取つて、浦鹽斯德港を開いた、この沿海州割取は露國が清國と英佛との間に和議を成立させるに骨を折つたから、其の報酬に貰ふといふので如何にも甘い話である。今頃過激派が無併合無賠償を宣言して居るのに較べると、誰か今昔の感に堪へざらんやと云ひ度くなる。しかも浦鹽斯德とは『東方の指揮者』と云ふ義である相だ、六七十年以前の露國が如何に野心滿々であつたか、現カイゼル處の騷ぎでなかつたことが分る。

尨大のシベリヤは露國の有に歸した、恰も是れ北海の大熊か亞細亞の北半に蹲つて南方印度から支那、朝鮮を一呑みにせんとするの形勢である。支那の如きは常に北海熊の威嚇を受けて居た。此の大熊の鼻息を一段と荒くしたものは、シベリヤ鐵道の開通であつた。この大鐵道は十九世紀の末年から二十世紀の始めに亙る約十五年の歲月

を經て完成された、露國の極東經營は之に依つて大に進んだ。殊に露國一流の威嚇と懷柔との外交手段で、巧に支那を說き附けて北滿洲を橫斷して、シベリヤ鐵道を浦鹽斯德にまで敷いたのである。

孰れにせよ、亞細亞の南半は此の北海熊に依つて非常に威嚇された。印度を大切の寶物として死んでも離さぬ決心の英國は、この形勢を見て驚いたこと一通でない、日本も亦著しく露國の壓迫を感じた。そこで兩國の握手となり、日英同盟となり、更に日露戰役となつて、露國の極東跋扈は一頓挫を來したのである。

北半球の大富源

シベリヤも其の開拓の進まない間は、主として流謫の地であつた。十九世紀の後半は露國に無政府主義が行はれて、虛無黨其他の過激論者は盛んに君主其他當局者を呪つて已まず、陰謀と暗殺と之に對する壓服とは、互に負けず劣らずの勢を以て繰返へ

された。而して之が爲めに縲絏の辱を受けた自由主義の人々は、老若男女を問はずシベリヤへと追ひ遣られた。コサックの長槍と銃劒とに追ひ立てられて、暗雲底く垂れた雪解けの曠野を、トボ〳〵と歩み行く哀れなる一群は實に彼等自由主義者であつたのである。恰も昔我が國でも東國が流人の國であつた如くシベリヤも亦左樣であつた。而して流人の國なる伊豆から起つた賴朝が天下を取つた如くに、シベリヤに放たれた自由主義者が帝政の露國を覆したのであつた。

併しシベリヤの開拓も漸次進捗した、而してシベリヤ鐵道の開通と共に、そこが世界大交通の要路となつたから益々開けねばならなかつた。歐露方面から移民が續々遣つて來る、農業も益與りつゝあつた、人口の殖えた結果、やがてシベリヤ防衛の軍隊は、同地の在住民の內から組織することが出來るだらうと云はれた程である。今一寸人口を調べて見ると左の通りである。

	(一八九七年)	(一九一一年)
全露人口	一二五、六四〇、〇〇〇	一六三、九一九、〇〇〇

即ち全露國の人口は以上の約十五年間に約三千八百萬人の増加であるが、其の内約三百萬人はシベリヤに於て増加したのである、之を一年に平均すればシベリヤの人口増加は毎年二十萬人づゝであつた。而して前記十五年間に歐露の人口増加率は約二割八分であるが、シベリヤは五割弱で、遙かに歐露を凌駕して居る。此の計數だけでもシベリヤの發達は、將來大に注目すべきことが知られやう。人口の増加に伴ひ森林鑛山等の富源が開發さるべきは明かである、尚沿海州の漁業も莫大なものであるが、その漁業權は日露戰役の結果日本人の占有に歸した、併し露國革命の結果この條約は破棄される憂がある、甚だ殘念な次第である。

内	歐露	九三、四四三、〇〇〇
	シベリヤ	五、七五九、〇〇〇
		一二〇、五八八、〇〇〇
		八、七一九、〇〇〇

現今のシベリア

露獨講和の結果露國內には到る處に獨逸勢力が侵入した、シベリヤも益獨逸化され、獨逸の商品乃至資本等はシベリヤに入り込むことであらう。そこに夙くも着目したのは米國で、米國が近來頻りに露國政府の歡心を求めつゝあるのは、實に油斷出來ぬ次第である。その點は某々國の尻馬に乘つて過激派を敵視して、無暗に其の惡口を叩いて居る隙に、横合から出た他人の爲めに着々利權を占められて行く國などゝは全く趣を異にして居る。又獨逸勢力がシベリヤに侵入したとは云へ、或は獨墺の俘虜が解放されたとは云へ、獨軍が飛行機や潜水艇を以て、直にも押寄せて來るかの樣に騷ぐのは何んなものか。吾人は輿論を指導すべき操觚者諸氏が、今少しく國際政局の機微を了解されんことを望むのである。好んで孤立の境遇に陷ることは少くとも愚である。諸君は戰後に來るべき日本の難境を覺悟して居らねばならぬのである。

兎も角、將來のシベリヤに注意すべきは米獨兩國の經濟的侵入であると思ふ。恰も亞細亞土耳古で英獨が衝突した如くにシベリヤの富源開發に伴ふ抗爭は、米獨

の間に起るであらう。東亞の强國たる日本は此際大に褌を緊めて懸らねばならぬ。侵入と云へばとて直に大砲や劍戟を想像してはならぬ。恐るべきは所謂平和的侵入である。吾人の活動は決して出兵や領土併合のみでは無い。他にモット重要なる活動がなければならぬ。濫に干戈を動かして好んで孤立の窮境に陷る如きは、絶對に避けねばらぬ。殊に信を支那四億萬の民衆に失ふことは最も恐るべきことである。

東亞に於ける帝國の地步を固めて、來るべき活動に應ぜん爲め、國力の充實を圖ること、是吾人の爲すべき急務である。今後世界の形勢は主として英米獨の三國に依て支配されるであらう。而して東洋には日本が在る、陸には支那大陸、海には太平洋、この二大舞臺に於ける英米獨三國の勢力關係は、吾人に重大なる利害關係を有して居る。

而して斯の如き際にして若し彼のビスマルクの如き機略と鐵腕とを併せ有した一大政治家が出たならば、巧みに以上の形勢を利用し、操縦することであらうに。

(大正七年二月)

四十餘年前 獨佛國境の要塞戰

震天動地の大戰亂

バルカンの一小國セルヴイヤが投じた一彈が動機となつて端なくも歐洲列強の平和が破れ、露獨佛墺の四大强國が互に干戈の間に見えることとなつたのみならず、由來平和を主義とした英國さへも、輿論は近年稀に見る興奮の狀を呈し、遂に獨逸に向つて戰を宣するに至つた。此の危機に際して、甚だ不利の地位に立つた如く見える獨逸は、如何なる奮鬪を試みるであらうか、其の同盟と賴むは墺太利のみで、東に露西亞、西に佛蘭西の兩國から挾み擊ちにされ、海上では英國の優勢なる海軍に依つて壓迫されようとしてゐる獨逸は方に四面楚歌の裡にあるものであるが、此の窮境を脫して獨逸民族の名聲を維持せん爲めに、カイゼルを始として獨逸の國民は非常なる決心を以て、死物狂の奮鬪を試みることと思はれる。固より窮通は歐洲國際關係に常に認めら

れることで、極度までに緊張した現時の國際關係も、或は意外の邊に穩和な解決が遂げられることが無いとも限らぬ。然し今度の戰爭は餘程突發的であり、又感情的であつて、常識的の推測を許さない點もあるから、或は思ひ切つた大戰爭が演ぜられるかも知れない。孰れにせよ、常に軍事の雄として人も許し、自らも任じてゐる獨逸の事であるから、其の活動は必らず目醒ましいものがあらうと思ふ。若し戰爭が始まれば陸戰では露獨の國境と、獨佛の國境とが重要な戰場となることは無論であつて、現に露軍の一隊は獨逸の國境を超えてヨハネスブルグに向つたとか、又獨軍の一隊は佛國の國境を越えてシレーに侵入したとか云ふ報知がある。これ等は固より前衛の偵察戰位なものであらう。然しこれ等の國境には平時から互に要塞を築いて嚴重に警戒して居るし、又獨佛共に得意な飛行機を利用して偵察に怠らず、けたゝましいプロペラーの音は國境の天地を震憾して居ることゝ思はれる。從つて獨佛の國境が今回の戰爭の重要なる方面であることは明らかである。若し獨逸が攻勢を取るとすれば、國境の何の

方面より佛國に侵入するが、容易に判斷は出來兼ぬるけれども、獨逸軍十萬人はルクセンブルグ大公領に入つたと云ふ報があり、又獨逸が頻りに白耳義に壓迫を加へて居る所から考へると、獨逸は或は此の方面から侵入するのではあるまいか。それは兎も角、獨佛境を接して居る附近に配置された兩國の要塞でも、必ず激烈な要塞戰が試みられることであらう。暫らく血に飢ゑた歐洲列强の武器は、最近に改良された幾多の結果を、此の戰爭で試驗することであり、各國人の意氣天に沖するの有樣であるから、必ずや目醒しいものがあるであらう。此際四十餘年の昔を顧みて、獨佛兩國が國運を賭して戰つた有名な獨佛戰爭當時のことを想起するのも、亦興味あることゝ思はれる

四十餘年前の獨佛戰爭

獨佛戰爭は千八百七十年夏から翌年一月末までに亙つたもので、今から丁度四十四年前に當つて居る。其の間に兵器は固より戰術も交通機關も著しく進步して居り、又

軍人の精神や修養にも少からぬ變化があるかも知れぬ。然し國を愛するの心は孰れも一つであらう。氣力に富んだ御國自慢の獨逸人と、積年の國辱に憤慨して止まぬ愛國心の深い佛國人との戰爭は、依然として四十餘年前の激しさを再現するかと思はれる。一たび此事に想到すると海山萬里を隔てゝも尙肉躍り血湧くの感がある。實に九十度の炎暑も忘れられる次第である。

獨佛の國境は獨佛戰爭當時と現今とでは相違がある。これは佛國がエルザス、ロートリンゲン二州を割いた結果であることは、能く人の知つて居る所で、つまり現今の國境よりは遙かに東に寄つて居たのである。從て獨佛戰爭當時に佛軍が守つて居たストラスブルグ、メッツの二要塞は、今は却つて獨逸に屬して佛國に對して國境を監視して居る次第である。千八百七十年七月獨佛兩國の平和が破れると、獨軍は參謀總長モルトケ將軍の計畫に依つて、八十餘萬の大軍を三軍に分けて佛國に侵入し、其の行動は極めて迅速機敏なものであつたが、佛軍は軍の集中が敏速でなく、此の點に於て既に

獨軍に一籌を輸した次第であつた。今度の戰爭でも獨軍の行動は甚だ機敏であるかの如く見える。戰爭は獨軍が連戰連勝の有樣で、千八百七十年八月から翌年一月に至るまで、壯烈を極めた戰爭は數多くあるが、獨佛國境の要塞戰として著名なのは、メッツ、ストラスブルグ、及びベルフォールのの三者である。ナポレオン三世が降服したセダンの戰は、白耳義と佛國との境であるのみならず、要塞戰と見ることは出來ないであらう、殊に以上の二要塞は今も獨佛の境上に近く相對立して、軍事上重要の地點を占めて居るから、此等の要塞は今度の戰爭に再び其名を揚げることであらうと思はれる。

メッツの要塞戰

メッツはルクセンブルグ大公國より南にある要塞で、獨佛國境の北部を守り、且ライン河中流方面から巴里に進む路を扼する重要の地點である。要塞はメッツ市街の周圍

に堅固な城壁を繞らしたばかりでなく、市の附近數里に亙つて形勝の地點には數多の堡壘が築かれて居る。佛の元帥バゼーヌは約廿萬の大軍と共にメッツ附近に壓迫され、やがては全く包圍されてしまつた。此時佛軍の行動が一致と敏活とを缺いた爲め攻圍軍に對して有力な出擊をなし得なかつたのは遺憾のことであつた。固より佛軍も屢出擊を試みて東南及び北方の佛軍に合せんとした、而して獨軍の攻圍計畫も此の爲めに妨げられたことは一再でなかつた。然し此等の出擊は孰れも擊退されて一も成功しなかつた。若し佛軍が攻圍の始めに總出擊を決行したら或は戰況を一變しかたも知れぬ。而してバゼーヌも一度之を實行しようとして、總軍を率ゐて出動し懸けたが、諸將の意見一致しない爲めに中止してしまつた。是は誠に殘念なことで、敵の參謀總長モルトケも之を以て奇怪千萬の行動だと言つて居る。元來獨軍のメッツ攻圍は普王ウィリヤム一世（後に獨逸皇帝となる）の意見で、濫に砲擊をしないで封鎖線を嚴重にして兵糧攻の方針を取つたのである。此の結果佛軍は八月末に攻圍されてから十月末まで凡七

十日の間、能く要塞を維持したのであるが、飢餓には如何な猛將勇卒も敵することが出來ず、敵に降服するものさへ少くないので、遂に十月廿七日白旗を城頭に飜して全軍降參することゝなつた。此の十月廿七日は當時から六十四年前即ち千八百六年に、佛帝ナポレオンが獨逸の都伯林に侵入した日と同日であるから、獨人は其の復讎でもしたかの樣にメッツ陷落を祝したのであつた。此時獨軍に降參したものは佛軍約十七萬其内士官以上凡六千人と云はれて居る。

ストラスブルグの要塞戰

メッツの陷落より凡一ヶ月前にストラブスルグも亦獨軍の手に落ちた。ストラスブルクはメッツよりも遙か東南にあつて、ライン河に臨んだ要地を占め、眞に獨佛の國境に位して當時は南獨逸を威嚇して居たのである。ストラスブルグはメッツの如き廣い範圍に亙つた築城でなく、又之を守つた兵もメッツに比すれば甚だ少く、凡そ六分の一位な

ものであつた。此の要塞が獨軍の攻圍を受けたのは八月末であるが、始め攻圍軍の司令官ウェルデルは開城の勸告をしたけれども、守將ウーリッヒは斷然之を拒絕した。そこで獨軍はいよ〳〵攻擊を加へることとなつたのである。ストラスブルグの攻城はメッツの場合と反對で、獨軍は優良な砲を多く集めて猛烈な砲擊を行つた。此の爲にストラスブルグの要塞は固より市街や寺院や其他の建物は多く破壞されて、市民の死するものも少くなかつた。餘り其の慘狀の甚しいのに驚いて、ストラスブルグの僧正は自ら獨軍の前衞に赴き、市民の迷惑一方ならぬことを述べて、頻に哀願したけれども、獨軍は之を拒絕して依然として砲擊を繼續したのである。獨軍の攻城は益々進捗して優良な兵器に依つて敵に多大の損害を與へつゝ且つ堡壘やら塹壕やら、益々攻圍計畫を密にして要塞に肉迫した。要塞內には兵器も糧食も十分であつたが、守備兵は諸方面から集めた雜駁な分子から成つて居たから、之を糾合して一大集團となして操縱するに不便であつた爲め、有力な出擊を試みることか出來なかつた。然し夫でも佛軍は屢

々出撃を決行したのであるが、孰れも獨軍の爲めに撃退されて成功しなかつた。獨軍の砲撃がストラスブルグに與へた損害は非常なもので、重な建築は悉く破壞されてしまひ、家屋は崩潰して市民は住むに家なく雨露を凌ぐに苦んだ。市街は一目荒凉として恰も廢墟に立つ感があつたと云はれて居る。此のやうな悲慘は日一日と加はるのに獨軍の砲撃は益々威力を發揮して來る。夫のみならず佛軍は他から援兵が來る望も絕えてしまつたので、遂に力盡きて九月廿七日の夕、敵彈の痕蜂の巢の如き大寺院の塔に白旗を飜して降參することとなつたのである。此時捕虜となつた佛軍は總數凡そ一萬八千人で、籠城の期間は凡そ一ヶ月餘であつた。

ベルフォールの要塞戰

メッツもストラスブルグも此樣にして陷落したが、唯一つベルフォールのみは首府の巴里と共に勇敢な抵抗を最後まで續けたのである。ベルフォールはボージュ山脈とユラ

山脈との間なる狹隘を扼して居る要地で、ライン上流から佛國に入る道を監視して居る要塞である。現今では方に獨佛國境の最南部にあつて、兩國々境の要塞中でも重要な地位を占めなければならぬものである。勝ち誇つた獨逸軍はベルフォールの如き一擧にして拔くべしといふ勢で、此の要塞に殺到し十一月初凡一萬の兵を以て攻圍に着手した。要塞の司令官はダンフェールと云ふ工兵大佐であつたが、夙くから防禦に苦心してベルフォール附近の要地に多くの堡壘を築いたのみでなく、あらゆる機會を利用しては出擊を試みて敵の攻圍計畫を妨げた爲めに、獨軍の攻城も容易に涉取らなかつた。そこで獨軍は大に兵數を增加して三倍とし、尙砲の數を增して二百門となし、又攻城砲臺を五十餘も築いて、一步づゝ徐々と要塞に肉迫することゝなつた。此時守將ダンフェールの奮鬪は實に目覺しいもので、其の防禦計畫は殆ど間然する處がなく、破損した堡壘を修繕するやら、屢々出擊して敵の攻圍線を擾亂するやら、あらゆる手段と機會とを利用して防禦に努めたので、流石の獨軍も十一月初旬から翌年一月に至つても、

此要塞を陷れることが出來ない。然し攻圍線は益々兵數を増加して正攻法に依て、攻圍線を進めたから漸く二月初旬に重要な支堡であるペルシェーの砲臺を拔くことが出來た、此くしてベルフォールの運命も危險に陷つたものであるから、攻圍軍司令官はダンフェールに對して開城を勸告したが、ダンフェールは巴里政府の命なき限り此地を去る能はずとて健氣にも之を拒絶したのである。此時巴里政府は獨逸軍と休戰條約を結んだので、ベルフォール要塞も獨軍に明け渡すことに決した。そこで百餘日の攻圍に耐えた此要塞も開城することゝなつた。いよ〳〵二月十六日ダンフェール大佐は巴里政府の命に依つてベルフォールから退城するのであるが、此時大佐は一切の兵器其他の軍需品を携帶し、隊伍を組んで大佐自身殿軍を率ゐて堂々と要塞を出たのである。普通の開城式には敵軍の前で分列式を行ふ筈であるが、ダンフェールは之を拒んでなさず獨軍も大佐の勇敢な防禦に敬意を表して分列式を強いなかつた。此のベルフォールの開城は實に名譽な開城で、佛國の名譽の爲に萬丈の氣焔を揚げたものである。ダンフェール

大佐の如きは後世軍人の龜鑑となるべきであらう。

千八百七十年の獨佛戰爭からもはや四十四年を經た今日ではあるが、擧國一致の決心すさまじい獨逸人と、愛國の情燃ゆるが如き佛蘭西人との間に起るべき戰爭は更に益々激しいであらう。吾等は日々の新聞紙に依つて戰況の發展を注目しつつ、限りなき想像を遙に歐洲の天地に馳せて居るのである。

（大正三年八月五日）

軍國の代表的人物（ジョッフルとヒンデンブルグ其他）

戰爭は一種の防腐劑

『國治つて武夫の忠も武勇も隱るゝは、譬へば星の晝見えず夜は亂れて現はるゝ、例をこゝに假名書きの……』とは、假名手本忠臣藏の劈頭第一の文句であるが、今度の歐洲大戰も亦光あざやかな幾多の星を見出したのである。お濠の水は腐る如く、平和は人間を腐らせる。戰爭は一種の防腐劑である、否淸涼劑である。長袖緩帶は『平和』の裝飾には適當かも知れぬが、人間と人間、國民と國民が、其のあらゆる力を傾け盡して赤裸々の鬪爭を試みる時、そこに新しい『戰爭の人』が現はれて來なければならぬ。

歐洲大戰始まつて以來方に三年有半、海に陸に戰度か戰爭は起つた、幾十萬の生靈は失はれた、或は國土を喪つた不幸な國民さへある。而して大戰の局に當る人物も、

文と武とを問はず新陳代謝して、新しい名は屢〻吾等の耳に頣いて來る。併しそこに現はれて來る卓越した人物は孰れも『決心の人』でなければならぬ、『熱誠の人』でなければならぬ。所謂才子や所謂敏腕家は、みな『戰爭』の一大威力の前に吹飛されてしまつたのである。

政治の主腦と軍事の主腦

獨逸は戰爭に於いて殆ど常勝であつた爲め、國內民心の動搖も少なく、能く擧國一致の籠城戰に耐へて居るが、それでも宰相以下の大臣には屢〻交迭があつた、多年宰相であつたヴヱートマン、ホルウヱツヒが罷めて、ミハエルスが代り、次で又ヘルトリングが代つて宰相となつた。冷靜にして物に動ぜぬ遲重な英人も、アスキス內閣の生溫い遣り方に慊らないで、ロイド、ジョージ內閣の出現を見ることゝなつた。佛國は固より文武官には著しく隆替があつた、大統領は依然としてボアンカレーであるが、內閣は

ヴィヴィアニから、ブリアンへ、ブリアンからリボーへ、リボーからパンルヴェーへ、パンルヴェーからクレマンソーへと四度變つた。又軍人の方では獨逸は相變らずヒンデンブルグ元帥を主腦として居る。英國では陸軍はキッチナー元帥横死して後、フレンチ元帥からヘーグ元帥へと移り、海軍はジェリコー提督が艦隊司令長官から軍令部長に轉じユトランド沖大海戰の猛將ビーッチー提督が代つて艦隊司令長官となつた。但し最近にジェリコーが罷めて新進の人が之に代つたのである。佛國では開戰當時ジョッフル中將（今は元帥）が參謀總長として、佛國東北戰線の總司令官となつたが、次いで佛國全軍の總司令官となつて、佛國の安危を雙肩に負うて居た。然るに將軍は其後、一九一六年十二月に元帥に進むと共に、ヴェルダンの防戰に勇名を轟かしたニヴェーユ將軍が之に代つた。

固より此等文武高官の更迭は、或る意味に於て新陳代謝の必要上結構なことかも知れないが、國政の衝に至る主腦人物が度々更迭することは、軍國多事の際決して慶す

べきことであるまい。殊に佛國內閣の更迭が最近に如何に頻々として起つたか、バンルヴェー內閣の如きは僅かに一ヶ月と十日しか保たなかつたことを考へれば、佛國々內の擧國一致に多少の動搖があつたことを拒まれないであらう。今度代つた首相クレマンソーは以前から獨逸反對の老勇將として知られた人、今後の佛國が戰爭目的を達せん爲めの努力は、必ずや目覺しいものがあらう、否目覺しいものがなければならぬ。

靴屋から出世したロイドジョージ

そこへ行くと、英國は一九一六年十二月ロイド・ジョージが首相となつて以來、彼は恰も軍國の宰相として獨舞臺を背負つて立て居る觀がある。『紳士』の語が貴ばれる英國に於て彼は決して『紳士』ではない、靴屋の職工から立身した彼は、自由黨の猛將として議會場裡に奮鬪したが、一九一五年軍需大臣となつて以來、益々鐵腕を揮ひ、更に首相となつてからは事ある度毎に『戰爭目的の達成』と『獨逸軍國主義の打破』

とを叫んで、『自由』と『個人主義』の英國とを着々軍國化して居る。新聞紙上を見ても分る如く、ロイド・ジョージ程長廣舌を揮つて、軍國の宰相の特色を發揮して居るものはあるまい。彼は米國の學者大統領ウィルソンなどよりは遙に態度が簡明直截である。併し餘り長廣舌を揮ふ爲めに、ウッカリ口が滑つて屢〻物議を醸すこともある。併し戰爭目的を貫徹せん爲め軍國宰相としての彼の態度と手腕とは極めて鮮やかなものである。但し彼が獨立獨歩の有様で、手腕の人として又口舌の人として、目的に向て一氣に邁進して行く態度は、一部の英人には少からぬ反感を起さしめて居る。或者は彼を呼んで民主的專制君主と云つた、又或者は自由黨の出身で居ながら專制と壓服とを行ふ自由主義の叛逆者とまで叫んだ。今後戰況が英國に取つて有利でない場合でもあれば、彼の御得意とする獅子吼も空しく『長廣舌』に終るの憂はないであらうか。

それは兎も角、現代戰爭が生んだ最も色彩鮮明の明星は、彼れロイド・ジョージでなければならぬ。一部の英人は彼はジェントルマンではなく、たゞのマンであると惡口して

居るさうであるけれども、大敵獨逸を打倒さん爲めには、悠長な貴族的態度は決して戰時の空氣と一致しないものである。孰れにせよ快男兒ロイド・ジョージの健在は英國に取つて確かに强味である。併し先頭の講和問題に關する彼の演說を見ると、例の獅子吼も少し勢が弱いかの觀がある。若し彼の態度にして多少なりとも妥協的に傾いたとすれば、英國の內部にも平和論が漸く勢を得て來たのではあるまいか。ともあれ、ロイド・ジョージは今尙ほ健在である、吾人は彼が英國の爲め、否、世界の爲め光榮ある平和を成立せしむるの日あるを期待するものである。

軍神ジョツフルの進退

英國の政界は兎も角ロイド・ジョージの鐵腕に依て纏められて居るが、佛國は前にも述べた如く、政局の變轉實に著しいものがある。しかもそれが近來同國の有力者中に不都合な行爲をする者が少くない結果だとか云はれるのは、佛國の爲め遺憾に耐へな

い次第である。但しクレマンソーが出馬することになつたから佛國今後の形勢は左のみ悲觀するに及ばぬかと思はれる。併し佛國民上下の信望を一身に集めて、佛國の軍神とまで仰がれたジョッフル元帥が、國軍總司令官の地位を去つて閑職に就いたことは甚だ物足らぬ感がせられる。

固より後任としてはニヴェーユ將軍が代つた、是は新陳代謝の意味に於て慶賀すべきことであらう、而してジョッフルは從來中將であつたのが、總司令官を罷めると共に元帥の榮職に昇せられた。他國では元帥は多くあるけれども、佛國は共和政府以來軍人が政界に跋扈することを恐れて、元帥を置かないこと既に三十餘年に及んで居る。然るに今やこの慣例を破つてジョッフルを元帥に任じたのであるから、佛國としては破天荒のことでジョッフルの偉大なる勳功に對する至當の酬ひと云はねばならぬ。併し一派の說に依ると、元帥の榮職は誠に結構であるが、それはジョッフルを敬遠したに過ぎないので、彼の威望が上下に遍くやがては政治上にも權勢を揮ふに至らんかを恐れた結果、

彼を實戰の重要地位より退けて、元帥に祭り込んで了つたのだとも云ふ。果して眞か否か若し眞とすれば佛國の爲め不幸のことと云はねばならぬ。

輿望を一身に負うたヒンデンブルグ

ジョッフルに比すればヒンデンブルグ元帥が、一昨年以來獨逸の參謀總長として、日夜畫策を怠らず、獨逸陸軍の爲め益〻重きをなしつゝあるのは、敵ながらも何となく賴もしい觀がせられる。今度の大戰では佛國も獨逸も、幾多の名將を出した。マルヌの大會戰や、ヴェルダンの要塞戰は、佛國陸軍に多くの新しい將軍を輩出せしめた。ヴェルダンの防禦に大功を奏した今の參謀總長ペタンや、ニヴェーユや、フォッシュや、カステルノー等數へ立てれば際限がない。獨逸にあつても同樣、マッケンゼン、ファルケンファイン、ルーデンドルフ、クルック諸將軍の名は、現代戰爭の花形役者として謠はれて居る。併し佛のジョッフル、獨のヒンデンブルグ兩元帥ほど、國民上下の輿望を一

身に集めたものはあるまい。

ヒンデンブルグは開戰以來遽かに有名となつた、今や彼は獨逸人殊に少年の崇拜の的となつた、彼の名は恰も武將としての淸正の名の如く、獨人の頭腦に響いて居る。開戰後間もなく伯林ではヒンデンブルグの大木像が造られた、而して有志の人々は金を納めて、その巨像に釘を打込んだ、鐵釘一本二圓五十錢銀釘一本五圓を納める。但しそれ以上納めても毫も差支ないのであつた。是れ戰時寄附の一種でその金は軍費として寄附されたのである。處がその巨像は僅かの間に全身釘で埋められて了ひ、而して之に依て莫大の金子を募集することが出來たが、此の一話を見てもヒンデブルグの人望の大なることが察せられよう。佛國に於けるジョツフルの人望の恐しいことも決してヒンデンブルグに劣らない、彼は一般佛人から『祖國の權化』なりとまで崇められた、彼が敬遠されて元帥に祭り込まれたと云ふ評があるのを見ても、其の人氣の素晴らしかつたことが分るではないか。

佛國を救うたマルヌ戰

ジョッフルの偉大なる勳功は、まづ第一にマルヌの戰捷でなければならぬ。一九一四年九月白耳義を蹂躙した獨軍は潮の如く佛國に侵入した、都の巴里も危いと云ふので政府はボルドーに移轉した。此の一大危機に處してジョッフルは毫も狼狽しなかつた、國内に獨軍が侵入するのを强ひて防ぎ止めもしないで、ドシ〳〵佛軍を退却せしめた而して勝に乘つて追擊して來る獨軍の右翼が旋回した際、味方の左翼に優勢な新兵力を集中して敵の右翼を包み、又敵の中堅に裂隙を生じた處に猛擊を加へて左しも勝誇つた獨軍に致命傷を與へ、遂に之をエイヌ河の線に退却せしめた。以後西部戰線には兩軍の間に幾度か、進退があり、勝敗があつたが、大體に於て西部戰線の狀況はマルヌの一戰に依て決せられた。この戰爭に依て佛國は全く困難から救はれたのである。國人がジョッフルの勳功を謳つて已まないのも當然である。單にそれのみでなく其後

其二年半の間ジョツフルが軍總司令官として日夜活動したことは非常なものであつた。

ジョツフル元帥の面目

ジョツフルは開戰以來絶えず戰線を巡視するを怠らなかつた。朝夙く起きると間もなく彼は味方の陣地を巡回する爲め出掛けて行く、この場合は多く自動車であるが、徒歩のことも少くない。彼があのドツシリとした體軀を運ぶ其の歩みは如何にも確かなもので、其の健脚は屢〻部下の參謀官をも閉口させる程である。彼が開戰以來二ヶ年間に自動車で巡回した道程は、約十五萬キロメートル即ち三萬七千五百里に及ぶと云はれて居る。之を一ヶ月にすれば平均千六百六十二里、一日に割つて凡そ五十二里、隨分と長い旅行ではないか、しかも著しい疲勞を感じた樣子も見えないと、彼の健康の偉大なことも之に依て察せられるのである。戰線巡回の外、軍總司令官としての彼が如何に多くの仕事を有して居るかは、推察に餘ある次第であるが、彼の食事を見て

も其の一端は窺ふことが出來る。彼は食事をするに場所と時間を選ばない、何時でも又何處でも食事をする。而して食事の時間は決して十五分以上を費さないさうである

彼は又軍人として虛飾は大嫌である。其の一端は次の話でも分る。彼は部下の將校から提出される報告に對しても、其の極めて簡明正確なことを要求する、若し形容詞澤山の報告にでも接すると非常に御機嫌が惡い。彼は容易に怒らぬ質であるけれども、この形容詞ほど彼を怒らせるものはない、而して彼は常に云ふのである『ソンな事は平和の時の話だ』と。彼は夜遲くなつて一日の仕事を終ると參謀連と共に晩餐を遣るが、その時は戰爭のことは全く忘れたかの樣子で、たゞモウ一箇の好々爺となつ面白く快濶に談笑する、此の老人が猛威を逞うする獨の大軍を引受けて、祖國の爲めに彼の長い戰場を守つて居る總司令官とは思はれないさうである。彼は大食はするけれども酒も嗜まず煙草も好まない、併し滑稽新聞を見るのは大好物で、自分を題材にしたポンチ繪などを見出すと大悅びである相だ。祖國防衛の大任を双肩に負つて、人間以上の努

力を餘儀なくされて居ると云ふ六十五六の老將軍と、滑稽新聞のポンチ繪と、何と興味ある對照ではないか。

沈着剛毅のヒンデンブルグ

陣中多忙なことゝ、質素な點に於ては、ヒンデンブルグも決してジョッフルに劣らない。陣中の日課の如きは今茲に煩を厭うて略するが、要するにジョッフルの勤勉勵精と相似たものとも云へよう。玆に看過し難いことはヒンデンブルグが軍司令官として陣地にある際、其の日課を能ふ限り平常の場合と同一にして居ることである。戰場であるからと云つて、遽かに平常と異なつた齷齪した生活をしないことである。事情の許す限り一定の時間には散歩もする、其他食事も就眠も出來るだけ平常と異ならぬ樣にして居る、而して戰爭のことを全く忘れた樣子で心靜かに精神を養つて居る、朝は大抵六時に起き、朝餐を終つてから始めて仕事に就く、それは陣中も平時も同樣であ

る。夜は幕僚と晩餐を共にして罪のない諧謔に興することもジョッフルの場合と同様である。一言にして之を蔽へば彼は極めて落着いて居る。戰況が急に變化して將士が周章て騷ぐ時、彼は冷然として顔の一つの筋肉すらも動かさない、恰も身戰爭の渦中にあるを忘れたかの觀がある。此の落着きこそ一軍の主將として最も肝要な資格である。之に就てはジョッフルにも一つの話がある。或時西部戰線で佛軍の戰線が動搖して非常に危險に陷つた時、ジョッフルの許へは戰報櫛の齒を引くが如く遣つてくる、參謀連は蒼皇として右往左往する、電話係りは眼の廻る樣に忙しい。その時老將軍はしばらく默考して居たが、やがて口を開いて徐ろに云つた、幕僚連はいづれ重大な命令であらうと思つて、耳を澄して聞けば、『マア飯でも喰はうよ』と云つて、ジョッフルは食堂へ行つてしまつたと云ふ話がある。

この餘裕この落着きこそ、彼が將軍として大をなす所以である。

恐ろしい仁王と懷かしい老爺

荒削りの仁王の如き武骨一點張りのヒンデンブルグは、外見上に於ても獨逸軍人の典型かとも思はれる。長大の體軀、四角張つた顔、睨み附けた樣な恐しい眼光、釣上つた太い眉毛、叩き附けた樣に平たい後頭部、太い襟首、いづれも優れた健康と體力とを示して居る。要するに總べてが獨逸式であり、軍人型である、如何にも三軍を叱咤すべき武將と思はれる。之に比すればジョッフルの外見は何となく優しい老爺の趣がある、武將でこそあれ、彼は南方生れの佛人である、ヒンデンブルグの如き頑固一點張りの人間の多い北方普魯西の產ではない、其處に佛人としての床しさが偲ばれる次第であらう。ジョッフルは肥大の體軀ではあるが、容貌に於てはその眼ざしは恐しきよりも懷しさに富んで居る。ヒンデンブルグの輪郭は四角であるが、ジョッフルのは圓い。たゞジョッフルの特色は房々と垂れ下つた白い眉毛と、便々とした大きな腹が前に突

き出て居ることであらう。其の眉毛に隱れた眼ざしには云ひ知れぬ深さがある、又其の便便たる大腹には一國の國防を負うて立つべき、十分の力を藏して居る如く見える彼の自信、彼の力、彼の勵精、而して彼の捷利、いづれも彼の巨腹に藏されて居る。吾人は寫眞を見て彼の巨腹に接する每に、何となく心强い感が起らざるを得ないのである。

併しヒンデンブルグもジョッフルも決して才の人ではない、俊敏と云はんよりは寧ろ遲重である、但しいづれも意志の人である、强い確信を持つた人である。軍國の人物として彼等が重きをなすは此の點に存するのである。現にマルヌ會戰の際獨軍右翼の旋回を探知して、遽かに攻勢に移轉する際、夙くも此の形勢を看破したのは、ジョッフル自身ではなくガリエニ將軍と巴里の市長とであつたと云ふ。併し此の如きことは軍の總帥たる、ジョッフルの價値を毫も減ずる所以ではないのである。又ジョッフルは決して傲慢の質ではなく、何人にも能く接するのであるが、所謂交際上手ではない。之

が爲めに國人の同情を得られなかつた場合もあつたさうである。

ヒンデンブルグも亦沈默で無愛想な一人である、彼が二十年以前オルデンブルグの聯隊長であつた時のことゝ思ふ、一日該地方知名の士が集つて詩の會合を組織した。而してヒンデンブルグに彼も亦該地第一流の人物であるから、會の幹事になつて貰ひたいと申込んだ。處が彼は曰く『予は軍人である、詩に關しては何等の理解をも持たない、然るにかゝる會に名を列することは虛僞に外ならぬ、自分は今戰術の研究に沒頭して居る、他を顧るの暇がない』と云つて、不愛想にも拒絕してしまつたことがある。

兩元帥の生ひ立ち

さて最後に兩元帥の略歷を述べて此話を終ることゝする。

ジョッフル元帥は一八五二年一月西班牙國境に近い地方で生れた、今年丁度滿六十六

歲である。一八七〇年彼の有名な獨佛戰爭の際には彼は夙くも少尉として從軍したが戰功に依て中尉に進み、二十四歲の時には既に大尉に任ぜられたのである。彼は又極東にも關係がある。一八八四年即ち彼が大尉の時、佛國と支那と戰端が開かれて、クールベー提督が臺灣を攻めた時彼も亦臺灣に上陸して戰つたことがある。それから軍人として種々の經歷を重ね、遂に一九九一年即ち六十歲の時參謀總長に任ぜられ、一九一四年の開戰に際して佛國東北部の軍司令官となつた。而してマルヌ大會戰以下の諸戰に偉勳を奏し、次で佛國軍全體の總司令官となつたが、一九一六年末、元帥に榮轉し總司令官を罷めて、陸軍々事顧問竝に列國軍事會議の委員長となつて、現に目下は比較的閑職に居るのである。

ヒンデンブルグ元帥は一八四七年普魯西のポーゼン州に生れた。今方に七十二歲の高齡である。彼は士官學校を卒業して少尉となつて近衞聯隊に入つたが、一八六六年の普墺役及び、一八七〇年の獨佛戰爭に從軍して功を立てた。而して以後軍人生活を

遂つて、一九一一年即ちジョッフルが參謀總長となつた年に、彼は陸軍大將となつた。而して休職となつたのであるが、現戰爭開始と共に拔擢されて東部の司令官となつた、開戰後間もなく彼は東普方面に向つて、そこに侵入した露軍を追拂ひ、タンネンベルグで非常の大捷を博した、之に依て彼の武名は遽かに高くなつた、彼が元帥に任ぜられたのも、此頃であつた。

其後彼は主として露西亞方面の戰線に向つて居たが、遂に參謀總長ファルケンハインと更迭して、彼が愈〻參謀總長となることゝなつた。この更迭は一九一六年に獨軍のヴェルダン攻擊が失敗し、又ルーマニヤが聯合側に參加したこと等の爲め、獨帝は民心の動搖を防ぐ爲め、武名嚇々たるヒンデンブルグを參謀總長に任じたのであつた。而して彼は今も尙獨逸全軍の畫策を掌つて居て、軍人派の代表者として、常に强硬なる意見を主張して居る。

今やヒンデンブルグは多數の獨軍を西部戰線に集中して、春に近づく頃英佛軍に一大打擊を與へる決心らしく思はれる。而して嘗て獨軍をマルヌ河畔に擊破した佛國陸軍の首腦ジョヨッフルは、もはや總司令官たる重要の地位を去つてしまつた。此際多少の感なき能はずである。

（大正七年二月）

獨逸皇太子（青年の爲めに）

吾儘乎果斷乎

寫眞で見ても分る通り獨逸皇太子は瘦せたヒョロ長い軀で、胸や胴も狹く、決して强健な質とは見られない、たゞ怜利な機智に富んだ青年とのみ思はれる。併し實際は非常に運動好で殊に尙武の氣象に富み、獨逸軍人から少からぬ尊敬を受けて居ると聞いては、人は實に見掛けに依らぬものである。世界を震憾しつゝめる歐洲の大戰爭―其の大戰爭を一人で背負ふて立つた樣な觀のある獨帝、否獨逸國民の奮鬪は確かに目覺しいものに相違がない、彼のヒョロ長い花車な貴公子姿の皇太子も、矢張り其の目覺しい奮鬪の著しい部分を擔任して居るのである、彼は少年時代から身を軍籍に置いて近衞聯隊の將校となつて居たが、頗る馬術に長じて屢冒險的な乘馬を試みる相である。而して彼は自から一隊の龍騎兵の先頭に立つて、得々としてポッツダムの宮殿の階段を

上下すると云はれて居る。嘗て危險な野外競馬に加はつて賞を得たことがあつたが、父の皇帝の怒に觸れて謹愼を命ぜられたことがあつた。又誰人の許可をも得ないで、ツェペリンの飛行船に乘つたこともある。孰れにせよ彼はジッとして居ることの出來ぬ質で、常に何か活動して居なければ承知が出來ない。併し又我儘な貴公子の特色を現して、自分勝手に思ふまゝのことを仕出來して、父帝の不興を買つたことも少くない固より無能の豚兒ではないが、遣り過ぎて不始末を惹起す弊を免かれないのである。彼を惡口するものは、遊び好きの荒々しい貴公子、傲慢にして徒に大言壯語する我儘な坊チャンなどゝ罵倒するが、又一部の人からは果斷に富んだ有爲の皇太子として、獨逸帝國の武威を輝かすべき未來の皇帝として崇拜されて居るのである。

他人の意志を顧みざる武斷主義の人

一昨年サラエボで横死を遂げられた墺國皇太子フェルヂナンド大公は、有爲の質で墺

國將來の興隆は此人に俟つ所が多いとて囑望されて居たが、獨逸皇太子にも此の趣がないでも無い。殊に兩皇儲とも軍人に擁せられて、武斷主義の人たるに於て一致して居る。獨逸皇太子が有爲の人物であることは、其の地位が自から然らしめるのであらうが、少くとも彼が碌々の兒でないことは明かである、一九〇五年、二十四歳で彼は結婚したが、其の妃たる獨逸メクレンブルグ・シュウェリンの公女セシリアは、實に彼が自身で選擇したのであつた。ともかく彼には一種の强い自信があつて、他人の意志に關せずドシドシ事を斷行するの勇氣がある、從つて屢父帝の不興を買ふことを免れない。例へば一九一一年モロッコ事件の喧しかつた時、主戰黨の面々は議會で政府の腰の弱いことを攻擊したが、當時皇太子は片田舍のダンチッヒの騎兵隊に大佐として左遷的に遣られて居たが、議會の喧しいことを聞くや、彼は無斷でダンチッヒから議會に來て、主戰黨の演說に同情を表したのである。又一九〇七年彼の雜誌ツークンフトの主筆として有名なハルデンが、獨帝の寵臣として帝の左右に待した一團の內で、オイレ

ンブルグ公とモルトケ伯とに對し惡評を加へた時、當路の人々は其の記事を祕して皇帝の眼に觸れしめなかつたが、皇太子は父帝の機嫌を損ねることを顧みないで、斷然其の記事を皇帝に示したのであつた。此等は彼の確かに凡庸兒でない證據であらう。

相反せる兩面の性質

彼が軍人黨の中心となつて戰爭主義を鼓吹したことは人の知る處であるが、彼の周圍には主戰論者が多く集つて所謂皇太子黨を形成して居り、獨帝が平和的の政策を行ふとすると常に之に反對するのである。從つて獨帝父子の間柄が圓滿でないといふことは、戰爭前に屢々唱へられて居た。英人の如きも獨逸が軍國主義を鼓吹して世界に不安を釀す、其の中心は獨帝よりも寧ろ皇太子であると云ふ程である、彼の有名なツァーベルン事件の際、卽ちエルザス州ツァーベルン市で同市駐在の獨逸將校が佛國生れの同市民某を斬つた爲め、非軍人黨が政府を猛烈に攻擊した時、皇太子はツァーベルン

の將校に電報を發して『遠慮なくドシドシ遣るべし』と云つた、次で同事件が軍人側の勝利に歸した時、更に電報を送つて『萬歳』と叫んだ、此等の點から考へると彼はナカナカ惡戲好と見えるが、又反對黨の者に電報を發して其の好意を買ふ樣な味なことも遣るのである。父帝も南阿戰爭の際トランスヴァール大統領クリューゲルに電報を送つて、世界の耳目を聳動させたこともあり、又日露戰爭の時には旅順口の攻圍軍司令官たる乃木大將に勳章を贈ると共に、防禦軍司令官たるステッセル將軍にも勳章を贈ると云ふ一寸面白い直似をしたが、皇太子も亦父帝に似た點があると云ひ得るのである。又彼が國民から賞讃されて居る點は、邁往直進を事とし簡潔明快を貴ぶ軍人氣質を備へた故のみでなく、尙父帝が毛嫌ひして居る社會黨に對しても時として好意を示すことがあり、まゝ平民的な態度を取つて庶民と伍する例も少くないからであつた。

死傷十萬のマルヌ敗北戰

此の如き性質の皇太子は今回の大戰爭が破裂する以前に、筆を執つて頻に主戰熱を煽つたのみでなく、諸方に奔走した其の努力は決して尠少なるものではなかつた。例へば開戰に先だつこと數ヶ月、獨帝が墺帝及び墺國皇儲と會見して、世人をして怪訝の念に耐えざらしめた時、皇太子は參謀旅行と稱して幕僚を隨へて、獨佛の國境に自働車旅行を試みたのである。さればいよ〳〵開戰となるや、彼は獨逸の第五軍に將として、メッツからヴェルダンの北方に侵入するこゝとなつた。之を考へても獨逸が開戰の準備に怠らなかつたことが察せられやう。然らば開戰後彼は如何なる活動をなしたか。戰將としての彼の價値は明らかでない、世評に依れば彼は血氣に逸る若武者の例として、徒に無理な戰爭を遣つて人命を損するに過ぎなかつた樣である。但し一九一四年九月六日から七日に至つたマルヌ河の大會戰で、彼の軍が敗北したことは、單に彼のみの敗北でなく、實は獨軍全線の退却であつたので已むを得ないことゝ思はれる。

マルヌ河會戰の時、獨軍は退却に退却を重ねた佛軍を急追し、其の中央を突破して

大打擊を與へる策を立て、ヴェルダンと巴里兩要塞の中間地帶に五軍の大兵團を突入せしめんとしたが、此時マルヌ左岸の地に足場を定めた佛軍は其の左翼の優勢なるを利用して、獨軍の右翼クルック將軍の兵團を側背から威嚇した爲め、獨軍の右は支え切れないで形勢頗る不利に陷つた。夫にも拘らず獨軍は佛軍の中央突破を企て、猛烈な進擊を斷行したのであるが、佛軍の爲め擊退され、殊に右翼軍の敗退の爲め、之に連繫して獨軍全線に亙りエイヌ河の線まで總退却を行ふことゝなつた。此の戰の際皇太子の第五軍は重要な地位に立つたもので、若し佛軍突破策が功を奏した曉には、皇太子は彼の有名な『死人頭』驃騎兵の服裝堂々と陣頭に立つて、巴里進擊の花々しい役目を承つたことゝ思ふ。獨帝は彼に此の重任を託し其の成功に依て、國民の間に皇太子の信任を增さしめる考へであつたと云はれて居る。併しマルヌの進擊は獨軍の失敗に歸し、シャロン方面から猛烈な進擊を試みた皇太子軍は、優勢な佛軍の逆擊に逢つて、森林の多い凹凸定まりない困難な地域を急に退却することゝなつた。殊に雨天と夜間

との爲め其の退却は實に悲慘を極めたもので、三十秒間に砲彈三十發を放つたといふ佛軍砲兵の猛射と、步兵の急進とに依て、皇太子軍は死者二萬、傷者八萬といふ大損害を受けたのである。

ヴエルダン要塞戰と獨逸皇太子

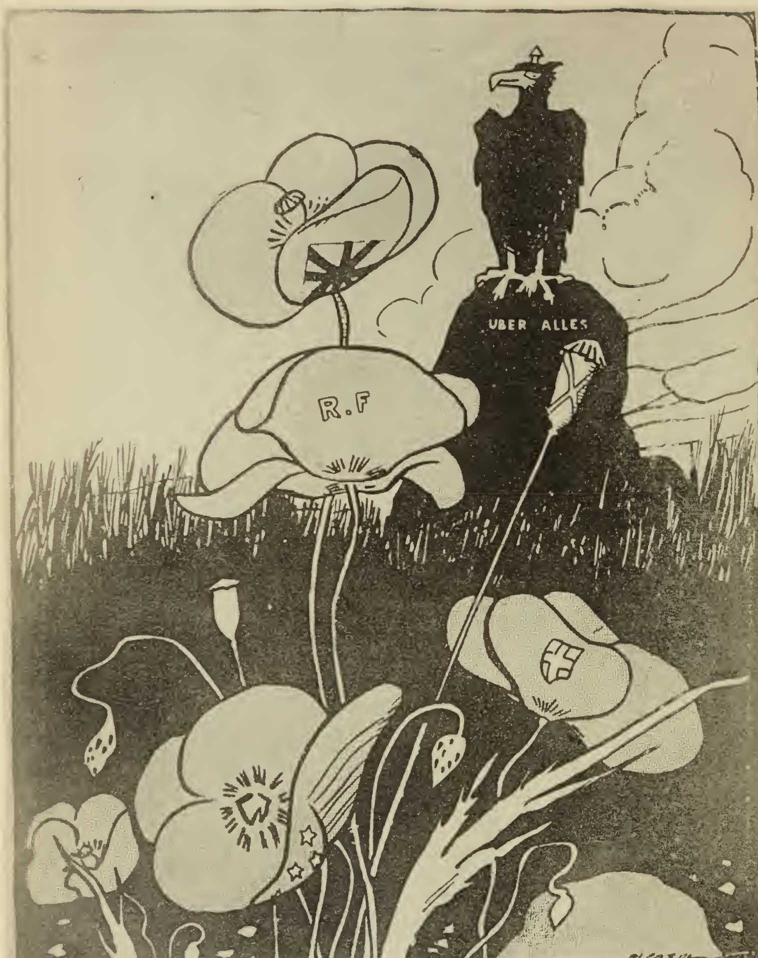
其後皇太子の活動は暫らく聞かれなかつたが、最近二月下旬に至り皇太子は五十萬の大軍を率ゐ、ヘセレル將軍の幇助に依り彼の大要塞ヴェルダンの攻略を企てた。其猛烈果敢な攻擊に依り獨軍は屍の山を築いても、辛うじて要塞線の一角を奪取したが、其後兩軍の間に屢爭奪戰が繰返されるのみで著しい變化は示されない。然るに間もなく皇太子は召還されて、ウュルテンベルヒ王子が之に代つたとの噂がある。是は皇太子の主張した强襲策が失敗した爲であるか否か判然しない。併し獨軍は更に大準備を整へて彼の大要塞を陷れて、西部戰線に決勝的の大戰を捲き起すに相違ないと推測されて

居る。ヴェルダン要塞の運命は分らないが、此の方面の戰爭は皇太子と緣が深いのであるから、いづれ戰爭好きの皇太子は、再び活動を試みることであらう。

此くして獨逸皇太子は戰爭を以て生命とし、勇武な軍人氣質を發揮して居る。併し將來獨逸皇帝として帝國の興廢を一身に負うて立つの時、彼は單に好戰王たるに止ることは出來ない。若し好戰王たる彼が我意のまゝに獨逸帝國を支配するならば、それは彼一身の不幸のみでなく、實に獨逸全帝國否世界の不幸である。彼は單に我儘の貴公子のみでない、今回の開戰は獨逸皇帝よりは寧ろ皇太子に多く責任があるとさへ云はれて居る。彼の相棒たるべき墺國皇儲フェルヂナンドは横死を遂げたが、彼は野心に富んだ三十五歲の壯者として活動して居る。併し將來獨逸の指導者たるべき皇太子として、彼が幾多の反省を要することは勿論であらう。恰もビスマルクに比較して現皇帝の缺點が認められる如く、現皇帝に比較して皇太子の短處が窺はれるのである。

かくして諸子も亦必らずや獨逸皇太子の上に就て、諸子自身の學ぶべき長處と反省すべき短處とを見出さるべきであらう。（大正五年四月）

獨逸の誤算



鷲(獨逸)が一度野の花を枯らしてしまつたと思つたら、直に又美しい花(聯合側)が前にも増して美しく咲いて來た、

人は能く獨逸を軍國主義の國だと云つて居る。成程陸軍の精鋭は其の誇る所であるかも知れぬ。又軍人の尊敬されることの最も著しい國家であるかも知れぬ。併し軍國主義の國だからと云つて、國民のすべてが軍事にのみ呑み込まれて居るものと解してはならぬ。卽ち戰爭一點張り、軍人萬能主義、何か事があるとすぐサーベルを振り廻す國民と見てはならぬ。獨逸の軍國主義と云ふのは、國家社會の諸機關を戰時の必要に適合し得る如く、平時から準備して置くのが特色なので、決して平時から莫大の費用を軍事に投じて居ると云ふ意味ではない。卽ち平時に於ける平和的設備が、戰時になると直に戰時の必要に適應することの出來る準備が出來て居る。此の意味に於て獨逸の軍國主義は世界に冠たるものと云つて宜しい。

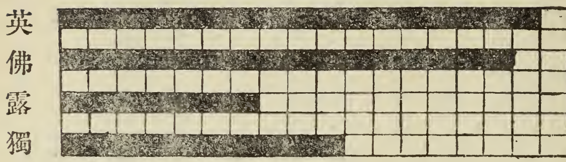
繪入統計—世界の現勢

(一) 歐洲列強の軍事費

今軍事費（戰爭前）の狀態に就て見ると、獨逸の軍事費が近年非常に增加して來たことは事實で、其の點は著しく目につく次第である。卽ち獨逸で軍事が重要視されて居るのは無論のことであるが、併し軍事費の全額は左の諸國よりも少なく、且つ國家の全歲出入との割合も獨逸は英佛露の以下にあるのである。又國民一人の負擔を見ても英佛兩國人の負擔よりは輕いことが分る。又敎育費を見ると普魯西だけの敎育費でも全帝國軍事費の半分以上を占めて居る。英國の敎育費は其の軍事費の四分の一位に過ぎず、佛國の敎育費は同軍事費の四分の一位に過ぎない。獨逸の强大は敎育の賜物であると能く云はれるが、成程と肯かれる次第である。吾人は獨逸を軍國主義の國家と稱するのは宜しいが、併し之を軍事熱に浮かされた國家と云ふ意味に解してはならぬ。其の一例として玆に軍事費に關する統計を示した次第である。

歐洲強國の陸海軍費

國民一人の負擔額(單位圓)



(開戰前) 極めて概數を示す

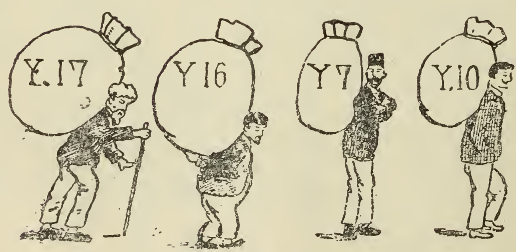
各國共に國家組織、財政制度を異にするを以て、正確なる意味に於いて比較は殆ど困難である、たゞ極めて概括的な傾向を示しただけに過ぎない。

	全歳出	との割合	國民一人の負擔額
英	八〇〇百万円	凡三〇%	凡一七円
佛	六八七	凡三五%	凡一六
露	一、〇五九	凡三〇%	凡七
獨	六〇〇	凡四〇%(帝國財政のみの場合) 凡一三%(帝國財政、聯邦財政合算の場合)	凡一〇

* * * * *

(參考) 日露戰役頃の情況

英	六八五百万円	凡三〇%	一六円
佛	四一〇	二九%	一一
露	五九一	三〇%	六
獨	四六〇	一六%(帝國財政、聯邦財政合算の場合)	八

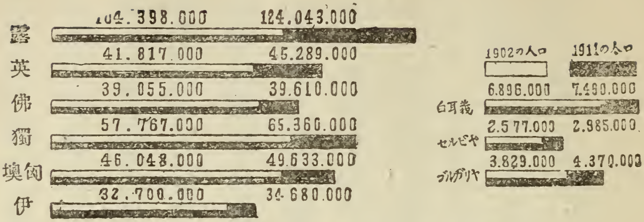


獨逸　露西亞　佛蘭西　英吉利

（二）歐洲諸國の人口增加率

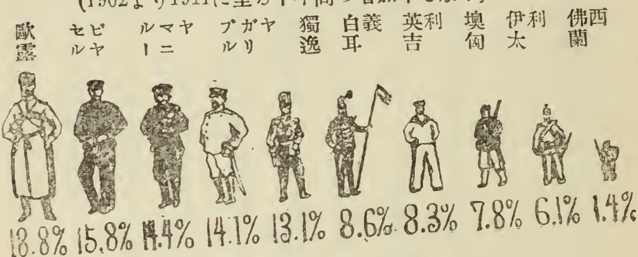
歐洲列强の人口は、其の絕對數から云へば無論膨大なる露國が第一で、以下獨、墺匈、英、佛、伊等の順序で、白耳義、セルビヤ、ブルガリヤの如きは、やがて以上諸國の十分一位なものである。併し國民の力は單に人口の多寡のみでは定まらぬ、假令人口は少くとも其の發達の勢の盛な國民は、最も將來に富んだ國民でなければならぬ是に於てか人口の增加率が大に注意を要する點なのである。固より大人口の場合と小人口の場合とでは、增加率が常に同一であることは困難で、小人口の方が增加率が多くなるのは自然の勢であらう。併しセルビヤ、ルーマニヤ、ブルガリヤの如き小國の人口增加率が他の大國を凌駕し居ることは、面白い現象で、殊に最近バルカン諸邦が自立の運動を起して、小國の價値決して侮るべからざること世界に示した事實を考へ合せれば、必しも偶然のことではないと思はれる。バルカンは歐洲の伏魔殿と云はれて居

(甲) 歐洲列强人口の増加



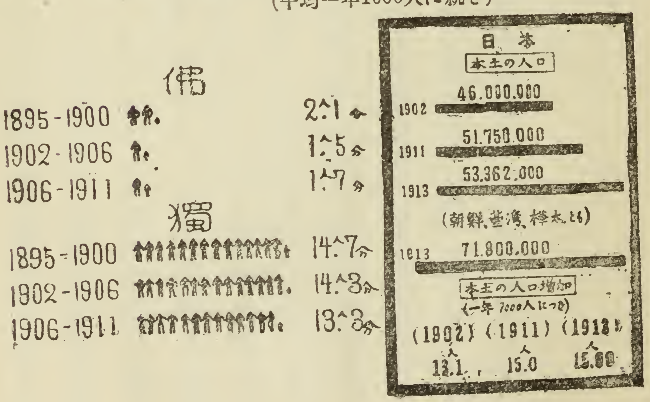
(乙) 歐洲列强人口増加率の比較

(1902より1911に至る十年間の増加率を示す)



(丙) 佛獨人口増加の比較

(平均一年1000人に就き)



るが、そこに將來有爲な國民が勃興したならば、歐洲の形勢はいかに變ずるであらうか。大國で人口增加率の多いのは露國を第一とし、獨逸が之に次いで居る。人口の點に於いて最も悲慘の情態にあるは佛蘭西である。其の人口增加率は如何に少いか。しかも增加率は年來減少しつゝあるので、出産數が死亡數に超過することは甚だ少い。近代獨逸の隆盛は人口增加が其の一因であるが、二十世紀に入つてから增加率は段々に減少に傾いて來た。最近に獨逸ではこれが大問題となつて、增加率減少の防遏は同國識者の頭を惱して居るのである。之に比較すると、最近に日本の人口增加率が著しく增加して歐洲列强を凌ぐに至つたのは、祖國の前途の爲め甚だ悅ぶべき次第と信ずるのである。日露戰爭時代には日本の人口は五千萬と云はれて居た、處が內地の人口增加や朝鮮等の領土が增加した爲め、最近では七千萬を越えて居る。今後日本はこの人口增加の趨勢を利用するに拙であつてはならぬのである。

(三) 歐洲戰局の趨勢

左に掲げた地圖は、歐洲西部戰線が過去一年間(一九一五年五月より一九一六年五月まで)に何程の變動があつたかを示したもので、太い點線と實線とが一年間の差を示すのである。之に依つて兩軍が一進一退共に大なる優劣の無かつたことが知れよう。此の如き僅かの戰線の變化に對して兩軍が拂つた犧牲は何程であらうか。それは次の表で知ることが出來る。兩軍の死者約四十三萬、傷者其他約百四十五萬、戰費合計約十六億圓、而して之に對する戰線の變化は圖の如き僅少の程度に過ぎない。之を以ても現代の戰爭が如何に容易のものでないかが悟られる。戰爭が單に君主や大名の爭に過ぎない場合には、甚だ簡單なもので其の期間も短かいのであつた。又ナポレオンの時代には一度び彼が敵地に侵入するや向ふ所敵なく、瞬く間に敵國を席捲し、更に急に軍を斑して戈を他國に向けると云ふ樣な極めて目覺しい働をしたのであるが、準備せられたる現代の戰爭は決して

一年間に於ける歐洲西部戰線の情況
(一九一五年五月より一九一六年五月まで)

戰線の移動



同上一年間の損害

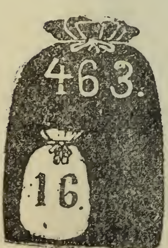


同上損失額と開戰以來損失額との比較

喪失兵力(單位千人)
(上段)開戰以來 (下段)過去一年間西部戰線に於いて



戰費(單位一億圓)(英佛獨合算)
(黑)開戰以來 (白)過去一年間西部戰線に於いて
(戰費に不明の點あれど姑く米人の調に從ふ)



此の如きことを許さないのである。蓋し現代戰爭は全國民の協力一致の下になされた眞の國民的戰爭であつて、又戰爭として最も組織的性質を發揮するに至つた故である。

又現代戰爭にて注目すべきことは、一度の戰ひに十萬二十萬と云ふ恐しい數の捕虜が出來ることである、日本人は之を聞いて西洋人の腑甲斐ないことを嗤ふのであるが、それは戰爭の大規模となつたことを知らぬ爲めではなからうか。西洋人が戰死を厭つて捕虜となると云ふ事情もあるであらうが、戰線が廣くなり軍の運動が大規模となつた爲め、軍の一大集團が知らず〳〵の間に捕虜となつて居ることがあるのである。

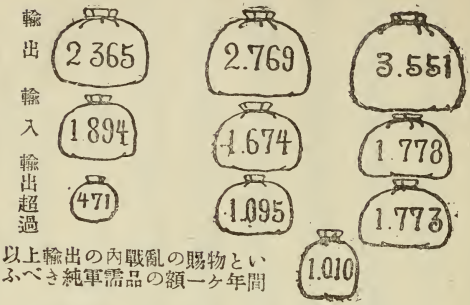
右の圖表を見て諸君は徒に戰爭の慘害を呪ふのみではいけない。想ふに將來の戰爭は必ずや此の如き國民的戰爭となるであらう。諸君は之に依つて戰時と平時とを問はず益擧國一致の決心を固めねばならない。

(四) 驚くべき米國の貿易額

歐羅巴は大戰亂の渦中にあること、もはや三年越しである。其のお蔭で米國から歐洲に輸入された軍需品其他の物品は遽かに著しい增加をなした。今や米國はドン〳〵大工場、大製造業を起して、戰亂に伴ふ莫大な需要に對して、ドン〳〵供給をなし、而して又ドン〳〵金を取り込んで居る。元來大規模なことの大好きな米國人――世界第一と稱するものは何でも米國から出さねば承知しないと云ふ、或意味に於て稚氣滿々たる、併し與國の元氣蔚然として昇天の勢ある彼等米國人は、此の古今未曾有の大戰爭に際して、ドレ程大規模な貿易を營んで、ドレ程莫大な富を握らんとしつゝあるか、而して之に比較して我が日本の貿易は、ドンナ狀況にあるか。次に揭げた表は卽ち以上に對する說明なのである。見給へ、開戰前一年の米國貿易は一ケ月平均にして輸出一億九千七百萬弗に對し、輸入一億五千八百萬弗、卽ち輸出超過約四千萬弗であつ

最近の米國貿易

(數字單位はすべて百萬弗)



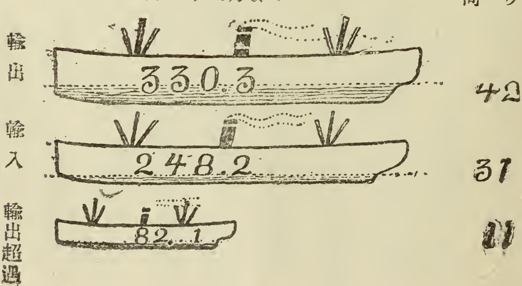
同上輸出先の割合



最近の日本貿易

1919一月より八月まで

同一ヶ月平均



たのが、一九一五年では一月平均にして、輸出二億九千六百萬弗、輸入一億四千八百萬弗、即ち輸出超過一億四千八百萬弗で、之を前に比較すると輸出超過は約三倍半に及んで居る。日本では一九一六年分の一月平均が輸出四千二百萬弗（八千四百萬圓餘）・輸入三千二百萬弗（六千三百萬圓餘）輸出超過一千一百萬弗である。之を米國に比して數字の上に夥しい差のあることが分らう。又輸出先では歐羅巴が開戰後著しく輸出額を增したのを見ても、米國の富が歐洲戰役の賜物であることは明瞭である。（而して米國貿易の順調なことは一九一六年から一九一七年に亙つて實に驚くべき有樣なのである）

此くして米國は益々富むのみであるが、今や彼は海軍擴張に熱中して、向ふ三年間に五億八千萬弗を投じて、戰艦十一隻、巡洋戰艦六隻以下大小艦艇百五十七隻の建造を決議したと傳へられて居る。歐洲の戰亂に乘じて急に成金の增加した米國が、近來軍備擴張熱に浮かされて來たのは、我々の輕々に看過し難い現象であらう。嗚呼、太平洋の波は長へに太平であらうか。

(五) 大英帝國の領土

英國の領土は五大洲に普く、其の全領土の上には日沒を見ると無しとは、英人の誇稱する所で、諸子もよく御存知のことであらう。然り世界に於ける英國の勢力は確かに偉大である。其の領土の全面積は全世界陸地の約五分の一を占めて居る。併し其の本國の大きさは僅かに英國全領土の百分一位に過ぎない。又人口から云へば、本國は全領土の約八分一である。此の面積人口共に少ない英本國が、廣大な海外領土を維持して行くことは、英人に取つて非常に重大な難問題であらう。此等の領土は無論統一されないで、其の重なものは自治を許されて居る。從つて本國と植民地との間には屢利害の一致しない場合が起る。目下大戰亂中であるから本國と植民地とは一致協力して居るけれど、何時如何樣な問題が起らないとも限らない。殊に全帝國人口の七割を占めた印度の如きは、屢不穩の態度を取つて、本國には頭痛の種となつて居る、實に

印度三億餘の人口の內英人は其の百分一位なものに過ぎぬのである。

是に於てか英國が、此の廣大な、併しながら分散した統御し惡い領土を維持せん爲めには、其の大海軍は是非とも缺くべからざるものである。英國が海上に覇を專らにすることが出來ず、ユニオンジャックの旗が、世界の海上から驅逐される樣なことがあつたならば、それは英國の滅亡である。植民地と本國との貿易は英國に取つて重大の意義あるものであるが、其の安全の爲めには大海軍がなければならぬ。若し海上の連絡を斷たれたならば、本國の民は早速餓死しなければならない。英國が近來獨逸海軍の發展を恐れて已まないのは誠に無理ならぬことなのである。

英國領土全體の統御が困難なのみでなく、英本國の內でも愛蘭の如き不統一の分子があり、又スコットランド人は英人の中堅たるアングロ・サクソン人とは、仲が善くないのである。此等の事情を思ひ合はせると、英國と云ふ一大勢力の立つて居る基礎は、甚だ不安定であるかの如くに思はれる。吾人は濫に英國の衰微を叫んではならぬ。併し

大英帝國の領土及び人民

I. 五大洲に普れき英國の領土

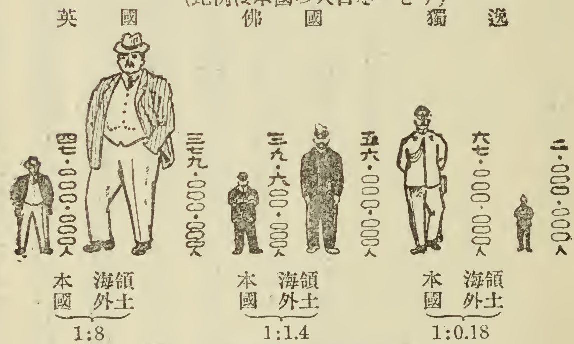


全世界の陸地55,640,000方哩 英國領土の全面積12,0000,000方哩 英本國の面積121,000方哩

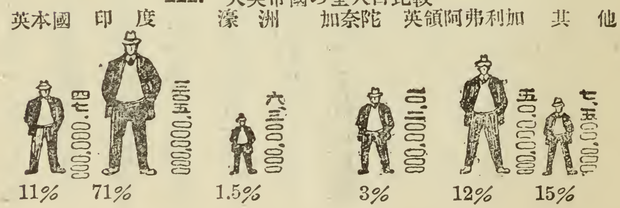
黒圏は英國領土

II. 本國と海外領土との人口比較

(比例は本國の人口を一とす)



III. 大英帝國の全人口比較



民族主義の著しい現代に於て、英帝國の結合は如何に變化するであらうか、固より英帝國の解體を信ずることは出來ぬ、如何に不純雜多の分子の多いとて、全領土の英人には英國と云ふ觀念が強く保持されて居る。此の歷史的民族的感情は英帝國の結果を固める楔子であつて、是ある限り英帝國は濫りに衰滅するものではない。併し地理上非常に隔絕した、異分子の多い國土は、其結束上に缺隙の多いのは云ふまでもない。少くとも全帝國の行動に支障を起することの多いのは免がれない。平和の時代に於ては此の缺陷が屢々現はれて來るのである。是は英帝國の一大缺點である。それは同盟國たる日本人の特に注意せねばならぬことである。

（六）農產物から觀た英獨の競爭

英國は數百年來商業國として世界に濶步して來た。之に反して獨逸は由來農業を主とした國家であつた。英國が獨り海上に跋扈し、獨逸が農業主義を奉じて居た間、兩國の間には利害の衝突は起らなかつたのである。併し獨逸は一八八〇年代から商工業が發達して、國家經濟は益々商工主義に傾いて來た。一八八二年には獨逸の農業者（家族と共に）は全人口の四十二％であつたが、一九〇七年には二十八％に減じて、其の代には商工業者殊に工業者が增加したのである。今獨逸商業の發達を見ると、商船の總噸數に於ては到底英國の敵ではなけれども、其の增加率は英國を凌いで居る。又貿易額も其の增加の割合は矢張り英國の上に出て居る。固より英國は既に膨脹を遂げた舊國家であり、獨逸は此から大に膨脹しようと言ふ新國家なのであるから、其の發達の割合が獨逸に於て著しいのも怪むに足らない。併し獨逸が此く進步の度を高めて來たことは、

である。

英國に取つて確かに不安の種でなければならぬ。現今戰爭の一因も實はそこにあるのである。

近代獨逸が商工主義に傾いたことは既に述べたが、併し之を以て獨逸の農業が衰へたと解してはならぬ。發達を遂げて居ることは農業も商工業も同樣であるが、たゞ發達の割合に於て農業が劣つて居るのみである。別表に見える通り、獨逸の農産額は著しい增加をなして居る。之に比すると英國農業の不振に驚かざるを得ない。固より英國は農業國でない、其の農村は多年荒廢に歸するの傾向があつた。夫であるから農業上獨逸に壓倒されたとて、英國は痛痒を感じないとしても、商工業上でも新興の獨逸が英國商工業の得意先たる外國市場に侵入して來ることは、英國の默視する能はざる點である。

英國が此くまで獨逸を警戒せねばならぬ程、獨逸商工業の發達は驚くべきものである。單に商工業のみならず、農業上の進步改善も亦著大なのであつた。左に掲げた統

英獨農產物の比較
（數字單位は百萬噸）

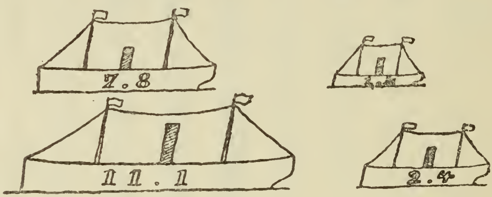
年代	穀類		藁		馬鈴薯		[illegible]	
	（英）	（獨）	（英）	（獨）	（英）	（獨）	（英）	（獨）
1891年頃	6.6	17	10.3	30.5	5.5	26.2	12.1	25.5
1912年頃	5.8	27.5	9.2	50.2	6.9	46.5	14.1	39.5
	減12%	增62%	減11%	增65%	增25%	增74%	[illegible]	[illegible]

英獨商船（汽船）の比較
（數字は單位百萬噸）

英吉利　　　獨逸

1900年頃

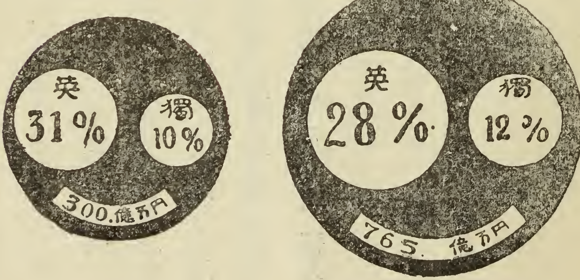
1911年頃



增加率　42%　60%

全世界貿易に對する英獨貿易の割合

1885年頃　　1900年頃



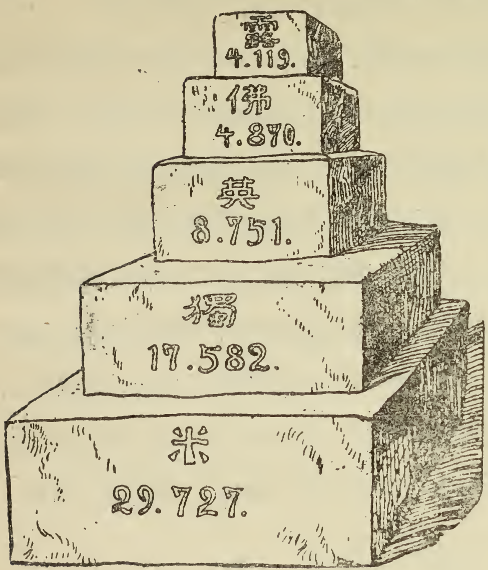
計は其等の著しい發達の一端を示さん爲めのものである。孰れにせよ精力に富んだ獨逸人の奮闘努力は、此等の發達の根本原因である、其の奮闘努力に對しては吾人は敬意を拂はねばならぬ。近代獨逸の發達は一に奮闘努力の結果である。此の統計を掲げた吾人の本意は諸子の緊褌一番を求めんが爲めに外ならぬのである。但し獨逸人が自國民の發達の爲め努力したことは偉大であるけれども、餘りに自己のみに注目して他を顧みなかつた結果、誇大妄想に陷り、自から世界第一と信じて、他國を蔑視し自己の力を過信して、遂に世界の平和を擾して萬民呪咀の的となるに至つたことは、吾人の殊に戒むべき點なのである。

（七）列强と鐵

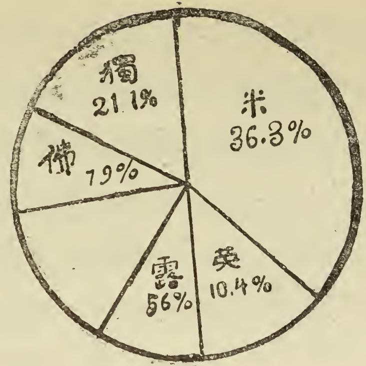
鐵が國家に取つて如何に重要なものであるかは今更茲に說くにも及ぶまい。殊に現時の如き戰爭の場合には、自國內に鐵を多く產することは、實に其國に取つて無上の强味である。銃砲其他兵器の供給を充分にする爲めには、鐵の供給を他國に仰いで居ることは、誠に不安のことゝ云はねばならぬ、獨逸が今囘の戰爭に兵器の供給に困らないのは、自國が世界有數の產鐵國である故である。世界の產鐵國としては、何と云つても米國が第一で、全世界の產額の三分の一以上は米國の產である。次に獨逸で、米國の約六割、次は英國で獨逸の半分弱、次は佛國で英國の約半分、露國は佛國より僅か少ない。以上は主要なる產鐵國である、日本は殘念ながら米國の百分の一位なものである。而して各國とも產鐵額は近年著しく增加して居るが、殊に米、獨兩國が著しい、それは左の世界全產額と各國產額との割合表を見れば分る。最近約七年間に米

獨露は世界全産額との比が各約一倍半の額に達して居る、併して英國の比は少々減じて居る、之を以ても新興國の産業が如何に長足の進歩を遂げて、舊大國の英國産業を凌駕しつゝあるかゞ知られる。

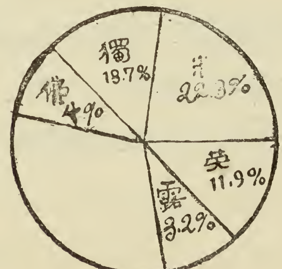
佛國も固より産額は增加して居る、併し其の增加の割合は、到底米獨二國に及ばない。殊に佛國に取つて殘念なことは、四十餘年前獨逸に割讓したローレーヌ地方が重要なる鐵の産地であることで、獨逸が世界に産鐵國として濶歩し得るのも、此のローレーヌの鐵の御蔭なのである。從て佛國は是非とも此の地方を獨逸から取返さねばならぬと、目下一生懸命に戰つて居る、又獨逸では開戰以來鐵の採掘は益盛に行はれて戰亂の爲めに毫も頓挫する樣なことはない。日本の産鐵額は少ない、併し海を隔てゝ彼方の支那は將來鐵の國として重要なものとなるであらう。吾人は支那の開發者として大に活動せねばならぬ地位に居る。世界の列强が、所謂『鐵の獨立』を得んと努力しつゝある時、吾人も亦其の大勢に遲れてよいであらうか。



世界の主要産鐵國 一九一二年
（數字單位千噸）



世界全産額との比 一九一二年



一九〇五年頃

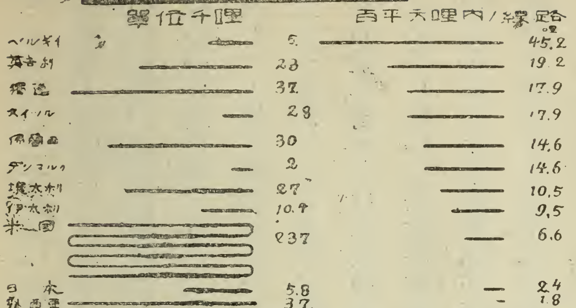
（八）　世界の鐵道

鐵道は各國家の發達を測定する一の尺度である、鐵道線路の長短はやがて文明の長短を示すものであらう。併し國家の面積上からして、何しても哩數の短からざるを得ない場合もある、是に於てか別圖（甲）に示す如く各百平方哩內の線路延長を比較して見る必要がある。この點に於て白耳義が著しく頭角を擢んでゝ居るのは注目すべきで、小國と雖もいかに能く國內の發達して居るかゞ知られる、同國が工業國として世界に立つて居る所以も成程と點頭かれる。次は英獨佛の三國、これは全哩數に於ても、百平方哩の平均哩數に於ても、共に世界で第二位乃至第五位を占めて居る。此の如き國家こそ世界の强國と云ふべきものであらう。米國の如きは全哩數は英國の十倍餘で、他國はとても足許にも及ばない程であるが、百平方哩の平均哩數は、第九位を占めて居る。これは同國が如何に將來發達の餘地に富んで居るかを語るもので、鐵道だけを

見ても米國が二十世紀の一大勢力として刮目すべきものであるかゞ分る。この點に於ては露國も相似たりである、日本は全哩數に於ても百平方哩の平均哩數に於ても甚だ劣つて居る、殊に全哩數は白耳義を凌駕して居ながら、百平方哩の平均哩數はその二十分の一に近いのである。それは地勢の關係上已むを得ない事情もあらうが、白耳義に對しても餘り威張れない次第であらう。併し（乙）を見れば約五十年前には一哩の鐵道さへなかつた日本が、五十年後には同期間に於ける英國の延長増加哩數に近い鐵道を布設し得たのは長足の進歩と云つて宜しい。

又(丙)に依れば全世界鐵道哩數の半ば以上は米大陸にある、併し面積の割合から見れば最も狹小なる歐羅巴が三割三分を占めて居ることを見て、流石に歐羅巴の進歩して居るに驚かざるを得ないのである。亞細亞の如き尨然たる一大陸が僅かに一割に過ぎず、更に阿弗利加が亞細亞の三分一以下なるのは、其の不振に驚くと共に又その將來が如何に多望なるかを思はしむるのである。併し努力して止まない彼等歐人は此等の

(甲) 世界各國鐵道ノ延長

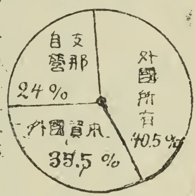


(丙) 五大陸ニ於ケル鐵道ノ分布



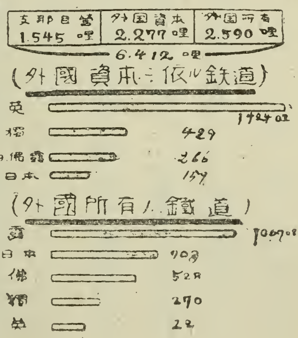
	千哩
米大陸	319.
歐洲	205.
亞細亞	61.
阿弗利加	21.
濠洲	19.
合計	625.

(丁) 支那ノ鐵道



(乙) 約五十年間ニ於ケル鉄道ノ發達

	(1870年頃)	(最近)	(發達ノ割合)
日本	0	5.8	
欧露	7	35.5	5.1倍
墺匈	5.9	27.	4.6倍
米	52.8	237.	4.5倍
獨	11.7	37.	3.2倍
伊	3.8	10.4	2.8倍
佛	11.1	30.	2.7倍
英	15.5	23.	1.5倍



多望なる大陸にドシ〳〵鐵道を布設しては、自國の勢力圈を擴張するに日夜怠らないのである。將來亞細亞や阿弗利加の鐵道は列强の勢力圈を示すことに依て美しく彩色されるであらう。其の適例は隣邦の支那である。(丁)を看よ、支那の鐵道は果して支那の鐵道と云ひ得るであらうか、其の大部分は歐人の經營である。是卽ち鐵道に依る支那分割ではないか。土耳古も波斯もやがては鐵道に依て分割されるであらう。彼の蜿々たる長蛇の如き鐵路に沿うて、歐人の勢力は全世界に蔓りつゝあるのである。

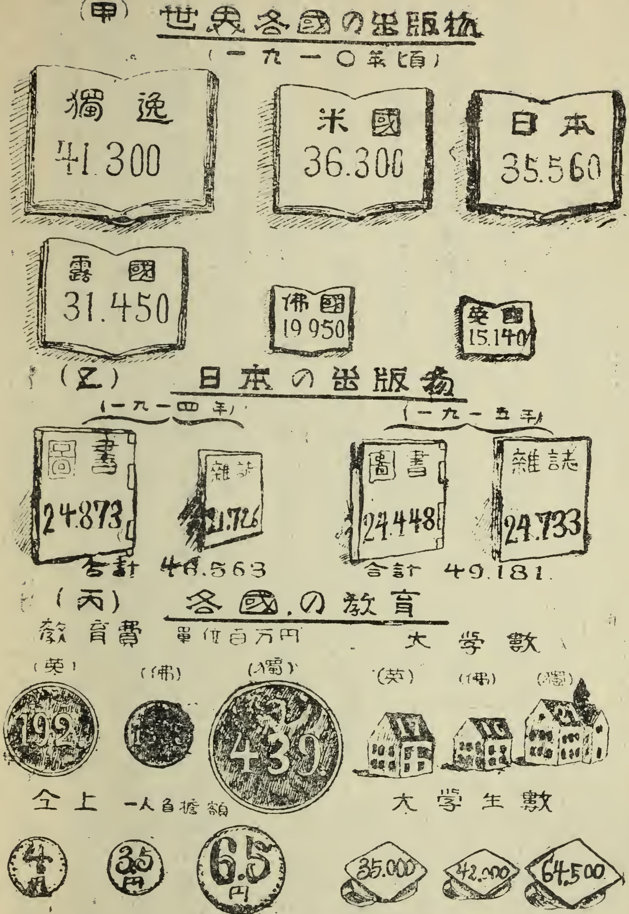
日本も遲れ馳せながら、支那に對しては聊か勢力を扶殖して居る、殊に現代戰爭で歐洲諸國が東洋を顧みることが出來ぬ爲め、日本の勢力擴大には多少好都合であつた。併し戰亂一たび靜まつた曉には、歐米人の活動は又もや目覺しいであらう。

(九) 出版物と教育

諸君まづ甲圖を見給へ。出版物（圖書及び雜誌）の部數の多いことは日本もナカナカ馬鹿に出來ない。世界で第三位を占めて居る。第一位は獨逸で流石學問を以て誇として居る國だけある。次は米國、それから露佛英の順序である。而して乙圖を見ると最近に於て日本の出版物は益々增加して方に五年前の獨逸を凌駕して居る。併し日本の出版物が多いことは文明の向上して行く證據で、誠に結構の次第であるが、外形の數字ばかり仰山でも其の內容が之に伴はなければ自慢は出來ない。聞く所に依れば外國人は日本は雜誌國だと云つて居る相である。コレは日本の出版物に輕薄なものが多いことを嘲けつたものと思はれる。兎も角、乙圖に依つても最近に雜誌（定期刊行物）の數が普通圖書よりも多いのを見ても、雜誌國の稱は必しも不當と云はれない。英佛獨いづれも雜誌の數は普通圖書の半分乃至七八割である。固より其の發行冊數は莫大

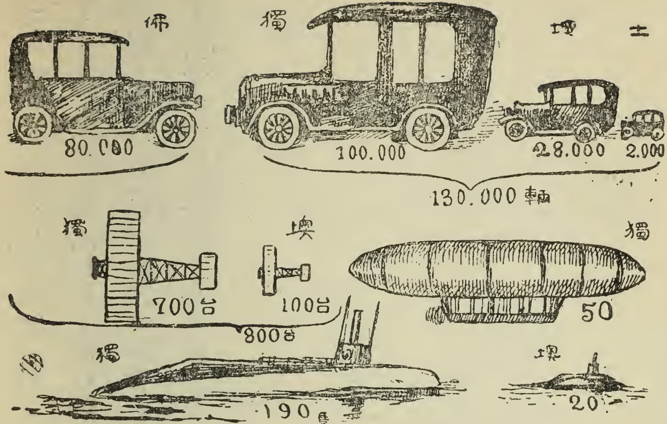
であらうけれども、玆にはたゞ其の種類即ち部數だけに就て云ふのである。從つて諸子は內容の勝れた出版物を選擇するの必要がある。每月新刊の雜誌は書店の店頭に山と積まれて居るが、其の景氣のよいのを見て直に文運の進步を叫んではならぬ。將來の國民は敎育と科學とに依らずんば發展を期し難いと云ふ事が痛切に感ぜられた今日諸子は眞面目にこの問題を考へて貰ひたい。

丙圖を見ても敎育は流石に獨逸が勝れて居る、固より今次の大戰に依て獨逸敎育の長所と短所とを自覺した彼等は、戰後益敎育の改善進步に努力して、等しく覺醒した英佛諸國の敎育と競爭することであらう。敎育の力、學問の效能は今回の大戰で十分に經驗された。獨逸が四面に敵を引受けて容易に負けた色を見せないのも、一は科學の力で籠城準備を整へたからである。從來獨逸は實に其の敎育費はやがて軍事費と相等しいのであつた。然るに世人は獨逸の軍國主義を口にする者は多いが、それにも劣らぬ敎育主義の國であることは比較的注意されないのである。固とり敎育の事も數字



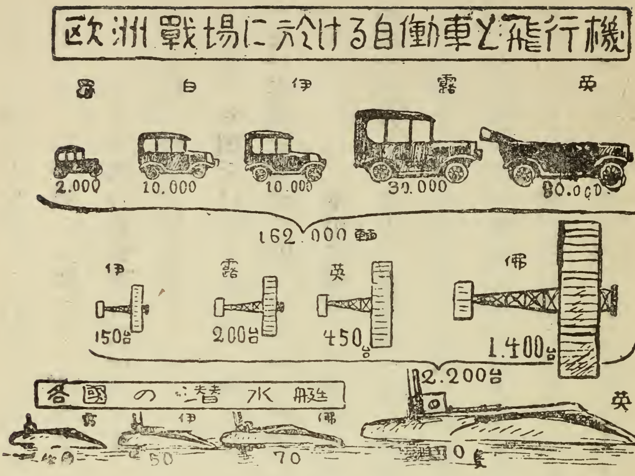
（甲）世界各國の出版物
（一九一〇年頃）
獨逸 41.300
米國 36.300
日本 35.560
露國 31.450
佛國 19.950
英國 15.140
（乙）日本の出版物
（一九一四年）
圖書 24.873
雜誌
合計
（一九一五年）
圖書 24.448
雜誌 24.733
合計 49.181
（丙）各國の教育
教育費 單位百万円
（英） 192
（佛）
（獨） 439
仝上 一人負擔額
4円
3.5円
6.5円
大学數
（英）
（佛）
（獨）
大学生數
35.000
42.000
64.500

のみでは論ずることが出來ないけれども、科學の力を實際に應用して偉大の貢獻をなしたことは、戰時の獨逸に於て確に認められた。諸子よ、軍備が整頓したとて國家は決して强くはならない。國民の敎育こそ國家富强の基である。吾人は一冊の書籍の選擇にも諸子が十分に注意を拂はれんことを望むのである。



（一〇）飛行機自働車潛航艇

『ソラ飛行機が來た』と云つて外に飛び出し『自働車が來た』と云つては目を聳てる、それ程日本では飛行機や自働車が珍しいのである。飛行機はまだ日本では曲藝視せられ、自働車は贅澤品と考へられて居る、又實際贅澤品なのである。物質文明の上で先進國たる歐米の飛行機自働車の進歩が著しいことは、敢て喋々する必要もあるまいが、日本に於て贅澤品に過ぎない自働車は、彼にあつては全然實用品である。今回の大戰に於て、其等の自



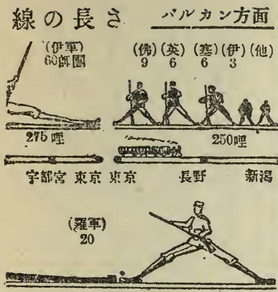
働車は如何に活動しつゝあるか、一個人の私有自働車乃至乘合自働車の類は、多く徵發されて戰線に於て運搬用に供せられた。殊に獨逸の如きは戰前から萬一の際の準備として、政府から多大の補助費を支出して、個人の自働車使用を奬勵し、開戰と共に其を徵發して軍用に供した、從て自働車の構造にも軍用にも便なる樣に作られた。

今や自働車は戰爭に缺くべからざるものとなつた、戰場を縱橫に馳せて、兵員物資の輸送補給に遺憾なからしむるものは、今後自働車でなければならぬ。佛軍が其の戰場後方に

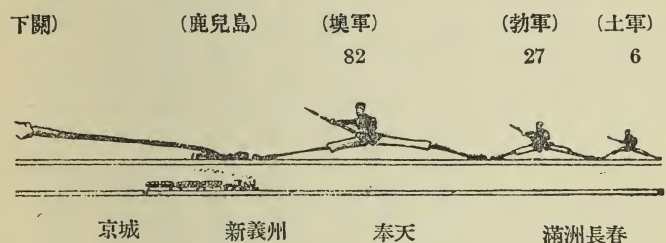
無數の自働車を配備して迅活な行動を取らしめた結果、獨軍の進攻を沮止することが出來たのは、今回の大戰中でも注意せねばならぬ一例であつた。現時歐洲戰場に使用されて居る各國の自働車は大略圖の通りで、此等の內には純軍用の裝甲自働車もあれば、荷物運搬車、病院車等も含まれて居る。日本では何うか、東京だけで自働車が約千三百、全國では二千五百餘、恐らく三千輛には達しまい。しかも其等の大部分は、成金が藝妓を乘せて用もないのに無暗と都大路を飛ばせる贅澤品とあつては實に心細いではないか。軍用自働車では獨逸が第一位を占めたが、飛行機では先進國だけに佛蘭西が雄視して居る。佛國飛行術の優秀なことは、獨逸の飛行機が佛國の空に飛ぶことの出來ぬのでも知られる。併し飛行船に於ては獨逸が獨步して居る、彼の巨大なる軍用飛行船は殆ど獨逸の特有とも云ふべきものである。圖に示した飛行機は歐洲戰場だけのもので、總計三千臺に及んで居るが、歐洲以外の戰場竝に國內に準備された數を加へれば、約五千臺に達するであらう。日本の飛行機は殘念ながら、此等と比較す

るには餘りに少數である。自働車と云ひ、飛行機と云ひ、吾人が如何にも貧弱であることは諸子の充分記憶すべき點であらう。

次に潜水艇は獨逸が潜水艇戰を御自慢して居るだけ、獨逸が最も多い。併し開戰當時には獨逸には僅かに三十隻位に過ぎなかつたのである。處が英國を相手に海上で堂々と戰ふことが出來ない結果、何でも水潜り戰術に限ると云ふわけで、ドシ〳〵潜水艇を造つた。いづれ遠からず二百隻には達するであらう。他國も潜水艇は必しも少くはないが、獨墺側の艦船が航海しない爲め、活動する機會がない。從て、獨逸の潜水艇活動のみが、馬鹿に景氣よく評判されて居るのである。

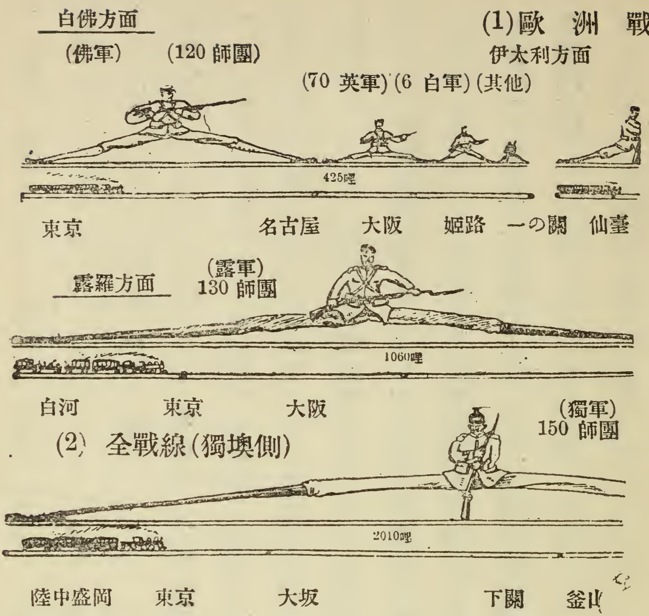






（二）歐洲の戰線と犧牲者

歐洲戰爭はいよ〳〵其の三週年を過ぎて第四年に入つた。媾和風は時々生溫かに吹いて來る樣子ではあるが、しかし戰爭の局面は未だナカナカ決着が附きさうもない。今日歐洲の交戰國は互に何れ程の戰線を維持して居るのであらうか。其の戰線の長さを日本の鐵道延長と比較したものが卽ち上の圖である。西部戰線卽ち白佛方面の防禦



は佛軍が主として之に當り、東部戰線は露軍の受持ち、伊太利戰線は伊軍の獨舞臺、バルカン方面は聯合各國の寄合ひである。(此外亞細亞土耳古及び阿弗利加方面もある)バルカンの戰況が捗々しく行かぬものも、此の寄合ひの爲めである。又獨墺側は何うか、全戰線の長さは陸中盛岡から東京、下關を經て朝鮮より滿洲長春に至るまでの鐵道線と等しい。この一大戰線には獨軍が主動者となつて頑張

つて居る。諸子よ考へて見給へ。獨逸は横暴だとか、英國は緩漫だとか、我々はソンナ事を云つて居る場合だらうか。かゝる大距離に亙つて長城の如き一大戰線を三年以上も維持することは國民に取つて如何に苦しいことであらうか。非常の決心と非凡の忍耐心がなければ不可能である。我等をして濫に彼等の缺點短所を指摘せしむるを止めよ、我等は敵味方いづれに於ても彼等より學ぶべき事が夥しいのである。小國民は長期の戰爭に耐へられないけれども、大國民の遣る戰爭は小國民が考へたよりは遙かに長いのである。我等は交戰國民でありながら戰亂の外に立つて、(極めて一部の人を除く外)平和の樂を享受しつゝ、ケチ臭い戰爭成金の浮雲にも等しい贅澤に目を峙てて居る。假令何であらうとも、彼等歐洲交戰國民の努力は實に著しい。獨墺側は固より『國難』に發奮した佛國の上下一致の奮鬪、英國民の覺醒、國論の統一に苦心慘憺たる露國、國土の恢復に努むる白塞兩國、孰れか吾人の鑑でなからう。しかも彼等が今まで戰線に於て犧牲に供した死傷者は莫大な數である、彼等の內で最も少ない白耳義

ですらも、日露戰役に日本が犧牲に供した數の約二倍に及んで居る。露國の如きは死傷者の數實に日本本土の人口の十分の一に達した（固より死傷者の內には數回負傷した者を重複して數へて居るけれども）。戰後歐洲諸國は疲弊して暫くは目覺しい活動も出來まいなどゝは、大國民の心事を理解した者ではない。吾人は歐洲戰線の長さを見ても、一大覺悟を固めなければ吾人將來の運命は決して大國民のそれではないのである。

現代世界の史的觀察（完）

大正七年十一月十五日印刷
大正七年十一月十八日發行

現代世界の史的觀察

定價金壹圓八拾錢

著者検印

著作者　大類伸

發行者　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社天佑社
代表者　小林政治

發行所　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社天佑社
電話番町(長)一一七九番
振替口座東京一〇二一八番

印刷所　東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社

印刷人　東京市牛込區榎町七番地
渡邊八太郎

天佑社新刊書目

佛蘭西大文豪グルモン氏原作■石川戯庵氏譯■藤島武二氏装幀

忽再版

小説 神人問答

四六判金箔押
箱入クロース美本
定價金一圓三十錢
郵税金八錢

東京朝日新聞本書を評して曰く。『グルモンの名作「リユクサンブウルの一夜」を飜譯せるもの曾てアポロン徒に基督と稱せられしと謂ふ神が今日の通常人の服裝にて現はれ一新聞記者と散歩の途上廣く人生問題に關して問答すると云ふ作意にして配するに美しき三人の少女を以てす、小説にして同時に詩歌、哲學といふを得べく感情と理智との理想的に綜合せられたる傑作也。譯者は曾てルソーの懺悔録を譯して世に知られたる人なれば譯文の流麗なるはいふまでもなし。』云々。

天佑社新刊書目

谷崎潤一郎氏序
佐藤春夫氏著　同氏裝幀

病める薔薇

四六判箱入美本
定價金一圓六十錢
郵送料金八錢

近時文壇の新人として一躍第一流の地位を占めたるものは佐藤春夫也。氏の作品は文壇の新しき驚異也。巨匠谷崎潤一郎は氏を目して得易からざる天才なりと極賞し、或批評家は明治大正年間に渉り自然を取扱ひたる文學中余の知れる限に於て佐藤春夫氏の作品は最も正道を踏み最も高所に達したるものなりと激賞せり。熱情炎の如く、才藻花の如く、氣品高くして眞摯の氣全篇を貫く。悉く是無韻の詩と謂ふべし。本書は氏の新舊傑作の全部を網羅し一も剰す所無し。切に江湖の愛讀を要請す。

天佑社近刊豫告

十二月上旬發行

與謝野晶子女史新著　津田青楓氏裝幀

心頭雜草

四六判布表裝
頗美本箱入

當代女詩人中第一人者として盛名を擅にする晶子女史が近作を集めたるものにして、論あり説話あり、詩ありスケツチあり豐醇なる女史心頭の雜草、抑も如何なる美花を開きて爛熳たるを姸を呈するか、乞ふ發刊の日を待て！

十二月上旬發行

岡本綺堂氏新著　小倉淳氏裝幀

玉藻の前

四六判箱入美本
定價　至廉

千古の傳奇を、近代的精神と老練絢爛の筆を以て叙述したる歷史小説にして、婦人公論誌上十數號に涉りて連載し數萬の士女を熱狂せしめたる大傑作也。

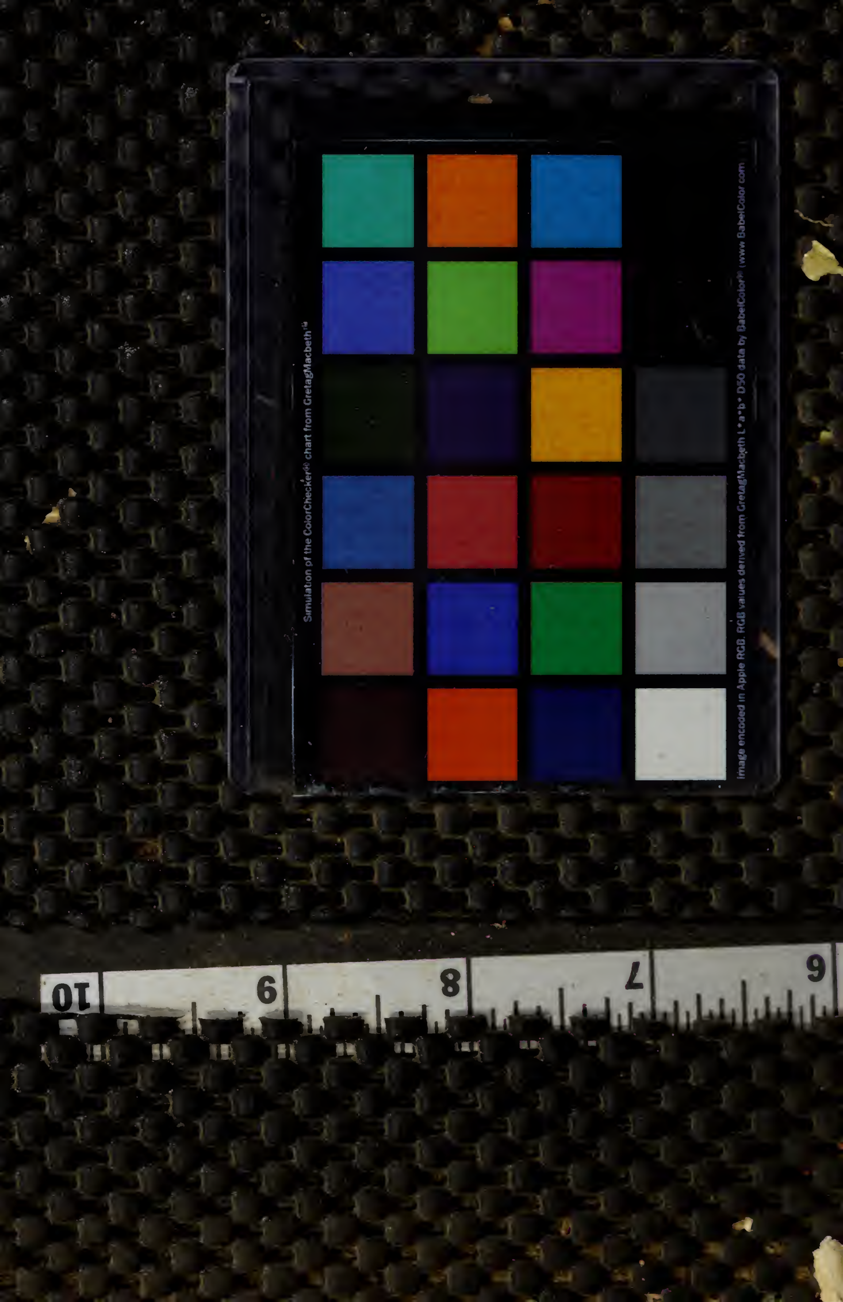
十二月中旬發行

オスカーワイルド氏原作
谷崎潤一郎氏譯

ウインターミヤ夫人の扇

四六判箱入美本
定價　未定

文壇の巨匠谷崎潤一郎氏椽大の筆を揮ふて本書を譯す、氏の創作多しと雖も未だ飜譯の出でたる事なし、文豪オスカーワイルドの傑作を譯するに谷崎氏の筆を以てす、其價値の如何は固より謂ふの要なからん。


Simulation of the ColorChecker® chart from GretagMacbeth™
Image encoded in Apple RGB. RGB values derived from GretagMacbeth L*a*b* D50 data by BabelColor® (www.BabelColor.com


OREGON RULE CO.
U.S.A.
Simulation of the ColorChecker® chart from GretagMacbeth™
Image encoded in Apple RGB. RGB values derived from GretagMacbeth L*a*b* D50 data by BabelColor®. www.BabelColor.com